

サイコをスキヤニング  
されちやう被験者です  
♪

ゼノアplus+

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつもと変わらない日々、人体実験を毎日行うだけの生活は突然終わりを迎えた……というわけではなかった。

「アツハハ!!キミ面白いねえ。ボクと遊んでよ……サイコスキヤニングモード!!」

これは、人体実験の被害者な少女が苦しみから耐え抜きながら、大好きなLBXと共にそんな日々を駆け抜けていくだけのお話……

ダンボール戦機の一挙放送を見て衝動的に書きたくなりました。反省も後悔をしていない……

# 目次

## 番外編

エイプリルフル企画【劇場版予告編】

装甲娘ミゼレムクライシス | 1

## 無印編

日常の終わり | 8

非日常、ミソラタウンにて 前編

20

非日常、ミソラタウンにて 後編

43

一日名誉弟子……その名はレイ

58

解説のレイ | 76

アングラビシダス3回戦 バンVS箱

の中の魔術師 | 92

ミニチュアハウスの中の人形 | 106

ボクだけの…… | 121

L B X世界大会アルテミス | 136

初陣 | 152

魔術師VS…… | 168

決勝戦 ヒーローVS悪の尖兵

189

サイコスキヤニングモード | 208

決着 | 231

彼女は願う | 254

火種、業火トナリ黒炎へ至ル

ねえねえ、今どんな気持ち???

278

脱出後

293

新しい出会い

308

地下での攻防。希望の少女。突きつけ

られる現実

324

エククリプスの一幕……二幕……そして

ほんの僅かな日常

356

人、その在り方

379

新たなる戦友

392

B R A V E R

406

真実

420

D A Y B R E A K F R O N T L I N E

E

予定外の空中戦

450

レイ その在り方

463

戦姫VS鬼神 勇者VS黒炎の魔神

480

おもちゃと兵器の狭間で

491

暁の水平線

503

空白の一年編

528

本当の日常の始まり

549

2代目レックスの誕生

560

W編

飛翔

560

新たな敵 デイテクター

紅白木偶合戦

世界なんてどうでもいい

610 596 577



## 番外編

エイプリルフル企画【劇場版予告編】装甲娘ミゼレムク  
ライシス

かつて、世界を救った子供達が居た。戦いを終えた彼等は日常へと戻り幸せを享受していた。あの日までは……

「やっぱり、人類は滅ぶべきだった。彼の言う通り」

「ミゼレムの大群が突如出現!!セカンドケースが対応していますが、もう持ち堪えられませんか!!」

「うそ……うそよ……どうして貴女が……!!」

「全人類に告ぐ。降伏しろ、なんてもう言わない。彼の意味に則り、君達を全て……」

「デリートする」

その日、日本は本当の意味で絶望というものを知った。

【LBCSコネクト イプシロン】

「馬鹿なツ!! LBCSの情報はミゼレム側には漏れないはず!？」

「当たり前さ、これはオリジナルなんだから」

『あの程度のファイアオール、ボクにとっては無いも同然。同じ事をいつかの日にも言ったね』

かつて最強と、戦姫と呼ばれた少女は人類の仇敵となった。

「生身で来られちゃボクも危ないからね。ランちゃんは先に対応させてもらったよアミちゃん。彼女がLBCSを纏えなかった本当の理由、知りたい？」

「レイ、貴女……ランに何をしたの!？」



「おいおい……いくらお前だからって……許せねえ!!」

何故彼女は、ミゼレム側に居るのか。何故今世界に宣戦布告したのか。

「師匠……いや、山野淳一郎博士。まずは貴方からだよ」

「レイ君……それが君の選択か」

「今までありがとうございます、この恩は……ボクが死ぬ時まで忘れません」

世界最高の技術者の失踪。

「レイ君……僕は見届けさせてもらう。君の元で」

「こんな時に……なんで俺は何も出来ないんだ!!」

「君達の喪失が、世界にどれだけの影響を与えるか……そろそろ自覚出来たかな? うん、さよなら……バン君、ジン君」

次々に行方不明となるかつてのレジエント達。

「弱い、弱すぎる。まだLBXを使う方がマシなんじゃないの?」

「こんなの……勝てないわ」

「どうしちゃったんだよレイ……うう……」

圧倒的な力の前に親友達は倒れ伏した。

「まだ、私達がいる!!」

「レジェンドだか最強だか知らないけど、貴女に好き勝手させません!!」

「アツハハツ!!初めまして?久しぶり?ボクの従姉さん」

最後の希望、ファーストケース達に知らされる衝撃の真実。

「きやあああああああああ!!!」

「アキレス……アキレス?……おい、嘘だろアキレス!?目を開けてくれ!!」

「これで邪魔者はいなくなつたね……仕上げだ。

「LBCSコネクト ミゼルオーレギオン」

希望はすでに断たれ、絶望が更なる絶望を呼ぶ……そのはずだった。

「昔っから、暴走するアンタを諷めるのは私の役目だったものね。アスカ、ジェシカ……両手両足もぎ取ってでも連れて帰って説教するわよ!!」

「おうよ!! いくつかの借り、返してやるぜ!!」

「任せなさい!! ファイアスイーツ隊で鍛えられた私の実力、見せてあげるわ!!」

かつての彼女の仲間達は再起し、希望を取り戻すために立ち上がる。

「みんなやなんで諦めてるにや!!? うちが見てきたみんなにやにやら、こんなところで諦めなんてしないのにや!!……もう、うちが行くのにやツ!!」  
「LBCSコネクト オーレギオン」!!」

「シーたちやんツ!!? ダメエえええええ!!」

「オーレギオン ミゼルオーレギオン試作品が、完成品に勝てるわけないじゃないか……わざわざ死にに來たのかい、シーたちやん?」

自分達だけこんな所で転がっていいのか? 無謀にも突撃する仲間を見るだけで

いいのか？

「みんな……行こう!!」

「そう言うと思ったぜアキレス!!」

「調子に乗ったあの銀髪……ぶん殴りに行くのら!!」

「が、頑張ります!!」

「レイ……ミューのところの頃から、なんとなくいけすかなかったのよね!!」

「隊長、指揮をお願いします!!これが、ラストミッションです!!」

「分からない、なんでこんなに無駄な事を続けるんだい?……更なる絶望を見せつけられ、諦めてくれるかな?」【必殺フアンクション】

そして、人類の未来をかけた戦いが今始まる。

「ミゼル、ボクはね……君に芽生えた心を……尊重したかっただけなんだ」

【装甲娘ミゼレムクライシス 希望と絶望の果てにある未来】

2054年4月1日公開

しません。

## 無印編

### 日常の終わり

#### 1話

「起きろ。実験の時間だ」

男の抑揚のない声が空間の雰囲気を変えて支配する。男の目の前には刑務所の檻のような部屋の白いベッドで横たわる少女の姿があった。

「……………あと5分」

「いや起きろって。今日も電撃の出力上がるぞ？」

「仕方ないなあ……………」

急張り詰めた空気が急に霧散した。少女の呟きに、男は疲れたような声音で軽い口調になった。少女も本当に面倒そうな表情をしながら体を起こす。

「今日のメニューは？」

「脳波コントロール速度の上昇、それをを用いた操縦技術向上だ」

「いつもより少ないじゃん。やつとボクの頭を壊すの？」

「アホか……お前壊したらウチの機体開発が滞るわ。たくつ……無駄話は終わりだ。行くぞ」

「はーい。楽しみだなあ……今日はどの子だろう」

入院患者が着るような薄緑色の服を着て、銀髪の少女はロックが解除された扉を潜る。どう見てもロクな現場ではないが、少女の口元は笑っていた。

やがてとある部屋にたどり着きそこに入ると頭にケーブルの繋がれた1人の少年が力なく座っていた。

「やっほー。今日も頑張ろうねえユウヤ君」

「……………」

少女にユウヤと呼ばれた少年は、聞こえていないのか少女の方をまるで見ていない。

それどころか死んでいるように顔色が悪く、少年の目には何も映っておらず虚空を眺めている。

「アツハハ……いつも通りだね。んじゃ、やりますか」

少女が乾いた笑い方をしながら少年の隣の席に座ると、数人の白衣の男が機材を持ってきて少女の頭に取り付け始めた。

「今日は何%から始めるの?」

「昨日の時点で43%をマークしているので、今日は35%から始めていきます」

「随分とお優しいじゃない? ボクはもう少し上からでも良いんだけど?」

「大事な被験体への過剰な負荷は認められません」

「ふうん……その分長くなるくせに」

親しげな口調で白衣の研究員らしき眼鏡の男と話す少女の声は明るい。今にも怪しげなことをされる側としては相応しくない。





逆る電流の量が増える。少女は叫びながらもガラス越しに見える中年の男に目を向ける。

(加納め……悪趣味な奴……)

歯を食いしばりながら少女は電撃に耐える。絶え間なく出力が上がっていく電流に少女の絶叫も大きさを上げていく。

『出力61%まで上昇。安定しています』

『よし、中断しろ。次だ』

電撃が収まる。

「……………」

「ハア…………ハア…………ハア…………あう…………」

いつまでも無反応な少年に、肩で呼吸する少女。すでに少女は疲弊し、ヨダレが垂れかけている。どうやら意識も朦朧としているらしい。

『今日はナイトフレームとブラウラーフレームで行う。CCMとLBXを渡せ』

指示通りに、少年と少女に携帯型端末が手渡され、両者の間に小さなキューブが投げ込まれた。そのキューブは地面で止まると白く光り大きくなっていく。そして光が収まると、闘技場のようなジオラマが現れた。

「ええ!!ボクがズールなの!?!ちよつと、デクー使わせてよ!!」

『文句を言うな。お前はブラウラーフレームかパンツアーフレームしか使っていないだろうが。今回のメインは灰原ユウヤの実験だ。お前は黙つて的になれ』

「……………ちえ〜」

聞こえてくる男の声に少女は朦朧としていたはずの意識を無理矢理覚醒させ男に文句を言った。しかし、一蹴された少女はズールと呼ばれた青いカラーリングのロボットをカチャカチャしている。

『LBX投下』

「仕方ないなあ……行くよズール」

「……………」

不機嫌そうな少女はジオラマの中にズールを投げ込む。対するユウヤも無言で茶色に塗装された一つ目のロボット、デクーを投げ込んだ。

ズールは右手に赤めの槍に丸い盾を、デクーは上に弾倉がついた銃と覗き穴が空いた長方形の盾を装備している。デクーに関しては腰にヘヴィソードを装備している。

『サイコスキヤニングモードデータ採取を開始する。バトルを始める』

「はいよ。手加減はしないよユウヤ君。今日も勝たせてもらうからね!!」

「……………」

2人が同時に携帯端末……CCMを操作して機体を突撃させた。

~~~~~

2046年 『強化ダンボール』の発明によつて、世界の物流は革新的な進歩を遂げた。

内側からと外側からの衝撃を80%吸収する革命的な『未来の箱』が、輸送手段の常識を覆したのだ。

しかし……その箱はやがて全く別の目的で使われることになる。

ストリートで行われる少年たちの戦い。

ホビー用小型ロボット『LBX』を操る彼らの戦場は次第にダンボールの中へと移つていった。

その四角い戦場で戦う小さな戦士たち。

人は彼らを『ダンボール戦機』と呼んだ。

~~~~~

「……正直、誰かが『ダンボール戦機』って呼んでるところ見たことないんだよねえ」  
「何か言ったか？」

「いや何も」

謎の独り言を呟いて先ほどの男に心配されている少女はなんでもなさそうに返した。  
本日の実験も滞りなく終了し男の監視の元、少女は自室へと歩いている。

「あ、そうだった。どうやらウチで開発中のAX-00が盗まれたらしい。今黒の部隊  
が追っている」

「へえ!!ここの警備を抜かれたの? なかなかやるじゃんソイツ。ボクにやらせてよ」  
通路を歩きながら2人は話す。大事な物が取られたのいうのに少女は楽しそうな声  
音をしている。

「もういねえよ。窃盗犯はLBXプレイヤーじゃないしな」

「え〜……つまんなーい」

「それにお前はまだ調整中だ。勝手な行動は慎めよ」

「ボク実は女の子の曰で……」

「昨日もソレ聞いたわ。お前のメデイカルチェックは欠かしてないから体調万全つても知ってるよ」

「女の子の個人情報丸裸っ!? うっわ〜へんた〜い」

「言ってる。たくっ……他の奴ら、毎日毎日俺にこいつの監視押し付けやがって……」

ケラケラと笑いながら少女は男をからかう。男は胃を押さえながら眩れている。どうやらいつものことらしい、そしてストレスがマツハなのだろう。薄毛に気をつけられたし。

「着いたぞ……とつとと休め。後で飯を持ってくるから」

「今日のご飯は〜?」

「知るか。俺は献立係じゃねえ」

「いけずう〜……はあ……よろしく」

少女は最後までケラケラとしていたが、すぐに真顔に戻り部屋に入ってベッドに腰掛けた。どうやら疲労は凄まじいらしい。そして男は扉のロックがかかったのを確認すると立ち去っていった。

「AX—00が盗まれた……ねえ……面白くなりそう。もしかしたらボクも……なんて、無駄な希望は持つちゃダメだね。さて……少し寝ようかな。明日こそは……デク……を……」

独り言を呟いていたがすぐに少女の寝息が聞こえてくる。どうやら眠ってしまったらしい。

一方とある町の河原では、これから起こる数々の事件の原点となる出来事が始まろうとしていた。

「見つけた。貴方が山野バン君ね」

「……え？」



運命の歯車はすでに回り始めた。残る問題は、ソレがちやんと噛み合って回るのかどうかのみである。

# 非日常、ミソラタウンにて 前編

## 2話

「起きろ。今日の実験は無しだ」

「……………後5分……………んにゆ……………無し？」

今日もいつも通り、男に起こされる少女。しかし、そのセリフはいつも通りではなかったようでピクツと反応した少女はゴネることなく目を覚ました。

「どう言う風の吹き回し？外に出してくれるわけじゃないんでしょ？」

「……………そのまさかだよ。今日はお前の望む場所へ行かせてやれ、っていう指令が下った。たくつ……………上の意図が分からねえ」

「……………ほんとに？」

「ああ。お守りは俺だ。あと黒の部隊から3人な」

「「よろしくー！」」

嘩然とする少女は、男の後ろに変な仮面をつけた金髪の女性、細身の男性、太り気味の男性がピースサインを向けてきているのが見えた。

「……………なんで？」

「知るか……………って言いたいところだが、大方外のLBXでも見て学んでこいって事だろう。ガキの意見つてのは時々馬鹿にならねえ時があるからな」

男が語っている。しかしどこか面倒そうだ。

「でも、ボク……………服はこれしかないよ？」

少女はそう言って自分が来ている患者服をひらひらさせアピールした。

「抜かりない、頼みましたよ真野さん」

「任せときな。ほら、男どもは出てなさい。お嬢ちゃん、名前なんだっけ？」

真野と呼ばれた、仮面をつけた女性がいつもの男に呼ばれ扉の中に入ってくる。男衆を追い払うと少女の方を向き直った。

「名前？知らないよそんなの。ボクはボクしかないんだ。他の奴らにはボクがボクだって分かるんだからいいんじゃないの？ああ、いつもの男の子は灰原ユウヤって名前があるみたいだけどね」

「……随分と大人びた子供だねえ。この前のガキとは大違いだよ。名前がないってのも呼びにくいし……折角だからつけてあげるよ」

真野は持ってきた服を少女に着させながら、うくん……と名前について悩んでいる。

「別に……いらないでしょそんなの」

「名前は大切だよ。よし、今日一日アンタはレイって名乗りな」

ビシツと指を指しながら少女の名前を決めた真野はどこか自信の有る顔をしているだろう。仮面で表情はわからないが。

「……なんでもいい。それより早く行く」

「ふふっ、あいよ。行くよお前たち!!……って、どこに行くんだい？」  
「考えてなかった……」

真野の純粹な疑問に、少女……レイはキョトンとしながら答えた。

「はあ……行きたいところは？」

「どこに何があるか知らない。……じゃあ貴女が最後に行ったところ」

少し悩んでからレイは告げた。しかし真野も予想外だったのか一瞬呆けてから最後に訪れた場所を思い出す。

「あたしが最後に……って、ミソラタウン？あの街に嬢ちゃんが楽しめそうところは……ああ、確かあの商店街にはあれがあったね」

「……あれ？」

「行ってみてからのお楽しみさ」

レイには、真野が仮面の奥でニヤツと笑ったように思えた。

ミソラタウン商店街

「……」

「ああ、真野さんが言うにはキタジマ模型店というらしい。名前の通り模型……LBXも扱っている。お前には充分すぎる場所だろう」

レイと男がやってきたのはミソラタウンの商店街に店を構える『キタジマ模型店』だ。提案したのはもちろん、レイ達の後ろの方でこっそりと監視をしている真野達である。

「もちろん……いや、姐さん分かってるね！ボクが一番楽しめる場所をさっ」

レイの服装は白いパーカーにジーンズの短パンというシンプルな格好。ただ一日どこかに行くだけなので真野もシンプルな服しか買ってこなかったようだ。男の格好は黒いスーツだ。どうやらこの男も黒の部隊らしい。

「姐さん？ああ……真野さんのことか。たくつ……慕いすぎてもどうせ今日限りの付き合いだ。程々にしとけよ」

「分かつてるよ。ていうか、貴方のことはなんと呼べばいいの？」

「ああん？……真崎でいい」

「へえ……んじゃ1日よろしくね真崎さん」

「おう」

会話をしながらキタジマ模型店の前までやってきた。ガラス越したが、3人ほど客がいるようだ。2人はそのまま自動ドアを潜り店内に入った。

「いらつしやい……つと、みない顔だね？」

「姪がどうしても他の街の模型店に来てみたいって言いましたね。ほら、挨拶しなさい」

男がどこか胡散臭そうな口調で、店員らしきバンダナを巻いた女の人と話している。レイは真崎の言葉を聞いて挨拶をした。

「レイって言いまーす。お姉さん、ここの店員さん？」  
「そうだよ。あたしの名前は北島沙希、よろしくね」

店の真ん中、ジオラマが置いてある場所には黄色と青のジャージを着た少年。ピンク色の服に短いスカート、白いソックスに耳当てをしている少女。そして青い服を着崩している少し不良そうな少年がバトルをしていた。2人は一度それを無視して店内を見る。レイは物珍しそうに、真崎は興味なさそうに適当に店を散策している。

P I R I P I R I ……

店内に鳴り響く電子音。真崎の携帯である。

「……失礼。レイ、適当に見ていなさい。金は渡しておこう」  
「ありがと〜、行ってらっしゃい」

レイは真崎から多少のクレジットを受け取るとまた店の散策を始めた。  
真崎が外に出ると、真野達3人が手でこつちにこいと合図をしている。



「なんすか……細井が監視についているから良いですけど……任務中ですよ。」

「そんなこと言ってる場合かい!!アンタ見てわからない?あの店の中にいるジャージのガキ、山野バンだよ!!」

「山野バン……?ああ……プラチナカプセルが内蔵されているコアスケルトンの。そういやあんな顔でしたね」

「あたし達は今すぐデクーで乗り込む。アンタは嬢ちゃんの避難を」

真野と矢壁がCCMを構えてLBXの準備をしている。

「ちよつと待つてくださいいよ。確かにアレは最優先目標ですが、今の俺たちの任務はアイツの監視。下手なことをして騒ぎになったらどうするんです?この間だって真野さん達失敗したでしょ?カパーパッドの機体に負けたんですから自重してください」

「だけどねえ!!」

「それにほら、今日は俺たち以外に監視はいないし、アイツだって楽しそうにしてる。実質休暇みたいなものですよ。この際ですから俺らも楽しみましょうや」

「……………一理ある。そうだね、まあたまにはいいんじゃないかい」

真崎の気怠そうな説得は少し真野の琴線に触れかけたが、どうやら彼らも普段の職務に疲れているらしい。悪魔の誘惑のような真崎の言葉であっさり落ちた。実際に真崎達4人以外に組織の監視はいないため問題はないのだ。彼らが報告しなければ何も起きなかったのと同じなのだ。

「焦って悪かったよ。失敗を取り戻そうと躍起になってたみたいだ」  
「分かってくれたらいいんすよ。んじゃ、俺はアイツのところに戻るんで」

そう言って真崎は店内に戻る。あたかも今通話が終わったかのようにCCMを閉じながらの入店だ。仕込みはバツチリである。しかし、真崎は入った店の中で衝撃的なものを見ることになる。

「……マジかよ」

平原ジオラマのDキューブの中で、赤いグラディエーター機の前に倒れ伏す、3体のLBX……アキレス、クノイチ、ハンターの姿だった。

「真崎が店の外に出ている間」

「ふんふんふん……」

すこし時間を遡る。真崎が店の外に出た後、お金を貰ったレイは機嫌良く商品を見ていた。もちろん、他の客である3人の少年少女の視線を浴びながらである。

(……ピンとくるやつがないな。やっぱりデクーが一番かも)

レイが見ているのはLBXのアーマーフレームのパッケージだ。棚にはクノイチやウォーリアー、ブルドなどの市販品が大量に並んでいる。しかしレイのお気に召すものはどうやら無いらしい。

「ねえ……その君」

「んん？」

レイに話しかけてきたのはジャージの少年、山野バンドだ。

「LBX、興味あるの？」

初対面だからかとても恐る恐るレイに話しかけてきた。

「うん！面白いよねLBX。でも自分のは持ってなくてね……折角だし買っちゃおうかなって」

「だったら良いのがあるぞ。ほら、今週のLマガ」

後ろから雑誌を渡してきたのは首元のボタンを開けた不良そうな少年、青島カズヤだ。

「ほえ……いろいろ書いてある」

「LBXの情報がたくさん載ってるから、それを参考にしたらいいんじゃない？」

バンの隣からひよこつと出てきた少女、川村アミだ。Lマガをペラペラとめくりながらアミの話を聞いているレイ。

「どんな戦い方がしたいとか、どんな武器を使いたいとか言ってくれればそれなりのものは用意するぜ？」

レジの奥から出てきた茶髪の男性。この店の店長だ。

「うくん……ボクはブラウラーフレームとかパンツァーフレームとかの重いのが好きなんだよね」

「だったらグラディエーターなんてのはどうだ？ シンプルで使いやすいウオーリアーに似たタイプだが、重装甲で重い一撃が放てるぞ。その分、使い手を選ぶけどな」

店長が手元から赤くペイントされたグラディエーターという機体を出してきた。名前からも見た目からも、ローマの剣闘士のような印象を覚える。

「へえ……いいかも……」

「どうせだし、俺がカスタムしたコイツを使ってみるか？少しクセが強いけどな」  
「えっ………いいの!？」

レイの目が輝いた。

「おう!!バン、カズ、アミ、誰か相手をしてやってくれないか？」

店長が気前よく言ってくれた。

「じゃあ俺がやる!!」

「いや待て、バン。ハンターの調整もまだ終わってなかったし、他の奴ともやってみたかったんだ。俺がやる」

「ええ!!私がやりたかったのに!!」

「おいおい………ちゃんと決めてくれよ………」

どうやらこの3人はバトルが大好きらしい。俺が私かと騒いでいる無邪気な少年達

を見て、微笑みながらレイは言った。

「アツハハ!!キミ達面白いね!!いいよ、3人まとめて相手をしてあげるよ」

「「「え?」」」

店内のレイ以外の全員が疑問の声を上げた。どうやらよほど驚いたらしい。

「お……おいおい、それは俺達を舐めすぎなんじゃないのか?そもそも、LBXを持ってないんだったら初めてだろ?」

「いや、レンタル……でいいのかな?それで色んなLBXを毎日のように使ってるから慣れてるよ」

得意そうに話すレイにカズヤはどうやら決めたようだ。

「へえ……だったら、その鼻っ柱折ってやるよ!!バン、アミ、行くぜ!!」

「カズ、本気!?相手は1人なのよ」

「おや?3対1でも負けるのが怖いのかな?アツハハ!!」

「……いいわ。やってやろうじゃないの!!」

「ええ!?!……はあ……まあいいか。よし、やろう!!」

レイの煽りもあつてやる気になったカズヤとアミに、仕方ないなく言いながらもバ  
ンもCCMを取り出した。どうやら3対1の変則バトルが始まったようだ。

「これがグラディエーターねえ……ふうん……良いカスタマイズだね。ボクの好みじゃ  
ないけど、いい機体じゃん」

レイは借りたCCMでグラディエーターの詳細データを見ている。店長が直々に  
チューンした機体だ。生半可な機体ではない。

「オツケー。やろっか」

チェックが終わったレイがジオラマにグラディエーターを投下する。グラディエー  
ターが着地すると目の前にはすでに3機のLBXが待機していた。真ん中の白と青が  
ベースの騎士がアキレス、狼のような鋭い目を持つワイルドフレームの機体がハン



ター、全身がピンクに塗装されたクノイチだ。ちなみにレイが操るグラディエーターの装備は『グラディウス』という剣と、『ラウンドシールド』という丸い盾だ。どちらも市販されているグラディエーターの基本装備である。

「準備はいいな？じゃあ……バトルスタートだ!!」

店長の掛け声でバトルが始まる。それと同時にピンクの閃光がグラディエーターに向かって駆けて来た。

「先手必勝!!行くわよクノイチ!!」

「アツハハ!!先制攻撃、確かにいいねえ。でも……キミ一人だけ近づいちゃっていいのかな?」

「ツ!!離れろアミ!!」

「えっ?」

違和感を察知したカズヤがアミに警告するがもう遅い。トップスピードに乗ったクノイチは急には止まらず、そのままグラディエーターの懐まで来ると、その両手に持つ

コダチというビームの刃のクナイを振り上げた。

「アツハハ!! 良い速度、並の機体やプレイヤーじゃこれでやられちゃうね」

レイは笑いながらグラディエーター右足を左側にずらした。もちろんそうすれば体も一緒に逸れることになるので、クノイチ渾身の一撃は悲しくも空を切る。それを見逃すレイではない。攻撃をからぶつたことで隙だらけのクノイチの細い胴に向けて、右腕に装備した剣の柄で思いつきり殴る。

「クノイチツツ!?!」

アミの叫びも虚しく、クノイチは吹き飛ばされた……と思いきやいつのまにかクノイチの腰に添えられていたグラディエーターの左手がクノイチをその場で崩れ落ちるだけの状態に留めた。そのままクノイチから青い光が迸りブレイクオーバー……戦闘不能になった。

「……ウソだろ。今のクノイチの攻撃……絶対ヒットしたと思ったのに」

「いや……ハンターはちゃんと捉えていたぜバン。アイツ……クノイチが武器を振り上げてから躲しやがった……偶然じゃ決して出来ないぞ」

「へえ……今の、見えたんだ。アツハハ!! 良いチームだね!!……じゃあボクから行くよお!!」

「ツ……来るぞバン!!」

「ああツ!!」

グラディエーターが走り出す。ハンターはその得物……スナイパーライフルを活かすため後方に下がり、その間を守るようにアキレスが盾を構えた。

「アツハハ!! 盾に頼りすぎじゃないかな?」

「そんなことはないさ!!」

グラディエーターが剣を水平に構え突きを放つ。それはしつかりガードしているアキレスの盾に突き刺さるが……僅かにアキレスが盾の向きをずらしたことで剣が上方へ逸れていく。

「カズツ!!」

「バツチりだぜツ!!」

ドンツ……

つと乾いた銃声が一発鳴り響く。ハンターが放った銃弾は、剣撃を逸らされたことで体勢が崩れ欠けのグラディエーターの胴体に寸分変わらず命中……

「アツハハ!!命中しないんだよねえ……グラディエーター!!」

レイの声に応えるようにグラディエーターの目が光る。そしてグラディエーターはレイの操作により信じられない機動を見せた。

崩れた体勢で、曲げていた左足でアキレスの盾を下から蹴り上げた。するとどうだろう……蹴り上げられ、アキレスの手を離れた盾はハンターが放った銃弾を弾きその衝撃でグラディエーターの空いている左手にすっぽりと収まったのだ。

「グラディエーターの盾がない!!……いつのまに投げ捨てていたの!」

「驚いている暇はあるのかい騎士君？」

「ツ……アキレスツ!!」

バンはレイの言葉で再起動しすぐに右手の槍でグラディエーターを突こうとする。

「甘いね騎士君。焦って先に倒そうとするのはまだまだ荒削りの証拠だよ」

グラディエーターはすぐにバックし、足元に落ちているグラディエーターの盾をアキレスに蹴り付けた。槍をついたばかりで反応できないアキレスはそのまま足に盾をくらい左足から膝をついた。

「いつちよ上がり!!」

グラディエーターはアキレスの大きな盾で常にハンターからの射線を切りながらアキレスに近寄り、袈裟斬りの要領で切り捨てた。アキレス、ブレイクオーバーである。

「アキレス……」

「アイツやべえ!!ハンター、必殺ファンクション!!」

『アタックファンクション ステインガーミサイル』

カズのCCMから鳴り響く音声。そしてハンターの背中のトゲが射出されミサイルとしてグラディエーターに向かう。

「アツハハ!!面白い技じゃん!!でもダメ」

グラディエーターはミサイルを見て、あろうことか跳躍。ミサイル群に突撃した。

「なに!?!」

「切り捨て御免……つてね♪」

グラディエーターの剣撃。そして信管が反応する前に真つ二つになったミサイルが爆発した。そして爆炎がハンターの視界を塞ぐ。

「ハンター、グラディエーターの反応を探すんだ!!」

「狙撃手は位置バレしたらすぐに動かないとダメだよ」  
「ッ!!」

爆炎の中からグラディエーターが飛び出す。

「ハンターッ……逃げr「遅い!!」ッ!？」

空中のグラディエーターは右手に装備する剣を思いっきりハンターに向けて投げつけた。それは寸分違わずハンターの首を直撃し、ハンターのブレイクオーバーの判定が下った。

「[[[[[……]]]]」

「アツハハ!!楽しかった〜!!バトルしてくれてありがとうね!!」

「……………おいおい、マジかよ」

ちょうどバトルが終わったタイミングで真崎が店に入ってきた。しかし店の雰囲気は重い。曲がりなりにも1点物の最新鋭LBXが2体、クノイチも並のカスタマイズで

はないのだ。そんな3体が、いとも簡単に……尚且つグラディエーターに一撃も加えることなく瞬殺されたのだ。ついさつき初めてグラディエーターを触った少女にである。

「騎士君はもう少し状況判断を覚えたほうがいいね。狼君は……狙撃手としての立ち回りかな。いざとなったらミサイルがある、とか思ってたでしょ。クノイチちゃんは……チームの火力を生かすために、狼君がポジショニングする間、ヒット&アウェイで時間を稼ぐべきだったね。あとちゃんと相手を分析してから動かないと」

笑顔で3人にアドバイスをしていくレイ。その顔はもはや笑顔を通り越して大天使だ。余程バトルが楽しかったのだろう。



# 非日常、ミソラタウンにて 後編

## 3話

前回、2分もかからずに3機のLBXを瞬殺したレイは、バン達を啞然とさせていた。

「店长さん、LBXありがとう……すごくいい子だったよ」

「あ、ああ……どういたしまして？」

損傷のないグラディエーターを店长に渡したレイはまだ笑顔だ。店长は、あまりのバトルにそれを為したレイを驚愕の表情で見ている。

「それでレイ、何か欲しいものはあったのか？」

「あっ……バトルに夢中で見てなかった。でもそこまで気になる子もないし、ボクは別にいいかな」

「そうか……しかし、何か買わなければただの冷やかしになってしまう。何かないのか

？」

「うーん……」

真崎の言葉で再び悩むレイ。その間に、今のバトルに啞然としていた3人も復活したようだ。

「すっげえ!!なんだったんだ今の……カズ、アミ、あの子すごいや!!」

「あ、ああ……あんな奴がいるんだな……」

「すごい操作技術……自分のLBXじゃないのに……」

3人はレイの操作技術に感動しているようだ。そこで真崎はジオラマの中で倒れ伏すアキレスを見ながら考える。

(……ブレイクオーバーしている。今ならデスロツクを発動させずにプラチナカプセルを回収できる?……いや、真野さんにあそこまで啖呵切ったし、そもそもここで取ったただの強盗だ。流石に辞めとくか。八神さんも強盗犯が部下にいたくはないだろうしな)

プラチナカプセル……真崎達が所属する組織が現在最も欲しているものだが、この時の真崎の決断は英断だったと言えるだろう。

「あつ。じゃあDキューブを買おうかな。売ってる?」

「おう、種類は少ないが置いてるぞ。この中から選んでくれ」

店長が停止したキューブは全部で5種類。『砂漠』『地中海遺跡』『南極』『城砦』『月面』だ。

「ふむふむ……そうだねえ……『城砦』にしようかな。はいお金」

「毎度あり。お嬢ちゃん、今後ともキタジマ模型店をご最顧にな!!」

「ふふっ……是非ともね」

レイはDキューブを一つ買うと、真崎と共に店を出た。

「あっ!!」

「どうしたのバン？」

「……あの子に名前を聞くの忘れてた」

「あー……確かに」

店の中から聞こえてくる間抜けな声にクスリと笑うレイだが、すぐに真顔に戻った。

「そんなもの買ってどうするつもりだ？ 実験をするなら『闘技場』で十分だが？」

「いやいや、地形が変わったから負けました。とか洒落にならないからさ。少しずつジ  
オラマを変えた方がいいと思わない？ 少なくともボクはそう思うんだけど」

「まあいいだろう。使うかどうかを決めるのは奴らだからな」

商店街を歩きながら2人は話す。

「それにしても、あの3人組はどうだった？ お前には雑魚同然だったろうが」

「うーんとね、発展途上かな。あれならもうちよい訓練したら今のユウヤ君には勝てる  
んじゃない？」

「ほう……（脅威としては十分……か）」

ヘラヘラと語るレイに真崎は興味深そうに首を縦に振っている。

「あの子達になんかあるのー？別に気にするほどじゃないと思うけど。ああ、珍しい子を使つてたね」

「あの白いLBXがAX—000だ」

「ツ……なるほど。あの子が噂の山野博士の子供ねえ……山野バン君、だったかな。アレ……プラチナカプセルを回収しなくてよかったの？」

「……今日はお前の監視任務以外、実質非番だ」

「アツハハ!! いったくないんだあ」

「うっせ」

周りのカフェやコンビニ、本屋やゲームセンターなど、レイは真崎と会話しながらも初めて都会に来た人のように目を輝かせながら眺めている。

「腹減つただろ。適当な店に入るから選べ……それとさっきのことは黙つてろ」

「はーい……じゃああの店で。雰囲気良さそうだし」

レイが指を指したのは、ブルーキャッツという喫茶店だ。

「……お前、コーヒー飲めるのか？」

「ひどくない？ボクだってもう一人前のレディだよ。コーヒーくらい飲める」  
「そうかよ」

真崎の訝しげな視線を無視しながらレイは店のドアを潜る。

「いらつしやいませ。何名様でしょうか」

「2名です」

「お好きな席へどうぞ」

出迎えたのはマスターらしき男の人。小さいサングラスのようなものをかけている。

「軽食は取れるでしょうか？この街に来るのはなにぶん初めてでしてね」

「多少はメニューにありますよ」

人の良さそうなマスターはスツとメニューを渡してくれた。2人はメニュー表を眺めながら悩んでいる。

「レイ、選んでいいぞ」

「じゃあこのオリジナルブレンドコーヒーとサンドイッチ」

「俺も同じものにするか」

「畏まりました」

レイは雰囲気の良い店内を見渡している。普段が檻の中のような部屋だから珍しいのは仕方がないだろう。5分ほど待つと、サンドイッチとコーヒーが出てきた。

「美味しそ〜!! いったただつきま〜す!! はむ……むっ!! ねえこれ……」

「ああ……美味いな……コーヒーも絶品だ」

「喜んでいただけただけで何よりです」

料理とコーヒーに舌鼓を打つ2人。レイも問題なくコーヒーを楽しんでいるようだ。

そんな時カランカランと入店時の鈴の音が響いた。2人が扉の方を向けば、先ほどの少年達3人だ。

「へえ……面白い巡り合わせだね」

「気を付けろ。俺達の最優先目標だ、油断するなよ」

3人は店に入ると迷わずマスターの方に向かって行った。マスターも彼らの名前を呼んでいるあたり、常連か知り合いなのだろう。そして、もともと店内にいた金髪の男の元に行つてジューズを飲みながら話し始めた。

「……ッ、なるほど。キミ達がねえ……アツハハ。そっか、つまりボクの敵か。楽しみだねえ」

「はあ……楽しみがあるならいつもの生活も頑張れるつてもんだろ?」

「それとこれとは話は別さ。どうしようもないから仕方なくやってるんだよ。組織の崇高な未来つて奴のためにね」

「どうやら2人とも実験生活には不満があるらしい。無い方がおかしいが。しっかり



と5人の話を盗み聞きしたレイと真崎は檜山と呼ばれたマスターにお金を払って店を出ようとした。しかし……

「ねえ!! さつきキタジマにいた子だよね!!」

「んん? ああ、さつきの騎士君じゃないか。それに狼君とクノイチちゃんも」

バンがレイに話しかけた。

「よお……さつきぶりだな」

「わざわざどうしたの? もしかしてナンパ? アツハハ!! 可愛い子がいるくせにまだ足りないのかな?」

「かわつ!?! ……むう」

アミを見ながら言ったレイに、アミは頬を染めて膨らませた。

「違うよ。その……君の名前を聞いてなかったなって思っつて。あ、俺は山野バン。こっちは相棒のアキレス!!」

「俺は青島カズヤ。コイツはハンターだ。狼君じゃねえよ」

「私は川村アミ。この子は……って知ってるわよね。クノイチよ」

3人がそれぞれ自己紹介をする。レイは心の中で、苗字考えてないんだけど……と思うが、まあいいだろうと楽観的に考えて自己紹介を始めた。

「ボクはレイだよ。一人称はボクだけどちゃんと女の子だからよろしくう」

軽く挨拶して手をヒラヒラさせている。

「バン、知り合いなのか？」

「宇崎さん。さつきキタジマでバトルしたんですけど、すごく強くて!!」

「まさか3対1で負けるとは思わなかったよな」

「なに?……彼女はそんなに強いのか」

「いやいや、ボクだって負けることはあるよ。あの子の性能も良かったからね」

あくまでグラディエーターの性能がいいという事実を主張するレイだが、その操作技

術はすでに映像として保存されているので説得力がない。もちろんそんなことをしたのはアミである。

「ほう……レイはどんなLBXを使うんだ？」

店のマスター、檜山が興味深そうにレイに聞いてくる。もうすでに呼び捨てなのはご愛嬌だ。

「アツハハ、ボクはLBXを持ってないよ。普段はレンタルしてるからね」

笑いながら語るレイにどうやら皆の毒気も抜かれたようだ。

「レイ。そろそろ行こう」

「あ、はいはい。じゃあ皆さんそういうことで。じゃ、またね♪」

意味深にレイが最後を強調しながら店を出た。その顔はやはり笑顔だ。店を出ればまた真顔に戻ったが。

「海道さんにこのこと言わなくていいの？普通に裏切りじゃない？ボクまだ死にたくないんだけど」

「うるせえ。俺達黒の部隊は、八神さんについて行ってんだよ」

「八神さんねえ……ちよつと正義感が強すぎる気がするよ。ああ、もちろん良い意味でね」

「そうかよ……それで？今日の出来事でなんか思い付いたか？」

「まっかせてよ。戻ったら速攻で開発部だね」

「頼もしいこつて……」

真崎はやれやれと首を振りながら、真野達が待つ車まで2人で歩いて行ったのだった。

くいつもの部屋く

「たっだいまゝ。うん、やっぱボクの部屋はこうでなくっちゃ!!」  
「それはそれでだいぶ終わってんぞお前」

レイの自室に戻ってきた本人はすでに患者服に着替えている。着ていた服は真野に預けたようだ。

「んじゃ、開発室に行くぞ。ちなみになにを思い付いたんだ?」

「ん〜? デクーのバリエーション機だよ。今は軽装型と監視型しかないでしょ? 監視型は重要施設の警備用。軽装型は一般隊員の訓練用。ノーマルはいつも通り。なにが足りないと思う?」

「知るかよ。俺は実行部隊だつーの。頭使うのは得意じゃねえんだ」

「アツハハ!! お馬鹿さーん。えっとね、指揮官機並びにそれに伴う随伴機が必要だと思  
うんだ」

「……はあ?」

レイの主張に首を傾げる真崎。よく分かっていないようだ。

「例えばウチってさ、部隊ごとにリーダー機に随伴機が全部デクーじゃん。それをリーダー機だけ特殊なLBXにしたら部隊っぽくていいんじゃないかなって。あとは……雑に姿勢制御を強化してランチャーとかの反動がでかい武器を携帯しても問題ないようにする。なんかなくって思ってたけど、あの子達のLBXを見て思いついたよ。ウチのLBXには彩が足りないッ!!」

「なるほどな……お前、義務教育も終了してねえのによく思いつくな」

「勉強は関係ないよ。パツと思いつくだけさ。それを形にするのは技術班の仕事だからね。あれれ、もしかしてボク天才だったりする?」

ハツとした表情でレイは真崎に問いかけた。若干ニヤニヤとしているが。

「こんなところにいると宝の持ち腐れだけだな。ほら、着いたぞ。行ってこい」

「あいあいさ〜」

レイは自動扉の奥に消えていく。技術班と変態トークでもしているのだろう。技術面です。

「全く……この組織がクソ共の集まりだつてことは知ってるよ。お前みたいな奴が、お前みたいな性格になる程のことをされてるんだからな」

真崎は拳銃のトリガーに指をかけクルクルと回しながら呟いている。

（八神さんはどうして気づかない？……まあ、俺は俺の仕事をごなすだけさ。いつか八神さんが変なこと企んでたらアイツも参加させてやろう）

# 一日名誉弟子……その名はレイ

## 4話

「起きろ。今日の実験は無しだ」

「……………もう慣れたよ。今度はなに？」

今日も今日とでなにかいつもと違うらしい。初めて外に出た日から数週間が経っている。そんなことを悟ったレイはいつものようにゴネることなくスツと起きた。どうやら過酷な実験ではないだけマシらしい。

「エンジェルスターは知っているな？」

「エンジェルスター……ああ、神谷重工の重機工場だっけ。なに？今度はそこへいくの？LBX以外は興味ないんだけど」

「そこにLBXの開発者である山野博士がいるとしてもか？」

「ツ!!へえ……良いじゃん。今すぐ行こうよ」



「どうやらレイのお眼鏡に叶ったらしい。レイは立ち上がると真崎から服を受け取り着替えた。」

ガチャツつとロックが外れ扉が開く。出てきたレイはパーカーのポケットに腕を突っ込みながら歩き始める。駐車場まで行くともはやお馴染みとなった真野達の3人組が待っていた。

「……姐さん達暇なの？」

「なっ……嬢ちゃん失礼だね！ちゃんとした任務だよ」

「そうっすよ。警護は自分達に任せるっす」

「社畜なんだね」

「この子……どこでそんな言葉を……」

レイは幼少時よりこの施設にいるため変な言葉を覚えるなんてはずはないのだが

……

「……………」

「アンタかい真崎!!年頃の娘の教育に悪いんだからやめなさい!!」

明らかに目を逸らした真崎を真野が咎める。細井と矢壁はそれを見て笑っている。レイはなんのことがわかっていないように首を傾げている。

(……一応、技術面も買われてるから研究室で勉強してるだけなんだけど……まあ言わなくて良いかな。(面白いし))

なんとかその場を納め、5人はエンジェルスターへ車で向かうのだった。

くエンジェルスターく

「八神さん？」

真崎の気の抜けた声が響く。エンジェルスター正面玄関で5人を待っていたのはレ

イ達が所属する組織、イノベーターの作戦実行を担う黒の部隊のトップ、八神だ。

「真野、細井、矢壁、お前達は私と共に来て欲しい。監視の任務は現時点をもって破棄する」

「「ラジャー!!」」

「どもー八神さん。お久しぶりです」

「……君か、いつも実験ご苦労」

「いえいえ、これも組織の崇高な目的の為に奴ですよ」

「……………そうか」

八神が苦渋の表情をしている。おそらく人体実験というのが気に入らないのだろう。そしてそれを当たり前のように受け止めヘラヘラしている少女に対しても。

「アツハハ。八神さん、そんな顔しないでくださいよ。そうですねえ……一つだけ言いましょうか。」

貴方にとつての光は、本当に貴方を照らす光なんでしょうか？もう少し、光度を落とせば見えてくるかもしれませんよ」

「なに？……それはどうい……」

「アツハハ!! それじゃあまた会いましょう八神さん」

八神がレイを引き止める前に、レイと真崎は歩き出していった。真崎に至っては全力で頭を下げている。八神もそれを見て毒気を抜かれたのか、伸ばしかけた腕を下ろす。

（私にとつての光……海道先生？彼女は一体なにを……）

「八神さん、どうしたんですか？」

「ツ……なんでもない、行くぞ（後でしっかり考えよう。アサシンの件もあるからな）」

八神達もエンジェルスターの内部へ入って行った。

ところ変わってレイと真崎の2人組は、エレベーターを何度か経由して最深部までやって来た。いくつかのコンテナを通り過ぎてたどり着いた一つの扉。真崎はノックした後その扉を開けた。

「……誰だね？」

「黒の部隊副隊長の真崎と申します山野博士。八神さんの部下です」

「ほう……君が『鬼神』か。噂は私の耳にまで届いているよ。黒の部隊最強のLBXプレイヤーだよね」

部屋の唯一いた人物。LBXの生みの親である山野淳一郎博士だ。

「ははっ、私には過ぎた称号です。私はただ自らに課された任務を遂行しているだけに過ぎません」

硬い口調で話し始めた真崎。そんな真崎を、レイはポカンとした目で見ている。二つ名がつくほどだとは思っていないなかったのか、ウツソだろお前……みたいな顔をしている

「ああ、このアホ面を晒しているのが、あの研究所の実験体2号です」

「……なるほど、君がか」

「ほら、挨拶しろ」

「へ？……えつとご紹介に預かりました博士。ボク……私が……えつと……？」

「申し訳ありません。後ほどしっかり教育をしておきますので」

「構わないよ真崎君。それで、何の用でここに来たのかね？」

レイの緊張した挨拶を真崎が遮る。どうやら聞くに耐えなかったらしい。山野博士は手で遮ると真崎に話を促せた。

「この子はLBXの技術面にも精通してしましてね。是非とも、LBXの開発者たる山野博士にご指導ご鞭撻をいただきたいのです」

「え……今日、そういう予定だったの？最近技術関係多くない？」

「それだけ組織はお前の才能を買ってんだ。大人しく教えてもらえ」

「ふむ……まあそれくらいならいいだろう。こんな生活が続いていると暇でね。私のようなおじさんの話でよければ何でも聞いてくれ」

山野博士は少し考え込むような仕草の後レイに向かって微笑みながら真崎の話を了承した。歳の近い息子が居るだけあって、子供には優しいのだろう。

「では、私は部屋の外で待機しておりますので」

そう言つて真崎が部屋を出たことにより、博士とレイの2人だけが取り残された。

「君のことは何と呼べばいい？流石に2号なんてものは女の子に対して失礼だろう」

「はあ……ではボク……じゃなかった。私のことはレイと呼んでください」

「分かったレイ君。それといつも通りに話してくれて構わないよ。別に公式の場じゃないのだからね」

「ありがとうございます博士」

レイは少し微笑んで博士にお礼を言う。

「どうやらレイ君は今日のことを聞かされていなかったと見える。突然のことで考えが纏まっていまいだろう？」

「いえ……LBXで聞きたいことなら何個でもあるので大丈夫です」

「……君は、LBXが好きなのかい？」

山野博士は、目の輝き出したレイを見て恐る恐る聞いた。

「もちろんです!! L B Xはボクの全てと言っても過言じゃありませんから!!」

「全て……か。君のような子にL B Xを好きになってもらえて本当に良かった……しかし……そのせいで、レイ君の頭には……」

「それ以上は言わないでください山野博士。L B Xが作られる前からボク達はここにいます。L B Xがなければ、重機でもなんでも使って今と同じ実験をしてたと思います。でも……ボクはL B Xと一緒にこの実験を受けられて嬉しいんです。山野博士……ボクとL B Xを出会わせてくれてありがとうございます!!」

「……そう言ってくれると、私も報われたような気分になるよ。レイ君、L B Xを好きでいてくれてありがとう。君のような子供がL B Xを笑って遊んでいるのを見るのは、L B Xを作った者としてこれ以上ない幸せだ」

「は……!!」

2人は笑いあいながらL B Xのことについて話す。レイはもちろんのことながら、山野博士もどこか熱が入っているように見える。

「各種フレームごとのコアスケルトンによる姿勢制御バランスと、それに耐えうる金属インゴットの素材についてなのですが……」



「ふむ……良い着眼点だレイ君。君はどうやらブロウラーやパンツァーフレームが好き  
なようだが、まずは基礎中の基礎であるナイトフレームの構造からしつかり説明してい  
こう。一般販売されているLBXのコアスケルトンに使用されている金属は……」

「……………なるほど、だからすぐに。今日一日よろしく願います博士……………いや師匠  
!!」

「ははっ……………師匠か。良いだろう……………1日名誉所長ならぬ1日名誉弟子だ。レイ君、私  
の教えは厳しいぞ!!」

「望むところですよ!!LBXについてならなんでもかかってこいや!!」

「部屋の中の会話が怖え……………監視カメラを見てる奴ら、絶対寝てるだろこれ……………絶対に  
関わらないようにしましょう……………」

部屋から漏れ聞こえる『技術者』と書いて『変態』と読む者達の会話に戦々恐々とし  
た真崎は、何も考えずドアを守ることだけに専念した。そんなカオスな現場は、用が  
あつてエンジェルスター最深部までやってきた八神が仲裁に入るまで止まることはな  
かった。

（約6時間後）

「ねえ……なんか慌ただしくない？」

「侵入者だ」

「え!!それってつまりボクなので……」「ねえよ」……だよねえ……」

山野博士との対談を強制終了させられたレイは不機嫌ながらも先ほどまで博士が居た部屋で真崎と会話をしていた。博士はすでに八神と共に何処かへ行ったしまった後だ。

「どんな奴が来たの？」

「山野バン御一行様だ」

「アツハハ!!あの子達結構アグレッシブなんだね!!うんうん……やっぱり面白いや!!」

「はあ……なんでも楽しむのは良いことだが、状況を弁えろ」

「でもでも、これって獲物が罠も仕掛けてないのに勝手にやって来たんでしょ。ちょー

チャンスじゃん。ここで捕まえられなかったらイノベーターの崇高なる一員としては……まずいんじゃない？」

楽しそうな声で言うレイに、真崎はいつも通りお疲れだ。しかし最後の一言でレイは絶対零度のような声音になった。

「その通りだ。だが、神谷会長曰くなんの問題もないらしい。お前がテストしたインビットを使うそうだ」

「インビットツ!!あの子は頑丈で素早くて、武器腕による中近距離攻撃が出来る優れもの!!AIを搭載して少しブサイクになっちゃうのは仕方ないけど、あの子達じゃ無理かもね!!アツハハツ!!」

ハイテンションでインビットについて語るレイは楽しそう……と言うよりマッドサイエンティストのようなレベルの表情をしている。おそらく山野博士との対談の余韻がまだ残っているのだろう。

「お、おう……そう言うのに詳しく無い俺でも、インビットがすげえLBXだって言うこ

とは分かるぞ」

「アツハハ!! ねえカメラとか無いの? 是非ともインビットの勇姿を見たいんだけど」

「ふっ……そう言うと思ったよ。ほら」

「さっすが!! もう7年の付き合いになるだけはあるね!!」

「まあな……そうか、もう7年か……」

レイの声に応え、真崎は画面に監視カメラの映像を映した。4箇所に分かれた映像にはそれぞれ、停止状態のインビットが、デクーカスタムR（監視型）を破壊していくアキレス達が、それを操作しているバン達が、最深部であるここの扉の外が、映っている。

「デクーカスタムRやっちゃえ!! そこだ!! ……なんで当たらないのさ。プレイヤーやる気あんの!? ああもうまどろっこしいなあ!!」

「お前が満足するほどの操縦をできる警備員なんていねえよ……なんてもん求めてやがる」

「はあ!?! 出来るでしょこれくらい!! どうせボクはサイコスキヤニングモードさえ使えるようになればもつと強くなれるんだからね。今のボクぐらい無いとイノベーター失格だよ!!」

「まあ……ウチの練度の低さは認めるが……といつても、隊長格が強すぎてそれ以外の隊員との差で誤解されるだけなんだよなあ……はあ……世知辛い……」

机をバンバン叩きながら熱狂しているレイに、組織のLBXを扱う隊員のことと遠い目をしている真崎。先ほどの八神のように止めてくれる人はいない。

「あつ!!インビットいいぞそこだあ!!……つてああ!?カメラが……くそつ、やってくれ  
るじゃないかバン君。だがそんなことではインビットは……ハツ!?自動操縦だから視  
界がなくなるのか……無理だったあ……」

「……………(俺、7年もよくコイツのお守り我慢して来たよ、うん……本当に)」

インビットがアキレス達LBXによって突破されるシーンを見てレイはさらに叫んだ。どうやらLBXを自動操縦にしているのがお気に召さないようだ。

「はあ……まさかインビットがやられちゃうなんて……つまんないねえ……もう用はないや。帰ろうよ」

「勝手すぎるだろうお前……『PIRIPIRI』……はい、私です………ツ!!そんなツ

……相手はLBXですよ!?!……分かりました……すぐに帰還します」

突如かかって来た通話に真崎は声を荒げている。レイは首を傾げながら電話が終わるのを待ち……真崎がCCMを取めた。

「……帰るぞ。奴らは終わりだ」

「どうしたの?」

「エンジェルスターマックスを使うらしい……流石に終わっただろう」

「ツ!?!……イノベーター、いったいどこまで。うーん……流石に厳しいかなあ」

2人は帰宅の準備を始める。と言っても、立ち上がって埃を払っただけだが。

「あ、そうそう。これ……持っててよ」

「あん?なんだこれ……っ、LBXの設計図。お前……」

「貴方だつてここには不満を抱いてるはずだよ。八神さんも。いつか必ず革命の時は来る。それまで持つてて」

「……分かった」

こつそりと、レイはLBXの設計図を真崎に渡した。真崎は納得行かない表情だが、ここで騒ぎを起こしても何も意味がないので黙っている。それとも、レイの発した革命というのが気になっているのだろうか。

そのまま最深部を脱出する2人。しかし、その道は一つしかない。上へ行きたいレイ達と最深部へ行きたいバン達。両者が出会うのは、必然だったのだ。

「ツ…………お前は!？」

「レイ…………」

「どうして…………貴女が…………」

「アツハハ!!見つかっちゃった。ごめんねえ…………ボクこつち側なんだ♪ああ、この前は本当に知らなかったから許してね〜」

すれ違ったレイ達とバン達。バン達の顔は驚愕に染まりながらも絶望の色も見えて  
いる。

「とつとと行くぞ」

「はいはい」

「ちよつと待てよ!!……捕まえないのか?」

カズヤが最もなことを聞いてくる。

「生憎、俺達はLBXを持って来ていない。別件で来たのに面倒なこととしてくれやが  
て」

「アツハハ!!今度バトルするときは一撃くらい命中させれるようになってよね。じゃ  
ないと……思わずプラチナカプセルごと破壊しちゃいそうだから」

「「ツ……」」

レイから放たれる圧倒的なプレッシャーにたじろぐ3人。

「じゃあ本当にまたね。次会う時は敵だよ。ばいばい♪アツハハハハツ!!」

2人が3人に背を向けて去っていく。通路に響くレイの笑い声が反響してさらに大



きく聞こえている。

「レイが……敵……?」

「この前のバトル、もしアンリミテッドレギュレーションだったら……」

「何も……出来なかったのよね……勝てるわけがないわ」

残された3人が呟く。以前キタジマ模型店で行ったバトルを思い出しているようだ。

「2人とも、とにかく前に進もう!!今は父さんを助けないと」

「そうね」

「ああ!」

3人は走る。すでもぬけの殻となった最深部を目指して……いや、もっと巨大で、強大なナニカが……待っているとも知らずに。

## 解説のレイ

### 5話

「起きろ……って、珍しいな。もう起きてるのか」

「うん？昨日の実験はいつもより緩くてね。精神同調じゃあそこまで疲労しなくなっちゃったんだよ。眠れないから暇でさ」

エンジェルスターに行った日からまた日にちが経っている。この日も、真崎は起こしに来たようだ。

「で、今日のメニューは？」

「今日は外に出るぞ。アングラビシダスというLBXの大会の見学だ」

「LBXの大会!?行く行く!!……って、見学う？」

大会と聞いて目を輝かせるレイだが、見学という言葉聞いてすぐにしよぼんとし

た。確実に物騒な会話があったが、2人にとっては日常茶飯事ではないためスルーだ。

「ええ……最近外出多くない？」

「俺もそう思う。だが、今回はちゃんとした任務だ。なんでお前を連れていくのかは知らないけどな。ちなみに山野バンが出場する」

「ッ!!……いいねえ。ということはイノベーター関連だね」

「ああ……なんでも、海道ジンを送り込んだそうさ。彼に勝てば、山野博士の居場所を教えるという条件でな」

「アツハハ!!ウチのやりそうなことだねえ……それにしても、海道ジン？」

いつものようにケラケラと笑いながら着替えるレイ。もちろん真崎は後ろを向いている。

「……………ああ、あの時の同室の子か。海道つてことは養子縁組でもしたのかな、ボク達とは違っていい御身分だね」

スン……っと空気が冷たくなる。レイや灰原ユウヤがこのような生活を送っている原因……『トキオブリッジ崩壊事故』での生存者とはある病院に搬送された。そこで同じ病室にいたのは、レイ、灰原ユウヤ、海道ジンなのだ。レイとユウヤは現在の通りこの研究所の人間に連れて行かれたが、ジンは連れて行かれなかった。それどころか、レイ達が所属しているイノベーターのトップの親類になつたらしい。

「で、ソイツ強いの?」

『『秒殺の皇帝』と二つ名がつくくらいには強いらしい。使うLBXはジ・エンペラーという濃い紫をベースにした、騎士の見た目だ。武器は大型メイスの『ティターニア』。片手で振り回していることからなかなか高性能のようだな。ちなみにナイトフレームだ』

「ふくん……一点物が蔓延る時代だねえ。なんでボクはでちやいけないのさ」

「お前達の調整は最終段階にあるらしい。今度のLBX世界大会で完成させるそうだ」

「ツ!!もしかして……ボクのLBXも……?」

世界大会と聞いて、レイは両腕を抑える。武者震いだろうか。

「ああ、灰原ユウヤが純粋なナイトフレームのLBXを使うのに対して、お前は特殊なナ

イトフレームの機体を製造中だ」

「おお!!つまり、ボクだけの専用機なんだね?」

「いや? 量産型の試作機だ。お前の調整に合わせてLBXのテストも兼ねてるんだよ。ちなみにお前が設計した通りデクーベースだ」

「アツハハ!!あの子だね、パーフェクトだよ!!自分で設計した子を自分でテストできる。しかも初お披露目は世界大会だつて? 素晴らしい……素晴らしいよ!!……開発コード……いや、あの子の名前は?」

テンションが爆上がりしたレイ。鉄格子を握りしめるほど手に力が入っている。

「かの有名なトロイア戦争を終結に持ち込んだ切り札、トロイの木馬から名前を拝借した、『トロイ』だ」

「トロイ……いいねえ、うん、すごくいい。だったら今日も実験してよ。早く調整なんか終わらせてボクにトロイと合わせて欲しいんだけど。ボクの頭の中のチップも疼いてるってきつと」

「慌てるなアホ。今日は大会を見に行くつつつたろうが。アングラビシダスの優勝者にはアルテミス出場権が与えられる。お前のアルテミス出場は確定してるんだから、ライ

バル様の偵察ってことだ。研究所も技術班もLBXの製造に入ってる手が空いてないらしい」

「むう……分かったよ。所詮ボクは籠の中の鳥だからね。自由が限られてるのも理解してるさ」

「……そうかよ、じゃあ行くぞ」

扉のロックが解除されレイが出てきた。

「あ、そういえば会場ってどこなの？」

「この前の喫茶店『ブルーキャッツ』の地下だよ」

くブルーキャッツ地下、アングラビシダス会場く

「「「「「うおおおおお!!!」」」」」

広い空間にセットされた4つのDキューブのジオラマ。それを取り囲むように数多の人間が叫んでいる。それはまるで、コロッセオで行われる決闘試合を今か今かと待っている観客のようだ。中には中学生や小学生などの子供もいる。

「うっわ……なにここの、空気わっつる」

「我慢しろ。所詮は荒くれ者達が集う大会だ」

そんな中一際目立つのはレイと真崎だ。レイは13歳でありながら発育も良く、美しい銀髪が映える美少女。真崎は、190cmを超える巨体に真っ黒のスーツを来た厳つい顔の男。そのアンバランスさも相まって会場の中では一際浮いている。

「ほら、あれが海道ジンド。一応仲間だから私怨で攻撃すんなよ?」

「へえ……気の抜けた顔してんね。人形みたい……アツハハ!!人形はボク達の方だったね!」

「笑えねえよその自虐ネタ……」

軽口を叩きながら二階に上がり観客席に行く。するとやはり見知った顔ぶれがいた。

「なっ……レイ……」

「あつれえ？バン君達じゃん。アツハハ!! 久しぶり〜元気してた？少しは強くなった？」

レイと真崎の目の前には、自分のLBXの調整をしていた山野バン、青島カズヤ、川村アミの姿が。隣には時代錯誤な番長の格好をしている郷田ハンゾウもいる。

「誰だコイツ……？」

「この前話したイノベーターだよ。俺達が瞬殺された……」

「イノベーター!?!……まさか、テメエが刺客つてやつか!!」

郷田の問いにカズヤが答えた。郷田は声を荒げてバン達の前に立ち塞がる。

「アツハハ!! キミ良い人だね!……でも残念、今日は見学に來ただけなんだ。ボクが出ちゃうと優勝しちゃうし」

「なんだと……自尊心の塊じゃねえかコイツ……」



「でもその実力は本物よ……今のバンじゃ勝てないわ」

バン達は警戒を解かないがレイは依然リラックスした様子で話す。

「もう……今日はホントに見学に來ただけなんだってば。仲良くししよ。少年達？」

「いや……あんまり歳変わらないでしょ……」

「敵と仲良くする義理なんかねえ」

「ええ!! 連れないな……あ、キミさ、確か大会に出ないよね?」

「ああ?……まあ、出ないが」

郷田を指差しながら言うレイに訝しげな視線を送る郷田。少し引いている。

「じゃあさ、相互監視つてことにしない?」

「相互監視い……?」

「お互いがお互いを見張つてたら何もできないでしょ? どうせボクは見るだけだしさ。あ、捕まえようと思つても無駄だよ。この人腕っ節強いから」

「……まあいいだろう」

真崎の腕をバシバシ叩きながら笑うレイに毒気を抜かれたのか、郷田も賛成したようだ。

『一回戦を始めます。出場選手はお集まりください』

「じゃあ行ってくるよ」

「私達も」

「ああ」

バン、カズヤ、アミは出場選手なのでステージに向かった。今回はAグループのみの対戦ということもあり、カズヤとアミは応援のために近くまで行くのだろう。

「アツハハ!!バン君達のバトル、楽しみだね」

「お前はイノベーター側だろうが。刺客の奴を応援するんじゃないかねえのか?」

「彼なら大丈夫だよ。どうせ勝手に決勝まで行くだろうし。それよりもボクはバン君達に興味があるんだ♪あの子達の上達速度は目を見張るものがあるからね」

「確かに、アイツらはすぐ強くなってるが……（彼……つまり刺客は男か）」

警戒をしながらも2人は普通に話している。どう見ても敵であるとは思えない。

「なんつーか……お前変な奴だな。なんでイノベーターなんかにいるんだよ」

「それはね〜……」「おい」……はいはい」

真崎が一言だけ簡潔にレイに告げた。

「う〜ん……守秘義務って奴だね。まあ、ボクはそれくらい存在って思ってたらしい

よ」

「……………何者だよ」

あえて興味を煽るような言い方で、郷田は不信感を募らせたがレイは何事もなさそうにステージを見ている。

『バトルスタート』

MCからの唐突な開始宣言。郷田はすぐにステージに意識を戻した。  
バンの相手はランチャーを装備したブルド改だ。対するアキレスは片手剣に長方形の盾を装備している。

「雑魚しかいないね。あのブルド改のカスタマイズはイカしてるけど。他の奴らはカスタマイズもプレイヤーの腕もなっちゃいない」

「お前……見ただけで相手のLBXが分かるのか？」

「うん？どんな悪路でも走行できるブルド改の車輪を活かすために力強いモーターのマスラオ50を使ってるね。プレイヤーのバトルスタイルとマッチしてるけど、あれが通用するのはルール無用のアングラビシダスだけ……まあ、いろんな戦いを経験してるバン君なら倒せるさ」

「ほう……」

レイの説明に感服する郷田。再びステージに視点を戻せば、ブルド改が武器をアックスに持ち替えている。スタンングレネードで動きの止まったアキレスの腕を切り落とす作業の途中だった。

「バンツ!!」

「アツハハ!! 良いパフォーマンスだね。でも……美しくない。所詮は野蛮な大会の常連か」

今まさにアキレスの腕が切り落とされた。切り落とした腕を持ち上げ、プレイヤーである首狩りガトーはアピールをし始めた。周りの観客もそれに呼応して盛り上がっている。

「……この試合、バン君の勝ちだね」

「ああ? どう見てもバンの方が不利じゃねえか。いや、バンが負けるとは思っちゃいねえけどよ……」

「見てみなよ、バン君の目を」

「目だあ? ツ……あの目は……」

レイに促されて郷田はバンを見た。その目は、絶望的な状況でも諦めていない。依然、郷田に挑んだ時のことを思い出したのだろう。郷田も気づいたようだ。

そして……スタン効果の切れたアキレスは動き出した。

「なっ……盾をあんな風に……なるほど……」

「盾の使い方が上手くなつたねバン君。もしや……ボクとのバトルから取り入れたのかな？アツハハ!!素晴らしい成長速度だ」

ランチャーの発射直前に、アキレスは左手の盾を発射口に押し付け暴発させた。爆発によって吹き飛ばされたブルド改はその体を、ジオラマの柱に強く打ち付けダメージを負った。

「決めるみたいだね」

「必殺フランクション!!」

『アタックフランクション ソードサイクロン』

盾を捨て去り剣を拾ったアキレスはブルド改に向かって駆ける。負けじとブルド改もアックスを持ち向かっていくが……ブルド改の懐に入ったアキレスは、ソードサイクロンにより剣撃の嵐を生み出し……ブルド改を爆発四散させた。

『ブルド改ブレイクオーバー 勝者、山野バン』

「！！！！うおおおおおお！！！！！！！！」

まさかの大逆転劇に会場が湧く。

「よっしや！！ナイスだぜバン！！」

「アツハハ！！LBXバトルはこうでなくっちゃ」

続くBグループには、アミ、カズヤ、ジンがそれぞれの相手と対決し始めた。

「……お前に聞くのは癪だが、解説してくれよ」

「おっけーい。アミちゃんの相手のクノイチは、名前は省略するけど直線運動で性能を発揮するモーターを積んでるね。アミちゃんのクノイチは小回りが効くタイプ。どちらも同じクノイチだけど、同じクノイチだから違いは明確に生まれる。」

ほら、アミちゃんが勝った。今回のフィールドは南極だから、一度加速し始めると相手のクノイチは止まれない。滑る床だからね。それにアミちゃんの方が純粹に練度が

高い」

「……………お前ホントにすごいな」

「まだまだだよ。ああ、カズヤ君はね……………まあ……………勝てるでしょあれくらい」

「いや急に適当だなお前!？」

カズヤの講評になった瞬間根性論になったレイに、郷田はツツコミを入れた。

「いやだって……………あれだよ?」

「……………そうだな」

レイが半笑いで指を指した先にはふざけた態度でLBXを操作するカズヤの相手。対するカズヤもそれにイラついているのか照準が定まっていない。対戦相手が間一髪でかわしているのもあるが……………

「まあ……………そのうち凡ミスで倒れる……………ああ、うん。こけたね」

「ああ、こけたな」



カズヤの対戦相手は、フィールドの石に躓いてこけ、そのままハンターによって撃ち倒された。

「……………」

レイも郷田もある意味で絶句である。

「ま、まあ…………一回戦突破だお前ら!! やったな!!」

「…………そのポジティブさは少し尊敬するよ」

レイは呆れたような顔で、隣でガッツポーズをしている郷田を見ている。レイがチラッと横を見れば、対戦相手を瞬殺して観客席に戻ってきているジンの姿があった。

(……………実力は確かみたいだね。海道ジン君)

一瞬で決着がついた海道ジンの試合を、郷田に解説しながら見ていたレイはほんの少し眉を動かしながら視線を戻ってきたバン達に戻した。

# アングラビシダス3回戦 バンVS箱の中の魔術師

## 6話

「一回戦突破おめでとう3人とも。良いバトルだったね！」

「……………ありがとう、レイ」

「おやおやく？あんまり嬉しくなさそうだね……………ああ！敵のボクに祝福されても嬉しくないか。アツハハ!!気づかなかったよ、ごめんね……………あだっ!？」

「お前天然で煽ってんのか」

いつも通りケラケラと笑いながら祝福をするレイにゲンコツをお見舞いした郷田。若干涙目のレイは真崎に目を向けた。

「ちよつと、ちゃんと助けてよ!!」

「いや……………お前が悪いだろ。今のはただのじゃれあいだ」

「なっ……………職務放棄!!八神さんに嘘8割で密告してやる!!」

「マジでやめろよ!?絶対に合わせねえからな!」

ギヤイギヤイと騒ぐ2人に唾然とするバン達。

「……本当にイノベーターなのかしら……なんか」

「ああ、どつちかっていうと……いとこ同士みたいなの？」

「あのおっさん話がわかるじゃねえか」

「ああん?俺はまだ27だ!!」

ふと郷田の零した『おっさん』に反応した真崎が郷田を鋭い目で射抜く。郷田はスツと目を逸らした。

「アツハハ!!アラサーなのに恋人もいないおじさん……うん……なんかごめんね」

「うるせえ!!そんな哀れみの目で見んな!!あとおじさんちやうわ!!」

「バン……とりあえずアキレスをどうにかしましょう」

「あ、ああ……そうだねアミ」

まだ騒いでいる2人を置いて、バン達は右腕の無くなったアキレスを取り出した。そのままどうするか悩んでいた3人のところに、郷田は近づいて……

「これを使えバン」

「郷田……これは……ハカイオーの腕。どうして……」

「パーツ交換はLBXバトルの醍醐味だぜ……俺のハカイオーの腕を使うんだ。絶対勝てよバン」

「……ああ!!ありがとう郷田!!」

アキレスにハカイオーの右腕を取り付けた。そんな彼らの元へ、喧嘩が終わったレイと真崎が近づいてきた。

「あれ?……パーツの交換したの?アツハハ!!アンバランスだけど、逆にそれがいい味を出してるね!二回戦も頑張ってるね3人とも」

「いや、バンは3回戦からよ」

「おっ……」

アミがレイにタブレットを見せる。どうやらトーナメント表らしい。そこには、二回戦でバンと戦う予定だった選手の両名が同時に破壊されたことによるバトル続行不能で、バンが三回戦へ不戦勝になったことが書いてある。

「アツハハ!!不戦勝か。運も実力のうちってね♪流石バン君。もってる」  
「おい、近寄るな」

レイがバンの肩を叩こうとしたのを見て郷田が止めた。

「むう……まだダメか。まあ良いや、じゃあアミちゃん、カズヤ君頑張ってる」  
『二回戦出場選手はステージにお集まりください』

アナウンスが響きアミとカズヤがステージに行った。

「どもどもバン君。解説のレイです。よろしくね♪」

「はあ……?」

「さっきもこんな調子だったから気にすんなバン」

観客席でレイ、郷田、バンは並んでステージを見下ろす。すでにジオラマの前には選手がスタンバイしている。アミの相手はジンのようだ。

「海道ジン……秒殺の皇帝……流石のお前でも、あれの解説は出来ないだろう？」

「アツハハ!!舐めてもらっちゃ困るよ……といっても、大型メイスを片手で振り回すのに耐え得る強度のアーマーフレームとコアスケルトン、そしてモーターを搭載してること。あとは……CPUとCCMの反応速度が速いことくらいしか分からないよ。あ、本人の技量もすごく高い」

「それくらい見りや分かるっての……まあしかたねえか」

『バトルスタート』

MCの抑揚のない声でバトルが始まった。しかし……

『クノイチ、ブレイクオーバー 勝者海道ジン』

「クノイチが……」

「あらら……だからこの前言ったのに」

バトルが始まったと同時に、アミの操作するクノイチはジンのジ・エンペラーに向かって突撃。一撃で勝負を決めようとしたが当たり前に躲かれて反撃の一撃でブレイクオーバーしてしまった。

(……バトルを楽しむ気がないみたいだね。所詮は君も、誰かの言いなり……やっぱりボク達と同じ操り人形か。バトルのセンスは良いみたいだけど)

レイは目を細めてジンを見る。無表情で観客席にも戻っている。隣にいる白い執事の服を着ている老齢の男性がレイを見ると少し会釈してきた。レイを小さく手を振って返すとバン達の方を向き直した。

「次はバン君の出番だね。相手は誰？」

「仙道ダイキ、通称箱の中の魔術師。3体に分身するジョーカーを使うわ」

「分身？ふうん……キミ達以外にもそんな面白そうな人いたんだ」

興味深そうに口元を歪ませてデータを眺めているレイ。やはり悪側の人間のような表情をしている。すでにバン達の中で普通に打ち解けているが。

やがて2回戦の全てのバトルが終わり、3回戦が始まろうとしていた。

『3回戦を開始します。出場選手はステージへお集まりください』

「行ってくる」

「海道ジンが相手か……まあ、軽く捻ってくるよ」

バンとカズヤがステージに向かった。

「おい、カズは勝てるのか？」

「無理だね。相性が悪いってのもあるけど、操作技術が違いすぎるよ」

「ちよつと!!勝手に決めつけないでよ!!」

「まあまあ、見れば分かるさ」



アミがレイを非難するが、レイはなんてことなさそうな顔でステージを見るよう促した。

『バトルスタート』

MCの声でバトルが始まった。もちろん、バンと仙道ダイキのバトルもだ。

「9秒とちよつとだね」

「え……何がよ……ッ!？」

『ハンターブレイクオーバー 勝者海道ジン』

レイが眩き、アミが問いかけた瞬間ハンターの首元にジ・エンペラーのメイスが突き刺さりハンターは倒された。

試合終了の時間はレイの宣言通り、9, 9秒だ。

「うそ……カズがあんな簡単に……」

「簡単だよ。ハンターが銃弾を発射してから避けたんだ。確実に当たったと思い込んだカズヤ君の負けは当然さ」

「銃弾を……発射してから……？そんなことができるわけ……ッ!!レイ……確か貴方……」

「思い出した？そうだよ……ボクはあの時、ハンターが放った銃弾が発射されたからアキレスの盾を奪って防いだ。アッハハ!!出来る人は確かに少ないかもしれない……でも、可能なんだよ」

この結果は当然だ。とても言うような言い方でレイはアミに告げる。

「おい、バンを見ろ……押されてやがる……」

「「え?」」

郷田の言葉でバンのフィールドを見る。するとそこには、アミの言った通り3体に分身してアキレスを追い詰めているジョーカーの姿があった。

「へえ……あれがジョーカー。カッコいい子だねえ……で、分身って何?」

「はあ？見たら分かるでしょ。今まさにジョーカーが3体に分身してるじゃない」

アミが指をさす。ジョーカーは走りながら突然3体になり順々にアキレスに攻撃している。攻撃が終わればまた一体に戻り、動き出せばまた3体に……その繰り返しだ。アキレスはなすすべもなさそうに攻撃を受け続けている。確かにどう見ても分身しているようにしか見えない。

「どこが？ただ同じLBXを3体同時に操作してるだけじゃないか」

「……………え!？」

レイのなんてことはなさそうな発言で郷田とアミが叫ぶ。信じられなかったらしい。

「アニメとか特撮でよくある分身っていうのは、1人の人物が高速で移動して何人にも増えたように見えるだけ。つまり、オリジナルの1人以外は全てほんの少し動作に遅れが生じるんだよ。誰かLBXのカメラ機能で見みなよ。寸分違わず動いているから」

「ウツソだろ……………おいアミ、どうなんだ?」

「本当だわ……………完全に同時に動いてる……………まさか、3体同時に操縦するなんて……………」

掌にクノイチを立たせ、その目のカメラ機能でジョーカーの動きを追っている。

「単調な動きでいいならボクも出来るよ。今のところ最高は5体までかな。それ以上はCCMが処理できなくてぶっ壊れちゃったっけな」

「……もう貴女のことでは驚かないわ」

どうやらレイの次元の違う発言にアミは諦めたらしい。郷田も頭を抑えている。その時、バンのフィールドが光り輝いた。

「ツ!!……これが……これがVモード。すごい……ここまで機体性能が上がるなんて……!!」

フィールドでは、ダメージを積み重ねられたアキレスが急に輝きだし黄金の光を纏った。それに伴ってバンのCCMからスクリーンが展開された。レイはその光景にいつもの口調を忘れて子供のようにはしゃぐ。技術者としての一面もある彼女には凄まじい光景だろう。

Vモードを発動したアキレスは、バンの操作を受けつけることなく自立稼働しジョーカーに攻撃を加えていく。そして分身攻撃を全て受け止めて吹き飛ばした。

「……3体とも本物、レイの言う通りだった」

3体のジョーカーは全員、機体からスパークが迸った。

「アツハハ!!良いね……強いプレイヤーがカスタムしたLBX3機を同時に圧倒。しかもアキレスは片腕のバランスが違うと言うのに……そして、問題は一つ。プレイヤーが操作できないということのみ」

ニヤツと笑いながらレイは分析する。その情報は全てレイがすっかり記憶している。長所も短所も何もかも。

そのままアキレスとジョーカー3体は拮抗した戦いを見せる。しかし、流石のアキレスにも限界が来たのか、岩に背を向けて3体に囲まれてしまった。そして……

「やっとかいバン君。ヒーローは遅れてやってくるっていうけど、ちょっと遅いかもね」

レイに眩きに呼応するように、赤く光っていたアキレスの目が正常な色に戻った。

「行くぞアキレス!!」

バンが叫びCCMを操作し始めた。どうやらアキレスのコントロールが戻ったらしい。

「終わったかな。アツハハ!! 決勝戦は見逃せないねえ……」

レイはバトルの終了を宣言。そして、アキレスの『ライティングランス』が3体のジョーカーを同時に貫き爆散させた。

『ジョーカーブレイクオーバー 勝者山野バン』

「バンが勝った!!」

「ナイスよバン!!」

郷田とアミがバンの勝利を喜ぶ。

「うんうん……そうこなくつちや。アツハハ!!今なお成長している……最高の観察対象だね」

残るバトルは、山野バンVS海道ジン。シーカー対イノベーターの代表戦だ。

## ミニチュアハウスの中の人形

### 7話

アングラビシダスも残るは決勝戦のみ。すでにバン、アミ、カズヤとジンはステージで構えている。レイはと言えば、郷田やその他のバンの友達たちのところにすんなりと混ざっている。もちろん真崎も近くにいます。

「今までの選手にイノベーターの刺客はいなかった……つまり……」

郷田が小さく呟いた。

「アツハハ!! 気づくの遅いよ郷田君。そう……彼さ」

レイは笑いながらジンを見ている。その目は笑っていないが。そして、開催者の檜山改めレックスとMCによるコールが行われた後、ついにバトルが始まろうとしていた。



「そういや、お前は山野博士の居場所は知らないのか？」

「うん？知らないよ。興味無いもん」

「そうかよ……」

『バトルスタート』

レイと郷田が軽く話しているとバトルが始まった。開始早々アキレスが果敢に攻め、その攻撃が一瞬当たった。しかし負けじとジ・エンペラーもアキレスに攻撃し、今のところ戦況は拮抗しているように見えた。

「……どんな感じだ？」

「うーん……単純な操作技術で言ったらジン君の圧勝。でも……バン君のアキレスにはあれがある」

「Vモード、起動!!」

バンが叫び、アキレスが黄金に輝いた。そしてバンのCCMもスクリーンが展開され

た。

Vモードを発動し性能が上がったアキレスはジ・エンペラーに一撃一撃をしつかり命中させ少なくとも無いダメージを負わせている。

「おお!!秒殺の皇帝相手に大立ち回りだ。このまま押し切れ、バン!!」  
「そう上手くいけば良いんだけどね」

レイが呟いたと同時に、ジ・エンペラーが急にスピードが上がった。いや、ジンが先ほどよりも早くCCMを操作しているのである。ジ・エンペラーのスピードに追いつけていないアキレスはメイスで、蹴りで、タックルでダメージを重ねていく。

「バン君のバトルが一番良くないのは、焦った事かな。大方山野博士の事でプレッシャーなんだろうね。時間制限のあるVモードを有効に活かさきれないと……ほら」  
「Vモードが……終わった……」

レイが言った時、アキレスの体から黄金の輝きが失われ、バンのCCMも通常の形に戻った。

そこを見逃すジンではない。さらにジ・エンペラーを動かし追撃をかけて行く。アキレスに抵抗の隙は与えさえない。メイスを振るうと同時にアキレスの背後へ移動しさらに殴る。それを何回か繰り返すとアキレスは倒れた。

「ジン君、決める気だね」

ジ・エンペラーがメイスを両手で構え静止する。

『アタックファンクション インパクトカイザー』

ジンのCCMから音声が聞こえジ・エンペラーが動く。エネルギーを貯めて思い切りメイスを振り下ろすと……地面が割れマグマのような高熱のエネルギーが吹き荒れた。それはそのままアキレスへと向かって行き……アキレスが飲み込まれた……

レイが横目で郷田達を見ればアキレスが負けたと思っただけで絶望したような目をしてい

る。

「アツハハ!!それでこそ……それでこそ……AX-00に認められた人間だよ」

抉れた地面の中からアキレスが飛び出した。そのまま両者は仕切り直しとばかりに激しい激突を繰り返す。熱い攻防に会場も凄まじい盛り上がりを見せている。

「……………ん？」

レイは何かに気づいたように眉を細めたが、勘違いだと思っただのか何事もなさそうに視線を戻す。

『アタックフアンクション ライトニングランス』

『アタックフアンクション インパクトカイザー』

両者は同時に必殺フアンクションを放つ態勢になった。しかし…………ジ・エンペラーが技を放とうとするタイミングで、その機動を停止した。

「あー…………なるほど…………これは驚いた。アツハハ!!面白いねえ…………」

「何が起こったんだ!!」

「単純さ。彼の操作スピードにCCMが追いつかなくなった。CCMが処理限界を迎えたんだよ……ボクの使う品は余程高性能って事か」

ジ・エンペラーは行動不能。つまりジンの負け、バンの優勝である。

「帰ろっか」

「何か言っていないのか？」

「ボクの賛辞は無粋だよ」

「そうか」

真崎が近寄ってきてレイと話す。そのまま2人は会場を後にしようとするが……

「おい待て!!……帰る気か？」

郷田がそれを引き止めた。振り返ったレイは一言だけ郷田に告げた。

「バン君に伝言……アルテミスで待ってるよ」

「ツ!!……それは……」

「アツハハ!!じゃあねえ」

レイと真崎は扉を出て行った。残された郷田はその場に少し立ち尽くした後、気を取り直してバンを祝うために彼のもとへ向かうのだった。

外に出た2人は、すっかり暗くなった商店街で立ち止まる。少しすると、扉が開きジンが出てきた。

「久しぶり……いや、キミは覚えていないだろうね。はじめまして海道ジン君」  
「君は誰だ?」

笑顔のレイに対して、ジンは無表情でレイに問う。

「アツハハ!!無愛想だねえ……まあいつか。名前は……あー……真崎さん?」  
「言えば良いだろ」

レイは少し遠慮気味に真崎に問いかけた承をもらった事でその名を言った。

「レイ……ボクの名前はレイさ。まあ、立場的には一応仲間だからよろしくね。いや、今日は惜しかったね！」

「……それだけなら帰らせてもらおう。爺」

「はい、坊ちやま」

レイの言葉を軽く聞き流し、ジンは立ち去って行く。レイは少し頬を膨らませながらその姿を見送った。

「むう……なつてないね全く。これだから最近の若者は」

「同じ年だろうが。帰るぞ」

「はいはーい。ちなみにさ、ボクも山野博士がいる所に行けたり……？」

「しないな」

「だよね」

「どうやら現実には甘くないらしい。レイと真崎はそれから会話をすることなく、真野達  
が待つていた車に乗り込み研究所へと帰って行ったのだった。」

く 研究所く

「起きろ。実験の時間だ」

「おっはようございまーす」

「おう、いい挨拶じゃねえか。どうした？」

翌日、真崎に起こされたレイだがその声は明るかった。

「アツハハ!!もうすぐアルテミスでしょ?色んな強いLBXプレイヤーがいるんだ。  
きつと想像を絶するほど面白いんだろうなって思ったら実験でもなんでもかかってこ  
いや!!」

「はいはい……そんなに実験をしたいならすぐ連れてってやるよ」



真崎が面倒臭そうに言うのとレイの部屋のロックが外れ扉からレイが出てきた。

「行くぞ」

「はい」

2人は無言で歩く。全く同じ色、形をしている通路は明らかに迷いそうだが、何年もほぼ毎日歩いている2人は迷うわけもなく歩いて行く。

いつも通り実験室の扉が自動で開き中にレイだけが入ると、すでに灰原ユウヤは椅子でスタンバイしている。ガラス越しに研究者達も実験の準備をしている。

「おはよーユウヤ君。そろそろアルテミス、頑張ろうね〜」

「……………」

「むう…………そろそろ反応の一つくらい欲しかったんだけどなく〜」

実験がある日は毎日行なっているレイの一方的な挨拶は、今日もユウヤからの反応はなかった。

『実験を開始する……所だが、今日は別のことをしよう』  
「……はあ？」

研究所の職員が所属する白の部隊のトップ、加納義一はマイクを通して告げてきた。  
レイは疑問の表情だ。

『アルテミス当日にはサイコスキャニングモードを実戦で行ってもらおう。もちろんそこ  
が初起動だ。そしてそれを補助する為に我々が開発したのが……このスーツだ』

「はあ……？」

実験室に2人の研究員が入ってきた。それぞれに黒ベースで、片方には黄色、もう片  
方には紫が混じっている、全身を覆うようなスーツを持っている。

『今日は、それを着ながら特殊な水のプールの中に入れてもらう。なあと、お前達はその  
中にいるだけでいい。スーツの補助効果のデータを自動的に脳波としてこちらでモニ  
タリングするだけだ。ちなみにCCMの機能もあるのでそのスーツを起きるだけでL

B Xの操作も行える』

「なるほどね……なかなかの技術じゃん。で、ボクはどこで着替えればいいの?」

『はん……お前もそう言うのを気にするのか。まあいいだろう、簡易的にだが着替え室を用意させてやる』

加納の態度に少しイラつくレイだが、抵抗も出来ないので大人しく展開された幕の中で着替える。

「ちよつと……これ着にくいんだけど、女の人に手伝わせてよ」

『今は手が空いていない。つべこべ言わずさっさと着ろ』

「もう……む?ちよつとキツイかも……仕方ないか」

ぶつぶつと文句を呟きながらレイはスーツを着る。2分ほどで着替え終わったレイはその姿をあらわにした。

「ねえ……」

『どうした?』

「これさ、もしかしてアルテミスで着るの？」

『当たり前だろう。なにか問題でもあるのか？』

レイの表情の消えた問いに加納はさらなる問いで返す。

「問題しかないでしょ。一応ボクって架空企業の代表として出るわけじゃん？これ……客観的に見て破廉恥だよ」

『ツ……ぬう……確かに』

レイは13歳にしては発育が良い。その状態で割と体のラインがしつかり出てしまうスーツを着れば……流石によくはない格好だ。このままでは架空とは言え企業の品格も疑われてしまう。加納も同意したのか少し言葉を唸らせている。

『分かった。アルテミス当日までにデザインについてはどうかしておこう。今日はそれで行え』

「りようかい。それとアンタの隣で顔を赤くしながら前屈みになってるデブ、どっかにぶち込んでおいた方が良くないんじゃない？」

『はあ……？ツ!! 貴様、なにをしとるか!!……連れて行け!!』

「アツハハ!!……キモいんだよロリコン。死ぬよ」

ガラス越しでも分かるほどレイの周りの温度が下がった。その目はゴミを見る目だ。

『……ただの実験体であるお前に同情などしないが、お互い気苦労が絶えんな』

「アツハハ!!なに、愚痴? アンタは一切の容赦なく実験してれば良いんだよ。全ては

……海道先生の崇高なる目的のために、ってね」

『お前に言われんでも分かっている。では入れ』

「……そういえば呼吸は?」

軽い会話の後、思い出したかのようにレイが尋ねた。全身くまなく水の中に入るため呼吸ができるか、と言う問いだ。

『問題ない。対策はしている。灰原ユウヤはもう入っているぞ。さっさと入れ』

「はい……よいしょっと……もがつ?！」

『ふはは!! そう、お前達が入っているだけで良い。例え呼吸が出来なくともな』

加納に騙されたレイは、なにも対策されていない水の中で必死に息を止める。

(……加納ウ!! 貴様ああああ!!)

しかし、それも長くは続かない。そのまま息が切れ、レイは意識を失ってしまった。

## ボクだけの……

## 8話

(……………は?)

意識が浮上したレイは、ゆっくりと目を開けて周りを見渡す。

「いつもの……部屋?」

「よう、眠り姫。ご機嫌はいかが?」

「最悪だよ……乙女を溺れさせるとかあのカス野郎……いつかケツに『ジョーカーズソウル』ぶち込んでやる」

「切れ痔待ったなしだな……恐ろしすぎるから13歳らしい復讐方法にして?」

声をかけてきたのはいつも通り真崎だ。患者服のレイは手で目を擦りながら恐ろしいことを呟いている。ちなみに『ジョーカーズソウル』とは切れ味抜群のハンマー系武

器だ。見た目は死神の鎌である。

「……で、今日も実験？」

「いや、今日の実験はなしだ」

「また外出？流石に怠いんだけど」

「今日がアルテミスだぞ」

「ふうん……今日がアルテミス………今日がアルテミス!？」

真崎の何気ない一言で急にレイの意識が覚醒する。当たり前前だろう、レイが実験で覚  
れて意識を失った時からまだ1ヶ月は猶予があつたはずだからだ。つまり1ヶ月眠り  
続けていたと言うことになる。

「ちよつと、今何時!!早く会場に行かないと……」

「落ち着けアホ。今日つつつてもまだ朝の4時過ぎ……移動時間を考えてもまだ余裕は  
ある」

「………なるほど」



扉に張り付くように慌てるレイに対して、冷めた様子で返す真崎。どうやらレイも一巨落ち着いたらしい。

「なんでボクは1ヶ月も寝てたのさ……」

「データ採取らしい。なんでも、急に溺れさせられたことによる素の感情での行動。そしてその動きを命令した脳からの電気信号をデータとして採取したんだよ。災難だったな」

加納が騙したことも一応まともな理由があったらしい。

「それは分かった。でもそれって最初だけでしょ？」

「ああ、それ以降の期間はお前専用の『トロイ』にするために眠っている間の脳波のデータをとり続けてサイコスキャンングモード使用時の負荷の軽減を試していたらしい。起きてる時にやっていると良くて発狂だとき。良かったな」

「……納得できないけど納得するしかないんだね。ボク専用のLBXって言われたら引き下がるしかないし」

「そういうことだ」

レイは苦虫を噛み締めたような表情をしている。理解しているが感情が否定しているのだろう。

「はあ……ユウヤ君は？」

「アイツは薬品投与で痛みもないから問題ないさ。サイコスキャニングモードの負荷にさえ耐えられるレベルの投与らしいからな」

「あつそ。ボクにも薬品が効けばなあ……」

「感情を壊したいならオススメだけどな」

ユウヤは過剰な量の薬品投与で廃人一步手前のような状態だ。昔はレイにも薬品が投与されていたのだが、何故かその全ての効果が出なかったため現在は薬品なし……負荷の全てを一身に受けながらの実験生活をしているのだ。

「ボクのCCMスーツはどうなったの？」

「見た目だけなら劇的な変化だぞ？体を覆うのは両手と頭だけ。その二つは赤と青の2本のケーブルで連動していて頭にはヘルメットを装着だ。良かったな、いつもの服装も

許可されているぞ」

「……ジーンズのショートパンツに白いパーカーを着て、ケーブルが繋がったグローブをつけてヘルメットをかぶった銀髪でスタイルの良い13歳の少女って構図。どう思う?」

嘲笑うような声で、今日の自分の格好を思い浮かべながら真崎に尋ねる。真崎は少し目を逸らしながら遠慮がちに答えた。

「一部の界限で人気が出そうだな。あ、この前のデブは衆道に強制入信されたから問題ないぞ」

「そうだよねえ……いやさ、ボクが表舞台に立つのそこしかないから良いんだけど。

……衆道ってなに?」

「気にすんな」

レイはなんのことか分かっていないが、どうやらイノベーターにも混沌を極めた人間がいたらしい。

「バン君達は？まさか、山野博士を救出されたわけじゃないんでしょ？」

「ああ……そのことなんだが……両方に逃げられた」

「……は？なにがあつたの？」

「最初は……侵入者達を捕らえたんだが、山野博士の策略によりシーカー達は脱出。山野博士自身も行方をくらませたそうだ、別々にな」

「それってシーカーの奴らにウチのボスが明確にバレただけじゃなくてプラチナカプセルを盗めなかつたどころか山野博士まで居なくなつたの？ウチの絶対有利条件が2つも消えた……大分終わってんね」

「俺もそう思う。だが、収穫もあつた」

「収穫？」

イノベーター側の大量の失敗に呆れているレイ。しかし、どこか得意そうな真崎は勿体ぶりながら言った。

「今度のアルテミスはただ、サイコスキャニングモードの実験をするだけに収まらなくなつたぞ」

「へえ……どういふこと？」

「今年のアルテミスの優勝賞品である『メタナスGX』という超高性能CPUの中に、プラチナカプセルの解読コードが入っているらしい。つまり金庫は山野バンが、鍵はアルテミス側が保有しているというわけだ」

「ほほう……つまりアルテミスでバン君のアキレスを破壊して優勝すればプラチナカプセルとメタナスGXが同時に手に入って一石二鳥。しかもあちらの戦力も削げる。完璧じゃないか」

「ああ、しかもお前は以前山野バンチームに対して借り物のLBXで瞬殺……イノベーターの勝利は確実だ」

「アツハハ!!勝ちが決まったゲームは面白くないねえ……しかも掛かっているのは世界の命運。パーフェクトだよ。ボクとトロイの初陣に素晴らしい舞台だ」

さらにいえば、決勝戦は5個に分かれた各ブロックの優勝者によるバトルロイヤルだ。海道ジン、灰原ユウヤ、レイの3人が別々のブロックで出場しそれぞれのブロック代表になった場合、イノベーター側が決勝戦の半分以上を占める数的有利を取ることができる。そうなった場合の山野バンの敗北は確実だろう。

「今のうちにスケジュールを説明しておこう」

真崎はそう言ってCCMを見せてくる。

「箇条書きだから見やすいはずだ。

- ・ 出場登録はこちらでしておくので問題はない。
- ・ チームには『アヌビス』を使用する研究者2人がつく。
- ・ トロイのデータ採取を優先。
- ・ サイコスキャンングモード発動は決勝戦で行う。
- ・ CCMスーツも決勝戦でのみ使用する。
- ・ ブロック戦4試合は全て自由に動いてよし
- ・ 僚機はデータ採取メインのため戦闘行動を行わない。
- ・ 予備のトロイは無し（ダメージを負うな）
- ・ バトル中は常にバイタルチェッカーを装備。
- ・ 同じブロック内に灰原ユウヤがいた場合はそちらを優先すること
- ・ ……こんなもんか。結構楽だな」

「だね。決勝戦以外は自由にしてて良いとか破格じゃん。今までの実験はどうした？つて感じだよ」

10個の項目を確認しそこまで苦な内容ではないことを確認した2人は案外余裕そうな感想だ。

「ほつとんど関係ないからなこの実験内容。7年間の努力が決勝戦だけとかお前報われねえな」

「アツハハ!!別にいいさ、トロイと一緒に遊べるんだからね。ていうかさ、そのトロイはどこにあるの?流石に一回も触らずにアルテミス出場とかは遠慮願いたいんだけど……」

「そう言うだろうと思ってな。ほらよ」

真崎が床に置いていたアタッシュケースを壁についている物のやり取りをする場所からレイに渡した。

レイは受け取ったアタッシュケースのロックを解きその中身を開けた。

「この子が……ボクの……ボクだけのLBX……トロイ」

中には、デクーベースのヘッド、ボディ、レッグだがヘッドパーツがボディパーツより大きい……いや、ボディが異常に小さいというアンバランスな上半身、デクーの腰を流用し前方からの攻撃を確実に駆動部にヒットさせない作りの大きなアーマーフレーム持つ下半身、両腕は肘から先がガトリングの武器腕になっている、黄色ベースのLBX『トロイ』が収納されていた。隣には上にスライドすることで操作が可能になるタイプのCCMもある。トロイと同じ黄色だ。

「これって、ボク的设计通り武器腕の『デスバレル』で殴っても大丈夫なの？」

「LBXを殴っても壊れない耐久力を維持しながらガトリング発射による融解も防ぐ。地獄の開発だったらしいぞ」

「できるんだ!! さっすが神谷重工、金属の加工はお手の物だね!! デスバレルは厳密にはアーマーフレームじゃないから金属の使用が可能。しかもボクが頼んだ金属ならLBXへの殴打にも対応できる……アツハハ!! 早く動かしたいな」

初めての専用LBXにテンションが上がっているレイは、トロイの特徴についてひたすら語っている。



「これが量産されたら多分無人機になるね。硬い装甲からガトリングを斉射するだけの面白みのない無人機。でもそんなことはボクが操作する限りありえないのさ!!ガトリングの腕で突然近寄って殴る。誰にも予想できるわけがない……衝撃に弱いのと火と雷に弱いのがネックだけど躲せばいい。ボク熟练操作テクニクなら余裕だからね」

「……………」

「どうやら真崎は相槌を打つことさえ面倒になったようで黙って話を聞いている。聞いているだけマシだ。」

「なんといつてもやっぱりこのデスバレルの装填数!!両肩の後ろに弾薬庫を設けることで一度に打てる弾数は驚異の片腕60発。しかも、ガトリングだから銃身を回すことによって威力も爆上がり。それでさ真崎さん、この弾薬庫入るのって何マガジン分?」

「えーと……たくつ、こつち渡したほうが早いな。CCMを起動しろ……よし、今詳細データを送った」

「あざす」

真崎は自分のCCMからレイのCCMへデータが転送した。自分の口で説明するに

はデータが多すぎるからだ。

「なるほど、60発が片方に15マガジンか……えーと……合計で……1800発!?  
……口に出すと恐ろしい数だね」

「そんなに入るのか……インビットの装甲を一発で打ち抜く威力だったはずだぞ……それが1800発? 神谷重工マジで恐ろしいわ……」

反応をやめていた真崎も流石に驚いているようだ。

「動かしてもいい?」

「ああ、弾は入ってないから撃つことは出来ないがな。その代わり発射時の動画とそれに伴う分散率、威力の距離減衰など色々なデータもあるからまた送っとくよ」

「了解、修正はバトル中についてことだね」

そう言ってレイはCCMを操作し始めた。それに続くようにトロイが起き上がり設置されている机の上を歩き始める。

「姿勢制御バランス問題無し。試しに本気で……」

レイが呟きながらCCMの操作速度を急激に上げた。その速度はアングラビシダスの時のジンと同等、もしくはそれ以上だ。

命令を受けたトロイはキレのある動きでひたすら走る、跳ぶ、腕を振り上げるなどの動作を繰り返す。その動きは舞にも見える。

「うん、いい反応だ……欲を言えば、普通に走るんじゃないやなくて、脚部にタイヤをつけて滑るように移動できたら良かったかも。走りながらのデスバレルによる射撃は反動による不安定なロックオンっていう欠点が目立つね。まあそこはPSでなんとかするしかないけど……量産型無人機としてはダメだな。アルテミスに後に再設計しないと」

レイはトロイの良い点と欠点をバラバラに絞り出していく。CCMは携帯電話としての機能もあるのでメモに色々書き込んでいるようだ。

「これ、もしかしてエンジェルスターマックスのデータを流用したりした？明らかに性能が重機寄りなんだけど」

「よく分かったな。この間のエンジェルスターでの山野バン達との戦闘データから、重機の腕の稼働を流用しているらしい。デスバレルはそのガトリング版つてところだ」

「やっぱりか。明らかにLBXの火力を超えてるからおかしいなと思ったよ。バトル用には少しリミッターをかけようかな。流石に強化ダンボールは貫けないけど、ジオラマ外にでた弾が観客に当たって人が死にましたとか洒落にならないからね」

「そこらへんの判断もお前に一任されている。トロイの性能実験ができればいいらしい」

「……………よし出来た」

チェックと調整、それに伴うメモが終わったらしい。CCMに打ち込むのを止めると、真崎にそのデータを送った。

「これを技術班と研究所に提出しといて。どうせアルテミスでまた改善点がバカスカ出てくるからね。後でまた新しいバージョンを用意するさ」

「はいよ。……何書いてあるか分かんねえな」

「まあね、あ!!もう一つ書き忘れてた」

「……………なんだ?」

ハツとしたように大声をあげるレイに真崎は問う。どうせロクなことじゃないだろうと思いつながら。

「多分トロイって普通の人じゃまともに扱えないから、一般隊員に支給するのはやめておいたほうがいいってこと。運用するならインビットを配置してるところ以上の重要拠点に固定砲台として置いておく方がいいってね」

「了解。メモに加えておこう」

「ああ……楽しみだなく、早く時が経てばいいのに。目に浮かぶようだよ……多勢の観客の前でボクのトロイが他の全てのLBXだった鉄屑の上に立っている姿が……アツハハ!!」

無邪気に笑うレイの顔は、無邪気さの奥に熱を孕んでいた。

# L B X世界大会アルテミス

## 9話

くアルテミス会場く

今日行われるL B X世界大会アルテミス。それを目に収めようと凄い数の人が会場に集まっていた。

「ここは……アルテミスの会場」

「すげー人だな」

そんな中、アングラビシダスを優勝したことによってアルテミス出場権を与えられた山野バン、川村アミ、青島カズヤが会場に到着していた。

一度はテレビで見たことあるような世界クラスのL B Xプレイヤーに驚きながらも会場に向かって歩く3人の前に、見るからに高性能そうな車が2台現れた。1台の扉が

開き中から伸ばしっぱなしの黒髪の少年が現れた。バン達と同じくらいだろう。さらに車の中から髪で目元まで隠れた男が2、PCを持って出てきた。

「……………」

バン達の方を見る少年……灰原ユウヤは、彼らの顔を眺めて……空を見上げた。

「「ッ!!」」

空から聞こえるキィィィンという聞き覚えがある音に、バン達も空を見上げた。すると、空から戦闘機が降下してきて1人の人間が飛び降りて着地した。

「海道ジン……」

そう、バン達が通う中学校に戦闘機に乗って転校してきた海道ジンである。バンとジンはお互いに目を合わせて睨み合う。その目からは絶対に負けないという強い気持ちが見えている。

「アツハハ!! 皆さんおそろいだねえ」

「ツ……レイ!!」

そんな彼らの後ろから聞こえてきた声。どこか人を馬鹿にしているような無邪気な笑い方をしているのはたった1人、レイだ。バン達とジン、ユウヤは奥から歩いてきたレイと後ろの2人の白衣の男達に目を向けた。

「やつほ〜1ヶ月ぶり?……アツハハ!! やつと敵として出会えたね、バン君?」

「俺はこんなふうに会いたくなかったよ」

「おやおや、意外にも好印象をもたれてた感じ? 光栄だね!!」

「無駄な会話をするな。行くぞ」

「むう……分かったよ。じゃ、せいぜいボクと戦うまで負けないでね。バン君、ジン君、それと……ユウヤ君」

白衣の男に指摘され、レイは眉を潜めながらも男の言葉に従う。そして全員を見回しながら別れを告げた。



「アツハハ!!じゃ〜あね〜」

レイは彼らの方を見ずにヒラヒラと手を振りながら会場への階段を登って行った。それに続くかのように、ユウヤとジンもそれぞれ会場へ向かう。

「バン……レイには勝てそう?」

「わからない……あれから毎日特訓したけど、レイは本当に強いから……」  
「……………」

アミの問いに、迷いながら答えるバン。カズヤもバトルのことを思い出したのか少し青い顔をしている。

「でも……俺達は勝たなくちゃいけないんだ。イノベーターにメタナスGXを渡すわけにはいかない!!」

「バン……そうだな!!」

「ええ、絶対優勝しましょう!!」

少年達は気持ちを新たに、ライバル達が登って行った階段を登り始めたのだった。

ところ変わってアルテミス会場内。エントリーを済ませたレイと白衣の男は、常に行動を共にしながら物品販売をしているL B Xの各企業ブースを訪れていた。

「ねえ……前から思ってたんだけど、このブルドやブルド改みたいにデクーの下半身を特殊フレームにしないの？」

「デクーは量産機としての完成形に近い。ここからコアスケルトンごとの改造は効率が悪い。性能面も十分のはずだからな」

「なるほどねえ……安易に生産ラインを増やすような事はしたくないか。じゃあサイバーランスみたいに細身の高機動L B Xは？」

「デクーエースがいるだろう？」

「あれの設計思想はあくまで隊長機、性能こそ他のデクーよりも遥かに上だけど高機動用に設計してないよ」

「ぬう……しかしデクーにそのような機構を搭載するとさらに重量や耐久面の問題が

……」

「……デクーでは諦めたほうがいいかもね。この案はダメだ。結局新型の頼りになっちゃおう」

「そうだな……もとより、重装甲LBXを主に置く我が神谷重工には不得意な分野というのも響いている」

販売されているパッケージを見ながらデクーの改造案を出し合っている3人。どう見ても技術者の顔だ。

『アルテミス出場選手の受付が終了しました。20分後より開会式を行いますので出場選手の皆様はステージへ、ご観覧の皆様は観客席へお集まりください。繰り返します……』

アナウンスが流れ、周りの人々が一齐に移動し始めた。

「さて……僕らも行こっか。トロイの初陣だからね」

く20分後く

「おおく結構出場する人多いねく」

開会式が始まりMCが登場し開会宣言を行った。レイはポケットに手を突っ込んで立っている。そして、MCが一番近い出口から女性が出てきた。

「……………ん？受付のお姉さんじゃん……………ッ!？」

レイは目を見開いて驚いた。女性の胸元が開き中から機械のボディが現れたからだ。

「なるほど……………あれがメタナスGX」

そして、各選手のブロック分けが発表され始めた。

『レイチーム、Dブロック!!』

「え、ボクの名前レイで登録したの？」

「何か問題か？」

「ああいや、まさか貴方達が許可してると思ってた……」

「名前がないのも不便だった。ちょうど良い名前を黒の部隊の奴らが呼んでいたから借りたまでだ」

当たり前のようにいう白衣の男に対して、レイは少し驚愕の表情を露わにしながらもなるほどと頷いた。

「ジン君がAブロック、バン君がCブロック、ボクがDブロック、ユウヤ君がEブロックか……見事に別れたね。ボクのブロックで知ってる人は……あ、箱の中の魔術師（笑）君だ。余裕で勝ち上がれそうだね」

この組み合わせによって、ほぼ確実に決勝戦は1対3の構図が出来上がったと言って良いだろう。そして、開会式が終わって3人は控室にいった。

「おゝ小部屋だ」

「バイタルチェックを行う。椅子に座って待機しろ」

「あいあいさ〜」

男の指示でレイは椅子に座って腕にケーブル付きのリストバンドを装着した。

「……異常なし。では、今日1日はこのリストバンドをつけている。我々の端末にお前のバイタル情報が送られてくる」

「わかりました〜。あ、CCMのヘルメットとグローブ貸してよ。当分出番ないから感覚を馴染ませとく」

「良いだろう」

もう1人の男が手元のスーツケースに収められたヘルメットとグローブを取り出した。レイは両手にグローブを装着した後ヘルメットを被った。

「トロイを動かして良い?」

「許可する。ついでに調整も行おう。使い方は今朝説明した通りだ」

レイが立ち上がって両手を開き前に向け腕を大きく広げた。すると目の前に黄緑に

光るモニターが現れレイのバイタルデータとトロイの機体データが表示された。

「ツ……ちよつと頭が痛い」

「修正する……どうだ？」

「治ったかな。うん、大丈夫そう」

「ではLBXを動かせ」

レイは頭の中でトロイの動き方をイメージした。するとトロイもそのイメージに応じて動き出した。しかしその動きはどこかぎこちない。

「ボクのイメージを受信するスピードが遅い」

「修正する。頭痛はないか？」

「うん」

「……………どうだ？」

男がPCを操作した後、トロイの動きがスムーズになった。

「オーケー、特に問題なし。激しめに行くよ」

トロイが走り出す。部屋の中を縦横無尽に駆け抜けるその動きは、CCMを用いて操作するよりも素早く、正確で何より人間味を帯びている。

「動作に異常なし。2号、変化はあるか？」

「……少し乗り物酔いをした気分かな。別にバトルに支障は無いから問題ない」

「分かった。調整終了……後は好きに動かせ」

「はーい」

そしてレイは5分ほどイメージを続けてからLBXを停止させ、ヘルメットとグローブを外した。丁寧に2つをケースの中に収めたレイは少し不思議そうに男達の方を向き疑問を口にした。

「これ……ヘルメットいるの？グローブが肌にくっついてるからこれだけでも直接操作出来そうだけど」

「一応可能だが、脳から脊髄へ、そして運動神経を通り手の末梢神経への伝達にはごく僅



かな時間がかかる。その分LBXの反応が遅れる、ということだ」

「なるほどね。ヘルメットとグローブを繋ぐこのケーブルはその工程を無視できると……グローブだけの場合との差は？」

「0,00015秒だ」

「……………誤差じゃないの？」

「短時間の戦闘となれば問題はない。しかし、バトルが長くなるにつれて、その誤差は誤差の範囲を超える。気づけば、LBXを走らせたイメージを持った瞬間はまだ動き出していない……という可能性がある」

「ああ……………致命的じゃん。確かにヘルメットは必要だね」

2人の会話が終わり無言になった。男達はPCの操作を続けているがレイはなにもししていない。落ち着かないのか、徐に机のリモコンに手を伸ばしモニターの電源をつけた。そこには現在行われている試合の映像が流れている。今はBブロック決勝戦のようだ。

「ジン君は？」

「無事、決勝戦に駒を進めている」

「ふうーん」

Aブロックの覇者は海道ジンのようだ。男からそれを聞いたレイは画面に視線を戻した。現在はマスクドJという選手と神崎という男がバトルをしている。

「ええ……なにやってんのあの人。バレバレ……じゃないし（なんでこの研究者ども気づかないの？ どう見たって師匠じゃんか!!）」

レイがソワソワしている。画面の先にはマジックショーでも行おうというような黒い服を着ている男の姿。仮面もしているが、どこからどう見たって山野博士その人だ。

（マスクドJ……Jって淳一郎のJか……あの人、童心を忘れないなあ。だからL B Xを作れたんだろうけど……ちよつと流石にあれは……）

レイが目を細めて呆れている。男達はPCに集中しているためそんなレイの様子に気付いていない。

「マスクレイドJ……細身だけどそのスピードは一級品。トロイの弾幕から逃げられるわけがないけど……（面白そうだし、少し泳がせておこう。わざわざ変装してまでアルテミスにきたんだから何かあるんだろうし）」

レイの中では、決勝戦の組み合わせは山野バン、マスクドJ、海道ジン、灰原ユウヤ、レイの5人で確定しているらしい。すでにマスクドJをバン側の人間と捉えて、3対2の構図を想像している。

（ファイナルステージ前に挨拶しとこっかな）

『マスクドJ選手!! Bブロック代表として決勝戦に駒を進めましたあ!!』

（まあそうだろうね。LBXの生みの親が弱いわけがない。さてと……次はCブロック。バン君達だね）

すでにCブロック一回戦は始まっている。4箇所で行われているバトルだが、レイの視線はバン達に釘付けだ。

「アツハハ!! なにあの蹴り。以前のキミなら絶対あんな芸当は出来なかったよねえバン

君。これは……ボクも余裕こいてられないかな」

バン達の成長はレイの予想を遥かに超えていた。しかしレイは動じない。いや、逆にテンションが上がっている。自分と戦ったらどんなバトルを魅せてくれるのだろうか、と。

そしてバン達がそのまま一回戦を勝ち、2回戦、3回戦と順調に勝利していく。世界クラスのプレイヤーに全く劣っていないその技術に、初出場ながらも会場を湧かせている。

残すはCブロック決勝戦。バン達の相手はアジアエリアチャンピオンだ。

「使用機体はウォーリアー、ブルド、アマゾネス……個人の戦闘スタイルはバン君達と全く一緒。違うとすれば、長年培われてきたチームプレイが相手さんの方が勝っていること。それに対するバン君達は機体性能と奇想天外の発想から生まれる作戦で勝負するしかないね……で・も♪ ボク、ちよっとお手洗いに行ってくるよ。監視は？」

「要らないだろう。お前は早くバトルがしたくてうずうずしているようだから、態々監視がなくても戻ってくるだろう」

「アツハハ!!よく分かってるじゃん」

ケラケラと笑いながらレイは部屋を出てトイレに向かう。

「勝負は公平に行かなきゃね♪実力差っていうハンデがあるから、せめて彼らの本気は見ないでおこつと。アツハハ!!ボクやつさし〜」

独り言を言いながらスキップでトイレに向かったレイは、偶然か計ったのか、バン達のバトルが終わる直前に部屋に帰ってきたのだった。

「さあ……遊ぼうかトロイ。ボク達は全てをなぎ倒して世界一をとるよ」

レイには目の前のトロイの単眼が光ったように思えた。

# 初陣

## 10話

『Dブロック一回戦が始まります。出場選手はステージへお集まりください』

会場全体に響くアナウンス。それを聞いた控え室のレイは、アタツシユケースにトロイとCCMを収めて2人と共に会場へ向かって行く。途中、試合を終えたであろうバン達と出会った。

「アツハハ!!お疲れ様3人とも、ファイナルステージ進出おめでとう!」

「……ああ、ありがとうレイ」

「次はDブロック……レイの番ね」

「うん。さっきの決勝戦……ボクはキミ達のバトルを見なかった」

「なんでだよ?」

カズヤが2人の気持ちを代弁して聞いてきた。

「ボクとキミ達じゃ実力に差がありすぎるからね。その分のハンデはキミ達の本気を見ないことで打ち消してあげたのさ」

「素直に腹立つなお前」

カズヤが卒直に言ってきたが、レイは気にしていない様子だ。

「アツハハ!!イノベーターだもん。そりゃあ敵は煽っていかないとね。まあ、キミ達はせいぜいボクのバトルを見て対策でも考えてなよ。ファイナルステージは実質3対2だからね」

敵、と言う言葉で3人が少し反応した。それを無視して言葉が続けているレイは少しヒントを与えることにしたようだ。

「3対2……レイ、どういうこと?」

「おっと……言い過ぎたかな。アツハハ!!良い女には秘密が付き物ってね♪内緒だよ

」

そのままレイはバン達の横を通り過ぎてステージに出た。訝しげな視線をレイに送る3人だが、レイはもう興味がない……いや、バトルを楽しみにしているのか眼中にならぬようだ。

『レイチームが入場してまいりました!!彼らの公式大会での戦績は一切無し。出場経験が無いとのことですが、使用するL B Xのトロイ、アヌビスの性能も未知数!!一体どんなバトルを見せてくれるのでしょうか!!』

M Cの男がレイ達について紹介している。レイ達の登場に歓声のあがっている観客席に向けてレイは手を振る。どうやら気分が良いようだ。

『対するは、九州エリアチャンピオン佐伯リョウ率いる「チームウイズダム」。チーム全員がIQ170以上という秀才L B Xプレイヤー!!そのイカした頭脳で、このバトルの戦局も左右するのか、必見です!!』



レイ達の相手は、会場の盛り上がり具合からしてなかなかの人気チームであるらしいことがわかる。

「ふっ……君達が対戦相手かい？まあ、このチームウイズダムの天才的作戦の前に倒れ伏すのが目に見えている」

「アツハハ!!自信满满だねえ……良い試合を期待してるよ!!」

『全ての選手が配置に着きました!!これよりDブロック一回戦を始めます!!各プレイヤー……レディ!!』

MCがバトル開始の合図をしてきた。それにより全てのプレイヤーがLBXをジオラマ内に投げ込む。

「さあ!!ボク達の華々しい初陣だ……アツハハ!!トロイ!!」

「アヌビス投下」

「グラディエーター!!」

「カプト!!」

レイ達のバトルフィールドは「城砦」。遮蔽物となる城壁や城があるステージだ。

『バトル……スタート!!』

「データ採取開始。2号、しくじるなよ」

「分かっているって」

「相手のLBXの特性が分からない。一旦距離を取りつつ様子を見ようか」

「了解」

相手のLBXはグラディエーターとカブト。

グラディエーターは片手銃のマシンガン『クイーンズハート』と銃弾に対して強い長方形の盾『スクエアガード』を装備している。

カブトは近接戦において多大な威力を発揮する片手銃『ショットガンSG4C』を二丁拳銃として持っている。2つ同時に発射されたものを同時に食らえば並のLBXならば一撃でブレイクオーバーだろう。

レイのトロイは武器腕なので説明の必要はない。僚機のアヌビスは片手剣『ヘヴィソード』の二刀流だ。戦闘はレイに任せているので隠れているだけである。

開始早々、グラディエーターがマシンガンを乱射しながら距離を取った。カブトもその後ろに隠れるように下がる。

「へえ……様子見ってわけね」

対するトロイは特に何かするわけでもなくその場に立ち尽くすだけだ。1マガジン30発のマシンガンから放たれた大量の銃弾がトロイの装甲を直撃する……しかし無傷だ。

「なに、グラディエーターの攻撃が効いていないだ?!」

「……なんかした?」

「ツ!! 貴様……」

レイはまずCCMのボタンを触っていない。明らかに煽っているだけだ。

「落ち着いて佐伯君。装甲が硬い分動きは鈍重なはずだわ」

カブトを操る女性……元永カスミがリヨウを諫め冷静にトロイを分析している。

「あれ、動かないの？じゃあボクがやっちゃうよ」

レイは一瞬だけCCMを操作する。そしてジオラマないから聞こえてくる駆動音。トロイの武器腕であるデスバレルのガトリングが回る音だ。トロイは右腕を相手に向けた。

「ツ……隠れろカスミ」

「ええ」

二機はすぐ側の城壁に身を隠す。そして、一定の回転速度を迎えたデスバレルからついに銃弾が発射される。

ドウルルルツ!!

「ツ!?!」

デスバレルより発射された大量の銃弾は、2機が隠れている城壁の壁を一気に貫く。

「回避!!あのガトリング……威力がおかしい!!」

「分かってる!!……でも!!」

「アツハハ!!なす術なく逝っちゃえ!!」

グラディエーターはさらに奥へ、カブトは跳躍し城の方へ逃げていった。しかし、トロイは右腕を徐々にずらし銃口を城壁へ向けている。ガトリングから発射された弾はそのまま城壁を破壊していき、逃げたグラディエーターに追いつこうとしていた。

「そろそろリロードする頃だろう……カスミツ!!」

「……………今よツ!!」

「うん?」

右腕のデスバレルの射撃が収まったと同時に、城の影からカブトが飛び出してきた。そのままトロイの目の前に着地して両手のショットガンで胴体を捉え発射した。

ガシユンツ!!

強烈な炸裂音がジオラマに鳴り響く。しかし……

「だからさあ……さつきからなにしてるの?」

「なあっ……ウソ……」

『おおおおおつと!!二丁のショットガンの弾を全てボディに受けたトロイですが、なんと全くの無傷!!なんとという装甲の硬さでしょう!!チームウイズダム、最大火力が全く意味を成しませんツ!!』

MCの言う通り、確実にボディにヒットしたはずのトロイはなんともなさそうだ。それどころか命中した弾は全てトロイの装甲で止まり、そのまま地面に転がった。

「アツハハ!!……墜ちろ雑魚」

「逃げろカスミ!!」

「無理よ間に合わッ!?!」

カスミが声を上げる隙もなく、カブトの頭のにりロードをしていないデスバレルが向けられた。

「まさか……まだ撃てるというのか!？」

「ファイア♪」

レイが言うのと同時にデスバレルから発射された銃弾はカブトの胴体をいとも簡単に貫き……腕を下げていく。ガトリングを発射中の腕を下げたらどうなるか……お分かりだろう。カブトの頭から腰までを銃弾が貫きカブトは穴だらけになって爆発しかける。

「じゃ・ま♪」

やっと撃ち終わったトロイはその右腕でカブトを薙ぎ払って吹っ飛ばす。そして地面に転がったカブトは爆発した。

『カプト、ブレイクオーバーツ!! トロイ、圧倒的な火力でカプトを破壊!! なんとという強さだ!!』

「カスミツ、くっ……」

「仲間がやられて戦意喪失しちゃった?」

「そんなわけないだろう!! 仇は俺が取る!!」

「アツハハ!! 天才的作戦とやらも無くなっちゃったねえ?」

そしてトロイは遂にその足を動かし始めた。その巨大なボディからはありえないようなスピードで。

「早い!?! いや、駆動部を狙う!!」

逃げていたグラディエーターはトロイの現在地より上の城壁からマシンガンを放つ。しかし先ほどとは異なりその攻撃は一撃もヒットすることが無い。

「正確な射撃。うん、腕はいいね」

「クソツ……なんで当たらない!!」



トロイはジグザグな挙動で銃弾を回避していく。中には確実に当たると思われたもので、一瞬の迷いなく命中する前にレイは避けた。

「正確すぎるんだよキミは。確実に当たるように脳内で計算してるんでしょ？アツハハ!!さっすが天才、やる事が違うね……でもだから避けやすい」

レイが語っている間も、グラディエーターは何回もリロードして銃撃を続けている。

「クソツ、クソツ……」

「……はあ、興冷めだよ。飽きちゃった。じゃあ……バイバイ」

「いつのまにツ!？」

レイが言った時には、すでにトロイはグラディエーターの背後を取っていた。そしてトロイは両腕のデスパレルでグラディエーターの首、肩、膝裏、足首を凄まじい速度で突いた。

「はっ……クローも付いていないような貧弱な腕でダメージがと通るとでも思っているのか!!その慢心が貴様の敗北を……ッ!?何故動かないグラディエーター!!」

腕を下ろして立ち尽くしているトロイの目の前で、グラディエーターはリヨウの操作を受け付けなくなった。

『……おおつと!!審判より、グラディエーター行動不能によりブレイクオーバー判定が下りました!!よって勝者、レイチーム!!圧倒的な性能のトロイ、数多の銃撃を受けたにも関わらず無傷での勝利となりました。2回戦進出です!!』

「「「「うおおおおおおおおおお!!!」」」」

MCの宣言により、レイ達の勝利が確定した。

「アツハハ!!やった。トロイ、良い初陣だったね!!この調子で残りの奴らもやっちゃおう!!」

レイは嬉しそうに笑いながら、歓声に応えている。アヌビスも男の手元に戻り満足そ

うな顔をしている。思っていたよりもトロイの戦闘データが良かったのだろう。

そのまま2人は、敗北して放心しているチームウイズダムに声を掛けることなく、ステージを後にした。

〈観客席side〉

レイの圧倒的なバトルを見ていたバン、アミ、カズヤ、郷田達は驚きのあまり啞然としていた。

「ねえ……あれって……」

「ああ、レイはLBXの性能だけで戦った」

「そしてその上で無傷で勝ったと……ヤバすぎるだろ」

「お前ら、対策どうするんだ？」

レイのバトルを分析した4人だが、レイがトロイの性能のみで戦っていた事を見抜いて頭を抱えていた。

「しかも覚えてる？レイってば、左腕の銃身を使わなかったわ」

「片腕で、尚且つーマガジンしか使ってない」

「見た感じ、肩の後ろと腕のガトリングに繋がってる奴。あれに銃弾があつてあの驚異的な連射を実現しているみたいだな」

「そうか！つまりあれを切つちまえばレイのLBXは装填されている分しか撃てない！！」

「ええ、でも油断出来ないわ。あのトロイが最後にやった攻撃……きつとグラディエーターの駆動部を直撃して機能不全を起こさせたのよ。もちろん狙ってね」

アミが分析した情報は概ね正しい。しかし一部間違いがある。レイがグラディエーターの駆動部へ行つたことは機能不全ではない。駆動系の内部だけを潰したのだ。表面から見ればなにも起こってないが全て内部を解体すれば鉄屑となったパーツが多々出てくる事だろう。

「対策を考えればいいとか言つてたけど、肝心のレイの操作技術がわからないんじゃないやあな……」

バン達は他の選手のバトルが終わるまでの間、レイについて意見を交わすのだった。

# 魔術師VS……

## 11話

Dブロックは2回戦に突入。レイは弾薬の補充もメンテナンスもすることなく再びステージに立った。相手は「インペリアルソルジャー」というチームだが、2回戦は1対1なので特に関係ない。

『それでは、Dブロック2回戦を始めます!!各プレイヤー、レディ!!』

「トロイ!!」

「ブルド改」

今回は【平原】ステージ。見晴らしのいい丘があるためトロイがそのポジションを取れば圧倒的に有利だ。

『バトルスタート!!』

「突撃だブルド改ツ!!」

相手はブルド改を使うようだ。武装は、右腕に『スパイクランス』、左手に大型の盾『モノリスシールド』を装備している。開始からトロイに突っ込んでくることから、相手のバトルスタイルはどうやら大型の盾でLBXを守り、ブルド改の4輪の機動力で突撃しその勢いを利用して貫通力の高い槍での一撃を叩き込む、というもののようだ。

レイの1回戦を知らないわけでは無いはずだが、おそらくモノリスシールドの守りを破れるわけがないと思っっているのだろう……しかしその考えは甘かった。

「トロイ、斉射♪」

「はっ!!そんな攻撃でこのブルド改の防御を破れるわけがないだろう」

ポチツとレイがボタンを押すだけでトロイの両腕がブルド改を捉え、デスバレルの1マガジン合計120発の弾丸の嵐が吹き荒れた。

「なななな……なななな!!」

「アツハハ!!穴だらけだね」

デスバレルから放たれた弾丸は漏れなくモノリスシールドに突き刺さり……貫通してブルド改の全身を穴だらけにした。運が良かったのか、爆発することなくただのブレイクオーバーに止まっている。おそらくモノリスシールドを貫通する過程で威力が下がったのだろう。

『ば、バトル終了!!レイ選手、武器腕による冷静な射撃でブルド改の強固な盾を撃ち破り勝利しました!!3回戦進出です!!』

MCがレイ達のステージのバトル終了を宣言し、会場が歓声に包まれた。

「……つまんなーい」

相手選手に聞こえないようにボソッと呟いたレイは、無表情でステージを降りていった。



控え室に戻ったレイは、一回戦の後には行わなかった弾薬の補充を行った。そして控え室のモニターを画面に移すと、ちょうど箱の中の魔術師こと仙道ダイキが対戦相手に勝利を収めていた。

「おう、じゃあ次のボクの相手は魔術師君か。アツハハ!! てこずりそうだね、これは」

てこずりそう、で負ける、とは言っていないレイだが、もう興味はないとばかりに他のバトルを映した。ビビンバードXという羽とクチバシがついた鳥のような赤い機体ポーズを決めているようだ。

「ユジン……オタククロスの子子? なまじ実力があるから長引きそうだねえ。まあ……ヒーローの口上中は攻撃しちゃいけないなんていうルールもないし? アツハハ!! ……悪の本気を見せてあげよう」

文字だと伝わり辛いがとんでもなく悪い顔をしている。それはもう……いつの時代かの『お主も悪よのう』とか言っている偉い人のような顔だ。とてもアニメで放送でき

ない。

『Dブロック3回戦を始めます。出場選手はステージへお集まりください』

「トロイのデータは？」

「十分だ。トロイのデータは、な」

「了解」

少し会話した後、レイは席を立った。

ステージに到着した時にはすでに対戦相手の仙道ダイキチームがジオラマの前に立っていた。

「やあやあ、キミが箱の中の魔術師君だね。アングラビシダスは見えたよ」

「ああ？……お前が俺のジョーカーの3体同時攻撃を目視で見抜いたっていう女か。L

BXの性能差で押し切っただけで先輩風を吹かされてもなあ？」

やけに仙道がレイを煽る。ダイキのチームメイトもヘッへと笑っているようだ。

「アツハハ!!キミ相手じゃ性能だけで戦えそうにないから今回は真面目に行くさ。だからボクの期待に応えてよね」

「ちっ……舐めやがって。ジョーカーMk —2!!」

「オルテガ!!」

いつの間にかMCが宣言していたようだ。少し慌ててレイもアタツシユケースからトロイを取り出した。

「いっくよ、トロイ!!」

「アヌビス投下」

6機のLBXが揃った。赤くペイントされ新たに改造されたであろうジョーカーは鎌型の『ジョーカーズソウル』を、

他の2機のオルテガは共に基本装備の『ギガントアックス』を装備している。全員がハンマー系武器だ。

アヌビス2機はどちらも『コマンドハンドガン』の二丁拳銃スタイルだ。

『バトルスタート!!』

開始の宣言と同時にアヌビス達が後ろへ下がった。戦う気はないという意味表示のつもりだ。

「俺がトロイを相手する。お前らは黒いのをやれ」

「おう!!」

仙道の言葉にチームメイトの2人が元気よく返しCCMを操作し始めた。

「む?……どうするの?」

「知らん」

「巻き込んでいい?」

「ああ。トロイのデータはすでにPCに移している。もうアヌビスは用済みだ」

「冷たいねえ……了解」

オルテガ2機がそんなアヌビスを見て突っ込んでいく。トロイはそちらに行こうとしたが、駆けて来たジョーカーが3体に分身してトロイの道を塞いだ。

「おお!!本当に分身出来るようになったの?アングラビシダスの時もそうすれば良かったのに」

「無駄口を叩いていいのか?……タワアの正位置。その傲慢さでお仲間が倒されるなあ?」

CCMを操作していない左手でタロットカードを取り出したダイキはさらにレイを煽る。

「アツハハ!!ボクは別に元々随伴機なんて必要ないのさ」  
「なに?」

仙道が疑問の声を上げた時トロイの両腕が、アヌビスへ駆けているオルテガ達の方へ向いた。

「俺を無視するなっ!!」

それにキレたのか仙道が分身を含めた3体で同時にトロイに詰め寄りジョーカーズソウルを下段から振り上げた。どれが本物か分からない攻撃が3方向から迫るが……

「甘いねえ」

「なにッ!？」

レイは本物のジョーカーを見極めその攻撃を躲した。ジョーカーズソウルを振り上げて隙が生まれたジョーカーを放っておいてトロイはデスバレルを回転させ銃撃を行った。

「ッ!! 必殺ファンクション!!」

『アタックファンクション ジェットハンマー』

しかし、オルテガを操る2人もアルテミスに出場するだけあってその実力は高い。ト

ロイの銃撃がオルテガを貫通する直前に、ギガントアックスを装備している時に使用できる固有技のジェットハンマーを発動。ギガントアックスに取り付けられたブースターが点火し、オルテガを上空へと連れて行った。それによりトロイの銃弾を躲しながら、アヌビスに向かって回転攻撃をした。

『アヌビス2機、ブレイクオーバー!!トロイの恐るべきガトリングを必殺ファンクションで上手く回避しながらレイチームのLBX2体を倒しました!!』

それだけではない。オルテガ2機は真つ直ぐアヌビス達へ向かっていた。つまりトロイから見ればオルテガとアヌビスは直線上……しかも両腕それぞれに、だ。躲された銃弾はそのままアヌビスを貫き、その上オルテガの必殺ファンクションを食らい爆発したのだ。これで戦況は3対1、数ではレイが不利になった。

「お前……最初から分かかっていて……」

「うん。そうだけど、それがどうかした?」

仙道は、アヌビスがトロイの射線上を見抜いたようだ。それに少し呆気を取られなが

らレイを見た。しかしレイはそのことを当たり前かのように返した。本当になんとも思っていないようだった。

オルテガ2機がジョーカーの左右に戻りギガントアックスを構え直した。

「このままアイツも倒してやる!!」

「覚悟しろ!!」

ジョーカーズソウルを肩に担いだままのジョーカーを無視して、オルテガは次にトロイに向かつて走りだした。

「待てッ!!……もう遅いか。まあいい」

仙道が一瞬2人に静止をかけるが、時すでに遅し。

「アツハハ!!良い気合だね。でもキミ達、ボクが近接戦出来ないって思ってたでしょ。トロイ!!」



レイの掛け声に合わせてトロイの単眼が光った。そしてトロイは向かってくるオルテガに向けて走り出した。

「なにつ!？」

デスバレルしか武装がないトロイに接近戦の方が有利だと思っていた2人は、トロイが敢えて近づいてきたことに驚いた。

その隙を見逃すレイではない。

「アツハハ!!……必殺ファンクション」

『アタックファンクション 地獄乱舞』

「ゴートウーヘル……つてね♪」

トロイは素早い動きでオルテガ2機に近づき、両腕の銃身でボデイに向けてアツパー。上空に吹っ飛ばされたオルテガ達は、それに続くようにジャンプしたトロイの硬い銃身による乱撃を抵抗出来ず受け続け、トドメの一撃とばかりに片腕ずつで頭から頭を砕かれ墜落し爆発した。

『……………はっ?! オルテガ2機、ブレイクオーバー!! レイ選手、銃身でナックル系必殺ファンクションをオルテガに叩き込み完膚無きまでに叩き潰しました!! しかもトロイの腕に損傷はなさそうです!! これによりジョーカーとトロイの一騎打ちとなりました!! これは最後まで予想できない展開となって参りましたああああああ!!』

目を疑うような光景に、観客もMCも啞然とし会場は無言だった。しかしすぐに回復したMCが状況を説明したところで、同じように戻ってきた観客が今までで最高の盛り上がるの歓声を上げた。

「アツハハ!! 油断大敵、見た目で判断するからだよ♪」

「しくじりやがって……………お前らは見てな。皇帝の逆位置だ、相手の僚機を倒して自信を持ちすぎたな」

「くっ……………」

仙道が、ジ・エンペラーのようなイラストが描かれたタロットカードを引き悔しそうな表情の2人に追撃をかけた。仙道はすぐにCCMに視線を戻すとジョーカーのカメ

ラでトロイをしつかりと見据えた。

「(近接用クローも無いのに殴打だと……ふぎけているのかあのLBXは!!)……タワーの正位置……ふつ……俺が動揺しているだど?そんなことはあり得ないね!!」

「お、来るね。迎撃迎撃い!!」

ジョーカーが武器を片手で構えながら突っ込んできた。レイはそれを確認し再び銃口をジョーカーに向け射撃を開始した。

「それはもう見たんだよお!!」

ジョーカーはまた3体に分身し、それぞれで銃弾を躲しながらさらにトロイに肉薄している。偶に銃弾がジョーカーの体を貫通しているがそれは分身。一瞬体がブレただけだ。

「うげっ……だからキミの相手は面倒なんだよ……」

一発も攻撃が当たらない仙道にレイが悪態をついたが、それでもトロイは銃撃を辞めない。そのまま銃撃を躲し続けたジョーカーはついにトロイの元にたどり着き、3体同時に上段から振り下ろした。しかしそれもまたトロイには避けられる。そして3体の姿が急に消えた。

「おや？どこに行つたのかな」

「くっ……（なぜ当たらないんだ。確実に奴の死角を捉えていたはず……）」

トロイは辺りを見渡しジョーカーを探すが見当たらない。「岩山」ステージなので岩陰に隠れやすく、素早い動きで敵を翻弄するジョーカーには格好のジオラマだと言えるだろう。

「……………そこっ!!」

「なあっ!？」

レイが叫ぶのと同時にトロイがとある岩山に向かって突撃。その右腕を思いつきり岩に殴りつけ、その影に隠れていたジョーカーごと吹っ飛ばした。

「馬鹿なっ!! 確実に隠れていたはず!!」

仙道が慌てふためいている。そして地面に一枚のタロットカードが落ちた。仙道は戦闘に集中して見えていないが、彼がカードを見たらそれはワンドのAの逆位置。その意味は『物事が完全に終了すること』だ。

「アツハハ!! キミは相手の死角ばかり狙う癖があるねえ? 3体同時攻撃の本命はいつもトロイのカメラ外からだったよ」

そう、ジョーカーが隠れていた場所はトロイの死角になっていた岩の裏手。仙道の癖を見切ったレイはいとも簡単にそれを見抜き岩ごとジョーカーに攻撃を加えたのだ。

「さあて……次はボクの番だよ」

「ツ!! ジョーカー、うごく「遅いよ!!」なにっ?」

レイの指が今までよりも早く動き始めた。それに対応したトロイは急激に加速して

ジョーカーの視界から消える。その様子は先程のジョーカーの素早さに近い。

刹那、トロイがジョーカーの後ろに現れた。

「くっ……ジョーカー!!……ッ!？」

ジョーカーはすぐに回避行動を取り距離を取る……が、避難した先にはすでにトロイが居た。

「さっきまでそこに居たはず……一体なにが……」

それから動き続けているジョーカーは、それでも移動先にトロイがいる、動く、トロイがいる、を繰り返して少しずつジョーカーの動きが悪くなっていた。レイがチラッと見上げれば、焦りまくって操作もうまくいっていない仙道の姿があった。

「そろそろ決めよう……必殺ファンクション」

『アタックファンクション 光速拳・一閃』

いつのまにかジョーカーの目の前に居たトロイは輝き出した右腕を少し後ろに引いて構えると、一瞬でジョーカーの後ろに移動……その腕は前に突き出していた。トロイが右腕を振り払うと、ボディパーツに大きな穴が空いたジョーカーが爆発した。光の速さでジョーカーを貫いたのだ。

『ジョーカーMk ー2、ブレイクオーバーアアアア!!強い、強いぞレイ選手!!今まで見せてこなかった銃身での乱舞!!相手の動きを読んでの位置どり!!無慈悲なまでの必殺フアンクション!!圧倒的だああああああ!!Dブロック決勝戦、進出です!!』

MCの声に続くようにCCMを持つ右手を天に突き上げたレイ。まさに勝者の佇まいだ。

「「「わああああああああああ!!!」」」

それに呼応するように会場から歓声が上がった。レイのバトルはそれほどまでに観客の心を躍らせたらしい。

「ば……………かな……………この俺が……………負けた……………?」

仙道は目を見開き、CCMを強く握りしめながら爆発したジョーカーの破片を見つめている。未だに自分の敗北を認め切れていないようだ。

「アツハハ!!良いバトルだったよ。えつと……………仙道君だっけ?ありがとうね」

レイは仙道に声をかけるが聞こえていない様子だ。仕方ないな〜と呟きながらトロイを回収している。

「クソツ……………覚えていろ!!」

再起動した仙道は小物のようなセリフを吐きながら、チーム全員でステージを去って行った。

『タイタン、ブレイクオーバー!!ユジン選手、相手を寄せ付けけない正確な射撃でDブロック決勝戦進出を決めました!!』



「やりました……師匠ッ!!」

謎の赤い仮面を被り、赤いジャージを着たユジンことオタレッド、又の名をオタクロスの弟子、は勝利のポーズを決めながら師匠という人物に向かって叫んでいる。会場にいるのかどうかは分からないが。

「アツハハ!!あの人が決勝戦の相手か。バトルをちゃんと見てないから何してくるのか分からないな……まいつか。仙道君よりは弱いでしょ」

レイはユジンを見ながら呟くと、男達を連れてステージを降りて行った。15分後の決勝戦に備えてメンテナンスを行うのだ。

「2号、落ち着いてバトルをしろ。気分の高揚のしすぎで脳波が乱れている。続けばサイコスキヤニングモード発動に支障が出る可能性がある」

「およ?そんなに昂つてたか。うん、次の試合までにはなんとかするよボクつて鎮静剤も効果がないんだっけ? (ちゃんと見てたかいバン君?使用するファンクションはこの2つだよ)」

「ああ、ない。原因は不明だがな」

会話しながら、レイはバン達が座っている観客席を見つめ……バンと目があった。レイが悪い笑い方をすると、バンが眉間にシワを寄せながらレイを見た。

(その闘志に満ちた目……ああ、やっぱりキミとジン君、そしてユウヤ君が、ボクとトロイを引き立たせてくれるんだね……アツハハ!!)

少し見つめあった後、レイが先に視線を逸らし通路へと消えて行った。

# 決勝戦 ヒーローVS悪の尖兵

## 12話

「決勝戦までは少し時間がある。乱れた脳波を落ち着かせるため、レイは自販機で買いたいちごオレを飲んでいた。もちろん1人である。」

「これおいしー……仙道君、中々面白いねえ。負けた後でも衰えることのない闘志。市販のLBXで分身ができるスピードを生み出したりも出来る。中々愉快な人だね」

「独り言を言いながらレイはさらにいちごオレを飲む。先ほどのバトルの事を思い出して持ってきていたトロイの脚部の傷を撫でた。そんな彼女の下へ、1人の男がやってきた。」

「おや、お嬢さんは確かDブロック決勝戦進出者のレイ君だったかね？」

「ん？……あ、師匠お久しぶりです」

「師匠？何のことかね。私の名前はマスクドJというのだよ!!」  
「……あ、はい。すいませんマスクドJさん」

レイは折れた。キレッキレの決めポーズを決めながら声高らかに宣言する彼、マスクドJに対してレイの精神力は少し削られてしまったのである。さらにそれがいつかの日にLBXについて教授して貰った師匠相手だとしても、相手にするのが面倒という印象を抱いたのだ。

「君のバトルに興味が湧いてね。お邪魔なら失礼するが……？」  
「別に良いですよ。どうせボクも暇ですし」

珍しいレイの敬語は違和感を感じさせない。普段からこのような態度で真崎にも接すれば良いが彼女にとっては論外だろう。

「実は、かの山野淳一郎博士から君宛にメッセージを預かっていてね。受け取ってもらえないだろうか？」

「……あーはいはい、そういうことです。良いですよ（この人……後から恥ずかしさで

悶絶したりしないのかな？いや、別にボクには関係ないから良いんだけどさ」

「それは良かった。ではCCMに直接転送する」

「了解です」

お互いにCCMを出して通信をした2人。ピロリンという機械音とともにレイのCCMにデータが送信された。

「ふっ……」

お互いに少し笑う。設定上初対面の2人のはずなのだが……

「使命は果たした。ファイナルステージで待っているよお嬢さん」

「すぐ行きますよ。せいぜい寝首をかかれないようにしてくださいな」

2人の関係はすでに単なるライバルに戻った。レイは去っていくマスクドJの後ろ姿を眺めた後、起きられてきたメッセージに目を向けた。

『レイ君……先日渡した設計図だが、あの機体はあの時の設計図一枚では完成しない。添付している画像に対となるもう一つの設計図を入れてある。きつと君の力になってくれるだろう。願わくば、バン達の力になってやってほしい』

「あつはは!! 良いねえ……研究者らしい自分勝手な人だ。だからこそ憧れたんだよボクは。うんうん……取り敢えずこれは真崎さんに送信して消しとこつと。さて、あの設計図は機体名称が設定されてなかったけど……あれ? こつちにもない。むう……名無し  
のLBXなんてどうしろつていうのさ」

表示された文章を読んでにやけながら呟くレイ。どうやら添付された設計図には機体コードが無かつたらしい。山野博士には何か思惑があるのだろうかレイにはわからないようだ。

「ま、今考えても仕方ないか。よし、じゃあ決勝戦もちよよいと勝ちますか!」

席を立ったレイは機嫌の良さそうな雰囲気ですテップを踏みながら控え室へと向かうのだった。

十数分後

「よ、よろしくお願いします!!」

「はい、よろしくね」

アルテミスのステージの中央。他の東西南北に設置されたステージより一際高い位置に設置されたそのDキューブに小面から向かい合う男女。レイとユジンだ。ユジンはいつもの赤いジャージに仮面を被っておらず、緊張して両肩が上がっているし声も上ずっている。

「しよ、少々お待ちください」

「ん?」

ユジンがいそいそと手元の紙袋から物を取り出した。レイは不思議そうに見ているが何をしているのかわからない。

「とおう!!愛と勇気のLBXバトラー、オタレット参上!!師匠、見ていてください!!必ずファイナルステージに行つて見せます!!」

「……(ボクが外の世界の常識を知らないだけで、もしかしてこういうのは普通なのかな?)」

オタレットとしての格好に着替えた彼はポーズをとりながら師匠とやらに向かって言った。レイは何も言うことなく無言でトロイを取り出した。

MCによる2人についての紹介があり、彼のコールでLBXをスタンバイした。

「トロイ」

「ビビンバードX!!」

『両者準備が整いました!!それでは、Dブロック決勝戦。バトルスタート!!』

ついに始まった決勝戦。フィールドは『都市』だ。両者はどちらも動かない。読み合いをしているのだろう……と思われたが、

「やはりか!!」



「……………何が？」

突然ユジンが指を指しながら言った。レイは内心、またか……………と思いながらも問う。

「その形状、ガトリング、そして何よりその一つ目!!お前こそまさしく悪の尖兵に違いない!!」

「……………なまじ間違っただけから何も言えない」

ビシッ!!と効果音がつきそうなほどキレッキレの動きで彼は続ける。戦隊もののレッドのような彼はやはりと言うべきか、そういうところは厳しいらしい。レイは、イノベーターについては大体合ってるので小さな声で呟いた。

「一個だけ言わせてもらおうけど、一つ目ってだけならブルド改だつて……………「そしてえ!!」……………君あれだね。空気読めないんだね」

「この私、オタレッドがいる限り!!この世界の平和は脅かさせない!!」

珍しく苛ついているレイ。言葉を遮られたばかりか、人の話を聞かない彼に少しきて

いるらしい。さらに、彼のLBXビビンバードXも彼と同じような動きをしているため2倍でウザい。

「じゃあ正義の味方っぽく、このボクとトロイを打ち破ってみせなよ」  
「ぬわっ!?!」

レイの言葉でトロイが両腕をビビンバードXに向けた。そして無慈悲に放たれる銃弾の雨。慌てた様子でビビンバードXはスライディングやジャンプ、ステップで回避する。その光景は間抜けだが1発もヒットしていないあたりその操作技術の高さが窺える。

「くっ……なんと卑怯な。しかし、悪は滅びる定め!!食らえ、ビビンバードスペシャルビーム!!とう!!へぁー!!」  
「いや、唯の銃撃だよね?」

流石のレイもいつも通りには笑えない。掛け声を上げながらジャンプして右手に持つ『ビビンバードブラスター』から放たれる射撃は彼の様子に反して正確にトロイを捉

えている。ツツコミを入れながらもレイは冷静に、内心焦りながら肩部装甲で受け止めた。レイのCCMでは、微量だがHPが減っている。

「むう……思ったより威力高いなあ。やっぱ実弾じゃないときの耐性に不安があるかも」

眩きながらもレイは操作を続ける。ビビンバードXの射撃を躲し、蹴りをいなす。隙あらばデスバレルを撃ちまくる。準決勝のようなデスバレルを用いての格闘をせず、両者ともに均衡状態のままだ。

「なかなかやりますね。ですが、これならどうだ!!」

飛び上がったビビンバードXが銃を構える。すかさずトロイは右にステップして回避行動をとった。

「甘い!!」

「へえ?」

ビビンバードXは射撃をすることなくすぐに着地、そのままトロイの懐まで低い姿勢で突撃し足を払って転ばせた。

「うわ……起きにくい」

「これでトドメだ!!ビビンバードスペシャルウルトラダイナマイトキイイック!!」

『アタックファンクション レインバレット』

「名前全然違うんだけど!?!」

デスバレルの銃身では手を付けない。しかもトロイの特長的な大きな装甲が邪魔をしておまぐら立ち上がれていない。その隙を突き、ユジンは必殺ファンクションを放つ。

その場で逆立ちし、片腕だけで体のバランスをとったビビンバードXは回転する。銃を持った右腕を広げそのまま銃を乱射。トロイのデスバレルにも劣らない弾丸の雨が必殺ファンクションの威力で放たれた。

「アッハハ。ちよつと焦ったけど、早計だったねえ!!」

それを確認したレイはすぐにCCMを操作。倒れた姿勢のまま地面を蹴り、後転する事で体勢を立て直したトロイはデスバレルを撃ち始めた。

『レインバレットとデスバレルにもよる銃撃の攻防!!両者一步も引いていません!!これまで圧倒的な力を見せつけてきたレイ選手!!少し苦戦しています!!』  
(勝手な実況をしてくれるじゃないか!!ボクが苦戦?あり得ないね!!)

やがて、両者とも攻撃が収まった。トロイはリロード、ビビンバードXはファンクシヨンの体勢から復帰し地面に立つ。しかし……

「ビビンバードX!!そんな、どうして!?!」

ビビンバードXのボディの色々な箇所からスパークが迸る。それに応じてか動きもいまいち良くない。対するトロイに、ダメージの様子は無い。ビビンバードXは必殺ファンクシヨンを使いたはずの名前の通り必殺の技だったはずだ。無傷では無いだろうが、トロイの動きに問題はなさそうだ。

「アツハハ!!ボクぼトロイに負けない良い射撃だったよユジンさん。で・も♪ただ乱射するだけのファンクションじゃあボクは倒せないよ」

「それは……どう言う意味ですか?」

「跳弾って知ってるかい?」

跳弾、目標に命中しなかった弾丸が地面や壁など障害物に当たって跳ね返る事だ。すでに100年以上に遡るであろう歴史の世界、それこそ人が戦争をしていた時代に実際に跳弾を用いていた者が居たそうだが、その難易度から意図して成功させる者は数える程もないだろう。

しかしレイは意図して成功させる。

「……まさか、狙ってやったとでも!?!集弾率の悪いガトリング系統の武器で……なんていう操縦精度だ」

本来は単発銃で行い、尚且つ跳弾をさせる反射角や風の強さ、弾速、距離その他諸々を全て計算し尽くさなければ成功することのない技術をレイは当然のように行う。これは才能、そしてそれを開花させた皮肉な環境、イノベーター。技術、訓練、研究、そ

して実験。度重なるレイへの試練が彼女の潜在能力を最大限まで高め、それはLBXで生かされることになった。

野菜は厳しい環境に置くことで美味しくなるといだが、そのレベルを彼女は超えている。そして何より恐ろしいのは、訓練さえすれば実銃でも彼女は成功させるだろう。それだけのポテンシャルが秘められているのだから。イノベーターが灰原ユウヤのような無理な実験をレイに行わなかった原因はそこにある。元々薬が効きにくい彼女に無茶をすれば本当に壊れてしまう。ならば自由にさせようと、イノベーターの思惑は完璧に彼らの利益になっている。

「貴方が撃った37発、ボクはその半分を撃って迎撃し、その撃たれた弾丸を跳弾させて全部迎撃。そして残りのマガジン全てを攻撃に回した。ほとんど弾かれちゃったけど、なかなか良いダメージは通ったみたいだね？」

『ブラッディーレイン』という必殺ファンクションがある。二丁の拳銃で行うそれはCMの補助による跳弾を行って敵を攻撃するファンクションだが、レイは手動で行っているのだ。

「くっ………ビビンバードX!!」

そんな圧倒的な技術を見せられてもユジンは諦めない。今の自分はオタレンジャーのリーダー、オタレッドにしてオタクロスの弟子。仲間にも師匠にも半端なところを見せられない。何より、巨悪（彼の中で）をそのまま放っておくことはできないのだ。

ビビンバードXは動作の重い体をなんとか動かしてトロイに向かう。そのままさらに跳躍し、射撃をしながらキックの態勢に入った。

「負けるわけには、いかない!!」

「アツハハ!!世界レベルのLBXプレイヤー、やはりここは最高の遊び場だよ!!必殺フアンクシヨン!!」

『アタックフアンクシヨン 光速拳・一閃』

後ろに引かれたトロイの右腕にエネルギーが溜まる。そして跳躍したトロイは光となりキックをしてくるビビンバードXを正面から相手取り……閃光がフィールドを支配した。



「ツ!!」

数秒経って、視界が晴れる。フィールドには、胴体を穿たれたビビンバードXと、その後方で右腕を突き出しているトロイ。そして……ユジンがCCMを閉じた。刹那、爆発。ビビンバードXが爆散し、トロイの、レイの勝利が確定した。

『ビビンバードX、ブレイクオーバー!!銃撃による激しい攻防を制したのはレイ選手!!見事ファイナルステージ進出を果たしましたアアア!!』

「「「「うおおおおお!!!」」」」

レイとトロイは右腕を高く突き上げる。それに呼応して観客席のテンションもマックスになった。

「良いバトルでした。ありがとうございます!!」

「ボクも楽しかったよ。またいつか、バトルできたら良いね」

激闘を演じた2人は握手をする。仮面を外したユジンは負けたにもかかわらず晴れ

やかな顔で満足している様子だ。そんな2人に様子に会場もさらに盛り上がっている。拍手まで起きている始末だ。

「フアイナルステージ、絶対勝ってくださいね。応援させていただきます!!」

「アツハハ、お願い。じゃあね」

「はい、また」

2人は背を向けてステージから去る。試合が終わって少し時間がたったにも関わらず会場の歓声が止むこともない。それは2人の姿が完全に見えなくなるまで続いたのだった。

く控え室く

「ビビンバードXの戦闘データはどう?何か使える?」

「……難しいな。2号も経験しただろうがキックなど、多少の格闘を行うために駆動部の強化、可動域の拡張をしているのは理解できる。必要だったかどうかは別だが」

控え室で、チームメイトに登録されている白の部隊の研究員2人はPCでデータの解析を行なっている。バトルが終わったレイも、トロイの調整をしながらそれに加わっている。

「まあねえ……どうやら趣味と実用性の両方が重視されるから中途半端になるのは仕方ないさ。そんなことよりもちよつと聞きたいんだけどいい？」

「どうした？」

男は、レイがわざわざ話題を変えてまでの聞きたいことに内心驚きながらも耳を傾けた。

「ビビンバードXのあの動く口と鳴き声みたいな奴、どうやって作るの？ボクすごい興味があるんだけど……」

「……知らん。実戦で使えるものなど要らないだろう？我々は実用性のみを重視して開発しているのだ」

「むう……まあいつか。よし、メンテナンス終わりつと。適当に工具を置いておくよ」

「ああ」

ドライバーや布、ヤスリ、グリズなどで簡易的にメンテナンスを終えたレイは立ち上がって伸びをした。

「気休めにアンプル頂戴。データも取るからさ」

「良いだろう。おい、渡してやれ」

「了解」

他の作業を行っていた男から液体が入ったアンプルが手渡される。慣れた手つきでそれらをセットすると、レイは自分の首に向かって突き刺す。

「ツ……………ふう。やっぱ変わりないね。結局なんでボクってこういう普通の精神安定剤も効かないの？」

「それが分かれば苦労はしない。まあ……異常体質としか言いようがないのが現状だ」

「ふうん」

薬を投入したレイは特に変わらない様子で会話をする。バイタルチェックをしても変化がないため、本当に効いていないのだろう。

「分からないなら仕方ないね。とりあえず次はユウヤ君の番だし、高みの見物といかせてもらおっかな。結局ジャッジとバトルさせてもらなえなかつたし」

どかっと椅子に座ったレイは、笑みを浮かべながらスクリーンを見始めたのだった。

## サイコスキャニングモード

### 13話

ファイナルステージ最後の出場者を決める。Eブロック。控え室でバトルを見ているレイは、特に灰原ユウヤのバトルに注目している。

「1回戦、2回戦、3回戦、全てが調整用の動きか。ねえ、ユウヤ君の調整内容を教えてくれない?」

「加納所長よりお前には教えるなど言われている。技量面での良いハンデだと思え」「そうですかい。ま、良いけどね。あの程度じゃあボクは負けないし」

現在、ユウヤはEブロック決勝戦の真っ最中。ハンニバル・カーンの操るカブトの攻撃を躲している所だ。

「……5ミリ。次は3ミリか。2ミリ以下までいけなかったの?」

「無茶を言うな。お前と違って薬物投与をしているんだ。ここらが限界だろう」  
「ふーん。あ、コマンドハンドガンに変えた。てことは……うん、まあそうなるよね」

ユウヤのLBXジャッジは、後ろで控えていたアヌビスから拳銃を手渡されカブトに向けて5発撃つと、それぞれ両肩、両膝、首の駆動部に直撃しブレイクオーバーさせた。これでユウヤのファイナルステージ進出が確定した。

「準備は？」

「バッチリだよ」

「分かった。CCMヘルメットとCCMグローブの調整も完了している。付けていくか？」

「いや、ヘルメットをしてたらボクだって認識されずに失格になるかもしれないからね。あつちでつけよう」と

「分かった」

研究員2人とレイは、怪しく笑いながら控え室を出たのだった。

く中央ステージく

『おまたせしました!!これより、第3回アルテミスファイナルステージを始めたと思います!!まず初めに、進出を決めた5人の選手をご紹介しましょう!!』

MCの声で会場が沸き立つ。ステージ中央に集まった5人、山野バン、海道ジン、灰原ユウヤ、マスクドJ、そしてレイ。

『Aブロック代表、海道ジン!!』

「……」

ジンにスポットライトが当てられた。彼は何も言わずバンを見ている。

『Bブロック代表、マスクドJ!!』

『Cブロック代表、山野バン!!』



続けてマスクドJとバンにもスポットライトが当たる。彼らは観客席に手を振ってサーブスしている。

『Dブロック代表、レイ!!』

「アツハハ!!盛り上がってるね〜」

手を振りながら笑う。その顔は嬉しそうだ。

『Eブロック代表、灰原ユウヤ!!』

「……………」

ユウヤもジンと同じように何も言わない。それどころか虚空を眺めている。

「バン君、遂にこの瞬間が来たね」

「レイ……………絶対に負けない!」

「アツハハ!!楽しみだよ」

バンの目には闘志が宿っている。そこへすかさずジンも入ってきた。

「僕も負けるつもりはない。もちろん、君にも」

「へえ？ 秒殺の皇帝様の実力、堪能させてもらうさ」

「2号、そろそろ」

「うん、頂戴」

レイの後ろにいる研究員から声がかかり、ヘルメットとグローブが手渡された。レイはそれらを手慣れた手つきで身につけていく。

「バン君、ジン君、ユウヤ君……今日のボクは本気だ。どんな手段も使わせてもらおう」  
「」「」「ツ」「」  
「!?!?!?」

手にグローブを付けたレイは、そう言ってヘルメットをかぶる。それと同時に、ヘルメットとグローブがコードで繋がれた。そしてユウヤも、このステージに上がる時に羽織っていた布を取り、CCMスーツを着た姿が露わになった。

その不審な光景に会場は静まり返る。

「レイ……それは？」

「CCMだよ。このバトルのね」

『なんとお!!レイ選手が身につけたグローブとヘルメットはCCMだそうです!!携帯型ではない、今までに類を見ない特殊な形状だあ!!』

これはすでに波乱の展開が予想できます。さて、各選手準備が整ったようです!!それでは、第3回LBX世界大会アルテミス、ファイナルステージ……ready!!』

MCのコールがかかった。ユウヤとレイは両手を広げ、モニターを出現させる。他の3人は通常通り携帯型CCMだ。

「アキレス!!」

「エンペラー・M2!!」

「マスカレードJ!!」

「トロイ!!」

「……………」

5体のLBXが今回の戦場に舞い降りた。そこは火山に建てられた古代遺跡。5角形からなるそのステージは5体が同時にバトルするとあつて広大だ。

『2号、聞こえているな？』

「うん、感度良好」

レイのヘルメットには、イノベーター研究所からアルテミスの様子を見ている加納の声が聞こえる。

『灰原ユウヤのサイコスキヤニングモードを先に実験する。お前はその後だ』

「了解。それまではユウヤ君とも楽しませてもらうよ」

『好きにしろ』

それぞれ向かい合うLBX達、全てが一点物のレアなLBXなこの舞台で遂にMCから、全世界が待ちわびたであろう一言が放たれた。

『バトル、スタートツ!!』

「……え？」

バトルが始まった瞬間、4体のLBXがトロイの方を向いた。

「食らえ!!」

ジンの掛け声でエンペラーの持つハンマーの先端部からミサイル群が放たれる。それに続くように、アキレス、ジャツジ、マスカレードJがトロイに向かって駆け出した。

「ええええええええええ?!?!?え、なに、キミ達組んだの!?!」

レイが急いで腕を振るうと同時にトロイが動き出し、その場でミサイルに向かってデスバレルを発射した。弾丸は全てのミサイルを正確に捉え爆発させた。その爆煙の中から3機のLBXが飛び出して、武器を構えながらトロイに飛びかかっている。

『おおっと!!何ということでしょう!!バトル開始から早くも全員の狙いがトロイに集中しています!!ブロック戦で警戒されたのでしょうか!』

「まとめて穴だらけになれ!!」

ミサイルを迎撃したトロイは次に3体に照準を向け発射。ジャツジとアキレスは各々の盾でガードしながら突き進み、マスカレードJは空中で体を捻り、回転させ上手く躲けている。

「レイ!!」

「バン君!!」

一足先に着地したアキレスがトロイに向かって突撃。水月棍をトロイに向け、走りながら突き出す。

トロイはすぐさまデスバレルで受け止め唾ぜり合いになる。始めは突撃の勢いもあつてかアキレスが押していたが、徐々にトロイが押し返していく。

「私達を、忘れていないかい？お嬢さん」

「ツ…………左右に…………」

アキレスと唾迫り合いになっていたトロイの右にジャッジが、左にマスカレードJが陣取り剣をトロイに向かって構えている。

「悪いが先に墜ちてもらおう!!」

さらに上空から迫ってきたのは上段にハンマーを構えたエンペラーM2。4体による同時攻撃に、会場の誰もがこれまで圧倒的な実力で勝ち抜いてきたレイの敗北を悟った。しかし…………

「アツハハツ!!ああ…………楽しいツ!!」

「アキレス!?!」

槍を弾き返したトロイはすぐさま腕を左右に向け発射。2体も攻撃を中止して離脱。エンペラーM2だけはそのままトロイを叩き潰そうと迫る。

「はああ!!」

エンペラーM2のハンマーが確実にトロイを捉え破壊……することはなく、その攻撃は地面を凹ませるにとどまった。

「ツ……トロイはどこに……ツ!! 上か!？」

「楽しい……楽しい……ああ、最高だツ!!」

ジャンプして回避していたトロイはエンペラーM2がハンマーを構え直す前にその上へ乗り、武器を使えなくした。その時のレイはヘルメットで表情が見えないがとても人様に見せられないような恍惚な顔をしていたそう。

「ジン君はここで終わりだね♪」

「ツ!!」

レイの楽しそうな声と共に、ハンマーの上に乗っていたトロイがデスバレルをエンペ



ラーM2の顔に向けた。そのままキュルキュルとデスバレルが回転し始めた時に……

「ッ……トロイ」

後方からレイピアが飛んできた事により、行動を中断して一旦下がった。

「……マスクドJ」

エンペラーM2を助けたのはマスカレードJ。そのまま高速でエンペラーM2の横を走り抜けてレイピアを回収したマスカレードJは、アキレスの元へと向かっていった。

「待て、山野バンは僕が……ッ、灰原ユウヤ」

体勢を立て直したエンペラーM2がマスカレードJを追おうとするが、それに立ち塞がるようにジャッジが現れた。

『2号、一旦下がれ。CCMスーツのテストが終わった。次はサイコスキヤニングモードを実効する』

「ええ?……仕方ないな。了解」

レイは加納の指示で火山中央部の高台に向かい、他の4機のLBXの戦闘を眺め始めた。

「あのヘルメットとグローブ……思ってた以上に性能が高い……」

バンは呟く。会場の雰囲気もバトルの様子で多少は良くなったが、それでも携帯型CCMを使った操作よりも繊細で人間味のあるトロイとジャッジの動きに驚いているようだ。

「灰原ユウヤ、サイコスキヤニングモード」

「……………」

『サイコスキヤニングモード』

ユウヤの後ろでPCを操作している男の指示で、ユウヤが遂にサイコスキャニングモードを発動させた。ユウヤの髪が白くなり、光の灯つていなかった瞳が赤く光る。

「ぐうあ!?……………う……………頭が……………」

ジャツジからライトグリーンのオーラが現れたと同時に、レイ自身から嗚咽の音が聞こえてきた。

『ばばあ……………ままあ……………どこにいったっちゃったの……………』

「ツ!?……………なに、今の……………（いや、どうでもいい。今はバトルに集中しないと）」

レイの脳裏に浮かんできたのは謎の映像と声。真つ暗な景色の中でボロボロの建物が見えた。しかし彼女は頭を振り、無視して目下のバトルに視線を戻した。

（ユウヤ君の髪が白くなってる……………多分サイコスキャニングモードの負荷で色素が抜けてるんだ。薬物投与で抑えられてるとはいえ、いつまでも持たないでしょあれ）

遺跡中央部では、サイコスキヤニングモードにより性能の上昇したジャツジがアキレスやエンペラーM2、マスカレードJの3機に対してその出力を生かし大立ち回りをしている。しかし、流石に3機を相手にするのはキツそうだ。

「加納……エンペラーM2の相手はボクがするよ?」

『ああ、少し経ったらパワースラッシュを使用させる。それまで持たせろ』

トロイは高台からステージを駆け抜けているエンペラーM2に照準を合わせてデスバレルを発射。上方からの無慈悲な弾丸の雨がエンペラーM2に降り注ぐが、ジンはさらに素早くCCMを操作し回避していく。

「アツハハ!!流石ジン君……我らがボスの孫!!」

ジャツジがアキレスとマスカレードJの相手をしているのを確認したレイはトロイを動かし、エンペラーM2の元に向かって飛び降りた。

「レイ君……君は、いや、灰原ユウヤと君は一体……」

「アツハハ!! それを知るのはまだ早いんじゃないのかい? 海道せんせーの秘蔵っ子?」  
「ツ!! やはり君達は、お爺様が……」

「ほらほらア!! ボーツとしてちや破壊しちやうよ!」

「くっ……強い!!」

トロイのデスバレルによる乱舞をエンペラーM2はハンマーで受け止める。しかし防戦一方のエンペラーM2はやがて押し負けていき、少しずつ後ろに下がっていく。

「必殺フアंकション!!」

『アタックフアंकション 地獄乱舞』

「なにつ!」

さらに深く詰め寄ったトロイは地獄乱舞を発動。両手にエネルギーを貯めエンペラーM2にさらなる打撃を加えようとしたところで……

『アタックフアंकション パワースラッシュ』

「へっ?……がっ……ツ!? アア!」

「なっ……」

少し遠い場所で剣にエネルギーを貯めていたジャツジによる、以上の威力のパワー斯拉ツシユが飛んできてトロイの左腕を切り裂き、直線上にいた唾迫り合いをしているアキレスとマスカレードJにも飛んで行った。

『うう……痛い……痛いよお……』

「何なんだよこれ!!こんな記憶は知らない!!ボクは泣いたことなんか無いのに!!」

左腕で頭を押さえながら叫ぶレイ。今の彼女の視界には、手の甲に涙が落ち巻かれた包帯にシミが出来ている映像が浮かんでいる。それと同時にユウヤの様子も可笑しい。全員がCCMを操作する手を止めおかしくなった2人を見ている。

『どうした2号?おい、返事をしろ……灰原ユウヤはどうなっている!?!……なんだと、実験中止!!強制停止させろ!!』

(なんて言ってるの?……聞こえにくい……頭が割れそうだ)

「さつきからうるさいんだよ!!ボクの中に、これ以上入ってくるなアア!!」

レイの動きに応じて、トロイもヘッドパーツに腕をつけてもがく。その間にエンペラーM2は一旦後退したのだった。

『1人に……しないで……』

「ツ!!はあ……はあ……そういうことね」

ユウヤが発する言葉と、レイの脳内で響く言葉が重なった。

「レイ……?」

『マスカレードJ、ブレイクオーバー!! マスクドJ選手、敗退です!!』

(脳波も使ってるせいかな……頭に埋め込まれてるチップを通して、ユウヤ君の記憶でも受信してるんだらうね。すご……胸が苦しい……痛い……辛い……これ全部、ユウヤ君の経験?)

いつのまにやら、パワースラッシュの直撃を受けたマスカレードJはブレイクオーバーしていた。

「あははははは!!! あーっははははは!!」

狂ったようなユウヤは笑いながらLBXを操作し始めた。

「1人にしないで」

「勝手な事言わないでよユウヤ君……はあ……あの頃はいつも2人一緒だったのにさ……ほとんど話してないけど……はあ……」

ジャツジが大きな風切り音を発しながら剣を振り回している。いや、暴走していると  
言ったほうが正しいだろう。

『被験体を破棄。離脱しろ』

『了解!!』

「なツ!! アイツら……見捨てるつもりか」

(そうだね、イノベーターはそういう奴らだ)



ユウヤの後ろの2人がPCを閉じてステージを去っていった。どうやら現段階までのデータで妥協する事にしたのだろう。

「はあ……はあ……ねえ、ボクは？」

『ぬう……本来なら棄権して離脱しろと言うべきだが……ジャッジのCPUに記憶されたデータは惜しい。出来る限り回収しろ』

「了解……（ユウヤ君自身についてはなにも言わない……使い捨てだとしても言いたいのかな？）」

頭を押さえながら加納の指示に返事をしたレイは、なんとか呼吸を整えて空中のディスプレイに両手を戻した。

「でも……やり方はボクが決めるよ」

『好きにしろ。だが、サイコスキャンニングモードは出来るだけ使いな。なにが起きるか分からない』

「オツケー」

レイは一息ついて、ユウヤの苦しんでいる様子を見ているバンとジンを見る。

(ま、いつか。これはボクの役目だ。さつきから頭の中に流れ込んでくるユウヤ君の記憶。ホント……薬物で表に感情が出ないとはいえこんな実験をよく耐えてきたよボク達は。はあ……クソ食らえだ。今更だけどアイツら絶対に許さない)

「ユウヤ君……10年以上続いたボク達のこんな生き方に終止符を打とう。ボクは……キミを解放する。サイコスキャンニングモード……起動ッ!!」

『サイコスキャンニングモード』

覚悟を決めたレイは数秒前に使うなど言われた禁止手を使った。ジャツジと同じくライトグリーンに光るオーラを放つトロイは、先ほどまでとは迫力が段違いだ。

「うっ……あはははははは!!! 一人に……ッ!! ああああああ!!!」  
 「ツツツツツツ!! 頭が……割れそうッ!!」

レイがサイコスキャンニングモードを発動すると同時に、ユウヤとレイがさらに苦しみを始めた。

『……………』

『キミは……だあれ？』

記憶の混濁が2人の中で起きる。病院で初めて出会ったあの日、研究員達に連れられてきた同じ境遇の2人。

『……………』

『ねえ……どうしてここにいるの？』

(そうだったねえ……あの頃からキミは全く喋らなかつたね。別に気にして無かつたけどさ。この世の全てに絶望したよう顔をして虚空を見つめてた。それなのにボクは空気が読まずずっと話しかけ続けて……バカみたいだった)

「キミを救うことが、ボクの贖罪さ。行くよ……トロイツ!!」

「あはははは!!」

同じ光を放つ2体のLBXが今、  
激突する。

## 決着

## 14話

「はあああああああ!!!」

「あはははははは!!」

ライトグリーン閃光の閃光がフィールドを支配する。その中心点では、2機のLBXが激突していた。

ジャツジの剣とトロイのデスバレルがぶつかるたびに衝撃波が生まれフィールドの柱や岩を破壊していく。少し離れた場所ですれを眺めているアキレスとエンペラーM2は、見ていることしかできない。横槍を入れれば激突の余波で破壊されるかもしれないからだ。

「トロイ、もっと速く!!」

トロイのカメラアイが光る。レイの声に呼応するように、トロイの動きはさらに加速する。

「1人に……しないでえええええ!!!」

ユウヤの叫びが、暴走したジャツジをさらに強化する。暴走していただだけの単調な動きでは無い。洗練された戦士の動きだ。

「ッ………トロイ!?!」

数々の打ち合いの末、ついにトロイにダメージが入った。ジャツジが振り下ろした剣が右肩の装甲を砕いたのだ。元々パワースラッシュの影響で左腕を失っていたトロイは、パワー負けをし、崩れた瓦礫の中へと吹き飛んだ。

「………トロイの損傷箇所を表示して!!」

レイの声で空中スクリーンにトロイが表示され、損傷したパーツに焦点が当てられ

た。

「左腕、右肩、頭部も少し逝ってる……HPも残り少ない……どうしよっかな」

「レイ！大丈夫か！」

「レイ君、手伝わせてくれ」

「……どういふ風の吹き回しかな？」

起き上がるとうとしたトロイの左右にアキレスとエンペラーM2が現れた。両機は少しずつ迫ってくるジャツジとトロイの間に行きアキレスは盾を、エンペラーM2はハンマーを構えトロイを守る態勢に入った。

「灰原ユウヤをあのまま放っておくといずれ死んでしまう。違うか？」

「え!？」

ジンの言葉でバンが驚いた。レイはヘルメットの下で少し眉を寄せるとジンを見て言った。

「……うん、そうだね。脳に過負荷が掛かっているからこのまま時間が経つといずれ……ね」

「だったら、一刻も速く勝負を決める。山野バン、レイ君、共に戦うぞ！」

「ああ！絶対に助けてみせる!!」

「アツハハ……ジン君はともかく、バン君は立場的には3対1なのに物好きだねえ……嫌いじゃないよそういうの」

レイは疲労を隠せていない声音で言うと、少し笑ってジャッジを立ち上がらせて2機の横に並んだ。

「ボクが牽制をするから、2人はその隙に近づいて。トロイも結構ピンチだからいつまでもつか分からないけどね」

「分かった。無理はするなよレイ」

「誰に言ってるのかなバン君？」

「愚問だな」

3人は軽口を叩いて笑い合いLBXを操作し始めた。



「トロイツ!!」

レイが腕を振るうと、トロイに残された右腕のデスバレルが回転し、弾丸がジャッジに向かって発射された。ジャッジは盾で防御しながらもさらに進む。まるでトロイの攻撃など効かないとでも示しているようだ。

「よし、アキレス……Vモード起動!!」

『アドバンスド Vモード』

バンの声でアキレスが黄金に輝く。それに続くようにバンのCCMから大きくスクリーンが現れた。

「行くぞ!!」

「ああ!!」

アキレスとエンペラーM2が左右から攻める。ジャッジはトロイの射撃を剣を振る



「アキレス!!」

そこへすかさず復帰したアキレスが空中にいるジャツジの胴体に水月棍を叩きつけ地面へと墜落させた。

「よし、いけるぞ!」

「うーん……なんとかかなりそう?」

「油断は禁物だ」

土煙が晴れると、ジャツジがまた立ち上がろうとしている。

『『痛くしないで……ッ!!』』

「くっ……またユウヤ君の記憶が……」

ユウヤが叫ぶと、レイの脳内で薬物を腕に注入されている映像が映る。ユウヤ目線だ。レイの頭には常に激痛が走っている。サイコスキヤニングモードの負荷もだが、何

よりユウヤから送られてくる記憶のフラッシュバックが主な原因だ。これ以上戦闘が長引くとレイにも悪影響が出るだろう。

(早く決めなきゃ……ボクも……)

『パワースラッシュ』

「レイ(君)!!」

「ッ!!」

突然ジャッジからパワースラッシュが放たれた。アキレスとエンペラーM2は既に左右へ回避していたがぼうつとしていたレイはトロイを動かしていなかった。バンとジンの声でそれに気づいたレイはすぐにトロイを前に転けさせる。

「ありがとう2人とも……危なかったよ」

「油断は禁物と言ったばかりだろう？」

「うっ……言い返す言葉もない……ってあつ!!」

「どうかしたのかレイ？」

反省していたレイが突然大声を上げた。バンがそれについて尋ねるが、レイは指でスクリーンの一部分を指した。

「肩の弾薬庫がやられた……もう元々腕に装填されてるやつしか発射出来ない」

スクリーンに映るトロイの右肩の後方に備え付けられたパーツが無い。おそらくパワースラッシュで前に転けた時、出っ張っていた弾薬庫が持つていかれたのだろう。

「…………ヘルメットが邪魔だ!!」

レイが両腕でグローブからヘルメットに繋がったコードを抜いた。そしてそのままヘルメットを脱ぎ捨て後ろでデータを取っている研究員に投げた。

「なっ…………2号、何をしている?」

「ヘルメットのデータはもう十分なはず。グローブだけの時のデータもいるでしょ!!」  
「それはそうだが、所長からはまだ何も「うるさい!!」…………まあいい、好きにやれ」

一悶着あつた後レイは再び前を向き、ヘルメットを脱いだことで露わになった綺麗な銀髪を右手で思いつきりかき上げた。会場のライトに当てられた髪は更に美しく光っている。気合を入れなおしたようだ。

「ごめんトロイ、今から無茶するね。気張って耐えてよ相棒ッ!!」

バンとジンを放つて一人で駆け出したレイ。トロイのカメラアイはしっかりとジャツジを捉えて右腕を突き出した。

その攻撃をジャツジは体を捻って回避する。トロイはそのまま蹴りやタックルなどでひたすらに追撃するが全て回避される。

「当たらないか……」

「あはッ」

お返しと言わんばかりにユウヤは笑い、ジャツジが動いた。左手に装備した盾でトロイを右から殴る。

トロイはジャンプして躲すが、そこへすかさず剣が突き立てられた。空中では回避し

ようがないトロイはそのまま直撃を喰らうと思われたが……

「ッ、トロイ！」

バトルが始まって最初の方にマスカレードJが見せた空中での回転での回避を思い出したレイはトロイにそれを指示。しかし、マスカレードJほど華奢なボディではないので、少し掠ってしてしまう。

「まだいける!!」

着地点はジャツジの真隣。伸ばし切った腕を再度動かすのにはほんの僅かに隙が生まれる。

「そッッ!!」

トロイが全力でジャツジの横腹を殴打した。デスバレルの強靱な銃身での一撃は大きくジャツジをのけぞらせることに成功した。

「2人とも行っちゃえ!!」

「ああ!!」

そこへすかさずアキレスとエンペラーM2がそれぞれの武器を構えて飛び込んできた。体勢の崩れたジャツジへ突き刺さる2体の攻撃は、剣を持った右腕を肩から破壊することに成功した。

「ああああああああああ!!!」

ジャツジの腕を破壊されたのが原因か、ユウヤはジャツジの痛みを直接味わっているかのように右肩を抑えて叫ぶ。そして、勢い任せにCCMスーツの一部を引きちぎってしまった。露出したからには爪痕のような傷が付いている。

「ツ……どこかで……あの時の!?!」

ジンはユウヤの傷を見て、何年も前の事を思い出した。かの日の事故で同時に入院し



た3人の少年少女。ジン、ユウヤ、レイだ。

夜ということもあって暗い病室の中ですすり泣く男の子を必死に慰めている少女。そんな2人をジンはカーテンの隙間から覗いていた。

『ぱぱあ……ままあ……』

『だいじょーぶ。だいじょーぶだから……ないちゃだめ。おとこのこでしょ』

(確か……あの少女も銀髪だった。何日か経ってすぐに白衣の男達が2人を連れて行ったが、まさか神谷重工だったのか)

「レイ君……君の本当の名前は確か……」

「あれ、思い出したの？アツハハ、遅かったね。でも言ったらダメだよ？今のボクはもう名前も戸籍も残っちゃいないからね」

「……後で話を聞かせてもらう」

「できたら良いね」

目を見開いてレイに問いかけたジンだが、レイは軽くあしらう。

ジャッジは左手に持つ盾を投げ捨て、左腕で剣を拾った。どこまでも戦うようだ。し

かし……

「トロイ……限界か……」

急にトロイが左足から崩れ落ちた。サイコスキャニングモードで急激に上がった性能に駆動系が耐えられなかったようだ。スパークが迸り今にでもブレイクオーバーになつてしまいそうだ。

「レイ！」

「なーに、大丈夫さバン君。次で決めるから」

「ッ………」  
「何を」

アキレスが心配して駆け寄ってくるが、トロイはそれを振り払う。

「あーはははははははははは!!!!」

『ねえ……なまえ……おしえて』

『……わたしの？うん、いいよ！えつとねー』

レイの中に更に流れ込んでくる記憶の奔流。それを見る度に、彼女には頭痛が走り過去を思い出す。

（忘れてたはずなのに……ボクったら、あんな口調だったんだね。全く、ユウヤ君は余計なことまで思い出させてくれちゃってさ。そういえばボク、そんな名前だったんだね）

レイはなんとかトロイを立ち上がらせると、すぐに構えた。

「今……助けるツ!!」

「ああああああ!!!」

『アタックファンクション』

ユウヤとレイがそれぞれ左手を握りしめる。それに呼応してジャツジとトロイがそれぞれ剣と拳にエネルギーを貯めた。

「山野バン、下がるんだ!!」

「ジン……でも!!」

「巻き込まれるぞ!!」

「ツ……分かった!!」

2体が何をするのか悟ったジンはすぐにバンに伝えアキレスとエンペラーM2を遠くへと逃した。

「ユウヤ君!!」

『崩天撃』

「あははははははははははは!!!!」

『大真空斬』

ジャツジがジャンプして左手に持つ剣のエネルギーを刃状に展開。そのままトロイに向かってエネルギーの刃何度も飛ばした。

「そんなものおおおおおお!!」

トロイは圧倒的な機動力を持ってそれらを躲す。そのままジャツジの懐まで詰め寄ると、青く光る右腕でジャツジに打撃を与えて吹っ飛ばした。ジャツジが吹っ飛んだ方向へ更に駆け抜けたトロイは猛スピードでジャツジに追いつくと、上空に向かって右腕を突き上げジャツジを更に浮かせた。

「トロイイイイイイ!!」

レイの叫びと共に、トロイの右腕から青いエネルギーが上空に向けて発射されジャツジを飲み込み……爆ぜた。

Dキューブの中からアルテミス会場上空に向かって迸る閃光に、会場の誰もがスクリーンではなく生で彼らを見ていた。例え遠くてシルエットしかわからなくても、見なくてはいけないと感じさせる何かがあったのだ。

そのまま何秒たっただろうか。少しずつ光が細くなっていきやがて完全に消えた。静まり返った会場の中で、どうなったのかと疑問に溢れる観客達はスクリーンへと視線を戻した。

「ボクの……ボク達の勝ちだッ!!」

トロイと同じように右腕を高く天に突き上げてレイは叫んだ。よく見ると、トロイの周りには黄色と黒で構成されたLBXのパーツがバラバラになって散乱している。全てジャツジだったものだ。

『ジャツジ ブレイクオーバーアアアアアアアアアア!! Eブロック代表、灰原ユウヤ選手、敗退です!!』

「「「「うおおおおおおおおおお!!」」」」

MCのコールが会場全体に響き渡り、観客達が思わず立ち上がって歓声を上げ拍手した。

「あ……やね……ちゃん……あり……が……と……」

「……どういたしまして。でも、ボクはもうアヤネじゃないよ」

ジャツジが破壊され、サイコスキャニングモードが解けたユウヤが意識を朦朧とさせ

ながらその場に倒れた。CCMスーツが放っていたスパークも収まり、完全に機能を停止している証拠だ。フィールドの中でも、トロイとアキレスはそれぞれ特殊モードが終了したようだ。

『選手救護のため、試合を一時中断いたします』

アナウンスが流れて試合が止まった。2人の男性が担架を持って現れ、ユウヤを載せると出入り口の奥へと消えていった。それを見送ったレイは、覚束ない足取りでフィールドに近づき中を見て言った。

「……………トロイ。お疲れ様」

「レイ？」

バンとジンがレイの様子を不審に思いフィールドを覗き込むと、必殺ファンクションを発動し終えた状態でカメラアイから光の消えたトロイの姿があった。

「これって…………」

「うん、ボクもここで敗退みたいだね」

『んん!?……トロイの機能停止を確認しました!!これにより、Dブロック代表レイ選手の敗退も決まりました!!』

驚いたようなMCの声が会場に響いて、スクリーンにユウヤとレイの敗退を意味する画面が現れた。

「あーああ……結局キミ達との決着がつかなかったな。ボクにはそれだけが気がかりだよ」

戯けたようにレイが言う。そして、真面目な表情になった彼女はバンとジンを見ながら続ける。

「バン君が勝てば、プラチナカプセルとメタナスGXはシーカーに。ジン君が勝てばそれはイノベーターに。」

まさしくキミ達が世界の命運を握っていると言っても過言じゃない。ううん、実際に握っているんだ。



でも、ここはLBX世界大会アルテミス。バトルの瞬間だけは、世界の命運なんか忘れて熱いバトルをすれば良いと思う。2人とも……良いバトルを期待してるよ」

「ああ!!」

「当然だ」

レイは2人にそう言って笑うとフィールドの中からトロイを優しく回収すると帰る準備をしている2人の研究員の元へと言った。

「2号……お前、バイタルが……」

「分かってる……これでも必死に意識を保ってるんだから……」

片方の研究員が持つPCにはレイのバイタルデータがリアルタイムで来ている。危険域を示すように画面全体が赤く光り、『DANGER』の文字もある。

そして、通路に入って会場が見えなくなったその瞬間に……レイは吐血した。

「ぐっ……はあ……はあ……」

「2号!?表に車を回せ!!」

「もう手配した!!応急処置をする、早く外へ!!」

膝から崩れ落ち肩で呼吸をしているレイは、まだグローブをつけたままの左手で口を抑える。

「げほっげほっ……あれ……視界が……赤く……」

遂に、目から血を流し始めたレイ。意識が朦朧としていて思考がまとまらない。

「目からも血が……薬物で負荷を抑えていた灰原ユウヤと違って、生身でサイコスキヤニングモードの負荷を耐え続けていたせいかな!!すまない、荷物を頼む。私は2号を」  
「ああ、頼んだ!!」

1人が荷物を下ろしてレイを背負う。白衣にレイの血がべったりと付くが気にしている状態じゃないため、出来るだけレイに振動がいかないように配慮しながら男は走る。続くように荷物を回収したもう1人も走った。

(……………トロイ……………ありがとう)

ヒビだらけのトロイを今でできる最高の力で握りしめると、そのままレイの意識は暗闇へと沈んでいった。

# 彼女は願う

## 15話

『死者4人を出したLBX世界大会アルテミスで起こったメタナスGX強奪事件に関して……』

薄暗い部屋の一室で、真崎は手元のLBXのコアパーツをいじりながらテレビを見ていた。

「レイは重症、もう3日も目を覚ましていない……そりや、あれだけの機動をすれば脳だってパンクするだろうな」

テレビには、アルテミスのファイナルステージのバトルが映っていてアキレスとエンペラーM2が互いに必殺ファンクションを放ちながら戦っている。

「結局、優勝は山野バン。だが、エンペラーM2に備わっていた『デストロイ』によってプラチナカプセルの強奪に成功。ついでに赤の部隊によって人殺しをしながらメタナスGXも奪取成功か。ふっ……遂にただのテロリストに成り下がったな。イノベーターは」

「元からだろう？あの時から俺達は……特にお前は復讐の鬼になったんだからな」

ガチャつと扉が開いてパーカーを着たサングラスの男が入ってきた。檜山蓮、レックスだ。

「よお蓮、終わったのか？」

「ああ、予定通りだ。これでイノベーターは俺達の掌だ」

「……そうか」

「すまない。本当ならお前がやりたかっただろうに」

「気にしてない……って言ったら嘘だけだな。もう終わった事だ。別にいい。それより

も、ほらよ」

「ッ……完成したのか？」

軽い会話の後、テレビを切った真崎はレックスに向かってLBXを投げた。

「ああ、生憎とGレックスは間に合わなかったけどな」

「いや、十分だ。それで、コイツの名前は？」

レックスが機嫌良さそうに真崎に尋ねると、真崎は少し溜めてからその名を告げた。

「炎の魔人、イフリートだ。俺の人生において最高傑作だよ」

その日、テストと称して一体の哀れなデクーが業火の中へと消えた。

くイノベーター研究所く

「メタナスGXの解析が完了致しました。しかし……」

「ああ、プラチナカプセルが偽物とあつてはどうしようもない。データをコピーして保存。メタナスGX本体はこちらで使う」

「分かりました」

イノベーター研究所では、アルテミスで強奪したメタナスGXに隠されたプラチナカプセルの解読コードの解析を行なっていた。作業が終了し、加納が研究員達に指示を出す。

（メタナスGX……プラチナカプセルの解読コードさえ抜き取ってしまえば、残ったのは超高性能CPU。開発途中のAX-01、02に搭載するコアパーツは変更できません。海道様の月光丸は完成されていてあれ以上はLBXのバランスを崩してしまうだけだ。現状、我々にはメタナスGXを搭載できるLBXが存在しない）

加納は熟考する。せっかく手に入れた超高性能CPUだ。活用しない手はない。しかし、イノベーターはデクーを基準とする量産型LBXを使用していて、今扱える高性能なLBXではメタナスGXの効果が薄い。圧倒的な性能を見せたトロイは元々自動操縦での運用を想定されていたため無理だ。ジャッジもサイコスキャンングモードの実験に適した形である。

「そういえば所長。2号の様子は？」

「命に別状はない。多少衰弱しているが、このまま休ませておけば問題はないだろうと医師の判断だ。しかし……奴にはまだまだデータの採取を……ツ!!そうか、その手があつたか!!」

「しよ、所長?どうされたのですか?」

研究員の何気ない質問に答えていた加納が、急に目を見開いて叫んだ。

「今すぐ2号を処置室へ運べ!!」

「は、はい!!すぐに手配します!!……ちなみに一体何をするのでしょう?」

「クククツ……なあに、ちよつと思いついてしまっただけだよ。フツ……年は取りたくないな。私の視野が狭まってしまっているようだ」

悪い笑みを浮かべながら加納は続ける。

「メタナスGXの特性は超並列演算を可能にすることだ。現在開発中の司令塔型LBXマスターコマンドを量産しさらにそのマスターコマンド達に他のLBXを制御させる



機能がある。メタナスGXが有れば、小隊規模しか制御できないはずが師団規模までの制御が可能になるだろう」

「しかし、メタナスGXは一つしかありません。一体のマスターコマンドでは師団規模など……それこそ、複数のマスターコマンドを指揮するユニットがなければ……ツ、まさか!？」

2人の会話に、いつしか部屋の中の全員が手を止めて会話を聞いていた。研究員は考察を重ねて……加納の思惑に気づいた。

「その通りだ。2号の頭のCPUを交換する。メタナスGXにな。人の脳から発せられる命令にダイレクトで答えるサイコスキヤニングモードとメタナスGXの処理速度、並びに並列演算が有ればまさしくワンマンアーミー、1人師団と言っても過言ではない」

「おお……」

幾分も先の事をすでに考えている加納。しかし、そこにレイの負荷は全く考えられない。師団規模のLBXの制御など少女の脳には無理だ。いや大人でも不可能だろう。

「すぐに始める。やり方はあの時と同じでいい。皆で見届けようではないか、最強の兵士の誕生を」

それから約8時間、白の部隊の独断で昏睡状態のレイの手術を行われた。薬物が全く効かない体質のレイは当然麻酔も効かない。意識がなくても痛みはあるようで、呻き声を上げながらレイは手術を終えた。

さらに数時間後、遂に彼女は目覚める。

「……………ッ」

目覚めて最初の言葉は呻き声だ。痛みがまだ体に残っているらしい。

「……………」

目を開くとそこは真っ白な空間。怠さを無視してなんとか体を起こした。

「いつもの部屋じゃない。ていうか……なんか視界が……」

今の彼女の目には、その全てがぼやけて映っている。

「なんで……ッ、頭が痛いなあ。サイコスキャニングモードモードの負荷かな？」

ズキリと頭に痛みが走った。本当は麻酔なしの手術の痛みがまだ残っているのだが、そんなことがあったとは全く知らないレイは誤解したようだ。

「あ、あれ……手が霞んで見える……もしかして、視力が落ちた？」

頭から離れた自分の手を見た彼女は、辺りを見渡しようやく気づいた。周りの空間が全て白いのではなくぼやけたせいで何が置いてあるのかわからないということに。

「アツハハ……これじゃあ一人で移動も出来ないね」

右手を握ったり開いたりしながらレイは呟く。そして一通り出来る動作を確認してから体をベッドに預けた。

「……………サイコスキャニングモードは多分ボクのおかげで成功してる。暴走したユウヤ君は多分放つて置かれるだろうからボクがこのままここにいればいい。そうしたらきつとユウヤ君がこれ以上何かされることはないかな」

「アホ、ガキがそんなに抱えてんじゃねえよ」

「ツ!!……………この声は、真崎さん？」

独り言を呟いていたレイに反応するように突然真崎の声が聞こえた。一体いつ入ってきたのだろうか……………レイはそう思いながら声の方向に視線を向けた。

「おう、見舞いに来たらちようどよく目を覚ましてたからな」

「……………ごめん、人の輪郭しか見えない。声で真崎さんだつてことはわかるけどね」

「分かるんだつたらいい。たくつ……………無茶しやがって。真野さんから聞いた時は心配したぞぞ?」

レイのベッドのすぐ横にある椅子に座った真崎。しかしレイにはそれがわからない。

「……今何したの？」

「ああ？椅子に座っただけだが」

「え、この部屋椅子あるんだ……見えなかったよ」

「重症だな。メガネとコンタクト、どっちがいい？」

「うーん……メガネかな。コンタクトはどんなのかわかんないし」

「分かった」

顔も分からない真崎の方を見ながらレイは喋る。だが、若干向きが違うことに気付いた真崎は同情の視線を向けながら言った。

「無理してこつち向かなくていい。楽な体勢で寝てろ」

「アツハハ……なんかやけに優しいね」

「病人にまで突き放すような言葉は言わんよ。まあ、無事なようで何よりだ。んじや、俺はこれで」

「軽くない!?……ツ、いったあゝ」

立ち去ろうとした真崎にツツコミを入れたレイだが、傷に響いたようだ。

「ははっ、今度迎えに行くからな」

「ッ……へ？それってどういう意味？」

真崎の意味深な言葉に、痛みも忘れて聞いたレイだが返事は返ってこない。すでに部屋を出した後だ。

「迎えに行く……ねえ。なんか面白そうなことになってるみたい。ま、今のボクには関係ないさ」

自分の身の上を笑いながら、レイは虚空を見つめる。全てがぼやけて見えるその目は、しかし何かを見つめているように感じられた。

「……はじめてだなあ、こんな気持ち。ボク……生きたい」

レイの声は……かつてないほど震えていた。

# 火種、業火トナリ黒炎へ至ル

## 16話

『楽しいい……楽しい……ああ……最高だッ!!』

1体のLBXに向かって攻撃を仕掛ける4体のLBX達。黄色いカラーリングが施されているLBXはいつも簡単にそれら全てをいなし、躲し、時に反撃する。LBXを操るプレイヤーの声音はまるで感極まっているようであり心のそこからバトルを楽しんでいるような印象を覚える。無論、無骨なヘルメットや、それから両手に伸びるコードが無ければ……だが。

そう、これはアルテミス決勝戦の録画映像。それを見ているのは、初出場ながらもファイナルステージまで勝ち上がり見事優勝を果たした山野バン、川村アミ、青島カズヤ。彼らはアルテミス終了後、イノベーターに奪われてしまったプラチナカプセルをどうにか取り戻せないかとキタジマでイノベーター関連の事を調べているのだ。



「……相変わらず、レイって嬉しそうにバトルをするわよね」

「ああ……それがレイの強さなのかもしれない」

「だからって、強すぎるだろ。灰原ユウヤと戦ってるときなんか、俺ビビっちゃったよ」  
「すごい迫力だったわね。まるでレイ自身が戦ってたみたい」

イノベーター関連の事を調べている……はず、なのだが……どういわけか反省会のようになっている。

アミファンとカズヤファンには申し訳ないが、ファイナルステージ中に2人にセリフがなかったのは単にバトル描写に精一杯だったという作者の力量不足である。(誠に申し訳ない)

「そういえば……ジャツジがアキレスみたいに光ってたのって、Vモードのようなものよね？」

「うーん……分からないけど多分そうだと思う。レイのトロイも同じ色になって性能が上がってたから、同じなのかなあ……」

サイコスキャンニングモードの事を言っているが、彼らはユウヤとレイでのサイコス

キヤニングモード使用時の差を思い出して測り損ねているようだ。

「ねえバン……もし、もしよ？アルテミスの時みたいに海道ジンと組んだら……レイに勝てる？」

「ッ……それは……」

アミの不安そうな質問に、バンは顔を俯かせた。アミとカズヤにはそれだけで十分な答えとなった。

「イノベーター関係なく、レイはバトルを楽しんでいた。だったら……なんでレイがイノベーターなんかにいるんだろう？」

「里奈さんみたいに弱みを握られてるかもしれないわね」  
「だったら!!」

カズヤが感情のままに立ち上がる。バンとアミがカズヤを見上げるがカズヤは落ちていた様子で言った。

「だったら……助けないと……ダメだよな」

頭を掻き、目を逸らしながらカズヤは2人の視線に答える。

「うん」

「そうね」

3人は意志のこもった目でお互いの顔を見合わせた。中学生にもかかわらずイノベーターと戦ってきた闘志は伊達ではないようだ。

「そのためにも、アキレスを早く直さなきゃね!!」

「拓也さんが任せてくれて言ってたけど、どうするんだろうな?」

「拓也さんが自信満々に言ってたからきつと大丈夫だよ!!」

そして、特になんの情報も得られないままその日は解散となった。ただ何も起こらなかったわけではなく、檜山からバンへと連絡がありプラチナカプセルを受け取った、という出来事があった。

「翌日」

「拓也さん、いったいどこに向かっているんですか？」

「タイニー・オービット社だ。アキレスの修理を頼んである。腕は俺が保証する。安心しろ」

バン達は新たな決意をした翌日、拓也の連絡を受け彼の運転する車に乗り込みT O社までの道のりを走っていた。ちなみに現在は高速道路である。そんな中……

「ツ!!……囲まれたぞ」

「まさか、これって」

「イノベーター……!!」

4台の大型トラックが拓也の運転する車を四方から囲んだ。

「「「なッ!」」」

そしてトラックの天井に現れる大量の赤い一つ目……デクーエースだ。その全てが武器を所持していてとても穏やかな雰囲気ではない。さらにその内の一機が車両のボンネットへと飛び出し細長い棒を突き刺した。

「カズ、戦うわよ!!」

「ああ……ッ、窓が開かない!」

「なに?……なっ、運転ができない!!」

それもそのはず、デクーエースが突き刺した棒はその機能によって車の操作系統を奪ったのだ。こうなれば拓也は何もできない。前方のトラックの荷台部分が開き、車が一台分収納されるスペースに自動で操られるだけとなった。窓からLBXを出して戦闘しようとしていたカズとアミもこれでは無力だ。そして、制御された自動車が荷台に入っ正しいこうとして……閃光が駆けた。

「な、なにが……?」

「バン、カズ、あれ見て!!」

「ツ……あの時の白いLBX!!」

トラックの上でガトリングガンを構えていたデクーエース達を猛スピードで切り裂いていく白いLBX。エンジンスターに潜入した時にもいたアイツ、である。白いLBXは拓也の車に飛び移ると、制御端末の棒を刺していたデクーエースを瞬殺。コントロールを奪い返した。

「行くわよカズ!!」

「おう!!」

それを確認した2人は迷わず窓を開けてクノイチとハンターをトラックの上に立たせた。

「はあっ!!」

「おらあ!!」

クノイチと白いLBXが猛スピードで近づき敵を乱舞のように切り裂く。ハンターは近距離ながらもスナイパーライフルを巧みに使い一体ずつ敵を処理している。数の上では不利ながらも、大きなダメージを負うことなく戦えている。

「アミ、コイツら無人機じゃないのか!？」

「知らないわよ……でも、無人機にしては強過ぎるわね……」

何故か分からないが時間が経てば経つほどデクーエースの動きに磨きがかかっている。それを感じ取った2人だがやることは変わらない。車に被害を及ぼさないようにながむしやらに戦っている。白いLBXの挙動にアミが不信感を抱きながらもクノイチを操作しているが、白いLBX見た一瞬を突き一体のデクーエースがヒートブレイズを構えて突撃してきた。

「あつ、クノイチ!!」

「クソツ、間に合わねえ!!」

すでにクノイチの反応速度が間に合わない位置までデクーエースが近づきヒートブ

レイズを叩きつけようとしている。カズヤもなんとかクノイチを助けようとスナイパーライフルをそちらへ向けるが、連携が取れているかのようない動きを見せる他のデクーエースがその射線を塞いだ。白いLBXもそれに気付いてはいるが自分を囲むデクーエース達によって助けに行けない。まさに八方塞がり。

「クノイチ!!」

やられる……そうアミが思った瞬間、デクーエースの頭を何か貫いた。

「え……ッ!!」

目を見開いて驚いたアミだが、状況が状況なのですぐに頭を切り替えて脱出。周りのデクーエースを一掃した。

そのまま戦い続け全てのデクーエースを殲滅した頃、白いLBXが、拓也の運転する車の前方のトラックに飛び移り武器を突き刺した。するとトラックが自動で道を開けた。



「LBXを回収しろ、抜けるぞ!!」

「はいッ!!」

拓也は一気にスピードを上げトラックを置いて逃げる。アミは白いLBXのことが気がかりで、白いLBXが乗ったままのトラックを眺めていた。

(さっきの銃弾は……なに?)

く真崎く

「たくつ……手間かけさせやがって」

た。 高速道路を見下ろせる高いビルの一室、1人の男が椅子に座ってCCMを操作していた。

「レイの奴迎えに行かないとな……はあ、俺にも休みが欲しい。八神さんに頼んだら一日くらいくれんかねえ……」

欠伸をしながら独り言を呟く男……真崎は、4台のトラックから逃げる一台の車を眺めている。

「病み上がりのレイを使いやがって……アイツは機械じゃねんだよ加納。さて、帰るか」

CCMを操作して掌にLBXを着地させた。その機体はアサシンの標準武装であるエグゼキューションナーを装備していた。

「……楽しそうだなお前」

通常のLBXよりも一回り大きく、何よりその大きなテイルパーツが目立つ怪物の様な黒いLBXを見つめて呟いた真崎だがその口元は笑っている。

「これからもっと楽しいぜ相棒」

そうやってLBXを専用のケースに戻すと、真崎は部屋を後にした。

ねえねえ、今どんな気持ち???

17話

「1度目から30機以上は負担が大きすぎたか……いや、理論値は完璧だったはず。恐らくは……」

「ええ、病み上がりの彼女を使ったのがいけなかったのでしょう。しかしテストにしては上々の結果かと思われまます」

イノベーター研究所で、加納とその部下はとある実験について話し合っていた。

「たった3機を相手に不甲斐ない結果だと客観的に見れば評価できる。しかし、任務遂行など物のついで……本質はここだ」

加納はディスプレイにデクーエース達の戦闘の映像を映す。研究員達も食い入る様に見ている。

「時間が経つに連れてデクー達の動きが洗練され、統率も取れている。一瞬とはいえ連携も取れているのがわかるだろう？さらに、この動きは全て2号に搭載されたメタナスGXから我々の元へ届いている。彼女は人のみでありながらも自己進化型AIのように成長し続けている。そしてそのデータは我々の物……これ以上の成果は無いだろう」

加納の解説に研究員達も声を上げて笑みを浮かべている。

「これから先、エターナルサイクラーを巡ってシーカーとの戦いは佳境を迎える。鍵は我らが、錠は奴らが。一見平等に見えるが、こちらの圧倒的有利だ。何せ我々には技術がある。どんな物でもイノベーターの力と変え、海道先生の役に立てるのだ!!」

「『『『『おお!!』』』』」

加納によって鼓舞された研究員達はさらにやる気を見せ作業を開始した。

(……2号にはたまにはアメを与えんといかん。私は人として墮ちている自覚はあるが、ただ使い潰すような愚か者では無い……しかし、あの娘には何を与えれば喜ぶのか

?)

部下の作業を眺めながら加納は考える。年頃の娘への誕生日プレゼントに悩む父親のような思考だが、彼は至って真剣だ。

「おい、誰か中学生の娘がいる奴はいるか？」

「「「「「はっ……………は？」「「「「」」

研究員達の中で加納に対する評価が少し落ちた。今日もイノベーター研究所は平和だ。物騒だが。

くとある病室く

「~~~~♪」

真白な壁にベッド、そして簡素な机が置いてある病室でレイは鼻歌を歌いながら机に

向かっている。先日、加納から『任務の報酬』と言われて修復されたレイのトロイとLBX用の工具一式、さらにはLBX用の設計図を貰ったのだ。

「あのクソ野郎も僕の趣味分かっているじゃん♪まだちよつと体が怠いけど、トロイを弄る分には問題ないもんね〜」

今のレイは髪をゴムで纏めてポニーテールのようにしている。作業をする時はいつもこれで、さらには眼鏡もしている。これは以前真崎からもらった物で、急激に視力が落ちたレイにとつての必需品である。これがないと生活もままならないほどに。

そして、そんな彼女が今まさに調整しているトロイにも目立つ変化があった。元々黄色だった装甲部分が軒並みホワイトに染められているのだ。左肩には黒で神谷重工のロゴもペイントされている。これもレイの希望で加納が手を加えた物の一つである。

「それにしても、あの2人強くなつてたな〜」

レイの脳裏に浮かぶのは自身が操る4機の試作マスターコマンドの支配下に置かれたデクーエースと戦うクノイチとハンターの姿。

「ボクの頭にメタナスGXを移植したとか聞いた時はぶん殴ってやろうかと思ったけど、まあ悪くないね。頭痛くなるけど」

「……………ちよつと実働に出る以外は前よりまともに暮らしてんだけど……………あれ、これボクがおかしい？」

ニコニコしているレイだが、少し経つとすぐに頬がストーンと落ちた。

そう、以前は嚴重なロックのかかったドアと、ベッドとトイレがあるだけの生活。それに比べて今は机も有れば機材もある。簡易的なシャワーも備え付けられていて、病み上がりだからと栄養価の高いしっかりした食事もあることができる。

「え、ホワイトじゃんイノベーター。テロ組織だとは思えないんだけど……………」

アルテミスで使ったCCMスーツの一つであるグローブを嵌めて調整し終わったトイを起動させた。十分なデータが取れたため試作品であるコレはレイに与えられた物だ。実験用ではなくレイが自分用にカスタマイズしたトイはアルテミスの時より



も軽やかな機動で部屋中を駆け回る。

「懐柔されんなアホ」

「おわっ!?……真崎さんじゃん、びつくりした〜」

急に聞こえてきた真崎の声に驚くレイ。いつのまに真崎は病室に入ってきたんだろ  
うか。

「まあ、横に開くタイプのドアだからな。そんなに音はせんよ。それよりほら、行くぞ」

「……どこに?」

「空」

「なるほど、空か〜……………そら?」

「そら」

「s k y?」

「スカイ」

「スウー————…は?」

レイがバカを見る目になった。

「そんな目で見るなよ……だから、逃げるぞ。イノベーターから」  
「ツ!!」

衝撃の発言を受けたレイは目を見開いて辺りを見渡した。

「カメラはねえよ。イノベーターは良くも悪くもお前を買ってる。ただの被験体だったお前に武器となるトロイを渡すくらいにはな」

「……どうやって出るの?」

「お前は知らないだろうが、ここはイノベーター研究所の1カ所。ここから結構近い場所にある倉庫にはステルス司令機エクリプスが保管されている」

「パクって飛ぶの?」

「言い方が悪いがそういうこった」

「ええ……」

流石のレイも苦笑いのような。イノベーターが所有する飛行機をパクって逃げると

いうのだ。現実的ではない。

「操縦できるの?」

「真野さん達が出来るらしい。今八神さんエクリップス奪取のために奔走してる」

「……なんでボクも?」

「さあ?八神さんから『確実に連れてこい』って言われてるからな」

「ふうくん……」

不満げな顔をしながらも、部屋の片付けを行うレイ。すでに答えは決まっているようだ。

「同情されても、満足してるから困るんだけどねえ……」

「そう言ってるやいなよ。八神さんはエンジェルスターの時からお前のことは気にかけてんだ。少しは組んでやってくれ」

「へえ……で、どこに行くのさ」

「知らん」

「……はあ?」

「ただ、逃げるとしか聞いてないからな」

表情も変わらずに真崎は言う。レイがまたしてもバカを見る目で真崎を見ているが、彼は気にせず続けた。

「よくそんなので付いて行こうと思ったね」

「八神さんは俺の恩人だからな。ま、これで恩は返すさ」

「あつそ。でさ、逃げるのは分かったしボクもこれ以上実験を受けたくないんだよね。そろそろ死にそうだし。だからさ、ちよつと嫌がらせしていかない？」

「ああ?.....すぐ終わるんだろうな？」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ふふふ、期待しててよ」

時計を確認した真崎は、何か企んでいるような笑顔のレイに溜息を吐きながら手を差し伸べた。

「助けに来たぜお姫様」

「似合わない台詞言う物じゃないよ王子様」



「大変です所長ツ!!」

「どうしたと言うのだ騒がしい。私は今新型の設計で忙しいのだ」

イノベーター研究所では、加納やその部下達が真面目に仕事に取り組んでいた。

「そんなこと言っている場合じゃありません!! エクリプスが……………盗まれました!!」  
「なに!!?」

加納が急いで監視カメラの映像をモニターに表示。そこには、大型の飛行機がゆっくりとスラストアーを吹かせて前進していた。

「バカな……………見張りはどうした!!」

「分かりません。現在赤の部隊、青の部隊に連絡をしていますが、対応に追われているのか連絡が取れない状況で……ッ!!所長、あれはッ!!」

「なに、どうし……ッ!?!」

2人が目を見開いてモニターを見つめた。研究所員達も呆然とモニターを眺めている。

『アツハハ!!きつとそこでアホヅラかましてるんだろぅね〜か・の・うさん?』

「に、2号ッ!!」

急にモニターが砂嵐で見えなくなり、代わりにレイの姿が現れたのだ。

『いや〜、トロイを返してくれてありがとう!!グローブもあるしこれから楽しくなりそうだと思わないかい?』

「ふ、ふざけるなよ貴様ッ!!一体何処に……ッ!?!」

『残念ながら、これは記録映像なので声は聞こえませ〜ん。アツハハ!!ねえねえ、今どんな気持ち?メタナスGXまで使った最高傑作が高みの見物でアンタらのこと嘲笑って

るのってどんな気持ち？いや〜ただの小娘のボクには想像も出来ないな〜……………で、ここ何処だと思う？』

高笑いしながら加納達を煽るレイだが、急に無表情になるとカメラを動かして居場所を表示した。

「開発室……………だと……………」

『答えなんて聞けないから無視するよ。ボク、ここ好きなんだよね〜。色んなLBXが置いてあるし、自由時間はここで勉強させてもらったりさ。アツハハ!! いい物見つけちゃったし』

レイがディスプレイ型のキーボードを操作すると、ショーケースの蓋が開き、中から4体のLBXが姿を現した。

「ツ!!それは新型の!?!」

『こんなにカッコいい子作れるのにやつてる事が汚くてひつじょうに残念!!この子達も親がこんなのだったら泣いちゃうよね〜。だからさ、もらっていくね?』

画面の横から真崎がやってきてアタツシユケースを開けた。恐らくそのままLBXを取り出して器用に収めていく。加納達は言葉も出ないのか、怒りに顔を赤く染めながら震えている。

『ついでだしデカー達の設計図も貰っておいたから。アツハハ!!じゃあ次の質問でーす♪このプログラムが何か分かるかな?』

ついでに表示される0と1の羅列。そこから続いて現れるC言語の列。加納は流れるプログラムを全て読み取れるほど熟練してはいなかったが、1人の研究者がすぐに読み取り口に出した。

「データ消去のプログラムツ!」

「なにっ?!?2号貴様、いつのまにそんな技術を……!!」

『ボクの事をLBXしか興味がない小娘だと思ってたでしょ。アツハハ!!……舐めてたねえ?まつ、トロイとかグローブとかくれたお礼と言っちゃなんだけど、消すのはこの子達だけにしといてあげるよ。ちなみにこの映像は終了後に自動的に消去、連動してこ



ここに仕込んだ爆薬が起爆するので悪しからず。アツハハ!! もう一回聞いてあげるねクソ野郎。

今……どんな気持ち!? ねえねえ今どんな気持ちなの!? 人の命弄んで置いて何も仕返しが来ないわけじゃないよね。アツハハ!! バイバーイ!!』

ープツンー

「「「「「……………」」」」」

怒涛の勢いでまくし立てるレイに立ち尽くす研究者達。その直後、轟音が彼らのいる場所まで届いた。

「ツ!! 被害を確認しろ!! さつさと動け!! 不味い……AXー01と02のデータさえ残ってれば最悪他は構わん!! 急げツ!!」

「「「「「はっ!!」」」」」

バタバタと走り出した研究者達。加納は思い出したようにキーボードを動かして監

視カメラをチェック。今の映像の間にすでにエクリップスは発進、空高く飛行しステルスモードを起動したところでリーダーから姿を消した。

ガンツ!!

「実験体如きがあ……!!海道先生に報告しろ!!この失態、我々だけで取り戻すには手余る。指示を仰げ!!」

「了解しました!!」

加納以外誰もいなくなった部屋で、彼は新たにモニターを表示した。

「奴らは……無事か。八神の仕業だな……海道先生への恩を仇で返しおつて……まあいい。メタナスGXは惜しかったが、解読コードは無事。事後処理さえ終われば奴らの調整に従事するでしょう」

悪い笑みを浮かべた加納は、研究者達に続くように部屋を出る。誰もいなくなった部屋は自動で照明が落ち静寂を取り戻した。

## 脱出後

## 18話

「……………」

「大丈夫か？」

「……………」

「ダメそうだな……………」

ここはエクリップスの病室ともいえる部屋。そこで座っている真崎はやれやれと言った感じの顔で、ベッドで横になっているレイに声を掛けていた。

「ぎもぢわるい……………」

「まあ、病み上がりの体で無理したもんなあ……………お疲れさん」

「……………あんなに叫ぶんじゃないかったあ」

レイが加納達へと残したビデオ映像で、やけにテンション高く喋っていたがその場のノリでありあと先のことは考えていなかった。更には、エクリプスの元まで全力ダッシュ。途中真崎におんぶしてもらったが揺れから来る吐き気にひたすら耐えていたのだ。

「言つとくけどな、俺も相当疲れてるからな？お前がアレもコレもと開発室のLBXをもつていくから……」

「うう……悪かったけどさあ……デクー達はこれ以上手に入らないんだからあそこで確保しなきゃいけないかったんだよ……」

レイが映像を録画し終わった後、棚に鎮座しているデクー、インビット、アサシン、デクー改、デクーエース、トロイの予備パーツなどイノベーターでしか手に入らないLBXやそのパーツを箱に詰めて盗んでいた。ちなみにレイのグロツキーの原因はこの大量の荷物にもあった。

「嬢ちゃん大丈夫かい？一応色々買ってきたけど……」

そんな話をしていうちに、ドアが開いて仮面を外した真野が帰ってきた。手にはビニール袋を持っていて、中にはスポーツドリンクや熱冷ましのシートなどが入っている。

「ありがとう姐さん……ちよつと休めば大丈夫」

「出会った頃の生意気なガキンチョが、随分としおらしくなって……よつぽどだったんだね」

「ん……くすぐりたい……」

真野は優しい表情でレイの頭を撫でる。レイはくすぐったそうに顔を背けるが、振り払うような動作はしない。嬉しげに笑っている。

「そっかや真野さん。こっからどうするんだ？」

「八神さんが言うには、一旦シーカーに合流するらしい。あたしらがしてきた事を考えたら受け入れられるかは怪しいけど、やってみないと分からないからねえ……」

「なるほど……すいません真野さん。コイツのこと、お願いできますか？」

「何処かいくのかい？」

「ええ、ちよつと……やることがあるので」

「……………分かった。行つて来な。ただし、帰つてくるんだよ。この子のためにもね」  
「もちろん」

そう言つて真崎は部屋を出た。レイや真野は神妙な面持ちの真崎を眺めていたが、レイが口を開いた。

「いつもあんな感じなの？」

「まあ、そうだねえ……ふらつといなくなる時もあれるけど、任務の遂行率は100%。  
LBXを使わせれば敵なしだが性格に難あり」

「ボク、真崎さんがLBXを使つてるところ見たことない」

「アイツは支給されたデクーしか使わないから無理ないよ。それに今の任務は嬢ちゃん  
の護衛さ。必ず遂行するから安心しときな。『鬼神』の名は伊達じゃないつてね」

「うん……」

「よし、あたしはエクリプスの点検をしてくるよ。ビニール袋の物は好きに使いな」  
「色々ありがとう姐さん」

そう言つて真野も部屋を出て行つた。一人残されたレイ、幸い熱も出ておらず体の怠さが有るだけだが彼女にとつては珍しいビニール袋。興味本位でゴソゴソと中身を漁っている。

「なにこれ……どうやって使うの？」

レイが手に取つたのは、よくあるペットボトルだつた。



「ん………ここは、ああ……逃げたんだつた」

次にレイが目覚めたのは、脱走翌日の朝だ。あれから試行錯誤を繰り返しながらペットボトルを開けることに成功したレイは、今までの疲労が襲つて来たのか死んだようにぐっすりと眠つた。

「姐さーん……いない?」

最近ずっと着ていた病院着のままエクリップス機内を歩く。廊下で真野を呼ぶがどうやらないようだ。何処かの部屋かと思いき恐る恐る色んな部屋のドアを開けるが誰もいないらしい。

「……八神さん……もいないじゃん」

次に向かったのは司令室。エクリップスの操縦も担っているまさに核の部分だ。しかし全ての機能が停止しているのか真っ暗。

「……………んお?」

「ツ（誰かいたあー……）」

突然男の声が聞こえた。そして司令室の照明が付き、誰がいるのかレイの目に映った。



「あ、起きたみたいっすね。えつと……」

「レイで良いよ。確か、姐さんと一緒にいた人。や……ごめん、忘れちゃった」

「矢壁って言うっす。まあ一度も話をした事がないから仕方ないっすよ。同じ女性って事でボスに任せつきりにしてましたし」

操縦席に座っていた……というよりは、黒い帽子を顔にかぶせて寝ていたのであろう恰幅の良い男、矢壁は気楽そうな表情と声でレイに話しかけた。

「えつと……矢壁さん、この飛行機って今何処にいるの？」

「あ……少し待っててくださいね……一番近いところで言うとおアキハバラ近くの倉庫っす。いやほんと、なんで都合よくこんな場所あるんすかね」

「それは知らないけど……他の人は？」

「八神さんはボスと一緒に仕事に、細井……ああ、もう一人いた青髪の男っす。ソイツは食料や生活用品の買い出しっす。非常食や寝具はあるんすけど、それ以外はなにも積んでないっすからねえ……正直、こんな逃亡生活じゃいつ飢え死にするか分からないっすよ」

「あはは……世知辛いね」

困ったように首を振って言う矢壁。内容とは裏腹にそこまで深刻そうな声音ではない。

「それともう一人……」

「え……?」

矢壁は、本当に困ったような顔をして扉を指さした。すると、扉が開き女性が入って来た。

「……………見たことあるような、無いような」

「石森里奈よ。えつとレイちゃん、で良かったかしら?」

「うん。で、誰?」

「元イノベーターの研究者で、今は裏切ってシーカーの一員です。何故かイノベーター研究所にいて、八神さんが連れて来たっす」

「へえ?面白い人だね」

「ツ……」

レイが笑って興味深そうに里奈を見た。里奈はジロジロと見られて少し気まずそう  
だ。

「まあ良いや。あのお人好しが連れて来たんだったら悪い人じゃ無いんだろうし。よろ  
しくね〜里奈さん」

「え、ええ……」

「ああ、それと。はいこれ」

「ん？CCM……誰の？」

「君のつすよ。真崎が君用について買って来てたつす。そのあとすぐ何処かに行つたつす  
けどね〜」

矢壁はレイに近づいてシルバーカラー、そしてスライド式のCCMを手渡した。

「サイバーランス社の試作高性能CCMらしいつす。アイツ……変なところで人脈がある  
んすよね……ああそれと、なんかデータを入れてあるつて言つてたつすね」

「データ……？ツ!!」

レイは早速CCMを開き確認する。通常のCCMとはほぼ同じ機能で、アルテミスで使っていた物と操作感も変わらさずレイも扱いやすそうだ。そしてメールの欄にあった2つのメール。一つずつ確認すれば、それは以前山野淳一郎からもらった2枚の設計図だった。

「……ありがとう真崎さん。矢壁さん、ボクは部屋に戻るね」

「了解です。何かあったら電話でも直接でも言ってくださいです。連絡先は全員分入っているらしいですから。ちなみになにするんすか？」

「研究所から貰ってきた子達の調整♪」

「ああ、デクーシリーズつか。あの……デクー改、見てもらっても良いっすか？最近忙しくてろくに整備出来てなかったんすよ」

「うん、良いよ。じゃあまた後で」

レイは矢壁からデクー改を受け取ると、楽しそうに部屋へと戻って行った。



「結構傷んでる……よくがんばったね」

レイはリペアキットや工具を使って、矢壁のデクー改を整備していた。イノベーター研究所で学んだ知識や技術は、確実に彼女の糧となっている。

「……………よし、こんなもんかな」

30分ほどの作業の末、デクー改は新品のように綺麗になった。アーマーフレームの傷はまるで元から無かったかのような光沢を放ち、コアフレーム関節部の摩擦も、レイが盗んできたデクー改の新品と交換して一切の歪みもない。極め付けはこの女、肩のスライクアーマーに無駄があると言って一部をカット。そして駆動域の拡張をしてより操作性をアップさせた。

「ふふふ、最初は慣れなくてちよつと癖があるけど、これに慣れたらもう戻れなくなつちやうよきつと」

恍惚な笑みを浮かべて完成したデクー改を見つめるレイ。とても楽しそうだ。

「さて次は……」

スツと表情を戻すと、部屋の棚に飾られたLBX達に目を向けた。

「デクー、デクーエース、デクー改……はさつき使ったからダメだ。エジプト、アヌビス、アサシン……違うね。インビット……あ、後でA1外さなきゃ。マスターコマンドは……改良することないかな。トロイは、今の設備じゃこれ以上は無理」

1機ずつ眺めて考察していくがいまいちピンとこない様子。そして最後の列に移った時、レイから表情が消えた。

「機体情報……ツ!? スペックが高すぎる……神谷がこんなの作ってるなんて。でもこん

なのイノベーターじゃ誰も……機体コード表示」

レイはCCMGグローブを装着しディスプレイを表示させた。

「セイリユウ」

青と白が基調のアーマーフレームで、装甲が薄いナイトフレームの機体、『セイリユウ』

「ビヤッコ」

インビットやハンターのように胴体と脚部のバランスが歪なワイルドフレーム、『ビヤッコ』

「スザク」

赤と青がメインカラーだが、何より目立つのはその腰部にある大きな孔雀の羽のよう

なエネルギーウイング。ストライダーフレーム特有のボディラインによくマッチして  
いて美しいという印象を受ける『スザク』

「ゲンブ」

4機の中で最も異質といえるフォルムを持つその機体は、腰から下が大きな浮遊ユ  
ニットとなっており、岩石に上半身がくっついていような黄色のパンツァーフレ  
ム、『ゲンブ』

「すぐにボク専用に使え上げてあげる」

中国神話における天の四方を司る聖獣達が、とある戦争で勝利をもたらした木馬の名  
を冠するLBXを操る少女の元集った。しかし……

「うあ!?!あ、たまが……!!」

突然レイが苦しみ始めた。急いでベッドに戻り頭を抱えてうずくまる。



「なにか、が……………暴れ回ってる…………!!やめろ…………入ってくるなあ!!」

痛みに悶え苦しみながら、レイは思考する。原因は明らかに頭に搭載されたメタナス GXなのは分かっているがなにが起こっているのか分からない。

「うぐう……………もう……………むり……………」

レイは気絶した。おそらく脳が負荷に耐えきれず強制的に意識をシャットダウンさせたのだろう。

(外部からの……………ハッキング……………それしか……………考え、ら……………れn……………)

## 新しい出会い

## 19話

「……………ひまあ」

2日後、レイはエクリップス自室の机の上でとろけていた。流石のレイも2日あればLBX達の調整も終わってしまい、する事が無いのだ。あの日の頭痛はすでに収まり何事もなかったかのようにレイ自身には何の影響も及ぼしていない。それどころか、勝手に人の脳内にアクセスされたことに憤慨したレイは怒りのままにLBXを改造しまくっていた。

「全く……………乙女の頭の中にズケズケと……………失礼するね!!……………そういやここ、アキハバラって言ったっけ？ええと……………検索検索……………へえ。LBX界限でも賑わってるんだ」

ふと、先日の矢壁の発言を思い出したレイは、CCMをエクリップスに接続しネットを

使つてアキハバラについて調べていた。

「……インフィニティネット。なるほど、メタナスGXのデータがこの中に……ゴッドゲート？たいそうな名前がついてるけど……ッ!!これか、てことは……これを通してボクの中に入つてきた奴が……」

レイはグローブを装着し、自身のメデイカルチェックの内容をディスプレイに表示。メタナスGXのデータを最大で表示しながあつたのかチェックした。

「あれ、解読コードが消えてる？ヴァーチャルLBXハーデス……侵入者は……あ、ハンターって確か……カズヤ君のLBXだったね。てことはバン君達か。これは一つ文句言つてやらないとねえ……でもゴッドゲートのセキュリティを見るに突破できるようなハッカーなんて……うん？」

レイは真実に気づきながら調べ続け、CCMに表示していたアキハバラのサイトに目が入った。

「伝説のハッカー……オタククロス？ほお……へえ……なるほどねえ……」

レイは口の形が三日月になったかのようにニヤける。

「じゃあバン君達はアキハバラに居るんだ……さてさて、この戦争関連で次に関係しそうなのが……アキハバラキングダム。ピンゴッ!!優勝してキングに勝てばアキハバラの支配者になれる。そして町中のハッカーを集めればインフィニティネット中に散らばった解読コードを取り戻すのも容易……アツハハ!!」

善は急げ、つてね♪」

レイは楽しそうに笑いながら、LBXを収納している棚からトロイとテクーを取り出すと、ケースに収めた。

「服……服……え、なんか服が増えてる。姐さんかな?」

クローゼットを開けると、1着しか持っていなかった服と同じ物がいつのまにか3セットほどあった。おそらく真野が買ってきたのだろうと思いつつ、以前真野に貰っ

た白いパーカーに着替えて腰にL B Xの入ったケース2個を腰に下げた。

「あ、メガネケースも持つていかなくちや……お金……真崎さんがくれた奴があつたっけ。うーん……荷物が多い……入れる物……入れる物……これかな？」

ゴソゴソとクローゼットを漁っていると、水色のウエストポーチがあつた。本来は腰に留める物だが、現在は肩からかけるの主流となつているそれを、レイは知るはずがない。しかし試行錯誤の末肩からかけることに成功し中にCCMと工具一式をコンパクトに収めた。

「レイ君、少しいいか？」

「あ、八神さん。どうぞー」

「失礼する……出かける気だったのか？」

扉越しに聞こえてきた声に返事をし、中に入れる。入ってきたのは真野達や真崎を指揮する八神だ。彼はレイの格好を不審な目で見てゐる。

「うん。アキハバラって所に行きたくてさ。姐さん達の誰かについてきてもらおうと思っただけけど……もしかして忙しい？」

「ああ、ちょうど任務を与えた所だ。すまない……」

「いやいや、別に良いよ。ボクは養ってもらってる身だし。うーん……どうしようかな」

「……少し待ってくれ。心当たりがある」

「子供の引率に心当たり……？」

真崎がいないのでついてきてくれる人がいないレイ。流石の彼女も一人で街に出ようとは思っていなかったようだ。八神がCCMを取り出して部屋を出て数分すると戻ってきた。

「石森里奈のことはわかるか？」

「うん。この前ちよつとお話したよ」

「彼女についてももう事にした。関わらせる気はなかったが、彼女に話をしたら是非、とな」

「それは嬉しい話だね」

「……本当は君を外に出すべきではない。イノベーターの刺客がどこにいるか分からない」

いからだ……イノベーターの件で、私は君に何もできなかった。しかし君には自由になつてほしい」

「だからエンジェルスターの時も言ったけど、気にしてないよ。八神さん、気負いすぎても任務に支障が出るだけさ。眉間にシワが寄っているよ？」

「ツ!!……ふっ、忠告感謝する」

『おとうさん、むずかしいことかながえてる。おでこしわくちやだよー?』

八神の発言にレイは困つたような顔をしながら八神の額に人差し指をあて笑う。八神はレイのその行為に何かを思い出したのか目を見開き……うっすら笑みを浮かべると、部屋を去つた。

「?……変な人だねえ」



「はあ!!参加受付終了してる!?!嘘でしょ!!」

「い、いえ……先ほど2チーム同時に登録されて終了しまして……申し訳ありません。来年度お待ちしています」

「うう……仕方ないか……」

「諦めるしかないわね」

アキハバラに到着したレイと里奈は早速と言わんばかりにアキハバラキングダムへの出場登録をしに受付へ。しかしどうやらすでに参加受付は終了していたようで……

「うーん……仕方ないけど観戦だけにしよう」

「でもまだ時間があるわね。どこか行きたいところはあるかしら?」

「LBXショップ……は特に面白そうなものもないし……って、ねえ里奈さん、あの子……」

「あら……?」

悩んでいるレイは近くに何かないと店を探す。その途中、一人の少女を見つけた。レイよりも幼く、小学生に見えるその紫髪の少女は困った顔でキョロキョロしていた。



「ちよつと行つてくる」

「あつ、レイちゃん……ふふ、仕方ないわね」

里奈は、入院している妹が完治して自由に歩き回れるようになった時の事を想像し、レイを妹に重ねた。

「ねえ、キミ……迷子？」

「ツ……あつ、お姉さん……アルテミスに出てた人」

少女はレイを見て思い出した。一瞬ビクツと後ろに下がった少女だが、誰か分かれると興味深そうにレイを見た。

「よく覚えてるね。もしかして見てたの？」

「うん。お姉さんの銀髪、綺麗。それにお兄ちゃんが出てたから」

「ありがと……キミのお兄さん強いんだねえ」

「……お姉さんが倒したけどね」

「へ？……あつ!!」

少女の物言いに、レイはアルテミスで戦った相手を思い出し『お兄ちゃん』というワード、そして少女の特長的な紫色の髪からある人物をピックアップした。

「もしかして、仙道君の……」

「そう、仙道キヨカ。その節はお兄ちゃんがお世話になりました」

「あはは……こ、こちらこそ？」

ペこりと頭を下げる少女……キヨカに、レイは気まずくなり動揺しながらも答える。

「あ、そういえば」

「どうしたの？」

「私、迷子」

「あらら……」

頭を上げたキヨカは思い出したかのように自分が迷子だとレイに告げた。

「お兄ちゃんがアキハバラキングダムに出るから応援に来ただけど内緒で来たからお兄ちゃんに言えないし……人が多いし……道は分からなくなるし……」  
「親御さんはどうしたのかしら？」

後ろから追いついてきた里奈がキヨカの身長に合わせてしゃがみ、怖がらせないように笑顔で聞いた。

「お買い物してくるって。会場にいるって伝えただけど、会場の場所もわからない」

「おお……八方塞がりじゃん。えっと、ネットによると会場はその道路が開いて出てくるらしい……？ごめん、よく分からないや」

「……お姉さん。LBXバトル強いよね？」

「え、ああうん。結構強い方だと思ってるけど……」

「メカニックとしては……？」

「あー……そっちがメインかな。元々開発とかの方が得意だし」

「教えて!!」

レイの言葉を聞いたキヨカが突然レイに詰め寄り、目を輝かせて頼んだ。流石のレイも突然のテンションの上がり方に戸惑っているのか少し引いている。

「い、いいけど……もしかして仙道く……お兄さんのため？」

「うん。いつか、お兄ちゃんのリョーカーを私が直したいから」

「……アツハハ!!お兄さん思いの良い子だね。里奈さん、いいい？」

「ええ、アキハバラの施設ならきつと充実しているわ。親御さんにちゃんと場所を伝えたら、行きましようか」

「うん!!」

キヨカは純粋な笑みでうなずくとCCMを取り出して通話。レイと里奈は終わるのを待つてからLBXシヨップへと移動した。道中……

「およっ」

「〜♪」

「……ふいふい」

自然とキヨカはレイの手を取って歩き出した。レイは心なしか嬉しそうだ。

ショップに着いたレイ、里奈、キヨカの3人は、早速制作スペースに向かった。

「キヨカちゃんのLBXは？」

「ジョーカー、兄さんと同じ」

「見ても良いかい？」

「お願いします」

レイはキヨカから市販品と同じカラーのジョーカーを受け取ると、ウエストポーチから工具を取り出して機体を観察し始めた。

「……………バトルはほとんどしてないね。関節の摩耗も少ないしアーマーフレームの損傷も少ない。ただ少し凹みがあるのは……操作中にぶつけたのかな。えっと、腕の補強具合が大体同じ……ってことはナックル系か二刀流、もしくは二丁拳銃のスタイルだね」

「ツ!!なんで分かるの?」

「ま、経験かな。バトルは出来る?」

「……あんまり得意じゃないけど、少しなら出来る」

「そっか。じゃあこれで少し動かしてみよう」

「……絶対勝てない」

「だいじょーぶ。お姉さんを信じて」

レイは備え付けのDキューブに立つと、腰のケースからデクーを取り出した。

「デクー、よろしくね」

「……ジョーカー」

デクーはヒートブレイズを装備し、キヨカのジョーカーはバーンナックルを装備している。レイは矢壁からもらったCCMを使っている。流石にグローブは使わないようだ。

「そんなに緊張しなくても大丈夫。もちろん本気ではやらないし、今回はジョーカーのメンテナンスのために少しバトルするだけだから」

「うん」

「それじゃあ、どこからでもかかっておいで」  
「……行きます!!」

キヨカがジョーカーを操作してデクーに向かって突撃。右の大振りデクーに攻撃した。

「おっとと、良い攻撃じゃん。これはどう？」  
「うう……」

デクーは体を逸らせて回避すると、ヒートブレイズをジョーカーの腹に当てた。ジョーカーは後ろに飛ぶと態勢を立て直し再度突撃してきた。しかし今度は直前でジャンプしデクーの背後を取った。

「今度こそ!!」

『アタックファンクション 旋風』

「操作もうまいし、ファンクションのタイミングも良いね」

ジョーカーは両手に風を纏わせるとデクーに殴りかかる。デクーは迫ってくる拳をギリギリで回避するが、『旋風』は連続攻撃の技。素早い連打がデクーを襲う。

「アツハハ!!全然上手じゃん!!でも……ボクじゃなかったら最初の一撃からコンボが続いてたかな」

デクーは右足で地面を蹴って跳躍、ファンクションが終わり硬直があるジョーカーの背後から首筋にヒートブレイズを当てた。

「チエツクメイト」

「つ、強い……流石ファイナルステージ出場者……」

「そこまで!!二人とも、良いバトルだったわ」

里奈が審判として試合終了を宣言、拍手をしながら2人を褒めた。

「お姉さん……強すぎる……重そうなLBXなのに攻撃が全く当たらなかった」

「えつとね。見ての通りブラウラーフレームなんだけど、ボクは避けられる攻撃は全部避



けるから駆動部の強化を重点的にしてるんだ。結構激しく動くから疲労も早いし、メンテナンスも結構な頻度です……あー、分かる？」

「うん、すつごくわかりやすい」

「そっかそっか。じゃあデクーとジョーカーのメンテナンス、一緒にやろうよ。工具も貸してあげるし、分からないことはなんでも聞いて」

レイはニコニコしながらキヨカを席に誘導、ジョーカーとデクーのアーマーフレームを外しながらレクチャーを始めた。

里奈はそんな2人を見つめながら、物思いにふける。

「……（八神さん、レイちゃんは貴方が心配してるほどひ弱な子でもないわよ）」

楽しそうにLBXを扱う2人を見て、里奈も自然と笑みを浮かべるのだった。

# 地下での攻防。希望の少女。突きつけられる現実

## 20話

「お姉さん、楽しかった」

「うん!!ボクもすごく楽しかったよ。またお話ししようね!!」

「いいの?」

「もっちらん♪」

1時間半ほど、レイはキヨカにメカニックとしての知識を教えた。途中キヨカもわからないことが多くあったのでレイが分かりやすくまとめたデータをCCMで送信した。

「キヨカちゃんにはまだ難しいことが多いと思う。少しは分かりやすくしたつもりだけど……これから頑張ってね」

「はい、ありがとうございます。師匠!!」

「ツ!!ふふ、師匠か。うん、またね」

キヨカはお礼を言って、向こうで待っていた母親のもとに行つた。キヨカの母親はレイと里奈を見て深く頭を下げていたが、そこまで大したことはしていないと感じている。レイはあはは……と笑い手を振つた。キヨカを見送つた後、レイと里奈は歩き始めた。

「んん……うーん……楽しかったあ!!誰かに教えるつていうのもなかなか良いね!!」

「楽しそうで何よりだわ」

「あ、そういえば里奈さん……暇じゃなかった?結構長い時間話し込んだじゃったし」

「いいえ、私も楽しんだから大丈夫よ。それより、もうすぐアキハバラキングダムが開催されるけど、見ていくの?」

「あー……見たいけど、結構満足しちゃつたんだよねー。バトルもしたし、もつと楽しい事もあったし……今日は帰るよ。長居しても八神さん達に心配かけちゃうし。本当はバン君達の活躍も見たいんだけど……どうせ今度会うしいいかな」

「分かつたわ。エクリプスまでで良いのよね?」

「うん。お願いします」

◆

里奈によってエクリプスに帰ってきた翌日。午前中は、八神に勧められてネットで常識関連の勉強をしていた。

「……わざわざ常識を勉強する人なんて、ボクくらいなんだろうなあ」

幼い頃は普通に過ごしていたレイだがイノベーター研究所での実験暮らしは、昔の日常をたやすく忘れさせるほどに過酷なものだった。社会の常識など学ぶ機会もなかったレイには、こういったものも新鮮で知らないものばかり。普通ならめんどくさがりそうなものも彼女は興味津々で勉強をしていた。

真野が用意してくれたお昼ごはんを食べて休憩している途中、八神からCCMに電話がかかってきた。

「えつと……もしもし、であつてる？」

『ああ、問題ない。よく勉強しているな』

「えへへ、それほどでも」

『急で済まないが本題に入る。私達は今タイニーオービット社にいる』

「へえ……じゃあシーカーとの合流は出来たんだ」

八神達は、レイが観戦をやめたアキハバラキングダムで優勝したバン達をイノベーターから助け協力を仰いでいた。里奈はレイを送ってから姿を消し、音沙汰がないがタイニーオービット社にいるのだと八神から聞いた。

『出来たんだが……いまいち信用が得られなくてな』

「アツハハ、仕方ないよ。なんとたつてボク達は元イノベーターだからね。多少は仕方ないや」

『……そうだな。今、エターナルサイクラの製造をしている。しかし、問題が発生した』

「ほほう？」

『イノベーターのLBX部隊がタイニーオービット社の地下を通って襲撃を仕掛けてきている。数は25000、奴らは本気でここを潰しに来ている』

「25000……対策は？」

『現在、ハッカー軍団やオタクロス、山野バン達が防衛ラインを築いて迎え撃つ準備をしている。君も来てもらえないだろうか。君がいれば戦力図が大きく変わる……これ以上この戦争に関わって欲しくはないが、事態は一刻を争う。頼む……』

いつにも増して深刻な声音で喋る八神に、思わずレイも気が引き締まっている。

「了解。すぐ行くけど……ボク、そっちまで行けないよ?」

『細井を迎えに行かせた。すぐに到着するだろう』

「オツケー、25000から楽しみ!!超楽しいバトルになりそう!!」

『……頼んでいる身で言にくいが、どちらも本気だ。世界の命運がかかっている』

厳かな雰囲気似合わない発言をするレイを気まずそうに咎める八神だが、その想いが通じたのかレイはテンションを下げた。

「……分かつてるよ八神さん。イノベーターは私が潰す。今まで散々ユウヤ君や私で遊んでくれた分はきっちり返すさ。だから待ってて。軽く蹴散らしてやる」

『ツ……分かった。こちらも全力で防衛ラインを維持する』

八神は、レイの雰囲気が変わったのを感じ取ったのか、一瞬言葉に詰まった後手短に要件を告げて通話を終了した。

「ふ、ふふふ……アツハハ!!初陣だよ、セイリユウ、ビヤッコ、スザク、ゲンブ……LBXの起動コード入力。並列思考並びに各CPUにリンクスタート……おっと、やっぱ4体同時は負荷が大きいね」

レイは棚から四神を取り出すと、CCMグローブをはめてメタナスGXとのリンクを繋げた。高性能のLBX4体を同時接続するのはまだ子供の身であるレイには負荷が大きすぎたのか、鼻血を出してしまっただけ。部屋に置いてあるティッシュで鼻を拭くと、さらに楽しそうに笑った。

「全機接続完了……グツモーニングみんな、初めまして。早速だけど……戦争しよっか」

レイの声に応えるように4機のカメラアイが光った。



「残り敵総数、15000!! 尚も本社に向けて進行中です!!」

「くっ……数が多すぎる……ハッカー軍団達の被害はどうなっている!!」

「46%が沈黙しています。この勢いですと……」

「ここはタイニーオービット社の地下1階新シーカー本部。拓也が指揮するシーカーの新たな拠点だ。」

『拓也さん、ここまでくる敵の数が増えてる気がします』

『今はまだなんとかなる量だけど、このまま増え続けたら耐え切れないわ』

『こちら八神、社内に侵入するLBXが増加している』

『どこにも手を回す余裕がない。今は持ち堪えてくれ!!』

エターナルサイクラーを製造中のタイニーオービット社には、現在25000機のイ



ノベーターのLBXが襲来してきていた。シーカー側は郷田ハンゾウ、ヤマネコをリーダーに置きアキハバラが誇るハッカー軍団のLBX達で迎え撃っているが、質が高くとも数の差は圧倒的。少しずつハッカー軍団の数は減少している。

『あと少しで私達からの増援が来る。彼女が来れば一気に形成は逆転する。それまで耐えてくれ!!』

「彼女だと……? たった一人で一体誰が……まさか!!」

『アイツもイノベーターを離れてたのか!!』

『レイが……来る』

八神の発言にレイの事を知る者達が驚き、希望を持った。皆彼女の实力を知っているからだ。

「ツ!! 拓也さん、未確認のLBXがこちらへ接近中です!!」

「なに……どこからだ?」

「……………社内エントランスからのようです!!」

『ふっ……………来てくれたか』

刹那、イノベーターの軍勢の一部から爆煙が上がった。

「「「「ツ!!」」」」

「アツハハ!!本当にたくさん居る。腕になるってもんだねえ!!」

『『『『レイ!!』』』』

モニターをこの方へ向ければ、ライトグリーンの光が見えて来る。カツンカツンと歩く音が聞こえ、そして彼女は現れた。

「さてと……サイコスキヤニングモード……発動ツ!!」

CCMGグローブから光が発せられる。それに呼応するように、戦場のど真ん中で、同じようにライトグリーンの輝きが4つ見えた。

『あれはっ!?!』

爆煙が晴れると姿を表したのは中国神話における聖なる獣達、その全てがサイコス  
キヤニングモードで強化され淡く発光している。その姿は威厳があり、神聖な何かを感  
じさせる。

「やつほー、遅くなってごめんねみんな。久しぶり」

『レイ……助けに来てくれたのか!』

「あれ、バン君の声が聞こえる……どこ?」

レイは辺りを見渡すがバンの姿は何処にもない。しかし、階段付近に3機のLBXが  
いるのを確認するとそちらへ近寄った。

「もしかして君たち?」

『久しぶりねレイ』

「わわっ、すごいねそれ。久しぶりみんな」

興味深そうに、バン達の新型のオーデイン、パンドラ、フェンリルを眺めるレイ。ど  
ちらかといえばバン達よりもオーデイン達に目が行っている。

『あ、相変わらずね……』

「人間こんな短期間で変わるもんじゃないよ……あー、いやボクは変わったかな」

レイが両手を開きLBX達を操作。

セイリユウは片手剣である『四聖獣セイリユウ』で敵を切り裂き、ビャッコは鉤爪のようなナツクル装備『四聖獣ビャッコ』でデクー達を貫く。スザクは両手に持ったエネルギー系サブマシンガン『四聖獣スザク』で大胆に走り回りながら敵を撃ち抜いている。スナイパーライフル系統でありながらショットガンの機能を持つ大型ライフルで敵を粉碎し、時に殴り倒しているのは『四聖獣ゲンブ』を手に持つゲンブだ。

『あれ全部……レイが操作しているのか？』

「うん？そうだけど」

『4体も同時に操作するなんて……』

『なんかお前、見るたびにおかしくなってるよな』

ライトグリーンンの光が軍勢の中で輝くたびに爆発が起きる。

「す、すごい……敵総数9000。なんていう殲滅スピードだ……」

司令室でモニターしている1人は呟く。あの一瞬で多くの敵を倒したレイの手腕に驚いているようだ。

「あ、忘れてた。マスターコマンドの起動コードを入力、起動。おはようマスターコマンド、デュー部隊、アヌビス部隊、トロイのコントロールを任せるよ。インビット達は八神さんのところへ、その後はコントロール権を八神さんに譲渡」

レイは懐からマスターコマンドを取り出すと、ケースの中に詰められたLBX達が起動、マスターコマンドの指揮下に入った。

『それは、リニアの時の!!』

「うん？バン君は戦ったんだね。この子はマスターコマンド。LBXを接続すれば指揮をする司令機になるんだ。トロイのデスバレルを参考にしたガトリングガンも持たせてるから戦闘能力もピカイチ」

マスターコマンドに続くようにデクエースを小隊長においたデクー部隊、アヌビスを主軸にエジプトとアサシンを僚機にしたアヌビス部隊、単独戦力としてホワイトカラーのトロイを最後尾に着かせた。

「マスターコマンド、一機たりともここを通さないで。サーチ&デストロイで頼むよ」

レイの言葉にモノアイの発光で返事をしたマスターコマンド達はオーディーン達がいる階段に陣取った。

「キミ達も前線に出ていいよ。ここはマスターコマンド達に任せればいいし」

『ありがとうレイ!!行くぞ、オーディーン!!』

『待つてよバン……仕方ないわね。パンドラ!!』

『おい2人とも!?!……はあ、フェンリル!!』

オーディーン達はその性能を生かして前線へと駆け抜けていった。

「八神さん、今インビットを2機向かわせてる。急ごしらえの調節しかしてないからあんまり期待しないでね」

『十分だ!!お前達、絶対にここを通すな!!』

『『ラジャー!!』』

「行くよみんな、必殺フランクシヨン!!」

『アタックフランクシヨン』

『ディメンション0』

『崩天撃』

『メガ電磁砲』

『アクエリアスレーザー』

次元を切り裂き、天を崩し、黄色や水色のエネルギーがイノベーターのLBXを打ち砕いてゆく。無双という言葉が一番似合うのは彼女の事だろう。

「負けてらんねえぜ!!ハカイオー絶斗!!」

『アタックフアンクション 超我王砲』

「やってやるぜ!!」

『アタックフアンクション トリプルエネルギー弾』

『俺だつて!!』

『アタックフアンクション ライトニングランス』

『私も!!』

『アタックフアンクション 蒼拳乱撃』

『行くぜフェンリル!!』

『アタックフアンクション ホークアイトドライブ』

レイの奮迅を見て気合を入れたバン達も続くようにフアンクションを発動。目々に見えてイノベーターのLBXの数が減っていった。

「げほっ……全力戦闘は10分が限界か……」

突然レイが咳をした。服で咳を受け止めるが赤く染まっている。どうやら脳の酷使で血を吐いたらしい。



「うーん……セイリユウ達の性能が高すぎるねえ。頭も痛いし、メタナスGXも熱を持ってきたかな？」

ディスプレイにセイリユウやマスターコマンド達のカメラ映像を映し、隣に自身のメデイカルチェックも映している。情報処理能力が上がっているらしい。口元を服で拭くと、レイは操作に集中し始めた。

「(後で残骸を回収しなきゃ……25000体分のパーツをくれるなんて太っ腹♪)」

打算的な事を考えながらも一切手を緩めないレイは、出来るだけ損傷が少なくなるようにゲンブ以外では首を落とすように動いている。ゲンブの武装はショットガンなどで機体を穴だらけにしてしまう。どうやら諦めたようだ。

そのまま戦い続ける事8分がたった。

「……………これ以上は無理だね。戻ってきて、みんな」

レイは己の限界を感じ四神を手下に呼び戻した。

「はあ……はあ……お疲れ様、みんな。初陣なのによく戦った。後でメンテするからね。接続解除……ふう」

四神をケースに収めると、まだ接続中のマスターコマンドに指示を出した。レイは疲労を表情に表しながらも次の行動に移る。

「トロイの指揮権をボクに、キミ達はまだよろしくね。トロイツ!!」

ディスプレイを表示させたままレイは右手にCCMを取り出しトロイと接続。再度起動させるともう一度戦場へと駆り出した。圧倒的威力のデスバレルは次々にLBXを穴だらけにしていく。そうしてほぼ全てのイノベーターが戦場から消えた頃……ヤツは姿を現した。

『戦車だつて!?!』

「……神谷の方か」

トンネルの奥からゆっくりと走行してくる大型の車体。各部に砲塔が積まれ臨戦態勢だということが窺えるそれはLBXとは比べ物にならないほど大きい戦車だ。

「大丈夫かレイ君？」

「ッ……ジン君、来てたんだ」

『ジン!!』

「……は僕がやる」

突然現れたジンは懐からLBXを取り出した。サイバーランス社が究極のLBXとまで言うゼノンだ。

「完成したこのゼノンならいけるさ」

「……アツハハ!!キミだけじゃ不安だからボクもやるよジン君。キミだけにカッコつけさせはしないもんね」

『ジン……レイ……だったら俺も残る!!』

ゼノンとトロイの隣にオーデインが着地した。

「アミちゃん、カズヤ君、郷田君は行って。階段にボクの子達が居るから気を付けてね。マスターコマンドから全機へ、そこを通る人間への攻撃を禁ずる」

「……分かった。しくじんじゃねえぞ!!」

郷田はそう言つて、パンドラとフェンリルを掴むと社内へと走っていった。

『どうやって戦う?』

「動けなくさえすれば良い、レイ君。行くぞゼノン!!」

「……なるほどね、了解。トロイ!!」

『アタックファンクション』

ジンの意図に気付いたレイはCCMを操作してファンクションの指示を出した。ジンもそれに続く。

『ブレイクゲイザー』

## 『崩天撃』

ゼノンが手に持つハンマーのオベロンで地面を叩き割り青いエネルギーを迸らせる。レイはトロイに最初の動作を省略させ、戦車に向かって両腕を突き出す。チャージされたエネルギーが戦車へと伸びた。

爆煙に襲われた戦車はカメラによる認識が出来なくなりその動きを停止させた。

「今のうちだ、バン君、レイ君」

「うん」

『ああ!!』

トロイ達は停止した戦車へと飛び乗るが、視界がないのをいいことにむやみやたらにマシンガンや主砲を撃ちまくる戦車。その攻撃によってハツカー軍団のLBXが次々に撃破されていくがそんな事を気にしている余裕はない。

途中現れた砲台をトロイのデスバレルによる射撃で難なく突破した3機は、核があると思わしき場所に飛び移った。

「ハッキングを行う。守りを任せる」

「アツハハ!!手伝わなくていいのかい?」

「問題ない」

『分かった!!』

ゼノンがその場の手をついて戦車にハッキングを仕掛ける。それを見過ごすわけがないイノベーターは、アヌビスやデクー改を迎撃に回してきた。

『行くぞレイ、ジンには指一本触れさせちやダメだ!!』

「誰に言ってるのかなバン君。この程度……………スクラップにしてあげるよ」

オーディーンが敵へと接近戦を仕掛け、トロイがデスバレルによる射撃で後方支援を  
行い連携してゼノンを守り通す。

『ツ…………レイ!!』

「分かってるさ」

トロイの背後をとったインビットがトロイを破壊しようとする武器腕を振り上げた……が、それに気付いていたレイはトロイに射撃を中止させ右足で回し蹴り。空中に吹き飛ばした後左腕での射撃で風穴を開けた。

「よそ見しちやダメだよバン君」

『ッ!!』

こちらを見ていて自分への注意が散漫になっていたバン。オーディーンの背後に迫っていたデクー改は間一髪のところまでトロイの射撃によって爆散した。

「やってやる!!」

『アタックファンクション 超プラズマバースト』

オーディーンが武器であるリタリエイターを回転させると、雷が発生し球体を精製。それに向かって武器を突き刺すと、とんでもないスピードでデクー改達へと突撃。全ての敵機を破壊した。

「ひゅー。やるじゃんバン君」

「……………完了した」

ジンの一言に振り返る2人。気がつけば戦車は停止していて、これ以上動き出す様子はない。戦車の全機能は停止し、LBX達の動きも止まった。これで任務完了だ。

「戻ってきてトロイ……………お疲れ様。後でメンテするからね」

掌にトロイを着地させたレイはトロイに声を掛けると丁寧にケースの中に戻した。

「マスターコマンド、全機撤収……………並びに被害を報告して」

CCMを収めた事で空いた右手も使い、両手でディスプレイを操作するレイ。少しするとマスターコマンド指揮下の全LBXの機体情報がディスプレイに表示された。

「うっわ、デクー改は大破か。矢壁さんのとコアフレーム取り替えたのが不味かったかも。アヌビスは全体的にダメージが募ってるね。近接仕様にして突撃させたのが原



「因か」

軽く被害状況をメモしていると、ジンが寄ってきた。

「あ、ジン君お疲れ様」

「ああ、レイ君も。これからバン君にLBXを渡しに行くけど一緒に行くかい？」

「あー……そうだね。そうするよ」

ジンからの提案に快く返事をしたレイは、帰ってきたマスターコマンド達をケースに戻し両手にケースを持って立ち上がった。

「ツ……」

「レイ君!? ……メタナスGXによる負荷か」

急にふらついて倒れかけたレイはジンによって受け止められた。どうやらジンはレイの状況を知っているらしい。

「し、ってたんだね……」

「研究所のログを追った。灰原ユウヤや君がやらされていた実験の内容も全て把握して  
いる」

「あはは……随分と危ない橋を渡ったねえ。それで、ボクが気持ち悪い？メタナスGX  
を頭に埋め込まれたボクが」

「そんなわけないだろう。それを行ったのは白の部隊で、君はむしろ被害者だ。それに  
LBXの実力は君の努力の結果、何も否定することはない」

「……そっか。もう大丈夫ジン君。ありがとう」

「ああ」

◆  
ジンはレイを離すと、オーデインを持ち上げた。レイも自分の体の調子確かめる  
ように足を踏み締めると階段を上っていった。

「レイ、ジン!!」

「バン君」

「やつほ〜」

エントランスで合流した3人は、アルテミスの時のような敵同士の関係ではないため  
気楽に集まった。

「君のLBXだ」

「ありがとうジン」

「バン君、強くなったじゃん。模型店の時とは大違い、ボクもウカウカしてられないね」  
「もうレイに負けるつもりはないよ」

「アツハハ!!言うじゃん、今度バトルするのを楽しみにしとくよ」

まるで元々仲が良かったかのような会話。しかし、その雰囲気壊すように外で怒号  
が響く。

「待ちなさい!!」

「ん?」

声の主を探すと、今レイ達がいるタイニーオービット社社長の宇崎悠介が外で何かを叫んでいた。

「悠介さん……?」

「何かあったのか?」

「ええ……行くの?」

バンとジンは気になったのかそちらへと走り出す。レイは疲労のためか乗り気ではないようだが、ついて行かないのもアレだと思い2人の後を追った。

自動ドアを抜けて階段の上から下の様子を伺う3人。しかし、そこで衝撃の瞬間を目の当たりにする。

「自分が何をしているのか分かっていないのか霧島さん!!」

「うるさい!!お、お前のせい……私……!!」

レイ達が地下でイノベーターの襲撃を防いでいるうちにタイニーオービット社で開

発を進めていたエターナルサイクラーの試作品が収納されたケースを持っていた人物、強化段階ボールを開発した霧島が悠介に拳銃を向けたのだ。

「……アサシン、起動コード入力……接続完了」

「レイ、何を!？」

「アレだけは、イノベーターに奪わせてはいけない。例え……誰かが犠牲になっても」

アサシンを直接起動させたレイは高台へとアサシンを向かわせた。その手には、以前財前宗介総理暗殺計画に持ち込まれた狙撃銃、エグゼキューションナーが握られている。

「レイ君……その行為が何を意味するか、分かっているのか？」

「分かっているよ。だから、ボクがやるんじゃないか。生憎この国の法律なんて知らないしボクの置かれた環境を鑑みたら情状酌量の余地だってある。ボク一人とエターナルサイクラー、どちらがこの戦争で大事なのかジン君は分かっているはずだよ」

「ツ……それは、しかし!!」

いつになく冷静に、そして覚悟を決めたかのようなレイの視線を受けたジンはたじろ

ぐ。頭では理解しているがまだ中学一年生だ、人命に関わる事を損得で決めれるほど冷酷な思考はしていない。

「ダメだレイ!!」

「離してくれないかいバン君。操作が出来ない」

「LBXを人殺しの道具になんてさせない!!例えレイが相手でも……俺は止める!!」

レイの腕を掴んで、グローブによる操作を阻害するバン。彼にも確固たる意志があるようだ。

「……はあ、キミは頑固だね。マスターコマンド起動。アサシンを指揮下において……エターナルサイクラーを持ってしている男を殺せ」

「ッ、レイ!!」

冷めた表情でバンを見たレイは自分では操作できないと感じたのか、マスターコマンドを起動させアサシンのコントロール権を譲渡。命令を下し霧島の殺害を命じた。

指令を受けたマスターコマンドはモノアイを発光させアサシンに命令を送る。受け

取ったアサシンは高台へと跳躍し狙撃銃を構えた。しかし……

「な、何をやる!!待て!!」

「霧島さん!?!」

「青の部隊ツ!!マスターコマンド、標的変更……青いスーツの男を……早く!!」

拳銃を悠介に向けながら交代していた霧島の背後から青いスーツを着た男が現れ、霧島の持っていたエターナルサイクラーのケースを奪った。男はそのまま道路へ飛び出すと横断、霧島はそれを追うように道路へ飛び出し……トラックが霧島を轢く距離まで来ていた。

「(無人のトラック……!?) くっ……社長さんが邪魔だ……!!」

マスターコマンドを通してアサシンのカメラ映像をディスプレイで見っていたレイは、奥から男、霧島、悠介の3人が一直線に並んでいるのを確認し歯噛みした。このまま撃てば悠介ごと射抜くことになるからだ。

そして、運命の瞬間はやってくる。

「霧島さん!!」

「ああ!？」

「「ツ!!!」」

霧島が轢かれると、思った3人だが間一髪のところまで悠介が霧島を突き飛ばし車線上から外した。しかし……

「……………!! (また、ボクのせいでツ!!)」

霧島を突き飛ばした悠介は代わりにトラックの車線上にいて……轢かれてしまった。倒れる悠介、衝撃で吹き飛ばされるメガネ、地面に落ちレンズが割れる……しかし、壊れてしまったのはメガネだけではない。

「うあ……あああああああああ!!!」



人が死んだ。  
この事実が、  
バンの心をへし折り粉々にしてしまった。

# エクリプスの一幕……二幕……そして

## 21話

「……………」

エクリプスの一室、レイの自室としてあてがわれた部屋で向かい合う男女。レイと八神だ。

「事情は聞いている。良くやってくれた」

「……………うん、まあ役目は果たしたね」

「ああ、君が来てから戦局が大きく傾いた。宇崎悠介社長に関しては、残念だった……………」

先日的一件、タイニーオービット社襲撃事件でレイは奮闘した。数々のLBXを操り25000機のLBXを倒したのだ。これによりタイニーオービット社は守られた。大きな傷痕を残して。

「誤算だったんだ。あそこに青の部隊がいるなんて……後3秒、後3秒有ればエターナルサイクラーは……」

「……アサシンは私が預かっている」

「ツ!!……まあ仕方ないか。殺人未遂だもんねえ」

力なく笑うレイ。いつもの覇気はなく、サイコスキャニングモードでの全力戦闘の疲労がまだ残っているようだ。

「で、どうするの?警察に突き出す?」

「馬鹿な事を言うな。今の警察は海道の手中だ。それに……戸籍があるかも怪しい君を放り出すわけにはいかない」

「……あつそ」

「あれだけの軍勢を差し向けられて、犠牲者が1人で済んだのはまだマシだったかもしれない」

「……そうだねえ。長い目で見れば、だけど」

「ああ、だが肝心のエターナルサイクラーはイノベーターに奪われてしまった」

「社長さんを轢いてどっかに行ったトラック、無人だった」

「……だろうな。わざわざ手がかりを残すほど奴らは甘くない」

自らの右手を見つめながらレイは呟く。八神も同意するように返事をし、ため息をついている。

「この際、殺人未遂の事は何も聞かない。財前総理の件に何も出来なかった事を棚に上げて言う事はできない」

「……そう」

放っておくと消えてしまいそうな声だ。

「別にボクはさ、人が死んだことはあんまり気にしてないんだ。ああいや、良いつて言うわけじゃないよ」

「……」

「やっぱさ、ボクの一瞬の気の迷いで対局があつちに傾いたつて言うのがねえ……あの時バン君を振り切つて自分でアサシンを操作していれば、マスターコマンドを經由せず

左手でCCMを取り出し、エターナルサイクラーだけは死守できた」

「……………」

「結局ボクは根っこからイノベーターなんだろうね。幼いころから少しづつ意識へ刷り込みがされてたって言えばそれまでだし自覚はあるけど、気づいたら損得を優先して……ねえ八神さん。ボク間違ってる?」

「ああ」

「……即答、か」

今まで黙ってレイの話を聞いていた八神は、レイの問いかけにすぐ返事を返した。

「君はまだ子供だ。そう言う汚い事は私達大人に任せて……と言っても、納得は出来ないだろう。だが、賢い君なら理解はできるはずだ」

「まあ、ねえ……」

「人殺しはいけない。たったこれだけの簡単な事だが、君の事を過大評価していたのかもしれない私は。あの環境で育ってきて知るはずがなかったのに……誰よりも強く、山野バン達よりも大人びている君を私達と同列に見ていた。だからあえて強く言わせてもらう。君はまだ子供だ、人に頼る事を覚えろ!!」

それだけ言うと、八神は部屋を出て行った。レイは緊張が解けたのかベッドに寝転ぶ。

「……頼ってた人が急に居なくなつて、その果てがあの実験生活だったじゃないか。ボクが自分でやる方が……早いし、確実だもん」

レイはそのまま目を瞑り、意識は闇へと消えた。レイ自身は気付いていないが、閉じた彼女の瞳から一筋の涙が溢れていた。



翌日、朝食を食べるために八神の元へ向かったレイ。2人の雰囲気はあまりよろしくなく、必要最低限の会話しか行わなかった。真野達3人はそんな2人をまるで父親と反抗期の子供のようだと揶揄し八神に一喝されていた。

自室へ戻ったレイは、パンを口に頬張りながらCCMGグローブのディスプレイを表示していた。彼女の額には熱冷ましのシートが貼ってある。薬物は全く効かないレイだが、このように直接作用するものは効果があるらしい。真野が買ってきたものを見境なく試した結果だ。

「初起動だったけど、サイコスキャニングモードがすっかり機能してくれて良かった。武器の劣化が早いのが難点だけど」

四神の状態をチェックしそう呟くレイは、メモ帳にやる事を書き込んでいく。何千という敵を倒したのだから武器の劣化は当然だろう。

「ゲンブ以外はまあ良いんだよ、エネルギーの刃と弾だし。ゲンブがなあ……はあ」

四聖獣シリーズの武器はゲンブ以外はエネルギーを使う物。バッテリーさえ続けば刃こぼれや弾切れを心配する事はない。だがゲンブは実弾、しかもショットガンのように弾がばらけるため出費が激しいのだ。さらに四聖獣ゲンブは公に出回っていない武器。その銃弾の規格は既製品とは一致しなかった。

「なんでマガジンも盗まなかったかなああの時のボク」

後悔のベクトルが明らかにおかしいがレイは至って真剣。このままではゲンブのみ違う武器を使うことになり、その重装甲高火力を生かした四聖獣ゲンブによる突貫が出来ない。瞬間最大火力だけで言えばハンマー武器を凌ぐ四聖獣ゲンブを外すのは惜しいのだ。

「ま、良いや。最悪武器の規格を変更すれば良いし」

口ではこう言っているが、なかなか難しい作業のため時間がかかる。コーヒーを飲みながら呟くレイ。以前檜山の店、ブルーキャッツでコーヒーを飲んだ時からハマっているのだ。

コンコン

「嬢ちゃん、ちよつといいかい？」

「姐さん？どうぞ〜」



扉越しの真野の声が聞こえ入室を許可。入ってきた真野は、女つげがない部屋だねえと呆れながらベッドに座った。

「今からタイニーオービット社に行くよ。準備しな」

「またなんかあったの？」

「いいや、今日から正式にシーカーに加入するからその顔合わせさ。嬢ちゃんも来るだろう？」

「ええ……それ、もうボクも入る事になってんの？どこかの組織に入るのやなんだけど」

「気持ちには分からなくはないけどね……今アンタを後ろ盾がない状態にすることの方が良くないんだよ。LBXの操作技術、開発技術、頭の中のメタナスGX、イノベーターの人体実験被害者、これだけでも良く嚴重に隔離されなかつたというに……極め付けは」

「海道義光によって隠蔽されたトキオブリッジ崩壊事故の真相を知る当事者……だね」

真野の発言に被せるようにレイが言った。約10年前に起こった、海道義光が主体と

なつて行つた鉄橋の建設中の事故だ。この事故によつて海道ジン、灰原ユウヤ、レイは両親を失い、八神英二に至つては妻と幼い娘を亡くしている。

「別に、こんな小娘の戯言を信じる人なんか居ないでしょ」

「いいやあり得るんだよ。今の総理大臣の財前宗介ならねえ」

「……ああ、暗殺に失敗した人」

「その通り。ニュースで彼の性格を知る機会があるけど、多分アンタの病院のレントゲンを撮つたら一発さ。徹底的に調べ上げ解決を図るだろうね。良くも悪くもこの国のために必死人だよ」

「へえ……この国つて恵まれてるんだね」

ケラケラ笑いながらレイは真野の話を聞いている。

「そしてそこが問題でもある。総理に告げ口なんてされてはイノベーターのボスの首が危ないからねえ……奴らは必死こいて止めるだろうさ。だからアンタだけは守り抜かなくちやいけないだよ」

「なるほど、それじゃあしょうがないか。全部終わつたら、アイツらがキレイさっぱり

消されるのを見れるんだね♪」

「う、うーん？まあ、そういう事にしておこうじゃないかい。ほら、さつさと着替えた。間が良かったら回収し忘れたLBXの残骸貰えるかもしれないよ」

真野の最後の言葉でレイが急に立ち上がり、からになったコーヒーカーップを机に叩きつけた。

「ツ!!! そうだった、姐さん何ボサつとしてるの。早く行くよ!!!」

「アンタを待ってんでしようが!!!」

「準備出来たツ!!!」

「こういうときだけ行動が早いね嬢ちゃん!? 生意気なガキだよ全く!!!」

神速のような速さで着替えたレイはいつの間にか腰にLBX2体分のケースを下げ、ウエストポーチの肩にかけている。極め付けは何も入っていないアタッシュケースを両手に持って目を輝かせている。

真野も呆れながら怒鳴り、しかしどこか楽しそうに笑いながらレイの手のアタッシュケースを引たくって歩いて行った。

「あつ、飲み終わったコップは台所に置いてから来な!!」

「はーい!!」

ステルス司令機エクリプスという特異な住居だが、彼女達の雰囲気は普通の家庭と全然ら変わっていないように見えた。

### 次回予告

「は、謀ったね姐さん!!姐さんだけは信じてたのに!!」

「……もう諦めな嬢ちゃん。ここでお縄につくんだよ」

「元テロ組織所属の癖にお縄とかどのツラ下げて言ってるんだ!!」

「アンタそれブーメランだからね!?!……ふん。お前たち、やっておしまい!!」

???  
「はーい♪」

「ぼ、ボクにちかづくなあああああ!?!?」

## ほんの僅かな日常

## 22話

「……………姐さん？少しくらい、説明してくれてもいいんじゃない？」

「なんのことが分からないねえ嬢ちゃん。あたしは物事を客観的に判断してるだけさね」

恨めしそうな視線を真野に送るレイ。理由は単純、彼女は今両腕を拘束されいるからだ。

「レイ、そろそろ諦めたら」

「……………頑固」

「嫌なものは嫌だよアミちゃん、えっと……………」

「三影ミカ、よろしく」

「あ、うん。よろしくね……………じゃなくて!!」

ここはタイニーオービット社地下の新シーカー本部。イノベーターの策略に巻き込まれて亡くなった宇崎悠介の後をついで社長となった宇崎拓也をはじめとした、バン以外のメンバーが揃っている。さらには八神、真野、細井、矢壁、レイもいる。

そして、今まさにレイの右腕に抱きついているのはアミ、左腕には紫に塗装されたアマゾネスを使う三影ミカがしっかりと抑えている。本部内にいる他の職員やメンバーは苦笑いでその現場を眺めており、八神に至っては片手で頭を抑えている。

「悪いけど、嬢ちゃんを頼めるかい？女としての常識って奴を叩きこんで欲しいのさ。嬢ちゃんも年の近い子の方が接しやすいだろうし」

「丁度レイに仕返ししたいと思ってたのよねー」

「……仲良くなりしたい」

「ひい!?!……なんでさ姐さん!!別に服なんて今あるやつでいいじゃん!!ボクは今すぐにも地下のLBX達の回収に……あ、矢壁さん助けてよ。デクー改の修理してあげないよっ」

「え!?!それは困るっす!!」

「籠絡されてんじゃないよ、おだまり!!ほらさつきさで行った!!」

「さあレイ、諦めてトキオシアデパートに行きましよう?」

「美人だから、なんでも似合う……楽しみ♪」

「うわああああ!! いやだああああ!!」

そうして悲しくもアミとミカによってドナドナされてしまったレイ。最低限、自己紹介と挨拶だけはしてあるので子供達の出番はここまで。その場にいた郷田や三人衆、ブルド好きで周りに知られているリユウなども共に出て行っていて、この場にいるのは大人だけだ。

「一つ聞かせてもらおう」

「……なんでも言ってくれ。私が知っていることなら全て話す」

白いスーツを身に纏った拓也は、鋭い目線を八神に突き付けながら喋る。八神はそんな拓也をしつかりと見据えている。

「彼女……レイはなぜイノベーターにいた? 明らかに自ら望んでいた様子ではない。そしてあのLBXの操縦技術に関してもだ」

「「「「……………」」」」

拓也が言った瞬間、八神達顔が険しくなる。雰囲気は暗い。

「分かった、全て話す。だが他言無用、そして何より先に理解してもらいたいのは……レイは全ての出来事においてイノベーターの被害者であることだということを念頭に置いてもらいたい」

「ああ」

八神達に視線が集中した。この場にいる誰もが、八神達の雰囲気や声音でただ事ではないと感じたようだ。

「10年近く前に起こったトキオブリッジ崩壊事故のことは知っているか？」

「……ああ、確か海道義光が推し進めていた計画だな。確か、途中で建物全てが崩壊すると言った事故があつて計画は中止されたはずだ」

「私やレイ、アルテミスに出演していた灰原ユウヤ、海道ジンはこの事故の被害者だ」

「「「「ツ!?!」」」」」



本部内に衝撃が走る。どうやらそこまでは知らなかったようだ。

「私は妻と子を失い、幼かった彼等は両親を失った。入院生活をしていた3人のうちレイと灰原ユウヤは神谷重工へ、海道ジンは海道義光の養子として引き取られた」

「その差はなんだ？」

「……あの頃の海道義光は、いや海道先生は人を思いやる心を持っていた。両親を失った5歳の少年を取り囲むメディアを一喝し病院へと連れて行ったそうだ。私も、世界のためにと活動を続けたあの人に憧れを、そして救ってもらった恩を返すために働いていたのだが……何故だろうな。あの人は変わってしまった。いや、レイと灰原ユウヤを神谷に送ったという事実が有る時点で、その頃から全てが計算通りだったのかもしれない」

「八神さん……」

独白するかのように八神は寂しく笑った。質問から外れているのは八神自身承知の上だが、どうしても聞いて欲しかった。拓也達は黙って聞いている。

「……すまない、話を戻す。君達も見た通り、レイと灰原ユウヤが身につけていたCCMスーツや、彼等のLBXが発光していたのは記憶に新しいだろう。あれらは全て最強の兵士を作るという発想の元に行われた非道な人体実験によるものだ」

「「「ツ!?」」」」

「なんだとツ!?……イノベーター……!! 一体どこまで!!」

「灰原ユウヤは実験の負荷に耐えるために過剰ともいえる薬剤の投与によつて命令を聞く以外できない人形に成り果て、薬剤が全く効かない体質だったレイは頭の中にチップ……LBXのCPUのようなものが埋め込まれている」

「衝撃的すぎる話に空気は死んでいる。誰もが悲痛の表情を浮かべ八神の話を聞いていた。」

「CCMスーツとは、脳から出て身体中に命令を送る電気信号の一部を直接LBXに送り込むことで自分のイメージ通りにLBXを動かす……従来の操作によるラグが無くなりより精密な操作ができる代物らしい。今はグローブだけになっているが、彼女の頭にあるチップと連動させる事でより正確でラグが少なくなる」

「らしい?」

「研究は白の部隊が行っていたから詳しくは知らない。部下の1人がレイの監視を命じられていたので少し知っているだけだ。」

そして、薬物で精神を破壊することを無理だと悟ったのだろう、奴らはレイを懐柔する方へと向かった。あの環境で唯一幼い子供が興味を持てる物、並びに今イノベーターが戦力として期待を高めていた物を与えた。その結果が、あの強さだ」

「ツ!!LBX……」

「彼女にとつてLBXとは全てであり、薬物で軽減できなかつた実験の苦しみを癒す唯一の物。ある意味……LBXに囚われていると言つてもいいのかもしれない」

「だからレイをアミ達に連れて行かせたのか?」

「イノベーターさえ潰してしまえば彼女は自由だ。もうLBXに継る必要も、痛みも何もない……ただの少女だ!!これからは、ただの一般人として生きねばならない」

八神は拓也に向けて力強く宣言した。拓也は壮絶な話に眉を潜めていたが、八神の言葉聞いて不本意そうな顔をしながらも表情を崩した。

「まあ……会社を救ってくれた恩もある。歓迎しよう、八神英二」

「ツ……感謝する」

2人は握手を交わして、笑い合った。



ところ変わってここはトキオシアデパート。全てを諦めたような目のレイに、その左右をガツチリと固めるアミとミカ、そしてそれを面白そうにみているリュウや苦笑いしている郷田と四天王3人。

「あたし達だけ紹介雑じゃない!？」

「何言ってるんだリコ？」

「な、なんでもないっすりーダー」

アミとミカは間のレイを完全に無視しながらどの店を見ようか話し合っている。

「あのさ……もう来ちゃったし抵抗しないから離してくれない？注目されて嫌なんだけ

ど」

「あら、ごめんねレイ」

「……逃げない？」

「逃げないよ」

レイの言葉で2人が手を離せば、溜息をついた。どうやら本当に嫌がっているらしい。

「で、なんでボクはこんなところに連れてこられてるのさ。本当だったら今頃ボクはL BXのパーツの物色をしているはずなんだけど」

「真野さんにレイのコーディネートを頼むって言われたのよ。いつになく真剣な感じだったから断りづらくてね」

「お小遣いももらった」

「中学生買収してんじゃないよ姐さん……」

呆れた様な表情で呟くレイ。心なしか少し疲れている様にも見える。

「まあボクは今からキミ達に着せ替え人形にされるのは分かっているんだけど、ハンゾウくん達は何すんの?」

「ああ? あー……: そういや考えてなかったな。よしテメエら、今から自由行動だ! 1時間後にここで集合でいいか?」

「私はそれでいいわよ。ね、ミカ」

「郷田さんが言うならそれでいい」

「俺、ブルド用のパーツ欲しかったんだよな!」

「俺もマッドドックの調整しねえと……」

「おいどんは丁度無くなったお菓子を買いに行くでござす」

「あたいは……: リーダーについて」 「リコは当然ついて来るわよね?」 ……え?」

それぞれが自分の希望を言う中、リコだけはアミに腕を掴まれていた。

「女子会……: やってみたかった」

「いや、あたいは」

「諦めなよ……: リコちゃんだっけ? こうなったアミちゃんやミカちゃん、もうダメそう」

「……: アンタも大変だね」

達観した目で虚空を眺めているレイに少し同情したらしい。

そして解散した皆は各々の目的地へと向かった。

「先に言っておくけど、スカートは絶対履かないからね。これくらいは選ばせてよ、ボクの服なんだから」

「え、絶対似合うのに……」

「気持ちは分かる」

不平があるらしいアミの隣でミカがレイの意見に同意している。彼女はスカートと短パンが一緒になった様な物を履いているからだ。

「リコちゃんは……それ汚れないの？」

スツとレイが視線を下げると、明らかに丈があつてない服が引き摺られているのが目に入った。

「……………気にしたら負けだよレイ」

（何に負けるんだろう……………？）

4人はおしやべりをしながら服屋へと向かった。

結論だけ言えばシーカー本部に戻った時、疲れ果て死んだ魚の様な目をしたレイを見た真野がやり過ぎたか、と少し反省するほどだったそうだ。



## 人、その在り方

## 23話

「うん、やっぱり美味しい」

「そう言ってもらえて、何よりだ」

TO社元社長、宇崎悠介が命を落としてから6日が経った。ミソラタウンの喫茶店ブルーキャッツにてコーヒーを楽しんでいるレイと、カウンター越しにコップを拭いているのはこの店のマスターである檜山蓮、通称レックス。

シーカーに帰還していた檜山とレイが偶々鉢合わせ、レイがコーヒーが飲みたいと言ったため2人は店へと来ていたのだ。

「一つ、聞いても良いかい？」

「なんだ？」

「アルテミスの時、ジン君相手に手を抜いたでしょ。明らかに挙動がおかしかったよ」

「何のことか、分からないな」

「……そう」

コップに口をつけて間を開けるレイ。誤魔化しているのがレイは理解したが深くは聞かない様だ。

「檜山さん、ボクは貴方が何をしているのか知らないし興味もない。勝手にやっつけていけば良いさ。でも、ボクの邪魔だけはしないでおくれよ?」

「……何が目的だ?」

「加納って知ってるかい?」

「白の部隊のリーダーだったな。お前や灰原ユウヤを弄くり回してたはずだが」

「流石だね」

さらにコーヒーを飲んだ。

「復讐するつもりか?」

「悪いことかな」

「……さあな。俺にも分からん」

「檜山さんだって、そんな顔してるよ？」

「ッ……」

凶星だったのか、手を止めてレイを見る檜山。レイは相変わらずコーヒーを口にして  
いる。

「皆、何かしら抱えて生きるものなんじゃない？ボクだって、檜山さんだって、多分だけ  
ど今回の一件で宇崎さんも」

「そうだろうな」

少し俯きながら言うレイに檜山も同意し再び手を動かし始めた。

「LBXバトル、しない？」

「ほう？」

「檜山さん、これから何かするんでしょ。最後くらい、楽しいバトルをしよう」

「……………分かった」

「ご馳走様でした。本当に美味しかったです」

飲み終えたレイはコップを置き立ち上がった。

2人は地下にあるアングラビシダス会場へと行き、ステージ中央の城砦ステージに向かい合った。

「行くよ、セイリユウツ!!」

「Gレックス」

2体の龍を冠するLBXがステージへと降り立った。

「行くよ!!」

「ああ」

片手剣『四聖獣セイリユウ』を構えてGレックスへと突撃するセイリユウは、目の前まで行くと小手調べと言わんばかりに上段から剣を振り下ろした。

Gレックスは左腕の『バーンナックル』で受け止め長い尾をしなければ反撃に出た。

「流石のパワー、アルテミスで見た時からバトルしたかったんだ」

「お前の機体も、なかなかのスピードとパワーだな」

「神谷はL B Xのセンスは良いみたいだからね」

「ふっ……なるほどな」

G レックスとセイリュウが打ち合うたび衝撃波が走っている。少しずつ削れていく城の壁は泣いていいだろう。

「ほう……そう来るか」

「そこッ!!……これを躲すの!？」

2人のCCM操作スピードが上がっていく。それに呼応する様にG レックスとセイリュウの動きもより軽やかなものに。

G レックスが尾で薙げば、セイリュウはジャンプして尾を踏みつける。固定されてしまったG レックスに向かって袈裟斬りを仕掛ければ、G レックスはアッパで攻撃し互いにダメージを与え合う。

「すごい……これが伝説のLBXプレイヤーの実力。ボクがこんなに被弾するなんて!!」

「光荣だな。レイ、使わないのか？」

「ツ!!使って良いの?」

「ああ、全力で来い」

「アツハハ!!壊しちやったらごめんね。サイコスキャニングモードツ!!」

『サイコスキャニングモード』

檜山の言葉に嬉しそうな声音で確認したレイは、CCMを端末からグローブに変えサイコスキャニングモードを使った。セイリユウから迸るライトグリーンのオーラがその発動を示している。

「檜山さん、楽しいねえ!!」

「ツ、ああ。最後にこういうのも、悪くないな……!!」

いつのまにか檜山の口元も笑っている。この瞬間、2人は心の底からバトルを楽しんでいるのだ。

さらに加速する攻防。撃ち合いが3分ほど続いた後、最後の1撃が放たれようとしていた。

「これで決めるッ!!必殺フランクシヨンッ!!」

「叩き潰せGレックス、必殺フランクシヨン!!」

『アタックフランクシヨン デイメンシヨン0』

『アタックフランクシヨンメテオストライク』

光がステージを包み込み、爆ぜた。

「いやあー楽しかったあ!!ありがとうね檜山さん。こんなに楽しかったの初めてだよ!!」

「楽しめたなら何よりだ。……もう夕方か、シーカー本部に戻るぞ」

「はい」

バトルを終えた2人は、帰りの支度をしていた。

「そういうえばレイ、この戦いが終わった後はどうするんだ？」

「ん？……あー、考えて無かった。でもまあエクリップスで適当に過ごすんじゃない？」

「無理だろうな。良くも悪くも、エクリップスはステルス機能のある飛行機だ。恐らく政府が管理することになるだろう」

「え!?!……もしかしてボク、ホームレスってやつ？アツハハ……わ、笑えないんだけど……」

苦笑いで檜山を見るレイだが、檜山は視線を無視している。

「これをやろう」

「おわっ……鍵？」

「この店の鍵だ、ここに住むと良い。どうせ俺は戻らんからな」



檜山はレイに鍵を投げると、レイは慌ててそれをキャッチ。訝しげに鍵を眺めている。

「戻らないって……まさか死ぬ気？」

「いいや、死ぬつもりは毛頭ない。ただ俺の計画が完了すれば、俺は晴れて世紀の大犯罪者として祭り上げられるだろうからな。気軽にここには戻って来れん。それに、これらの未来を作るのは俺みたいなおっさんではなく、お前の様な子供達だからな」

「……そっか。うん、じゃあ貰っておくよ。いつのまにかボクが『2代目レックス』とか呼ばれ始めても文句言わないでおくれよ？」

「ふっ、それはそれで面白そうだ」

店から出て、レイが鍵をかけた。

「この戦いが終わったら、かあ……」

「どうした？」

「いやさ、こう……想像できなくてね。今を何とか生きてきたボクが、これからのことを考えるなんて想像できなくて」

「人は未来を見据えて生きる事ができる生き物だ」

「……………どういう事？」

立ち止まった檜山は、空を見上げながら語り始めた。

「人は獣にあらず、人は神にあらず」

「ツ……………」

檜山の雰囲気が変わる。

「人が人であるためにはどうすればいいか、レイは何が正解だと思う？」

「……………」

「難しいか？」

黙りこくつて考えるレイ。目を瞑り、相当集中している様だ。何分たっただろうか、いや本当は数十秒しか経っていない。

そしてレイは目を開けて檜山を見て言った。

「全部ひつくるめて、人って言えるんじゃない？」

「ッ!!」

レイの回答に檜山は目を見開いた。

「どこまでも好戦的でガツガツ攻めるけど、人情深く友を大切にする人は獣？」

「……違う」

「どこまでも理性的に戦況を見つめて動く事ができるけど、敢えて人を見下す様な態度を取る人は神？」

「違うな」

「二つの事にどこまでも夢中……いや、それしか無くそのためならなんだってする、人殺しだつて厭わないし、その事をする他の存在は全て格下だと思つている様な人は獣、神……いや、人かな？」

「人だ」

「そう、人だと思う。結局の所……どんな人でも、人なんだ。考え方も行動も、全部人が考えてするから人なんだ。それに、人が人であるために、つて言う考え方……神様みた

いな事言ってる。檜山さんだって人じゃないか」  
「ッ!?それは……」

狼狽えて、少し下がる檜山にレイは続ける。

「さっきのボク達は獣でもあつたし、神様みたいでもあつたじゃん? 戦いを楽しむ本能の様なもの、LBXという玩具を上から操って戦わせる神の様なもの。獣みたいな自分、神みたいな自分、それらをうまくコントロールしている人こそ、自信を持って人つて言えるんじゃないかな」

黙ってレイの話を聞く檜山、その瞳は揺れている。

「でも、そんな事をいつも人が考えているわけじゃない……そう考えれる檜山さんは凄  
い人だね。なるなら檜山さんみたいな大人になりたい」

「……こんなおっさんになりたいのか? 変な奴だ」

「あいたつ!?……アツハハ!! ダンディ? でかっこいいと思うよ」

檜山は茶化す様なレイの言葉に少し微笑みながらレイの額を小突き、T O社へと再び歩き始めた。

「あ、着いた。檜山さん今日はありがとう、楽しかったよ」

「俺も年甲斐も無くはしゃいだな……次会う時、敵同士じゃなければいいな」

「アツハハ!! 勘弁して欲しいけど、そうなたらまたバトルしようか」

「ああ、じゃあな。頑張れよ」

すっかり暗くなった頃、T O社へと到着した軽く2人は挨拶を交わし、別れた。

(獣と神を併せ持つことも人の形、か……俺は……)

## 新たなる戦友

### 24話

「ふあ〜……ねむ」

「ちよつとレイ、緊張感が無さすぎるわよ」

「……誰かさん達がボコボコに負けたせいで、LBXのメンテナンスの手伝いがボクにまで回ってきたんだけど……誰が知らないかなあ〜」

「うっ……」

「パンドラ、フェンリル、ハカイオー絶斗、ナイトメア。どれも一点物で弄りがいがあつたけど……知ってる？キミ達の機体って結構繊細な作りがしてあつてメンテナンスにも一苦労するんだ。」

パンドラは細身で高機動ばつかりだから各関節部の疲労が凄しい、

フェンリルは膝裏がイカれてたねえ……狙撃銃を撃つ時に無理な体勢を取ったんだね。

ハカイオー絶斗は超我王砲？の掃除が大変だった。1発ごとの燃費が悪いし、あれ欠

陥じやないの？

ナイトメアは本体は問題無かったけど武器だね。あのハンマー、デザイン重視のせいか耐久性に難ありだったんだけど……まあカッコいいからいいや。

……あれ、なんでアミちゃんとカズヤ君は目を逸らすのかな？教えて欲しいな？」

「すいませんでした、以後気を付けます!!」

現在、人が全く来ない様な山道を車で移動している。イノベーター研究所へと向かっているのだ。レイと檜山がバトルをした翌日に発射されることになったミサイルの発射阻止のため、レイは半徹した眠気を抱えたまま作戦に加わった。

車に乗っているのは拓也、里奈、バン、アミ、カズヤ、ジン、レイの7人。大きめのワゴン車だ。レイにしては珍しくLBXの事を喋っているのに声音に怒気が感じられる。

「ジン君はバッチリ、流石だね」

「自分のLBXは自分で修理する。当たり前だ」

「ううっ!!」

「片腕切られたって聞いてたけど？」

「予備パーツはサイバーランスからもらっている」

皮肉の聞いたジンの言葉に笑顔でうなづくレイ。アミとカズヤは唸っている。

「あ、オーデインは最悪だったよ」

「え!？」

「キミさあ……昨日神谷に殴り込みに行ったらしいけど、引きこもってた1週間機体に触ってなかったでしょ? ホコリついてたし、なんか無理に掴んだ様な跡があったし」

「ギクツ!!」

「オーデインが飛行形態にもなれる可変機って自覚ある? 変形ができるってことはそのコアスケルトンは他に類を見ない超特殊な形状、構造をしているんだ。少しの整備不良で機体が爆発する危険性だってある。普段からもっと機体のことを「もう着くぞ」……まあ帰ってからにしてあげるよ」

思いの外ボロクソに言われたバンだが、拓也の一言で救われた。しかし、バンは引きこもっている途中ジンの訪問でオーデインを投げようとした事があり、それがレイにバレたらしい。



「全く……まあゼノン以外の機体データは粗方貰ったからこれくらいで許してあげる。流石にゼノンを作る様なサイバーランスは敵にしたく無いから貰わなかつたけど」  
「お前もやることやってんじゃねえか!？」

なかなかエグい事をしていたレイにカズヤがキレた。悪の組織に殴り込みを仕掛けに行く雰囲気では無い。

そのまま車が止まり、目的地に着いた7人は下車し湖の元までやってきた。

「ああ、ボクは途中から別行動するからね」

「何?そんな話は聞いていないぞ」

「アツハハ!!言っていないもん♪」

笑顔でそう言うレイに拓也の眉間が寄る。

「ここつてさあ、ボクが10年?くらい住んでた場所なんだよね」

「「「「ツ!!」」」」

「最後くらいボクの部屋に帰ってあげようかなって。忘れ物を取りに行きたいし」

「……分かった。道は分かるか？」

「10年も住んでたんだ。分かるよ」

レイはひらひらと手を振り、一人で湖へと歩いていった。

「おいレイ、そこは水が……ってええ!？」

「ただのホログラムだから大丈夫だよ」

湖は全てがホログラム、故に使ったとしても何の問題も無い。驚くカズヤを背にレイはさらに進む。

研究所内部へと入りエレベーターで地下へ、そして変哲もない廊下を慣れたように歩き続けた。

「ここは実験室、あんな電撃を喰らってボクってよく生きてたよね」

「ここは治療室、薬が効かないって分かるまでずっと投薬されてたっけ」

「ここはバトルルーム。デュー達のデータ取りに、よくユウヤ君とバトルしたなあ……」  
歩いていくうちに通り過ぎる見慣れた扉。全てがレイの記憶にある。そうして次に見つけたのが、黒焦げになった扉と廊下の一部だ。

「アツハハツ!!ここ、開発室。真崎さんとここから出るときに爆破したんだっけ。あの時の加納、どんな表情してたのかなあ……」

腰に下げた1つのケースを触りながら、レイは感慨深く呟いた。ケースの中身は、バンの新装備『ビームガーター』と共に結城より受領した一体の新しいLBXだ。

「……ただいま」

強固な檻がついた、トイレとベッド、簡易的な鏡と机しかない無骨な部屋……レイの部屋だ。

「ああ、相変わらずこのベッドは硬いなあ……あはは、なんか懐かしいや。あの頃は時間

の感覚だつて無かつたのに」

誰もいないせいかわロツクのかかつていない扉を開け、ベッドに腰かけたレイ。ベッドを触りながら思い出に浸る。

「10年間……お世話になりました。もう、戻る事はないから……本当にありがとう……ありがとう!!」

立ち上がり部屋を出たレイは、扉に向き直り元気よくお礼を言った。

「感動の再会は終わったか不良品」

「ッ!!」

背後から聞こえてくる馴染みのある声。

「加納ッ!!」

ニヤリと笑うのは白の部隊隊長にして、この10年間レイとユウヤを弄り回してきた張本人、加納だ。

「ネズミが研究所内をうろついていると思つたら、ククク、貴様だったとはな。大方シーカーと共にサターンを止めに来たのだろう？」

余裕ぶつた笑みを崩さず、レイを見下している。

「アツハハ!!そんなわけないじゃないか」

「なに？」

「この10年間お世話になつたのは、この部屋だけじゃ無いからねえ……お礼に来ただけさ」

「ふっ……ははははははははッ!!貴様が?………笑わせるなゴミクズが!!貴様のせいで何体の新型が開発中止になつたと思つている!」

「知つた事じゃ無いね。それよりも、お前はここで終わりだよ」

「はっ!!そうだ、貴様がここを去つてからの私の研究成果を見せてやろう」

「研究成果……?」

喜怒哀楽の変化が激しい加納が最後に自信ありげにレイに言った。そして加納が右腕を上げると、後ろから一人の少女が現れた。

「……………」

「女の子？…………ツ!!そのスーツは!？」

見た目的には仙道キヨカと同じくらいだろうか、小学生程の身長の子が以前デザイン変更を求めたCCMSーツを着て虚空を見ている。

「お前…………お前は!!ボクやユウヤ君じゃ飽き足らず…………また人を葉漬けにしたのか!？」

「そうだ。私は貴様と言う完成品のデータを使い、完成されたサイコスキヤニングモーターを搭載した量産品を仕上げた。どうだ?10年も手間をかけた貴様などもういらん。ここには1ヶ月程度で量産化に成功した本当の完成品だ!!」

「この、外道がツ!!」

「なんとも言うがいい!!海道先生の計画が完了した暁には、エターナルサイクラーを使つての世界征服など容易い。しかしその後は?貴様らシーカーのように歯向かう愚

か者共を始末するための最強の兵士ツ!!これこそがその第一号ツ!!」

両腕を開き、勝ち誇ったように叫ぶ加納だが、少女は何も言わない。

「……さない……」

「なんだ?」

「……お前だけは、許さないツ!!」

今までに類を見ない程顔を歪めたレイ。怒りに満ちたその目は加納を凝視している。そんな強烈な視線に少したじろいだのか、少しのけぞった加納は少女に指示を出す。

「やれ、あの不良品を倒し貴様の価値を海道先生に証明しろ」

「……………出撃」

「行くよイプシロン、あの子を……救うツ!!」

加納により投げ込まれたDキューブ、火山ステージに投下された5体のL.B.X。

「え……セイリユウ、ピヤッコ、スザク、ゲンブ……どうして？」

レイの新しいLBXイプシロン。2度に渡って山野淳一郎より託された2枚の設計図をT.O社の高度な施設で作成した、レイのための専用機。とある世界線で、バンの3機目の機体として製作されたことからその性能は折り紙付きだろう。

特徴としては、オレンジのフレイムに青い塗装が施され、頭部に三叉鏃の様な3方向に伸びる角、そして何よりイニシャルである『E』が胸部で輝いている。

右手にはビームの刃の薙刀が両端に付いている槍系武器『イプシロングレイブ』、左手にはビームガンターと同じ原理で強化ダンボールを使用した強固なシールド『イプシロンガンター』を装備している。いや、ビームガンターはイプシロンよりもたらされた技術で作られたと言っていないだろう。

対するは少女のLBX達。カラーチェンジされた四聖獣の4機全てが一人の少女によつて操られている。

「これが、これこそが……四聖獣を超える新たなLBX、『四霊神』の姿だッ!!」  
「四霊神ッ……」



カラー以外は形状、武器など何も変わっていない。しかし、レイは四霊神からの圧を感じているらしい。額から一粒汗が流れ落ちる。

レイと少女は互いに両腕を伸ばし空中ディスプレイを展開、直接的な操作を始めた。

「早く決めないと……あの子の命に関わる!!」

イプシロンが駆ける。マグマをジャンプで躲しながら四霊神へと近づく。

「なんて反応速度、スピード……操作感度だ……流星は師匠の作った機体……」

「やれ」

「……………」

四霊神がそれぞれ散らばった。セイリユウはイプシロンを正面から迎え撃ち、ビヤツコが裏を取る。そしてスザクが中距離から銃を構え、ゲンブはセイリユウのすぐ後ろで両手銃を持って待機している。

「ツ……良い配置だけど、ボク相手には通じないよ」

セイリユウの横薙ぎをイプシロンガーターで弾き、イプシロングレイブで腹部を切る。槍系武器だが薙刀でもあるこの武器は、両端に逆向きで刃があることでトリツキーな戦い方を可能とする。

「意外と硬いツ!？」

「当たり前だ、四霊神は貴様が持ち去った四聖獣より遥かに強化している」

「そんなLBXを4機も使わせたら、この子の脳が持たないはずじゃ!？」

「それがどうした?」

「今なんて…イプシロンツ!!」

加納の言葉に気が逸れた一瞬の隙に、裏を取っていたビヤッコの鉤爪がイプシロンの背中を襲う。レイはすぐイプシロンを復帰させ回し蹴りでビヤッコを吹き飛ばした。しかし待っていたと言わんばかりにスザクからビームのマシンガンがイプシロンを襲うが盾でイプシロンは防ぎ切った。そして必殺の一撃がイプシロンを襲う。

「ヤバっ……避けて!!」

間一髪でイプシロンが地面を蹴り、横に飛ぶ。イプシロンがいた場所には5、6発の弾痕があり地面が破壊されていた。ゲンブのショットガン型両手銃『四霊神ゲンブ』だ。

「威力が高すぎる……なりふり構ってられないって事か」

精神状態がLBXの操作へと直結するこのバトル。加納の言葉と少女の事が気になってるレイと、薬漬けにされ加納の命令を聞くマシーンとなっている少女……どちらが優勢か言うまでもない。

「これは……マズいかも……」

少女を救う勇者は、まだ覚醒しない。

# BRAVER

## 25話

「必殺ファンクション!!」

『アタックファンクション クリムゾンスラッシュ』

炎を纏ったイプシロングレイブが四霊神を纏めて吹き飛ばす。いいところに入ったのか、少しよろけながら立ち上がる4機。

「くっ……」

実を言うと、バトル始まってから2度目の『クリムゾンスラッシュ』なのだ。そのはずだがまだ立ち上がる四霊神に、焦りを加速させるレイ。脳波がブレてイプシロンにダイレクトに伝わっている。

「ごめんねイプシロン、ボクがすっかりしなくちやいけないのに……キミを不安にさせちゃって……」

「チツ……何をしている!! たかがLBX一機、早く仕留めんか!!」

「……………う」

加納の指示で少女が操作を加速させた。

「ツ!!……………絶対助けるから!!」

小さく漏れた少女の呻き、それを耳にしたレイは焦りを振り切り意思を確固たるものにした。

「……………右、上、正面……………後ろ!!」

4体の攻撃を躲し、盾で防ぎ、槍で受け流す。安定した精神から行われる操作はイプシロンの本来の性能を引き出し、強化された四霊神を相手にしても一步も譲らない。

「埒が明かない!!サイコスキャンニングモードを使え!!」

「了解……………サイコスキャンニングモード……………あう!？」

『『『サイコスキャンニングモード』』』』

「ああああああ!!!」

「なんて事を……………!!!」

薄い紫に輝く四霊神。少女は4機分の負荷を一身に背負いその苦痛で悶えている。

「こんな幼い子に4機分のサイコスキャンニングモードを使わせるなんて……………死んでしま  
う!!」

「それがどうした。1ヶ月でこの完成度……………変わりなど幾らでも用意できるからなあ  
!!」

「神にでもなつたつもり?」

「神……………神だと?ふははははは!!いや、この世界の神には海堂先生こそふさわしい!!  
私はその隣に立つ事ができればそれでいいのだ」

話を通じない、レイは齒軋りして淡く輝く四霊神を見据える。

刹那、ビヤッコが消えた。

「ッ、はや!?!」

気がつけば後ろに回り込んでいたビヤッコにギリギリ対応したイプシロン、そこへ潜り込むゲンブの両手銃の殴打によって吹き飛んだ。

「くそっ……」

空中で体勢を立て直したイプシロンだが、スザクがマシンガンで追撃してきた。盾で防ぎ切るのが威力が高く、空中であるため踏ん張る事が出来ずまたも体勢を崩してしまふ。落下地点ではセイリユウが待機しており、そのまま落ちれば斬られるだろうことが目に見える。

「いたい……いたいよう……」

「……………イプシロン、サイコスキャニングモードッ!!」

『サイコスキャニングモード』

イプシロンがライトグリーンに輝く。

(ユウヤ君の時みたいに……また共鳴があるかと思っただけ、これならなんとかかなりそ  
うだ)

「ほう？そのLBXでも使えたか。しかしそれも今や旧式、改良した私のサイコスキャ  
ニングモードには劣る代物だあ!!」

「うるさい!!」

(マグマに落とせば……ダメージはなくとも動きは鈍くなるはず)

セイリユウが落下してくるイプシロンに合わせ剣を突き出す。イプシロンは空中で  
体を捻りセイリユウの横に着地すると、盾でセイリユウを突き飛ばしマグマ溜まりへと  
突き落とした。

「まず一機ツ!!」



イプシロンはオーラが尾を引くほどのスピードでゲンブへと近づくとイプシロングレイブで左腕を切断、蹴り飛ばし火山より流れるマグマに放り込む。

「次はスザク」

先ほどから何度もマシンガンでこちらを牽制しようとするスザクは後退しながらイプシロンに射撃を続けるが、性能差には勝てず接近を許し足を切断され動きを止められた。

「最後」

不用意に近づいてきたビヤッコの攻撃を避けたイプシロンが素早く首、腹、腰に槍を打ち込み動きを制限した。

「バカなッ!? 四霊神が……」

「こんなはこの子が苦しんでるのに……サイコスキャニングモードでさらに苦痛を与え

たりして……まともにLBXを操れるわけがないじゃないか!! 1ヶ月で仕上げた? それはどうした、こっちは10年仕込みなんだよ加納。お前はここで終わらせる!!」

「終わらせるだど? ふざけるな、早く奴を仕留めろ」

「あ……………う……………アア!!」

少女が頭を押さえながらも、片腕を大きく振る。すると、マグマに落ちたはずのセイリュウとゲンブが復帰し、動けないスザクとビヤッコの側に降り立つ。どちらも装甲は無事だが、コアスケルトンにマグマのダメージが入ったのか動きが鈍い。

「ボクが価値を示したデータのせいで、キミがこんな事になった……………ボクの責任……………キミを救うツ!!」

『ブレイバーモード 重複発動』

レイの宣言と共に、イプシロンのカメラアイが輝く。機体から白銀のオーラが溢れイプシロンを染め上げた。サイコスキニングモードのオーラにブレイバーモードの輝きが混ざったその姿は神々しさすら感じる。

「こんなバトル、終わらせよう」

「くっ……やれ」

「アアアアアア!!!」

無理矢理四霊神を動かした少女は、足の無いスザク以外の3機をイプシロンに向かわせた。

「遅い」

気づけばイプシロングレイブがゲンブとビヤツコの横腹に同時に刺さっている。そのまま二機は爆発した。

「なにが起こって!?!」

「覚えておけ加納……ボクの名前は『レイ』、お前を潰すLBXは『イプシロン』だ!! 必殺フアンクション!!」

『アタックファンクション グロリアスレイ』

突き出したイプシロングレイドにエネルギーが収束され白銀の槍となる。そのままジャンプしたイプシロンが槍を高く掲げるとさらにエネルギーを纏った。そしてイプシロンは槍を振るう。すると白銀のエネルギーが射出されセイリユウとスザクを襲った。

「回避しろ!!」

「アア……あ……」

「なにをしている!?!」

「チェックメイトだよ」

爆発。必殺ファンクションをもろに喰らった2機はなす術なくブレイクオーバーとなった。戦闘の終了した火山に立っているイプシロンは特殊モードを解除し、レイの手に戻った。Dキューブも元の形状に戻り、地面には四霊神の残骸のみが残っている。

「ば……かな……私の……技術の結晶が……」

顔を押しえうろたえる加納は、まだ敗北を信じられない様子だ。少女は敗北によって気絶し、地面に倒れている。その顔は何処か安心したようだ。

そしてレイはイプシロンをポーチに戻すと、加納へと近づいた。

「クソツ……クソ……!!ありえない!!この私の作品が負けるなど!!あつてはならない……あつてはならないんだ!!」

「いい加減認めろよ……お前の負けだ加納」

「不良品如きが……お前をそこまで強くしたのは誰だと思っっているんだ!!」

レイが近づくとたびに加納が下がる。

トンツ……

「ツ!?!」

「逃げられない……逃がさない。お前だけは……ここで……殺す」

やがて、壁にぶつかった加納はレイの圧を恐れたのか座り込んだ。

「殺す……だど？ふん、たかが子供、それも10年も筋力を鍛えたことがない貴様に出来るわけが……なっ!？」

「出来るよ……文明の利器つて便利だよね。こんなか弱い子供でも……人を殺せるんだから」

言葉の途中で驚く加納、それもそのはず。レイが取り出したのは『拳銃』だったからだ。

「どこで……それを……」

「親切などどこかの伝説のLBXプレイヤーさんがくれたんだ。後で感想を聞かせろつて言うお願いと一緒にね」

「ッ……」

チャキツ……と、銃口が加納へと持っていかれ加納は息を飲む。彼の一挙手一投足が命へと関わるからだ。

「10年……ああ10年だよ……ボクの事はこの際いいんだ。お前の言う通り、ボクはここまで成長出来た。偶々、薬が効かなかったから正気でいられた……だからこうなった。でもユウヤ君とその子は違う!!感情を壊され、命令を聞くだけの人形にされた!!(檜山さんの言う……) 未来ある子どもにした事の罪は重いッ!!」

全力で加納に怒鳴るレイは、何を言っても止まらないように見える。

「私を殺すのか!?!私の技術が失われる事は、世界の損失につながるのだぞ!!」

「人を改造して兵士に仕立て上げるような技術なんていらねえ!!お前なんか居るから、ユウヤ君はまだ目を覚まさないんだ……こんなじゃ……ボクはいつもみたいに笑っていらねえんだよ。新しい世界とやらに、お前はいらねえ!!」

「人殺しだぞ?!私を殺せば、貴様は犯罪者として名を馳せる事になる。貴様のお熱なしBXも出来なくなるだろうなあ!!」

「負け惜しみはよしなよ。お前が死んだ後の事なんて、その時考えるさ。今は、このどうしようもない気持ち……お前にぶつけたくて仕方ないんだ。檜山さん……人は獣にあらず、人は神にあらず。でも、人を辞めたコイツは……獣以下だよね」

「くっ……」

何を言っても無駄と分かったのか、加納は唸るばかりで何も言わない、いや言えない。

「ああ……冥土の土産？つて言うんだっけ。ついでだから見せてあげるよ。これ、海道ジン君が海道せんせーと会話した時にスキャンしたんだって」

「海道先生を……これは!？」

レイは加納に拳銃を突き付けたまま、CCMに保存した画像をみせた。そこには、海道義光の写真が写っておりその骨格が金属の……アンドロイドである事実が映っていた

「嘘だツ!!では本物の海道先生はどこに居ると言うのだ!？」

「死んだよ。この拳銃で」

「なにい!？」

「本当かは知らないけど、そうじゃないと檜山さんが拳銃なんか持つてるわけないし……嬉しいでしょ。憧れの神様が死んだ武器で死ぬるんだから。まあ、ボクもこんなじゃ獣以下さ。一緒に地獄に落ちようぜ」



レイの顔に慈悲はない。加納の命は風前の灯のようだ。

「遺言？を聞いてあげるよ」

「……………海道先生、万歳ッ!!」

「……………可哀想な人。さよなら、死ね」

そして、銃声が響き少女の服を血で染め上げた。

「アツハハ♪…………アツハハハハハハハハハハッ!!!」

## 真実

### 26話

時は、レイが少女とバトルをしている頃まで遡る。

「さっきのフェアリー、防衛に回せるほど量産されているなんてね」

「ああ、しかもあの強さ……早く対処しないとまずいな……」

司令室を目指しているバン達一行では、少し前に現れたAXシリーズのフェアリーについて話していた。

「そういえば、レイってこんなところで10年も過ごしてたのよね。一体何してたのかしらっ？」

「！！！！」

アミのふとした疑問を聞いたジン、拓也、里奈に動揺が走る。ここまでイノベーターと戦ってきたことで普通の子供よりは成熟しているとはいえ、中学一年生に聞かせるような話ではない。

「ジンはイノベーターに居たんだろ？なんか知ってるんじゃないか」

「……………僕からは話せない。彼女から聞いたほうがいい」

「なんでだよー」

カズヤがジンに聞くが、ジンは少し冷や汗を掻きながら目を逸らした。

「拓也さん、レイってジンでも話せないような生活だったんですか？」

「……………ああ、ありえない……………いやあってはならないような生活だ」

バン達は少し不満そうにしながらも、虎の尾を踏むのは気がひけるのかそれ以上聞く事はなかった。

「ひとつだけ、言えることがある」

「ジン、それは……?」

少し気ますぐなくなった雰囲気の中でジンが口を開いた。

「彼女はあの生活を一部、楽しんでいた。LBXがあつたからだ。それを後悔したりしないだろう」

「「……………」」

ジンがそう言うと同時に、彼らは司令室へと到着した。

「誰もいないようだな」

「すぐサターンのコントロールに介入しましょう」

拓也と里奈が司令室からプログラムを流し込みサターンを止めようとする。しかし

……

『SYSTEM LOCK』

「どう言うことだ……?」

モニター全てが接続できず、謎の状況に陥った。司令室の出入口となる扉も完全にロックされてしまい閉じ込められてしまう。

どうかしようとして色々な手段を試すがどれも無駄。そうこうしているうちに、正面の最も大きなスクリーンに檜山の姿が映る。

『気に入ってもらえたかな?』

「レックス!」

『俺からの細やかなプレゼントだ……レイはいないようだが、全てが終わるまで特等席で世界が変わる瞬間を見ている』

「レックス……何言ってるの?」

『ふっ……まだ気づかないのか? お前達は、俺のシナリオどおりに動いていただけだ』  
「「「「ツ!!」」」」」

檜山の言葉に驚いた6人、檜山が何を言っているのかまだ分からない。

『俺はプラチナカプセルとメタナスGXを使って、シーカーとイノベーターを戦わせた。世界の命運とやらを巡って奔走するお前らの姿は、なかなか面白かったぜ?』

「まさか……お爺さまを殺してアンドロイドを操っていたのは!」

『ああ、俺だ』

「ツ……お爺さま……」

悪びれもなく宣言した檜山の言葉に、ジンは冷や汗を掻く。

この会話の間にも、サターン発射シークエンスは続いており残り30秒もない。

「檜山、何故こんなことを!!」

『見てみたかったのさ、未来を担う子どもを実験台に使うような奴らがいるこの世界に、命をかける価値があるかどうかを……しかし、やはり無かった。だから全てを壊してやり直す。そのきっかけを、俺が作る』

檜山が話し終えるのと同時に、カウントが0となりサターンが発射されてしまった。

「檜山……一体何をするつもりなんだ!!」

『知ってどうする……今のお前らには何も出来ないだろう?』  
「違う!!そんな事はない!!」

震えるほど強く拳を握りしめているバンが感情のままに叫ぶ。  
しかし檜山はそんなバンを冷ややかな目で見ながら言った。

『バン、何が出来ると言うんだ』

「俺は……最後まで諦めない!!」

『全て手遅れだ、最後までそこで大人しくしてろ』

そこまでバンが言い切ると、突然ロックされているはずの司令室の扉が開いた。

「父さん!!」

入ってきたのはバンの父親にしてLBXの生みの親である山野淳一郎博士。そして

……

「あ、レイ……ッ!？」

「はあ……はあ……キツツい………」

いつものCCMグローブをつけたまま、少女をおぶっているレイ。しかしレイの白かったパーカーは赤く染まりただ事ではないように見える。息が切れているのは、少女を背負ったままここまでできたからだろう。

『やはり現れましたか、山野博士……そしてレイ、お前の復讐は終わったのか?』  
「復讐ですって!？」

檜山の言葉に、里奈がレイを凝視した。どうやら信じられないようだ。

「ちよつと、息くらい……整えさせてよ……ふう。うん、ちゃんと終わった。終わらせてきた」

『どんな気分だ?』

「……安心したね。これ以上、ボクみたいな人が作られる事は無いから。この子で最後だよ」



『ふっ……そうか』

檜山は面白かったのか少し笑いながら納得の言葉を口にした。

周りの全員が呆気にとられる中、一区切り付いたと判断したい山野博士が話を始める。

「檜山君、こんなバカな事は辞めるんだ」

『ほう……その様子だと気づいたようですね。俺の計画に』

「ハッキングした情報を解析し、サターンの到着地点を計算した。サターンの到着目標はNシティだ」

「Nシティ……？」

続いて入ってきたのは八神。どうやら迎えにきたらしい。

「そうだ、Nシティでは現在、サミットが開催されている。そこにサターンを落とす事で、世界中のリーダー達を抹殺するつもりなのだ、彼は……」

「！！！！」

『ご名答、さすがは山野博士』

「なるほどね……檜山さん、世紀の大犯罪者ってそう言う事だったんだ」

山野博士からもたらされた衝撃の事実全員が息を呑む中、レイは納得したように肯いた。ブルーキャッツでの会話を思い出したのだ。

「まさか君がエターナルサイクラーの技術を世界の破壊に使おうとするとはな……教えただけだ。新たなテクノロジーに携わる者ほど……」

『人間の良心を忘れてはいけない、ですか……懐かしいですね』

空を見上げた檜山。おそらく、今の言葉を教わった時のことを思い出したのだろう。

『ですが俺には良心はおろか、人間の心なんて残ってはいないんですよ』

「ツ……嘘つき」

『俺は人間の心を捨てて、モンスターになったんです。18年前のあの出来事から』

「一体何があったんだよ、レックス!!」

『おっと、ここからは俺も参加させてもらおうか』

「お前は……ッ!!」

画面の向こうで別の男の声が聞こえた。檜山が画面を傾けると、どこで何をしているのか今まで分からなかった真崎がいた。部下だったはずの真崎が檜山の隣にいる事実には八神は目を見開く。

『すみません八神さん、辞表はエクリップスに置いてきました。今日限りで、アンタの部下を辞めます』

「なん……だと……?」

「あーそうだ、聞きたいことあったんだった檜山さん。いつから真崎さんと檜山さんって知り合いだったの?」

『……コイツに聞いたのか?』

「うん」

「何を言っているんだレイ、真崎はずっと私の……」

話についていけない八神は途中で口を閉ざした。話を聞けばわかるからだ。

檜山は語り始めた。

18年前、次世代エネルギー研究所で大規模な爆発があった。多数の被害者が出たこの事故について、政府は管理会社の管理不足だと発表し全ての責任を、当時の責任者だった檜山と真崎の父親に押しつけた。

親同士の付き合いもあり度々会うことがあった檜山と真崎はすぐに仲良くなりよく一緒に遊ぶことが多かった。『幼馴染』これが2人の関係だ。

しかし、世間から非難され続けた檜山の家族はそのことから逃げるためバラバラになるほかなかつたらしい。しかし真崎の父親は事故の時にそのまま亡くなり、母親とともに何処かへ行ったそうだ。

『今家族がどこにいるのか知らないし、生きているのかも分からん。だが、コイツは違った』

檜山は親指で真崎を指した。真崎は一步前に出て自ら語る。

『俺の母親は、俺の目の前で殺された』

「「「「ツツツツ!!」」」」

『正確には、政府とつるんでいた海道義光一派の刺客が俺たちの住む家にやってきたことに気づいた母さんが、俺をクローゼットに隠した。そして、俺が見ていることに気づいていなかった男は拳銃で母さんを撃ち殺した後、隠蔽工作で家を燃やして出て行った。幸い俺は裏口からこっそり抜け出したから無事だったけどな。恐らく、事故の真実を知っていると思われたんだろうよ』

「真崎さん……」

『俺は決意した。復讐を、この手で海道義光を殺してやると……まあ、結局やったのは蓮だったけどな。』

そして、何年か過ぎた後……世間から事故の記憶が薄れた頃、俺たちは合流した。計画を始めるために』

語り終えた真崎は、もう用はないと下がった。残りは檜山に任せるようだ。

『全ての元凶は海道……しかし、計画を進める中で俺たちはさらなる真実に気づいた

……奴は、世界の支配者達のほんの一部に過ぎなかった、ということに』  
「なんの話だ……?」

『つまり、この世界は一部の権力者の掌に動かされているんだ。政治、経済、技術開発、そして……戦争すらも奴らが作り出し管理している。強大な力によつて戦争を管理し私腹を肥やす者たち……そして、ソイツ等よりもさらに強大な力を手に入れようとした海道が取つた新たな手段、それが……』

「レイ君のサイコスキャニングモード、か」  
「えっ……?……ボク?」

檜山の言葉を、山野博士が受け継いだ。予想外の言葉に、愛用しているレイが驚き疑問を浮かべた。

『流石博士。ひっそりと進めていたサイコスキャニングモードを用いたプロジェクト……普通に使うよりもさらに質の高い兵器を手に入れるために考え出されたのが、人と機械の境界を壊す事だった。灰原ユウヤ、レイ、その少女は……その計画の被害者であり被験者……兵器の試作品という事だ。幼い子供を使ったのは、ある程度は従わせやすかったからだろう』

「……………ボク達が、兵器？」

『ああ、そういう事になる。まあ海道の計画が潰えた事で、お前等は解放されたも同然だがな』

「えつと……………ありがとう、でいいのかな？」

『知らん』

そんな無責任な……………、ここの中でレイがそう叫ぶがもちろん届かない。

（つてことは、加納も海道せんせーにうまく乗せられて研究してたつてこと？あーあー……………報われないねえ……………地獄でザマア見るカス）

どうやら兵器として扱われていたことはあまり気にしていないらしいレイ。拓也などの大人達は同情的な視線をレイに向けているが彼女本人は気づいていない。子供達はジンを除いてスケールの大きさに圧倒されている。

『このミッションが終わり次第、俺は世界に向けてメッセージを送る。じゃあな』

「檜山!!」

そして映像が消え、モニターには砂嵐しか残らない。完全に切断されたようだ。

「行こう拓也さん。レックスを止めないと」

「その通りだ」

「……行くぞ!!」

拓也の指示で全員が走る。しかしレイだけは動かない。

「レイ、お前も早く来い!!」

「……………うん」

「レックスを止めなきゃいけないんだ、レイも早く!!」

仕方ない、と言わんばかりの表情のレイは皆に続くように走り出した。



## DAYBREAK FRONTLINE

## 27話

コンコン

「どうぞ〜」

「失礼するよレイ君」

「師匠、ちゃんとお話するのは久しぶりですね」

「元氣そう……では無いが、五体満足で何よりだ」

1人、思考を続けていたレイの元に訪れたのはLBXの生みの親である山野淳一郎博士。その手には修理を終えたイプシロンもあった。

「このイプシロンが君の力になったようで、私も嬉しいよ」

「ブレイバー……さつき調べました。ボクにはとても似合うような言葉じゃありません

ん」

「いいや。君は間違いなく、灰原ユウヤ君にとってもあの少女にとっても、自分を救ってくれる勇者だった。それは謙遜するべきでないぞ」

「……………」

黙りこむレイに、山野博士はイプシロンを渡した。

「イプシロンは、本当はアキレス、オーデインと続くバンの3機目の機体として設計していた。もちろん機体性能はオーデインに引けを取らないし、その分癖があった」

「ッ!!」

「しかし、君は使いこなしてくれた。それは間違いなく君がイプシロンを信頼し、イプシロンもまた君を選んだからだ」と私は考えている」

「事実と結果を追い求める研究者の言葉じゃ無いですね。それにボクはやはりイプシロンに相応しくありません。これ以上はもう……………」

「時に君は、『日の出』と言うものを見たことがあるかね?」

「……………日の出?」

レイは山野博士の言葉に、想像力を働かせるが基本太陽の当たらない室内でしか生活したことの無いレイには見当がつかなかった。

「夜明けの際に水平線に現れる太陽はとても美しい。オレンジ色に輝く太陽は雲の形を含めるとさらに仰々しく、美しくなる。イノベーター研究所に幽閉されてからはしばらく見る事のなかった景色だよ」

「はあ……？」

レイは山野博士が何を言いたいのか理解できず困った顔をしている。

「ここしばらく身を潜めていた私はまだ日の出を見ていなくてね。久しぶりに見てみたくなったのだよ。それにここは雲の上だ。遮るものが一切ないからきつと、レイ君の目にもそれは美しく見えるだろう」

「へえ……」

レイの口元が僅かに緩む。自分が師匠と呼ぶほどに尊敬する山野博士がそこまで言う『日の出』、生来、まともに『綺麗』、『美しい』といったものを知らないレイは少し興

味が出たようだ。それをみた山野博士も計画通りと言わんばかりの表情でレイを眺めている。

「見たくなっただろう?」

「うん、ちよつと面白そう……でも師匠、分かっている……分かっているんです。そのために、戦えて、言うんでしよう?」

「ああ」

急に表情を戻したレイの言葉に山野博士は同意した。色々遠回しにした彼だが、言いたいことはその通りだったからだ。

「これから行われる作戦は『オペレーション デイブレイク』。私達の戦いが終わる頃には、夜明けを迎え日の出が見られるだろう。例えそれが、檜山君の計画を阻止しようと、出来なかつたら。君も分かっているだろうか? 君にとっては世界のリーダー達などどうでも良いかもしれないがサターンほどの質量と、映像で見た大量のフェアリーに搭載されたメガトン級爆弾ドングリの爆発によるNシティの被害予測が、どれだけのものになるのかということ。」

「ツ……」

A国の中でも特に大きい都市。もちろんそこに住む人々の数は計り知れない。檜山の計画でどれだけ多くの人が命を落とすのか、それは頭の良いレイには痛いほど理解できている。

「無論、君がいなくても作戦は実行する。しかし君がいればこの作戦の成功確率は飛躍的に上がる。それに君には、話をしなくてはいけない人物がいるだろう？」

「……真崎さん」

「そうだ。君は何年彼に世話になった？君と最も接してきたのは彼だ。そんな真崎君が、今檜山君と共にサターンに乗り込んでいられる。『レイが行かないのであれば、私が行く』と、八神君も言っていたよ」

「……………はあ」

山野博士の説得に、レイは大きなため息をついた。山野博士はそれを見て語るのをやめて黙った。レイの反応を待っているのだろう。そして、レイは徐にイプシロンを目の高さに持っていく、機体を弄り出した。

「四霊神達につけられた傷やマグマのダメージがまるでなかったみたいに直ってる。それに関節の動きがより滑らかに、少し無駄のあった摩擦が無くなって今まで以上に滑らかな動きが期待出来るね。それにデータを見る限り、サイコスキヤニングモードとブレイバーモードの重複発動による負荷もほとんど無くなって実質、デメリット無しだ。この短時間で修理……いや、アップデートとも言えるほどのチューニングをするなんて……」

「よく分かったな。どうやら、さらに腕を上げたようだ」

山野博士がイプシロンに施した事を完全に見抜いたレイに、山野博士はどうやらご満悦のようだ。

「サイコスキヤニングモードを前提にしたイプシロン。この子はもう……完全にボクのLBXになった。そう言う事で良いんですよね師匠？」

「無論だ。今となつてはイプシロンが一番似合うのはレイ君、君しかいない」

「……ここまでしてもらって何もお礼せずただ受け取るなんて出来ないよね、イプシロン」

「レイ君……」

「ありがとうございます。山野博士。ボクのLBXを直してくれて」

「ふっ、礼には及ばないとも。さあ、行きたまえ」

「はい!!」

そう言ってレイは部屋を出て駆け出した。恐らく司令室、八神の居るところだろう。作戦への参加を伝えるために。

「レイ君にああ言った手前、私もやるべき事を果たさなくてはな（LBXの発明によって起こったことの贖罪のためにも）」

山野博士は再び白衣のポケットに手を入れ、部屋を出た。

〈数十分後〉

「わあく!!これがコントローラポッド!!ねえねえ、あとで分解して良いかな!?!」  
「やめてくれ……一応我がタイニーオービット社の技術の結晶だ」

司令室にて騒いでいるのはもちろんレイ。全天周囲方モニターに映るLBXの視界や、レバーやペダルを用いての操作、さらにはCCMを使用するよりも圧倒的に広い操作範囲を可能とするコントローラポッドに興味津々のようだ。

「ちよつとレイ!!調子が戻ったのは良いけど、もう少し緊張感を……って、レイには無駄よね」

「アツハハ!!アミちゃんもやつとボクの事が分かってきたんだね。うんうん、ボク嬉しいよ♪」

「つ、疲れる……」

気怠げそうなアミに絡むレイ、そして後方では男子達がそれを眺めていた。

「レイ君、元気そうで何よりだ」

「そうだなジン、俺達も頑張ろう」

「おいおい、俺達のことも忘れんなよ」



「おいお前、まさか俺達つてのに俺を加えてねえだろうなあ？」

「ああん？一度は俺の舎弟になつたくせに舐めた口聞くんじゃねえよ」

「……………ああ!？」

「郷田も仙道も作戦前くらい仲良くしろよ!!」

「出来るか!!」

「コイツらッ、めんどくせえ……」

バンとジンは平和そうだが、無謀にも郷田と仙道のいがみ合いを仲裁しようとしたカズヤに飛び火してしまい面倒なことになっている。

「LBXの準備ができた。出撃の準備をしろ!」

今回の作戦では、特殊なブースターや、防御装備が必要となる。それを待っていたLBXプレイヤー達だが、準備ができたらしい。八神が号令をかけ、次々にコントロールポッドへと乗り込んでいった。

「コントロールポッド起動!!」

レイがCCMをコントロールポッドに差し込み、起動させた。それと同時にモニターにレイの駆るLBXの視界が映る。

「お……お……おお~~~~~!!!」

「うるせえ!!」

テンションが振り切れたレイが叫ぶ。声が大きすぎたのか隣のポッドにいる仙道がわざわざ通信で文句を言ってきたが今のレイには何も聞こえない。ただ純粹にコントロールポッドに感動しているのである。

「よし!!行こっかトロイ!!」

レイの呼びかけにトロイがモノアイの点灯で応える。今回、レイが降下に使用するのは火力制圧が得意なトロイだ。デスバレルから放たれる大量の弾丸に貫けないものはない。

「トロイ、出…撃ッ!!」

レイが両手のレバーを倒し、ブースターを吹かしてトロイを出撃させた。そして視界に広がるのは暗闇の中に映る大空や雲。

「これがトロイから見ると世界ッ!!いい…いいよトロイ!!アツハハ!!空と雲の間を飛ぶなんて、最高じゃないかトロイ!!」

縦横無尽に大空を駆け回るトロイ。レイだけはものすごく楽しそうにトロイを操作しており初めてながらもその動きは熟達したそれに見える。LBX操作の才能はやはり抜きん出ているといつてもいいだろう。

『対空砲撃くるぞ!!』

八神からの号令で、レイを含む全LBXが回避行動に移った。

「3番隊、全機トロイ後方に直列に並ぶように。少しでもズレたら落ちると思って」

『ラジャー!!』

先ほどとは一転、真面目な声音で同部隊員に命令したレイは、デスバレルを構え発射。対空砲撃を撃ち落とすという荒技も荒技で被害を減らしている。後ろに構えるグラディエーターやウオーリアーは盾を構えてなんとか持ち堪えている。

「アマゾネスは左にバレルロール、ブルド改少し上昇!!」

『了解!!』

「クイーン降下、マッドドックとナズーはそのまま直進!!」

『『おうよ!!』』

『ありがとよレイ!! テメエら、気張っていくぞお!!』

郷田が先陣を切つて前に出る、しかし被弾していないのは一重に剛田の操縦技術だろう。ミカやリュウ達に指示を出す余裕があるのはもちろんレイだ。彼らもおかげで被弾を減らしている。

『7番隊全滅、9番隊被害甚大!!』

味方機が次々に撃墜されていく中、更なる悪夢がシーカーを襲う。

『サターン外周部に高エネルギー反応!!』

『フェンスがくるぞ!!全機、アンブレラ展開!!』

「早くないッ!?トロイ、アンブレラ展開ッ!!」

サターンの強力な対空兵器である『フェンス』。エネルギー兵器による全方位への砲撃に耐える手段はLBXにはない。しかし、強化ダンボールの開発者である霧島がT.O社と協力してフェンスに対抗できるようになったのが、強化ダンボールの繊維をエネルギー状に展開する防衛兵装、『アンブレラ』だ。無論、急造品であるため確実にフェンスに耐えられるわけではない。

シーカーのLBXの前面にライトグリーンのエネルギーシールドが展開された瞬間、サターンから赤い光が放たれた。

『ぎゃあああああ?!?!』

『なんつー威力だ!?!』

『うわっ!!』

「はっ!!?いつのまに……くう!!気合いで耐えてよトロイツ!!」

気がつけば、子供達以外のLBXはほぼ全て大破している。フェンスが止まってから  
の被害報告は止むことがなく、残りのLBXの数も少ない。

「か、掠った時はやられたと思っただけ……」

『ツ!!サターン後方にLBXの反応、その数約50機!!デクーカスタム砲戦型の模様で  
す!!』

『なんだと!!砲戦型にそこまでの飛行能力は……真崎かツ!!』  
「真崎さんツ!!」

フェンスを抜けたと思えば新たにやってくるデクーの大群。残りブースター容量も  
少なくなり、この状態ではエネルギー切れでの落下や撃墜の未来しか見えない。

「……仕方ない、か。オーデイン、ゼノン、パンドラ、フェンリル、ハカイオー絶斗、  
ナイトメアは先に進んで。ミカちゃん、リュウ君、他の3人も、覚悟決めてくれる?」

『……郷田さんのため。やる』

『うう……アミちゃんが無事にいけるように、やるしかないよなあ!!』

『『リーダー、後は頼みましたッ!!』』

トロイ、アマゾネス、ブルド改、クイーン、マッドドッグ、ナズーがオーデイーン達を遮るようにデクーとの間に展開。射撃装備を構えた。

『レイ!!皆!!』

『お前ら……頼むぞ!!』

『チツ……おいレイ!!お前のトロイは俺が倒す。やられるんじやねえぞ!!』

『ダイキ君……アツハハ!!ここは任せて、先に行けつてね♪』

『レイ……お前が相手でも容赦はしないぞ』

『ツ……真崎さん。アツハハ!!さあて……全機、迎撃開始!!一機たりとも逃すんじやな

いよ!!』

『『『『『『『『『』』』』』』』』

## 予定外の空中戦

28話

「各機散開、オーデイン達には絶対に近づけさないで!!……ギンジ君は頑張れ」  
「そんな無責任な!」

両腕がクローということもあり、遠距離攻撃が出来ないマッドドッグには難しい戦場だ。

『おいおい、あんなの勝てんのかよ……』

『リーダー達を先に行かせさえすれば良いんだよ!! 気張りな』

『砲戦型はミサイルを装備している。一撃でも当たれば終わりだぞ!!』

「まあ、そうだよねえ」



八神からの通信でレイ達に緊張が走る。

「トロイ、射撃開始」

レイがボタンを押すと同時にデスバレルが稼働、砲戦型へ向けて射撃を始めた。大量の弾丸が砲戦型を襲い次々に爆破させていく。どうやらトロイの火力の前では砲戦型の装甲や分厚いシールドも意味をなさないうようだ。

「この程度で諦めるとでも思ったのかな……真崎さん」

「!!!!!!!!  
!!!!!!」

圧倒的な暴力を前に、バン達を守らんと前線を維持するメンバーは震えた。レイがいれば大丈夫。そう思わされたメンバーは果敢に砲戦型へと突撃を開始した。

『うわあああああ!!!』

トロイの右前方でリュウのブルド改が爆発した。

「気をつけてって言われたのに!？」

速攻で撃破されたリユウに驚きながらも、レイはトロイのブースターをさらに吹かせ敵へと肉薄していく。

「はいじゃあ仇一丁!!」

ブルド改を撃破した砲戦型を殴り飛ばし撃破したトロイ。そして迫り来るミサイル2発を回避した後離脱した。

『ごめんレイ、やられた!!』

『ごつちも……』

通信が入りリコとミカも撃破されたことが伝わる。

「結構やるじゃん……!!」

『レイ、あまり無茶な機動はやめるんだ。燃料はあまり多くないぞ!』  
「無茶しなきやこつちがやられるんだよね!!」

八神からの注意を聞かず、レイはさらに加速しながら射撃をしている。しかし、

「おわっ!」

急にトロイ全体が回転した。普段すっかり脚部を固定して射撃をしているため反動というものが大きい事を忘れていたのだ。

『レイ!?!』

「そういえばここ空だった……えっと、こうだね……ッ!!」

すぐに体制を立て直したレイだったがその隙を逃さんとばかりに数機の砲戦型に囲まれてしまっていた。

「……………これは流石に、ヤバそう?」

『やらせねえよ!!』

『舐めるなでござす!!』

「ナズーとマッドドッグ!!」

通信と共にトロイの目の前に飛び込んできたマッドドッグとナズー、2体は推進力そのままに砲戦型へと体当たりをしてそのまま落下していった。

「何やってるのさ!!」

『お前が残った方が良いに決まってるんだろ』

『悔いなしでござす』

「ツ……君達……次ツ!!」

レイはすぐに意識を切り替え、次の砲戦型へと照準を向ける。

「一機でも多く、一機でも早くツ!!」

レイに目をつけられたのが運の尽き。本気になったトロイを止められるはずもなく、

新たに5機の砲戦型が爆発四散した。



「おいおい、アイツマジかよ……」

サターンのコントロールルームにて、1人の男がモニターを見ながら苦笑いしている。真崎だ。

「次のプログラムつくらねえとな……」

そう言うと真崎はキーボードを高速で打ち始めた。今この瞬間に、砲戦型への命令を書き換えているらしい。

「レイの奴、動き変わりやがった。ありや本気で潰しにきてるな……たくつ、流石に空で

抑えるのは無理か」

「仕方ないだろう。その程度で止まるような奴らじゃないさ」

「蓮……お前若干楽しんでるだろ」

「まあな」

隣から話しかけてきたのは今回の事件の首謀者、檜山蓮。通称レックス。幼馴染であるこの2人は同じ場所からシーカーを迎え撃っている。

「どうせバン達は降りてくるだろう。トロイもおそらく燃料切れで墜落するだろうから放っておけばいいさ」

「いいや、ダメだな」

「ほう？」

「鬼神の力……アイツには全く見せたことがないからな」

「お前も楽しんでるな」

2人は笑いながらモニターを見据えている。とても犯罪者とは思えない。

「鬼神VS戦姫か」

「ああ？戦姫……？」

「知らないのか？アルテミスでレイにつけられた二つ名だ」

「アイツが姫つて柄かよ。いいじゃねえか。俄然、楽しくなってきた」

真崎が言い終わると同時にエンターキーを押し、新たな命令を残った砲戦型に送った。

「花火の時間だ」



『レイ、バン達がサターンの着艦に成功した!!後はバン達に任せて帰還してくれ!!』

「いや……ちよつと無理そうかなあ……」

『何があつた?』

「アハハ……真崎さん、覚えてろよお!!」

レイが何やら叫びながら機体を操作している。何があつたかのかと思ひ八神がバン達からモニターを移せばトロイの周囲で立て続けに起こる爆発の数々。砲戦型がトロイに接近し自爆をしているのだ。

「意地でもボクに着艦させたくないみたいだね!？」

今のところギリギリで躲すか撃ち落とすかで防いでいるがあからさまに時間稼ぎをされている。このままでは燃料切れで海に真つ逆さまだ。

『おいコラ!!レイはいるか!?!』

「ハンゾウ君?なにさ、今ちよつと忙しいんだけど……」

急に郷田から通信が入った。何やら怒っているようで冷や汗をかいているように見える。

『なんで敵の防衛にトロイがいやがるんだよ!!さつきから弾幕のせいで動けねえし近寄れねえ!!』



「え、トロイ量産されたの？やるじゃん神谷重工。流石だね」  
『敵褒めてんじゃねえよ!!』

どうやら侵入経路の防衛に量産されたトロイが使われているらしい。程なくしてバ  
ン達からも同じような報告があつた。

「アツハハ!!教えてあげようハンゾウ君。トロイはね、もともとインビットと同じよう  
に警備用の自立型LBXとして扱われる予定だったのさ」

『なんだと?つてこたあ、まだまだたくさんいるつてことか』

「多分ね。まっ、頑張りたまえよ諸君。ボクより弱いんだから余裕余裕♪」

『他人事みたいに言いやがって…』

実際にはあまり受け答えする余裕がないだけなのだが、殿を務めている以上無意味に  
心配させないと虚勢を張っているだけだ。

そして、ついにその時はやってきた。

「え、ちよまつ、うわああああああ  
!!!!!!」  
『レイ? どうした!!』

レイが急に叫びだした。あまりのことに八神が確認を取ろうとするがレイの叫び声によって届いていない。

『八神さんこれ!!』

『くっ!!やはりもたなかったか!!』

真野が八神にモニターを回した。そこには、燃料切れを起こし海に真つ逆さまに落ちているレイのトロイの姿があった。レイが叫んでいるのも、トロイ目線の視界を体験したからだろうと八神は予測を立てた。

『トロイとコントロールポッドを切り離すんだ。止むを得ん!!』

「ちよつと、トロイを見捨てろって言うの!？」

『どのみち何もできないだろう。レイは改めてほかのLBXで出撃するか、コントロールポッド内で待機だ』

「っ!!そんな…トロイ…」

トロイ自体は動く。しかし空中ではただ落下するのみで何もできないトロイをどうにかすることは今のレイにはできなかつた。

『つたく、お前はいつも世話が焼けるな』

「その声は…」

トロイを見捨てるしかないという選択を迫られていたレイに男の声が届く。何とかトロイの体を反転させ上空を見ると、トロイめがけて飛んでくる3体の砲戦型がいた。

「真崎さん!!」

『ふう、間一髪。おっと抵抗はするなよ? せっかく助けてやったんだからな?』

「なんで…?」

『お前を助けたことか? それともそつちの通信に割り込んだことか? ちなみに答えは両方とも気分だ』

「そつか…:…ありがとう真崎さん」

『おう、じゃあお礼代わりにこのトロイはもらっていくわ』

「へっ?」

真崎はそういうと、三体の砲戦型でトロイを持ち上げ三機分のバーニアをフル活用しサターンへとトロイを拉致して行った。

「何してんのさ!?返してよ!!」

『はっ!!やなことだ。どうしてもっていうんだったら……取り返しに来い』

「それは……」

『真崎か、どうしてこの通信にいる!!』

『やっべ、バレたバレた。そんじゃレイ、後でな』

「うん!!また後で!!」

レイは笑みを浮かべながら『SOUND ONLY』のモニターに返事をした。

『待て真崎、私はまだお前からの辞表など受け取るつもりはないぞ!!』

八神が叫んだ。真崎は少しの沈黙の後、無言で通信を切った。

## レイ その在り方

## 29話

カシュー……と機械音がなり、レイのコントロールポッドが開く。レイが当たりを見渡せば、他のポッドは一つも空いておらず皆がバン達の戦いを見守っているらしい。

「レイ、大丈夫か!!」

「うん、全くもー。良いところで邪魔してくれちゃってさー」

「そんなこと言っている場合ではないだろう。何かプログラムをされてないかお前のポッドを検査する……どこに行く気だ?」

駆け寄ってきた八神に軽口を返しながら、扉に向かって歩くレイ。その顔は先ほどと違っていつになく真剣だ。

「四聖獣とイプシロンの調整」

「ツ……どうやって真崎のところまで行く」

「さあね。でも、真崎さんは『また後で』って言ったんだ。どうにかするんですよ」

「ブラフかもしれないが……こういう場でふざけるような男ではないな。分かった、こちら準備を整えておくとしよう」

八神の言葉を聞き終わると、レイは司令室から出て行った。



20分ほどが過ぎ、自室でLBXの調整を終えたレイはコーヒーを飲んでモニターを眺めていた。

「神谷コウスケ……趣味合うかも」

オーデインとゼノンの視界が映っているモニター、八神に頼んで部屋に映像を回してもらっている。視界の先には、半壊したルシファアの姿があった。

「あの謎ウイングパーツと角で墮天使つぼさ出てるし見た目だけじゃない性能にプレイヤーの腕もなかなか。しかも器用に半分だけ壊れて天使と悪魔の両方を兼ね備えた見た目になったのがまた良いアクセント……非対称のデザインもアリだね」

独り言だが早口でルシファアの評価をしているレイはとても笑顔で、目が輝いている。

「でもまあ……特殊モードを発動した2人には……あ、まあそうなるよね」

バンとジンのコンビネーションは神谷コウスケを圧倒。いくら恐ろしい姿になったとはいえ、コアスケルトンが剥き出しになったルシファアの防御力は皆無に近い。それほど時間もかかることなく、ルシファアは爆発四散した。

そしてオーデインとゼノンがサターンの防衛システムにプログラムの注入を行った。しかし、

「んん？……アツハハ!! 僕の出番、来ちゃった♪」

程なくサターンの攻撃も収まり第二次降下が始まると思いきや、急に映像が途切れた。コントロールポッドを使ったLBX操作の要であるスパークブロード通信を遮断されたのだ。

「なるほどなるほど。こうやって会わせるんだ真崎さん。発想力、それを可能にする技術力……すごいね真崎さん。なんで隠してたのさ……だつたら防衛用のトロイだつてもう少し強く出来ただろうに、なんで突破されちゃうかな」

そう、トロイでの戦闘中に郷田から言われたが、サターンの内部では量産型トロイが防衛に当てられていた。レイの助言と各々の観察でトロイを突破した全員であったが、真崎ならばと思うレイであった。

『レイ、状況は見ていたな？ブリーフィングを行う。司令室に来てくれ』  
「了解」

調整したイプシロンを腰のポーチに収めたレイは施錠の後、浮き足立ちながらも司令



室へ向かった。

「これより、サターンに直接乗り込んで艦内を制圧する。イノベーター達も激しく抵抗してくるだろう。よって、バン達はこの場で待機」

「……ッ?!」

「待ってください。世界の危機なんです!!このまま黙って見ているわけにはいきませぬ!!俺もいきます!!」

バンの言葉にジン達も同意した。しかし……

「もちろんボクも参加するよ八神さん。こうする以外選択肢がなかったって事は……そう言う事だよね?」

「……真崎の掌の上で踊らされていると言うことか」

トロイを取り返しにこいと言った真崎。先程まではどうやって?と考えていた八神だが、こうなると真意を理解したらしい。『乗り込む』という選択肢を取ったのは八神でも拓也でもエクリップス職員でもなく、敵である真崎なのだ。

「……………わかった」

少し悩んで八神は子供達の意見を認めた。程なくしてエクリプスからサターンへ『ハーブーン』という補助連絡通路が射出され、サターンへの通路が開けた。

「八神さん、師匠、これ渡しておくね」

「アタツシユケース？」

「これは？」

サターンへの突入前にレイは八神と山野博士へ少し大きめのアタツシユケースを手渡した。

「八神さんのはマスターコマンドとセイリユウ、スザク、師匠のは同じくマスターコマンドとビヤツコ、ゲンブ。マスターコマンドは両方ともボクと繋いであるから、道すがら何かあった時の戦闘管制は任せて」

「ありがたい。すまないなレイ」

「ありがとうレイ君。使わせてもらおうよ」

「ボクにはイプシロンがあるからね」

キュツ、とCCMGローブを締め直しウインクしながら答えたレイは一転して真面目な表情に戻るとバン達に続いてハーブーンへと足を踏み入れた。



「必殺フアंकション!!」

『アタックフアंकション デイメンション0』

『アタックフアंकション メガ電磁砲』

『アタックフアंकション 崩天撃』

『アタックフアंकション アクエリアスレーザー』

レイが見る画面の向こうで起こる爆発。バン達がレイの声に一瞬振り向くがすぐに前を向いて走り続けた。

(思ってたより数が多い!!真崎さんに会う前にボクが力尽きるかも?……マスターコマンドに完全に制御を任せた方が良さそうだね)

「もしもし八神さん、 師匠!!悪いけどマスターコマンドに全部任せるよ!!ボクが先に潰れそう……」

『了解した。あとは任せてくれ』

『レイ君、私のCCMにマスターコマンドの制御コードを送ってくれ!!こちらでなんとかする!!ジ・エンプレス……出撃』

「え、ちよつと師匠何そのLBX……つてああ!?!くう……!!後で絶対解析してやる!!」  
「お前もつと緊張感持てよ!?!」

思わず郷田がレイに突っ込むがレイは山野博士が起動したLBXを見ることが叶わず悔しがるばかりだ。

「カズ、私達はこつちよ!!」

「俺達はこつちだ!!お前ら、やられんじゃねえぞ!!」

アミ、カズヤ、郷田、仙道が自分のLBXを回収しに別の道へ向かった。

「バン君、レイ君、先を急ごう」

「ああ!!」

「ジ・エンプレスって何さああああ!!」

『アタックファンクション クリムゾンスラッシュ』

レイは叫びながら、ロックがかけられているであろう通路の扉を必殺ファンクションの炎で切り裂いた。

オーディーンとゼノンが停止してあるところにたどり着いた3人、バン、ジンはLBXの回収に向かいレイは気絶している神谷コウスケの容体を確かめている。

「……………息はあるし大丈夫でしょ」

そう言った知識は微塵もないレイは生きていることだけ確認すると2人の元へ戻った。

「回収出来たみたいだね。それじゃあ先に進もう」

「ああ」

「神谷コウスケはどうするんだ？」

「帰りに連れて帰ったら良いよ、どうせLBXもないから抵抗できないしき。てか全部終わった後だしそもそも海道義光が死んでんだから使命も何もないし抵抗しないでしょう」

無慈悲である。バンは少し罪悪感を感じながらも状況が状況なので仕方ないとレイに同調した。

「ていうかき、ここの奴ら銃持つてるくせにLBX使うのなんだろうね？」

「僕達に抵抗できない様にしてから制圧するつもりなのだろう……あるいは……」

「意図的にLBXを使わせる、か……」

「どういふことだよ2人とも」

レイとジンが意見を交わし合っているところに、よく分かっているバンが口を挟んだ。

「檜山さんと真崎さんが敢えてイノベーターにLBXを使わせてる可能性がある、って事だよ。全く……これじゃ本気で計画を遂行する気があるのか分かるかいね。」

「いや、ボクらからしたら都合がいいんだけどさ」

「レックスが……」

「……」

ジンが何やら無言で考えているのを横目に見ながらもレイはバンに解説を続けている。

（あるいは、ボク達に計画を失敗させて欲しい……分かるよジン君。あり得ないことを可能性の一つに数えるのは勇気が要るよねえ……）

「まあ何はともあれ、そういったことは直接聞けばいいんだよ。アツハハ!! 2人とも悩

みすぎさ」

気を遣ったレイの明るい声音に思考を中断した2人。レイの気遣いが伝わったのか2人とも苦笑しながら先へと進んでいった。

そしてスパークブロード通信を妨害している装置の元へたどり着いた3人。ジンはすぐに解除を試みる。

「レイ君。君も手伝ってくれ」

「え、嫌だけど」

「何でだよレイ!!」

「ボクはあくまでトロイを返してもらうために真崎さんに会いに来ただけ。檜山さんの邪魔をしないっていう約束だからね。……まあもう半分くらい破ってるけど」

仕方ないと言わんばかりに作業の手をすすめるジンだが、すぐに解除は完了した。そして、Dキューブが投げ込まれた。

「ん?」



「ジン……」

奥から現れたのは海堂義光……ではなく、その形をしたアンドロイドだ。ジンの表情が重いものへと変わり、低い声音でバンとレイに告げる。

「君達は先に行け。コイツは僕が倒す」

「……………うん、行こっかバン君」

「え、でも!!」

「君が檜山さんを、ボクが真崎さんに用事があるように……ジン君にもアレに用があるということさ。ほら、間に合わなくなっても知らないよ?」

「……わかった!!負けるなよジン」

「ああ」

バンはそう言い残すとコックピットへと走った。

「ちよ、速いって!!ボク運動出来ないんだから!!」

「そうだろうと思って俺から来てやったよ」

「ッ!?……………真崎さん」

文句を垂れつつ走るレイだが、バンには追いつけない。息も絶え絶えというところで、物陰から真崎が出てきた。

「お疲れさん。ほらよ、まあ落ち着いて飲み物でも飲もうや」

「ああ、ありがとう……………つて、何か仕込んで……………るわけないか。だったら加納の時にもうしてるもんね」

「まあな。後これ、落とし物だ」

そう言つて真崎はトロイをレイに返した。素直に返してくれることにレイは驚きながらも受け取り様子を見た。

「トロイ……………お帰り」

「ほら、用事済んだろ。飲み終わったらすぐ帰れよ」

「……………なんで」

「なんでつて、そりゃここ爆発するしよ。下手しなくても死ぬぞ」

「違う。なんでそんなに優しくしてくれるの？」

「ああ……？」

訝しげな視線を送るレイに気まずそうに目を逸らした真崎は、はあ、つとため息をつくと仕方ないと話し始める。

「お前との日々は割と楽しかった。それだけじゃ不満か？」

「不満だね。第一、真崎さんの復讐は終わったじゃないか。どうしてそこまでして檜山さんを手伝うのさ」

「おおっと、痛い所をついてくるじゃねえか」

「こんなときにふざけないでよ」

「いつつもふざけるのはお前だったくせに……まあいいか。まあ、あれだ。蓮とは腐れ縁だからな。アイツを理解できるのは俺だけだし、俺を理解できるのもまたアイツだけ。それぞれ北海道への想いを秘めて再会したあの瞬間から、運命は決まっていたのかもな」

真崎は語りながら虚空を見つめる。昔の事を思い出しているらしい。

「俺にはもう何も残ってないからな。だったら俺はせめて、蓮の理解者で在ろうと決めた。ただそれだけの事だ」

「……………分からない」

「理解されようとしてないからな。これ以上の問答は無駄だろう」

真崎は話を区切ると、2人の間にDキューブを投げた。ステージは闘技場だ。

「ステージがあつて、お互いに相棒がいて、することは一つだろうか？ さあレイ、最初で最後のLBXバトル……………始めようか。イフリートツ!!」

闘技場に降り立った漆黒のLBX、イフリート。怪物のようなヘッドパーツには不釣り合いなほど大きい胴体や四肢は太く、それだけで力強さ、禍々しさが伺える。途中で曲がった二本のツノに、イフリートの身長よりも大きいであろうテイルパーツは機械と思えないほどしなやかに稼働している。

「イフ……………リート……………真崎さんが作ったの?」

「ああ、俺の人生で最高の機体だ」

「なんでそっち系が分からないなんて嘘ついたの」

「一瞬でもそんな事言ったら何時間でも喋り出すだろお前」

「そんな理由!?!」

「そんな理由で悪いかよ。生憎、八神さんにも脳筋で通してるんでな」

「……………はああああ?!?!?人がどれだけ心配で来たか知らないで……………!!ああもう、ぶっ壊

しても知らないからね!!」

「はっ、『鬼神』の実力……………思い知らせてやるよ」

「行くよイプシロン……………お灸を据えてやろう。それで八神さんの前で土下座させてやる

!!」

「サイコスキャンニングモード!!!!!!」

## 戦姫VS鬼神 勇者VS黒炎の魔神

### 30話

「イプシロン……あの時の二つのデータが、そんなチートが生まれるとか予想外にも程があるわ」

「ビジュアルが良すぎる癖に滑らかで無駄のない作り込みをしてあるイフリートに言われたくないね」

遮蔽物が一切ないフィールドで向かい合う2体のLBX。お互いに一步も動かず、相手の動きを待っている。

「来ないのか？」

「そっちこそ」

それも仕方がない。2人とも自ら率先して動き始めるタイプではない。相手に打ち

込ませて、圧倒的な力で敵を粉碎してきたのだ。

「……つたく、様式美的には勇者様がラスボスに挑んで来いよ」

「そういうのは知らないからね」

「はっ、じゃあサービスだ。俺から行くぜ」

漆黒のイフリートがついに走り出した。大きすぎるテイルパーツが動きを阻害することのない、しかし流動的で生きているかのようなダッシュでイプシロンまで距離を詰める。

「俺と相棒を舐めんなや」

「なッ!？」

右腕を構えて殴打の体勢をとったイフリートに対して全身を守るように盾を構えたイプシロンだが、振り下ろしたその巨大な手は開いていた。

「イプシロン!!」

盾を鷲掴みにされたイプシロンはすぐに盾から手を離し右方向へと回避した。

「今ので左腕は持っていていけるはずだったんだが」

「真崎さんこそ、イプシロンを舐めすぎさ」

「ははっ、言うじゃねえかレイ」

真崎はあくどい笑みを浮かべながら盾をイプシロンへと投げ返した。

「ッ、なんのつもり……?」

「お前の全力で来いよ。そんなもって、楽しもうぜッ!!」

「何言ってるんだよまったく……ッ!!」

真崎の声に反応するようにカメラアイを発光させたイフリートがさらに突撃してくる。イプシロンも対抗するようにイフリートへ走り出し、フィールドの中央で槍と拳が交差する。



「オラオラア!!もつと打ってこい!!」  
「性格変わってるじゃんか!？」

幾度となくお互いに己の武器をぶつけ合う2体。イプシロンは槍で突き、切り払い、投擲など様々な方法で攻撃をしイフリートの連打を盾と機動で受け流す。対するイフリートは何も気にすることなどないと言わんばかりに全ての攻撃をそのボディで受け止め、両腕による絶え間のないラッシュがイプシロンを襲う。

「イフリートはこんなことも出来るんだぜ?ほらよっ!!」

「尻尾で殴ってきた!?サラマンダーでも難しいことを平然とやってくるねえ!!」

イフリートによるテイルでの横なぎは、イプシロンには受け止めることができずそのまま横方向へと機体を持つていかれる。空中に浮いたイプシロンへすかさずイフリートの追撃が襲い掛かる。イプシロンの背中へと右腕によるアップパー、さらに上空へと吹き飛んだイプシロンへ、その上から叩きつけるようなテイルでのメテオが襲った。

「一撃一撃が重い……!!でも、イプシロン相手じゃ決定打にならないみたいだね」

「山野博士製のLBXは流石に出来がちげえって事だな」

地面に叩きつけられながらも、盾で地面との接触によるダメージを軽減したイプシロンはそのまま前転でイフリートの懐に潜り込むと仕返しと言わんばかりの回し蹴りをイフリートの横っ腹に叩き込む。

「トンファークックっぽいことすんな」

「なにそれ？」

「……いや、なんでもねえよ。これが世代差か」

「ふーん」

正確に言えば真崎が生まれるよりも前の時代に流行ったのだが、ツッコむ人間は誰もいない。

「サイコスキャニングモードって、結局機体の発光ぐらいしか意味無いんじゃないのか？」

「まさか。CCMグローブとボクとのリンクに負荷をかけることでさらに精密な動きを

可能にしてるんだよ。機体性能の純粋な向上はどちらかと言えばVモードやブレイバーモードのほうじゃないのかい？」

「まあな。でも、お前の操作技術がサイコスキヤニングモードの本来の性能を圧殺する形で上回っているようにも見える」

「ボクのサイコスキヤニングモードはユウヤ君のと同じ試作型だからね。どちらかと言えばあの子……セカンドチルドレンの試験体に搭載されてる方が優秀なのさ」

「アイツらのデータはぶっ壊しといた。もう2度とあんな技術が生まれることはない」  
「……そっか。それは良かった」

。 会話をしながらもお互い操作には余念がない。お互い全力での殴り合いが続いている。

「はあ……お前、最近笑ったか？」

「なにその質問……まあいつも通りだよ。一体どれがいつものボクなのか、ボク自身も知らないけどね」

「いいや嘘だな。最近、作り笑顔ばつかだろ。痩せ我慢なんかしやがって。お前が他人に気を遣えるようになったのはいいけどな」

「どういふこと?」

「LBXバトルを楽しめてないってことだバカ。世界を知って、LBX以外の気になることでも出来たおかげだろ」

「そんなことは……ツ!!」

即座に否定しようとしたレイだが、思い当たることがあったのか途中で言葉が出なくなつた。

「悪いことじゃねえよ。むしろ良い傾向だ。お前がもうLBXに固執する必要はないんだ」

「やめてよ!!まるでボクがLBXに囚われてるみたいなさあ!!」

「間違つてはねえだろうが。シーカーのガキンチョどもと出かけた時、アキハバラに行つた時、ミソラタウンに行つた時は楽しかつただろ!？」

「ああそうさ、楽しかつたさ!!フアツションとかはよく分らないし、初めて見る街並み、植物、デパート……知らないものだらけで興味が湧いたし、すつごく楽しかつた。でも、真崎さんの今の言葉だけは許せない。例えば昔からイノベーターの命令でLBXをやつてたとしても、あの日々が楽しくなかつたなんてそれこそ嘘だ!!」

「違う、否定するわけじゃねえ。もつと色んなことに目を向けろって言うてんだよ。お前はもう、ただの女の子だ。こんな世界に関わるような生活は辞めてくれ……!!」

真崎の懇願するような声音に、レイの手が止まった。サイコスキャニングモードを使用しているため、連動するようにイプシロンの動きも止まった。

「それこそ無理だよ。どうせボクはこの後イノベーター関係者として政府に拘束されるんだからさ。分かってるでしょ？八神さんたちも同じさ」

「……途中からはシーカーに加わった。お前は未成年だし、何より被害者だ。情状酌量の余地は十分ある。その後の話だ」

「その後なんか気にしてる余裕ないじゃないか」

「ツ!?お前、まさか……」

「いいや、詳しくは知らない。でもなんとなく分かるじゃん？このメガネが何よりの証拠じゃないか!!」

レイは見えないことすら無関係に目元のメガネを取って真崎に掲げる。皮肉にもそのメガネは真崎が買ってきてくれたものだ。

「幼い頃からサイコスキャンニングモードの手術を受けた状態で、第二次性徴を迎えて今に至る。極め付けはメタナスGXの移植手術だ。アルテミスで限界以上にサイコスキャンニングモードを使っただけでボクの体はボロボロ……ねえ、教えてよ真崎さん。」

ボクは後、何年生きていられるのかな」

「ッ、……………」

レイの悲痛な表情と声が、真崎に突き刺さった。

「ボクの人生はこないだ始まったって、最近思うんだ。でも、視力は限りなく0に近くなって、頭痛がひどくて……次はどうなるんだろうって思い始めた。耳が聞こえなくなるのか、匂いが分からなくなるのか、味がしなくなるのか、完全に目が見えなくなるかもしれない。体が動かなくなると、寝たきりみたいな生活が来る？でも、あり得るじゃないか真崎さん!!ねえ!!ボクは、どれだけ先の未来まで見れば良いのさ!?!」

「……………本当かは知らねえ。加納と研究員共が話をしてたのを盗み聞きしただけだ。それでもいいのか?」

「構わないよ。ボクがボクらしくあるための制限時間……どうせ病院つてとこで検査でもすれば分かるんでしょ」

「まあ、そうだな。そういうことになるよな結局……」

真崎は覚悟を決めたかのように、悟ったような声を上げた。

「20歳迎えられたらいい方だそうだ。そもそも、メタナスGXの移植の時点で無理があったらしい。脳みそに機械を仕込むなんざ代償なしに出来るわけが無かったんだよ……」

「2……0……ははっ、そっか。大人には、なれないか。うん、まあ……そっか。ねえ、ユウヤ君は？」

「さあな、アイツらは特に灰原ユウヤの話はしなかったが……今は確か海道ジンの庇護下で病院に入院してると聞いてる。おそらく大丈夫だろうよ」

「あの子……あの女の子は？」

「分かるわけねえだろ。あんまり不明確なこと言いたくねえけど、すぐ病院に搬送すれば……」

「なるほどねえ」

腑に落ちた表情のレイ、悲しげな顔で心の内を曝け出した先ほどとは打って変わってどこかスツキリした表情だ。

「今ボク何歳だっけ？」

「詳細な戸籍情報がねえと分からない。けど流石に高校生はねえな」

「ふーん……」

「レイ……君……？」

2人の会話の途中、新たに声が聞こえてきた。聞かれていたのかと2人が声の主の方向を向くと、絶句し目を見開いているジンと山野博士の姿があった。

「あーあ、聞かれちゃったか」



## おもちゃと兵器の狭間で

## 31話

「あーあ、聞かれちゃったか」

「どういうことだレイ君!! 20歳まで生きられない!」

「……確かなんだな真崎君」

「ええ……加納達の会話ですが、白の部隊内での会話ですのでわざわざ嘘をつく必要はないかと思いません」

ありえないという表情でレイに詰め寄ったジンと、冷静に真崎に事実確認を求めた山野博士。対照的な反応だが考えていることは同じだろう。

「……やあ、海道センサーロボには勝ったんだね。おめでどうジン君」

「そんなことはどうでもいい!! なにも思わないのか!」

「うーん、まあなんとなく予想してたし……ああ、もしかしてジン君、人の致死率が10

0%って事ご存じないのかな？」

「ッ!!」

「ジン君ッ!!」

ジンの感情的な行動に、反射的にレイは目を瞑った。広げた掌を振り上げたからだ。しかし、いつまで経ってもレイに衝撃が来ない。聞こえるのは留めるような山野博士の声だけだった。恐る恐るレイが目を開くと、目に映ったのは震えながら涙を浮かべるジンの姿だ。

「バン君と君と一緒に、宇崎社長の最後を見た。僕だって何も思わないほど大人ではないつもりだ!!お爺さまもいつの間にか亡くなっていった!!辞めてくれ、死ぬ事を楽観的に見るな!!」

グツと胸倉を掴んで叫ぶジンにレイは声も出ない。思っていたよりもずっとジンは弱っていたらしい、いつものキリツとした声ではなくそれは懇願するただの子供のようだ。

「……ジン君。ごめん、強がってた。ボクも死ぬことが怖くないわけじゃないんだよ？でもね、最近分かってきたんだけど、自分の身体ってデータに出さなくても自分で分かっちゃうものなんだよね。ボクのカルテやら経緯やら知ってるジン君なら薄々勘づいてると思うってたし。まあ、何が言いたいかっていうとね……真崎さん」

「ツ……なんだよ」

ジンのこういう姿が珍しいのか、山野博士と共に静かに子供達の会話を眺めていた真崎だが不意にレイに話しかけられたことで少しうわずった声を上げた。

「続きをしよう」

「……ふっ、やつと楽しむ気になったか？」

「うん。最初からそうさせるつもりだったんでしょ？やつと気づけた。あんなに辱めを受けたのはいつぶりかな。あ、師匠ジン君の事お願いします」

「ああ、ジン君このハンカチを使うといい」

「……ありがとうございます。レイ君、そういうことなら見届けさせてもらおう」

ジンと山野博士がDキューブのそばに立ち、レイと真崎が再び向かい合って構えた。

「やっぱさ、サイコスキヤニングモードを使うたびに寿命って減るのかな」

「サイコスキヤニングモードの使用による発熱が脳に負荷を与えるんだろうよ。だから遠回しに使うなよって言ってたんだ」

「なるほどねえ……でもさあ、せつかく真崎さんとバトル出来るんだし全力でやらないと意味が無いと思わない?」

「そこまでしてこのバトルになんの意味があるんだよ。LBXの製作者の前で言うのはなんだけだよ、所詮はおもちや同士のバトルだ。バトル自体に世界の命運がかかってる蓮と山野バンのバトルでもねえし」

「じゃああの2人は兵器で世界の命運を決めてるわけだ。結局はいつの時代もどこかで何かを使って戦争してるんだね」

先ほどまでとは違う、余裕を持った笑みのレイの言葉に山野博士が反応した。

「やはりレイ君の目には、LBXは兵器に映るかね?」

「はい。この考え方だけはボクの中で変えることができません。イノベーターからのそういう刷り込みもありますが、デクーエース、デクー改、トロイ、インビット……製造

に関わったもしくはボクが開発したLBXは兵器としての運用を前提にしていますから」

「いいやちげえ、LBXはおもちゃだ。結局は扱う人間次第って事だ。これからお前が関わるLBXは全ておもちゃとしてのLBXだ。アルテミスを経験したお前なら分かるはずだろ？」

「うん、兵器として開発されたトロイが1番強いってよく分かったよ。ボクはもうLBXをおもちゃとしては見れないよ真崎さん。だってオーデインはリニアと同じくらいの速度で飛行し、プロトゼノンもは相対速度300キロ以上でたはずのリニアを止め、ゼノンはその完成形……ボクはもはや恐怖すら感じるね」

ジンは身に覚えがありすぎるのか口を閉じている。それほどまでにレイはLBXに對して確固たる考え方を持っている。

「……まあ真崎さんの言う通り、人間次第なのさ。つまりボクはそう言う考えって事なだけ。別にわざわざ兵器運用するわけじゃないんだし、なんだっていいのさ。あーでもフェアリーは一機だけ欲しいんだけどなあ……」

「ドングリ内蔵のいいなら余るほどあるぞ」

「いらぬいよそんなゲテモノ。よし、じゃあやろつか。絶対に倒してやる」

「さつきイフリートにボコボコにされてた癖によく言うぜ」

「油断して受けなくていい一撃受けてた癖に……」

「……………ああ？」

それを皮切りにバトルが再開された。先程までの陰鬱な雰囲気が一気に霧散し、そのままバトルの熱気が充満した。

「ジン君、よく見ておきなよ。これがボクの意味表明さ!!アツハハ!!イプシロン、必殺フアंकシヨン!!」

『アタックフアंकシヨン クリムゾンスラツシュ』

「炎の魔神とも言えるイフリートに炎属性の技とか、舐めてんのかよ……必殺フアंकシヨン!!」

『アタックフアंकシヨン ヴアルゾダース』

イプシロングレイブに炎がエネルギーが纏わりつき、イフリートは全身に黒炎を纏い突撃の準備をしている。

「今思えば、お前とももう10年近くの付き合いか」

「そんなに経ったっけ？まあボクも真崎さんも、自分の立場ってやつを理解してたしそんな感じしないよね」

「……ああ、そうだな。あの頃のお前はホントにクソガキだった。生意気でLBX以外全く興味がなくて……いや今もクソガキのままだな」

「そりやそうでしょ。だつてホントに子供だからね。それを言うなら真崎さんだって、保護者失格じゃないのー？」

「誰がテメエの保護者だ」

「どつちかつていうと檜山さんのじゃないかな？」

「……………それは言えてやがる」

互いの必殺ファンクションがぶつかり合い、その熱はDキューブのフィールドにとどまらず4人にも感じられるほど弾けている。

「俺は蓮の目的を手伝って……それと、お前にもつと生きてほしいだけなんだよ」

「じゃあボクはもつと真崎さんと一緒にいたいよ」

嵐の前の静けきさでも言わんばかりに、2人は優しい声音で思いを告げる。

「「だけど、今だけはッ!!!」

「イプシロン!!」「イフリート!!」

互いの行動や主張は相入ることがない。真崎は檜山と共に悲願を叶えるため、レイはただ自らの願いを叫ぶために。

「ブレイバーモード!!」「インフェルノモードッ!!」

『ブレイバーモード』『インフェルノモード』

レイのCCMグローブから表示されるモニターが増え、真崎のCCMが拡張され展開される。それと同時にイプシロンは白銀の輝きを、イフリートは更なる黒炎を纏い向きあった。

「お前とはこのまま一生バトルする機会が無いんじゃないかと思ってた」



「そうだね……真崎さんがボクをここまで案内してくれなかったらこうしてバトルすることもなかったと思う」

拳と槍による連撃が双方を襲う。特殊モードによって強化されたそれらは今まで以上に激しい攻防となるがお互い一步も引かず打ち合っている。拳が振るわれれば盾で逸らし槍で貫こうとすれば拳がその膂力を持って叩き潰す。どちらかがステツプ等で距離を離そうとしてもそれを上回る速度での追撃が離脱を許さない。

「ハッ、これでも食らってな」

イフリートの尻尾による薙ぎ払いを大きくジャンプすることで回避したイプシロンだが、計画通りと言わんばかりに真崎は笑みを浮かべ両腕を地面へと叩きつけた。

「ツツ!!インパクトカイザー並みの攻撃なんてツ、仕方ないねえ!!」

炎を纏ったイフリートの拳は闘技場の大地を隆起させ人為的なマグマを引き起こした。着地狩りをする様にイプシロンに直撃しようとした瞬間、レイは素早い判断で盾を

地面に向けて構えると蹴り付けマグマの進行を多少ながら食い止め、その隙に回避した。

「盾を失ってよかったのか？」

「失う……？何言ってるのさ。よく見なよ」

「なんだと？」

「イプシロンガーターを舐めちゃあだめだよ」

真崎はレイの言う通りにCCMに目を移した。そこには、噴き上げるマグマの熱に耐え形を保っている盾があった。

「さすが、というべきだな。山野博士の作ったLBXは……」

レイはイプシロンを操作し素早く盾を回収するとしっかりと持ち直した。

「まったく、コイツは自信作だったんだけどな。そこまであつさりと防がれると……逆に面白くなってきやがった。いけ、イフリート!!」

イフリートから放たれる圧倒的な熱量がフィールドを包み込む。

「うーわ……、装甲の耐熱テストじゃないんだけどなー」

「もつとだ、もつとだ相棒……!!格の違いを見せつける」

飛び出したイフリートへの反応が一瞬遅れたイプシロンは、強烈な殴打をもらいにくい吹き飛ぶ。先ほどの大地の隆起で形成された壁すら突き抜けるその勢いで闘技場の客席にめり込んだ。

「はっやい……!!でも、まだ……!!腕が!!」

レイのCCMモニターに映る異常を示すアラームが鳴り響く。イプシロンの全体像がアツプで映し出されその右腕の関節部の不具合を訴えている。

(接触するだけで溶けかけてる!?!これじゃあ満足に武器が振れない……)

「どうした?もつと打ってこいよレイ!!しないのなら、激情の炎に身を焦がすだけだ」

「なんの、これしき!!……まだいけるねイプシロン!!」

「恨みますよ山野博士、コイツにこんなオモチャくれてやりやがつて」

「ふっ……だが、君も楽しんでるだろう?」

「ええ……微妙な気分ですよ」

あまりの高熱にフィールドは陽炎がゆらゆらと揺れている。信頼と実績を誇る強化ダンボールでさえ溶けてしまうんじゃないかと思わせるほどの熱量とイフリートの威圧感がこの場を支配している。魔神というに相応しく、炎と称するには物足りない、圧倒的な暴力がイプシロンの前に立ち塞がる。

「立ち上がれよブレイバー、これがラストステージだぜ?」

## 暁の水平線

## 32話

「立ち上がれよブレイバー、これがラストステージだぜ？」

「何度だって立ち上がるさ。それが勇者ってヤツだから」

イフリートが戦局を支配するこのフィールドでイプシロンがぎこちなく立ち上がる。熱で動作不良を起こした右腕は力無く垂れ下がりまともに武器を振るうことは出来な  
いだろう。

「ほう……利き手を変えるか」

レイはそんなイプシロンを見て即座に左手に武器を持ち、右手には盾を握るだけ握ら  
せた。

「ッ!!」

イプシロンがイフリートに向かって駆ける。魔王へ挑む勇者はたとえボロボロになろうとも使命を果たすために果敢に立ち向かう。

「無駄だ」

「無駄かどうか、過去の自分に問いかけなよ」

「なに?……ッ!?!」

イフリートが拳に炎を滾らせ迎え撃とうとし……出来なかった。真崎のCCMはエラーの文字を表示しながら点滅している。

「どれだけ強くても、どれだけ耐熱性が高くても……冷却システムがないといずれどこかから綻ぶ」

「チツ……痛いところ突きやがる」

「そうか、そういうことか」

「博士、どういうことですか？」

ジンだけはレイの言葉を理解できなかったのか疑問の声を上げた。

「超高温に耐える耐熱合金をイフリートに採用していると仮定すると、それは自動車のエンジンや航空機のタービンのものに相当する。1500℃まで耐える事を想定し1000℃での常用を基本とするその合金はそれ故に熱が籠ってしまふんだ」

「なるほどッ、熱伝導性が低いからトラブルが発生しやすい。そしてLBXでそんな超高温が発生してしまえば……」

2人の言葉の続きは、動けないイフリートの肩に『イプシロングレイブ』を突き刺し左腕を切断させたレイが宣言した。

「CPUがイカれる事くらい、素人でも分かるさ!!」

「あつつつ……!!」

真崎がCCMを落とした。イフリートのCPUに連動したのか、CCMもとてつもない熱を発しており碌に使える状態ではない。

イフリートは左肩を押さえながら片膝を突き沈黙した。

「はっ……ははは、流石だなレイ!!このイフリートの弱点をこんなにも早く見抜かれるとは思ってなかった!!」

「この……?」

「ああ、蓮に渡したイフリートはそんな弱点は存在しない。だが、俺のイフリートは敢えてその弱点を許容している」

「はあ!?なんでそんなこ……と……?」

「目覚めろ相棒……食い散らかせッ!!」

『グア……アア……アアアアアアアアアア  
!!!!!!』

機能を停止しているはずのイフリートの様子がおかしいことに気づいたレイはイプシロンを後退させた。

そしてイフリートはヘッドパーツが開閉し真の姿を見せる。

「うそ、なんでその状態で動けるの!?ていうか操作してないのに」



「コイツのCPUは特別性でな。学習型のAIを積んである」

「学習型……AX-01と同じのって事？」

2人の会話中もイフリートは咆哮を上げながら姿勢を変え始めた。

「似たようなものだ。だが、コイツが学ぶのは何も戦闘だけじゃない。『感情』もだ」

「感情……？」

「俺からは怒りや憎しみなど負の感情を、そして今お前からは楽しさ、喜びなど正の感情を」

『ギイ……ガ……ギャアス……』

「理解し学んだ末にイフリートは新たな境地に至った」

イフリートは四つん這い（左腕がないため三だが）になり、両足がワイルドフレームのように獣的な形状に変形していく。

「『イフリート改』……コイツはありとあらゆる状況で進化する」

『グギャアアアアアアアアアア!!!』

四足歩行のLBXとなったイフリート改は新たな自分を喜んでいいのか狼の遠吠えのように大きな咆哮を上げた。

「感情を手に入れたLBX……そんなの……生きてると同じじゃないか!!」

「実質そんなもんだ。正真正銘のラストバトルだ、気張れやレイ」

「鬼かな!？」

「これでも『鬼神』って言われてるもんでな」

イフリートが跳躍した。性能が変わったわけではないためイプシロンでも反応できる速度、さらに左腕……この形態なら左前足を失っているため跳躍力も若干低下しているので容易に回避する。

「四足歩行のLBXなんて知らないっ」

レイの動揺はサイコスキヤニングモードを通じてイプシロンの動きにも顕著に現れ、普段よりも動きにキレがない。

「動きを観察してる余裕はねえぞ。イフリート改は学習型AIを積んでんだからな」  
「時間をかければ絶対負ける……!!」

イフリート改の獣的な機動は、イフリート改が自ら判断してその最適解に至らせたもの。イプシロンを相手にする上で必要だと考えたのなら即座に実行するだろう。

(AIが相手なら奇想天外な行動でAIの学習前に一方的に叩きのめすべき……でもイフリート改相手じゃそもそも一方的に攻撃できない!!)

インフェルノモードは継続しているため炎を纏いながらイプシロンの周りを囲うようにゆっくりと歩いているイフリート改はその熱でイプシロンを逃す気はないらしい。

「だったら!!」

『アタックファンクション グロリアスレイ』

レイは自らの切り札とも言える必殺ファンクションを上空に向かって放つ。イフ



真崎の言葉を肯定するようにイフリートが吠える。揺らめく炎はさらにその勢いを増し感情の昂りを示しているようだ。

イフリートは四肢が欠けているとは思えない速度で走り出しイプシロンの周りをグルグルと旋回している。

「ッ……………」

イプシロンの性能とレイの反射神経が相まってその動きはなんとか追えている。しかし突撃のタイミング次第では反応できない、故にレイはここまでで1番の集中力を発揮しその時を待っている。

「……………」

「……………ッッ!!イフリート!!」

イフリートが飛び出そうとした瞬間、真崎が異変に気づき叫ぶ。時はすでに遅く、一歩を踏み出してしまっていたイフリートは自らの失態に気づいた時には、イプシロング

レイブが眼前へと迫っていた。

「そっこだああああ!!!」

イフリートの首元にイプシロングレイブが突き刺さり声ともならない悲鳴を上げた。通常ならばそれだけで機能を停止させるはずの一撃だがイフリートは耐える。ぎこちなく動く右手でイプシロングレイブを掴み、力のまま握りつぶした。

「ああもう、馬鹿力め……イプシロン!!」

イプシロンは武器から手を離しイフリートから離脱、これで武器が無くなった。

『……………ガ……………ギヤ……………』

「ツ……………もうやめよう真崎さん。これ以上は本当にイフリートが死ぬよ」

「コイツはそんな覚悟、生まれた瞬間から出来てんだよ。それに……………なあイフリート。自分を負かす奴になら、いいだろ？」

バチバチと身体中からスパークを撒き散らしその場にうずくまるイフリートに、真崎は問いかける。イフリートは極度のダメージから動くことができず、右手すら満足に動かせない状況だ。

『ギャア……………』

イフリートの瞳がイpsilonをしっかりと捉えている。伝えようとしてきているのはもちろん……

「……………いいんだね？イフリート」

『……………』

レイは気乗りしていない。しかしイフリートの意思は固いようで、CCMを通してイpsilonのカメラアイから伝わるイフリートの視線を感じ取ったレイは深く息を吸って吐いた。

「必殺ファンクション」

「レイ君!?! いいのか!!」

「うん……LBXはLBXとして終わらせてあげる。ただの獣に成り下がる前に」  
「そうしてやってくれ」

ジンの驚いた声にレイは自分の気持ちと共に決意した。そしてイプシロンのカメラ  
アイが輝く。

『アタックフアンクション 光速拳・一閃』

イプシロンの左手に白銀のエネルギーが収束。限界を迎えイプシロンが力強く大地  
を踏み締めた刹那、

『グギャア……』

イフリートの胸部を貫き、イプシロンがその背後に現れた。

「お疲れさん相棒、今までありがとうな」



『……………フン』

爆発。

「レイ君の勝ちだ。真崎君、これで満足したかね」

「……………ええ、アンタらの足止めとしては十分でしょう。コックピットへの通路はすでに封鎖済み、今頃蓮と山野バンがバトルをしてるはずですよ」

「イプシロン……………お疲れ様」

イプシロンを回収したレイは、脳の酷使によつて一瞬意識が朦朧となり倒れかけたが、ジンによつて受け止められた。

「大丈夫か!?!」

「……………ああ、うん。バトルに夢中になりすぎたみたい。ありがとねジン君。師匠、ジン君、2人は先に行つてて」

「分かった」

「行こうジン君」

ジンと山野博士はレイの言葉に頷き、コックピットの方向へと走っていった。

「終わったな、レイ」

「うん……終わったよ真崎さん」

「はあ………負けた負けた。ちつくしよ……普通に勝てると思ってたんだけどなあ」

「いやいや!? あんなの普通勝てるわけじゃないじゃん!! インフェルノモードに自我の芽生えとか予想できないし……ボクにだって無理なことはあるんだよねえ!!」

「勝った奴が何言ってもな。イフリートは強かったか」

「うん、まさしく鬼神だった」

「ああ、アイツも喜ぶと思う」

2人だけになった空間で、適当なところに座り込んで話を始めた。その会話は他愛のない親子みたいなものだ。

「ねえ、どうしても……戻ってくる気はないんだよな」

「ないな。もし蓮が負けてサターンが止められたとしても……」

「そっか、そうだよねえ……じゃあさっきのは完全に無駄な問いかけだったわけだ。あーあ、はずかし」

「はっ、バカ言うなよ。お前の本心が聞けて俺は嬉しかったよ。最後にいいもん見れた」

真崎は機嫌良さそうにレイの髪をぐしやぐしやと撫でまわすと、不意に立ち上がった。

「俺のCCMはオーバーヒートで使いモンにならねえ。だから……八神さんに伝言を頼めるか」

「嫌だけど？」

「はあ!？」

「そういうのは自分の口でいいなよ。トロイ返してくれたし……まあ録音で勘弁してあげる」

「つたく、そういうことかよ。仕方ねえ……」

『……………』

レイのCCMに、録音が終わった。

「頼んだぞ」

「アツハハ!!任せてよ!!」

「ふっ……良い笑顔ができるようになったな、レイ。じゃあな」

「え……ちよつとそれどうい……ッ!!!」

パタリと、レイが真崎の胸に倒れ込んだ。真崎の右手にはスタンガンが握られてい

「……ほんっつにこの10年間、手のかかるクソガキだったよ」

「レイッ!!」

レイが気絶して少しした後、カズヤとアミが走って現れた。

「……よおガキども、俺は負けちまってな。サターンの後始末で忙しいからコイツのこ  
と頼むわー」

「……どういふつもりだよ」

「どうもうこうもねえ。俺は負けた、レイは勝った。それだけだ」

「そうですか……カズ、レイを連れて行って」

「お、おう。アミは？」

「この人と少し話があるわ」

カズヤがレイを背負いエクリップスへと歩いて行った。それを見送ったアミは真崎へと向き直った。

「貴方がレイの保護者の真崎さんね」

「ああ。一応、保護者になるな」

「そう……あの時はありがとうございました」

「あの時？」

「アルテミスの後、タイニーオービット社に私たちが向かってる時助けてくれましたよね？」

「……なんのことやら」

イノベーターのトラックの襲撃を受けた時、真崎はイフリートにスナイパーライフルを装備させ援護をした。しかしそれは絶対に気づかれる距離ではなくCCMの電波でさえ届かないはずの場所からだ。アミは気づいているようだが、自らネタバラシをする必要は一切ない。

「惚けないでください。それにレイも言っていました。ここぞつて時に、真崎さんは頼りになる人だつて」

「……アイツがそんなことを。そうか……なあ嬢ちゃん、一個頼まれてくれねえか」  
「なんですか」

「レイとこれからも仲良くしてやってくれ。アイツは感情豊かそうに見えるけど、本当はすごい寂しがりやで構ってちゃんで……」

「ッ」

レイのことを話している真崎の目から自然と涙が溢れ始めた。アミはそれに気づいたが指摘せず、静かに耳を傾ける。

「……研究所で連れてた少女が居たる？レイは多分あの子のことを引き取るつもりだ。」

アイツは自分のせいで新しい被害者が生まれたと思ってるはずだしな。自分の不始末は自分で片付けると言いかねん……だからさ、アイツとこれからも友達でいてくれ」

「当たり前です。レイは……最初にキタジマ模型店で出会ったあの日からずっと友達です。バンもカズも、他のみんなだってそれは同じだから」

「……ああ、そうだな。あの日あの場所にレイを連れて行ったのは、アイツにとって一番良いことだった」

「レイに友達が出来て、本当に良かった……!!」

もはや会話にならなくなってきた。アミはかける言葉が見つからず、しかし真崎の言葉をしつかりと胸に刻みつけてカズヤを追いかけて行った。

1人残った真崎は、落ち着きを取り戻した頃警報が鳴り始めた。

「負けたか、蓮」

「たくつ……最近の子供はすげえよな……ガキのくせに、いやガキだからこそ真っ直ぐに突き進んでいつか俺ら大人を超えて行っちゃまう」

「ああ……最悪だよ。情がうつりすぎた……!!」

「幸せになれよ、レイ」

乾いた銃声が誰も居なくなった空間に悲しく響いた。



「はっ!? ……真崎さん!!!」

それから数時間が経った。気絶していたレイはエキリプスの自室のベッドにて目を覚ました。

そう、全てが終わった後である。



「ウソだ、ウソだ……何時!!もうこんなに経ってるなんて!!」

レイは身支度も整わないまま部屋を飛び出した。

「あつレイ、おきたのk……って、なんだアイツ？」

廊下で会話をしていた知人たちにも気づかないくらい、レイは必死に駆け抜けていく。そしてたどり着いたのは司令室。こんな時だけ開くのが遅く感じる自動ドアを潜り抜け八神が居るはずの場所へ階段を登ったレイは叫んだ。

「どうなったんだい!？」

「「「「「……………」」」」」」

そこには、八神を始めとした大人たちに加えバン、カズヤ、アミ、ジンなどの面子が揃っていた。

「レイ、起きたのか。体調は大丈夫か？」

「そんなのどうでも良いでしょ!!サターンは、檜山さんは、真崎さんはッ!!!」

レイの身を案じた八神だったが、レイは怒り心頭といった表情で八神の胸ぐらを掴みながら詰め寄った。

「ちよ、ちよつとレイ少し落ち着いて……」

「ああん!?!」

「いえ……なんでもないわ」

「あのアミが威圧で負けた!?!」

「明日は槍の雨か!?!」

「……降るわけないだろう」

子供達のコントのようなやりとりで司令室に緩い空気が流れるが、レイだけは真面目だ。

「サターンはバンが打ち込んだ自爆プログラムでNシティ到達前に自爆した。幸い海上だったため被害はゼロだ」

「檜山さんと真崎さんは？」

「……」

「レックスはサターンと一緒に……」

「ッ?!?!?……そう」

言葉を濁した八神に変わって、バンがレイに真実を告げた。最後の最後まで一緒にいたバンだからこそ、言うことができたのだろう。

「……………まさきさんは？」

「ッ……分からない。バン達が帰ってくる時も出会わなかったんだ。だがエクリプスにいないということは……」

「そっか」

確証は得られていない。それでも最後に話したことを思い出したレイは、全てを悟って顔を俯かせた。

「レイ、真崎さんが私に言ったこと……聞きたい？」

「アミちゃん?……ううん、ボクに直接言わなかったことはボクが聞く必要は無い。真崎さんも聞かれたくないこと言ってたでしょ?あの人親しい人には本心を言いたくなさそうだし」

「まあ……ねえ……2人とも、似たもの同士ってことはよく分かったわ」  
「え、それどういう意味!?!」

長きにわたる戦いは終わった。

イノベーターの最終兵器はただの少女へと戻り、これからきつと普通の生活というものを知らぬだろう。

「ねーアミちゃん教えてよー!!」

「えー、どうしよっかなー。あつ、今度シヨツピング行きましょ。レイったらまた同じ服着てるし、色々選んであげる」

「うげっ……それは勘弁してほしいかな……なんて」

「んー?」

「…………ゼヒオネガイシマス」

これから始まるのは、被験者でも、実験体でもないただの少女の日常だ。

## 空白の一年編

### 本当の日常の始まり

33話、もしくは1話

イノベーター事件は収束を迎えた。元々イノベーター陣営であったレイ、八神、真野、矢壁、細井、少女一次的に軟禁状態となり政府によって管理されたが、その生活は保障された。特に未成年であるレイと実験体の少女は丁重に扱われ、健康的な食事に清潔な環境の病院で過ごすことになりほぼ毎日検査三昧という少し退屈な日々が続いていた。

「……ヒカリ、体調はどう？」

「お姉ちゃん、大丈夫だよ」

ヒカリ、と名付けられた少女はレイをお姉ちゃんと呼ぶようになり、国内最高峰の医療技術（オペティマ込み）によって革命と言えるほどの快復を見せていた。

名付け親はレイだ。自身の名であるレイは『光』に関連する語彙であるということか

らそのまま少女に『ヒカリ』と名付けたのだ。

「良かった。最近はどう？先生は痛いことしない？」

「うん。先生もお姉さん達も優しくしてくれてる」

残念なことに、完璧と言えるレベルでメタナスGXとレイの脳は接続していた。取り除く方がむしろ生命の危険を迎えることになるという判断が下されオプティマによる治療ですらレイの延命は期待できないという事態となった。この事を知っているのはレイ、八神、真野達3人、医者達のみであり外部には一切漏れていない。よってレイの寿命は20歳そこらのままである。

レイとヒカリの病室は同じ部屋で2人専用となっている。イノベーター研究所から押収された研究資料の数々によって2人に施された被人道的な実験の数々は医者達の間で知るところになり、それを知る者からは同情の視線で溢れている状態だった。

「お姉ちゃんは大丈夫？」

「うん、ボクはいつも通り元気さ。退院したら……一緒に暮らそう。小学校にも行こうね」

「学校!!行ってみたい!!」

「お姉ちゃんにまっかせなさい!!」

虚勢である。レイとヒカリがこうして会話できているのも病院側の配慮によるもの。本来、なんの後ろ盾も無い彼女達は完璧に隔離され、稀有な症例としての臨床試験まみれの生活が待っていたはずだったのだ。それにストップをかけたのは、他でもない内閣総理大臣の財前宗助その人だ。彼は、オペレーションデイブレイクの発動時Nシテイに居た。つまりサターンの落下地点に居たのと同義であり、シーカーの活躍がなければ今頃故人となっていた人物だ。

彼はレイ達によって生かされた命を、彼女達のために最大限の権力をもって応えた。その結果が今の2人と言えるだろう。

入院生活で、不明瞭だった2人のプロフィールが明らかになった。

レイ 本名、片倉アヤネ 現在15歳 親族は存命中の従姉妹家族のみ

ヒカリ 本名 本条ユウカ 現在9歳 親族は無し 天涯孤独の身

その他は伏せさせてもらうが、これで1番驚かれたのがレイだ。親類がいることはさておき、年齢である。バン達と同じ年の13歳と思われていたが、2つ上の15歳、仙道ダイキや郷田ハンゾウと同じ年であり中学校に通っていたならば3年生である。本



来ならば義務教育として中学校までは必ず通う必要があるのだが、今更編入もできない。しかし次回からは高校生であり義務教育からは外れるため高校に行くには選択肢が生じることとなる。現在レイには保護者となる存在がいなかったため高校に通うことも厳しい状態となつてしまつたのだ。

バン達は二つも年が上だということに驚いたがそれだけで態度が変わるような人柄ではない。定期的に数人でお見舞いに来てはLBXマガジンや果物などを差し入れとしてくれる。レイは自覚していないが友人を超えて、親友とでも呼ぶような関係になつていた。

仙道と郷田は、内心『こんな奴が同い年!?』という認識であつたが、その境遇を関係者として聞かされるとなんとも言えずたまにお見舞いに来るような関係だ。仙道が来る時は、アキハバラキングダム当日に知り合つた妹の仙道キヨカも一緒であり既にヒカリとキヨカも同い年の9歳ということ仲良くなつてゐる。ヒカリにとつて初めての友達であり関係も良好だ。

ここまではただの前置きである。これからは現在の状況であり、イノベーター事件収束からおよそ半年近くが経過しているのを前提に話を進めていく。



カランカラン

「いらつしやいませ」

ミソラタウン商店街、喫茶店ブルーキャッツ。ここ半年ほど閉店状態であり、地下のLBXバトルスペースの使用すらできなかつたこの場所は、とある1人の存在によって完全復活を遂げていた。

「あ、あの!!サインお願いしていいですか!?!」

「ええ、もちろんです」

マスターである八神レイは、第3回LBX世界大会アルテミスで決勝戦へと進出した世界屈指のLBXプレイヤー『白銀の戦姫』として名を馳せていた。美しく輝く銀髪、少女ながらも美しい見た目に誰が見ても最強と呼べるほど突出したLBXの操作技術

を持つ彼女は、公式大会での記録が一切存在しないというその特異性からある種のカリスマ的存在だった。そんなレイがとある喫茶店のマスターをしているとなれば、商品関係なく注目の的になるのは時間の問題だったのだ。

八神レイ、名前の通り八神英二の養子となったレイは、檜山から受け取っていたブルーキャッツの鍵を使用し、自らの住居兼、職場として使用していた。女性物の制服は存在しなかったため発注となったが、檜山特性のオリジナルブレンドコーヒーのレシピなど商品に関するレシピはしっかりと残されており、レイが日常生活に順応、商品の再現に成功し開店準備が整うまでに半年を要したのだ。

「マスター、オリジナルブレンドとサンドイッチ!!」

「畏まりました。ヒカリ、オリジナルブレンド宜しく」

「うん!!」

現在、近所のミソラ第三小学校（仙道キヨカと同じ小学校）に通う八神ヒカりは偶にはあるが、放課後に店の手伝いをするようになっていた。命の恩人であり憧れの存在である義姉のレイと関わり続けた彼女はおかしな方向にすくすくと育ち厨房を任せることができるレベルまで達していた。小学4年生である。

『LBCカフェ ブルーキャッツ』

前マスター 檜山蓮の意志を継いだこの店は先代の雰囲気壊すことなく、落ち着き静かな喫茶店ながらも棚に綺麗に並べられたLBX達を一望できるカフェとして有名だ。店主が未成年であることから営業時間は短いが店主はアルテミスファイナリスト、話題性は抜群でリピーターも多い。

「マスター、今時間あるかい？」

「ええ、なんですか？」

「この子のカスタムについてなんだけど……」

LBXプレイヤーとして名の知れているレイだが、彼女の本領はメカニックにある。リピーター達はレイのメカニックとしての技術を知っている者も多くこのように軽食ついでに相談に来る者も多い。客に寄り添った店としてもブルーキャッツは、ブームが去った後でも密かな人気を保っている。

「ご来店ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」  
「ますー!!」

レイがマスターならヒカリは看板娘、身麗しい義姉妹の接客は今日も営業時間の終了を迎えた。

「今日もありがとねヒカリ。ボクが片付けとくから先にお風呂行ってらっしゃい」

「うん!!後でお姉ちゃんも来てね!!」

「アツハハ……間に合えばねー」

いつも通り、終業時間を迎え店の片付けを済ませたレイはヒカリを風呂に行かせ厨房の片付けを行なっていた。

(幸せすぎる……こんなに幸せで本当にいいのかな、真崎さん)

半年前、レイは最も信用している人間を失った。彼の墓は共同墓地に建てられたがそこに遺骨はない。祈るのもレイを含めれば八神達4人のみであり少し寂しさを感じる

場所であるが、レイの心にはいつまでも彼の声が残っている。

実のところ、レイは最近LBXとあまり関わる機会がない。客からの相談や展示用のLBXの掃除などは行うが、趣味としてLBXをいじくり回すには時間が足りない。店の営業、檜山の残したレシピの研究、ヒカリの学費に勉強（理系のみ）、生活必需品、家計の管理など日常生活を送る上で必要な行為全てを行なっているレイに、趣味に没頭する時間など存在しなかったのだ。

そんなレイであるが、LBXに関わることが少なくなっても日々の充足感を感じている。LBXが全てであった頃を鑑みれば世界一とも呼べる進歩だが、彼女は今までの経験が少なすぎたこともあり、突如舞い込んだ『幸せ』というものに慣れていないのだ。

カランカラン

「ああ、ごめんなさい。今日の営業は終了して……ダイキ君?」

「よお」

「お邪魔します」

営業時間を過ぎ、closedの看板を出したはずなのに店に入ってくる1人の男と少女、仙道兄妹だ。

ダイキはアルテミス以来の因縁、キヨカはメカニックとして師匠のレイと親友のヒカ  
リに会いに来ることが多くなっていた。ダイキは関係は希薄だが、若干シスコンの気が  
あるのでキヨカを一人で遅い時間に出歩かせることなどしない。キヨカが八神姉妹の  
元に来る際は必ず同行していた。

「いらっしやい2人とも。厨房の片付けだけ済ませるから少し待ってて。ヒカリは今お  
風呂だしちよっと時間かかるかも」

「分かった」

「うん」

ダイキに似てクールに育ったキヨカも冷静に返事をして数十分後、レイは片付けを終  
えて2人が待つテーブルに座った。

「ふうー………今日もいい感じだったよ」

「……………さすがお姉さん」

「……………」

ダイキはコーヒーを飲み、キヨカはオレンジジュースを飲んでいる。どちらもレイが用意したものだ。

「体調は問題ないのか？」

「んー？ヒカリなら全然大丈夫だよ」

「違う、お前だレイ」

「ボクう……？うん、元気だけど……え、もしかしてダイキ君心配してくれてる？」

「そんなわけあるか!？」

ダイキは、イノベーター事件にはその場のノリで参加したが一連の事情はバン達に聞かされている。そこにはもちろんレイの事情も含まれており、アルテミスの因縁でレイに突っかかっていたことに罪悪感を感じている。不良だと言われ続けているが根は優しいのだ。

「大丈夫さ。こんな風にお店もやれてヒカリの面倒も見れてる。年齢的にどうしようもない手続きはやが……英二さんに任せっきりだけどこうして戸籍まで貰ったからね」

「……そうか」



「あつ、君たち夕飯まだでしょ？ウチで食べて行きなよ。親御さんには連絡しとくから  
キ」

「いや、そこまで世話になるわけには……」

「いいからいいから」

珍しくレイの押しが強く、キヨカのわくわくしたような視線を浴びているダイキはなし崩しに了承した。親への連絡は自分で行つたらしい。変な勘違いをされたくないという思春期特有のアレである。

「……………チツ」

「兄さん、舌打ち良くない」

「ああ、ごめんな」

喫茶店らしい制服にあまり似合っていない蝶ネクタイをつけて、エプロンを着ながら料理を始めるレイの後ろ姿を見たダイキは思わず舌打ちをしてしまう。キヨカに嗜められたがそれでも彼には思うところがある。

(コイツが料理をしているのが無性に気に食わねえ。口を開けばL B X L B Xほざいていたヤツが今やこんなな家庭的……半年でどうしてこうなれる?何がアイツをこうさせる?)

「あつ、キヨカちゃん!!」

「ヒカリ、お疲れ様」

ダイキがそう思考している内に、ヒカリが風呂から上がり2人の元へやってきた。

「キヨカちゃんのお兄さんもこんにちは!!」

「あ、ああ……」

元気な人間は苦手な方なダイキは、もう何度も挨拶しているのにも関わらずヒカリにぎこちない返事をする。キヨカの友達なので下手に無碍にも扱えないが一般的な幼な子への対応など恥ずかしくて死んでもできない。

「ヒカリー、ちゃんと髪乾かした?」

「乾かしたー!!」

「ならよし!!」

(母親かお前は)

心の中でツツコミを入れたダイキだがそれは他の面子が見れば誰もが思うだろう。

むしろこのような一面を見せてしまえば、空気を読んで大人しくしているダイキ以外の面々なら悪いものでも食べたのではないかというほど驚き狼狽えるだろう。

「はいお待たせー。急に人数増えちゃったから適当になったんだけど許してね。それでもボクの自信作には変わりないけど」

出てきたのは白飯、味噌汁、野菜炒め、という日本人なら誰もが好むような代表的な食事だ。

「米は炊いてたし、味噌汁は今朝の残り、野菜炒めはカンタンに作れるから楽でいいよねっ!!」

（誰だお前。本当はレイの見た目をした俺のお袋だろう）

家庭的すぎるレイにダイキはついに言葉が出てこなくなった。本当に別人になったのではないかと真剣に疑い始めてしまうほどに。

「……レイ、後でバトルしろ」

「んん？んん……いいよ」

喫茶店の経営、美味しいコーヒーを淹れ、母親並みに家事を行い妹の世話をする。ここまで忙しくしていればLBXを触っている暇などないはずだ。そうした考えがダイキの頭をよぎり少し苛立った。

（俺がテメエを倒すために出来ることは全部やったつもりだ。それなのにテメエはもうとうと日常生活にしけ込んでやがる……腑抜けているに違いない）

その考えは間違っではない。メカニックとしてLBXと関わることはあっても、プ

レイヤーとしてはこの半年一切の関わりを絶っていたレイは心の片隅で自分がどれほど弱くなったのか少し気にしていた。

尚、ダイキは殺伐とした思考の途中でも箸を持つ手は止まらず段々とおかずに箸が運ぶペースが上がっている。

隣を見れば、キヨカとヒカリは小学生らしい会話をしておりこちらのことは全く気にしていないようだ。時折ヒカリの頬についた米粒をレイが拭っているがそれはもう無意識の領域にしか見えない。

「そういえば最近ハンゾウ君見ないけど元気してる？」

「なんでアイツのことを俺に聞くんだ」

「いや、君達仲良いし」

「誰がツ……しらねえよ。まあ、偶にLBXの大会に出てる噂は聞くがそれだけだ」

「元気そうだねえ」

反射で強い言葉が出そうになったが今は食事の席、ダイキはイラつきながらも冷静に返すとレイはしみじみと感想を述べた。

「ねえ、ちょっと相談があるんだけど」

「お前が、俺に?」

「まあね。こればっかしはボクだけじゃ決めあぐねてるんだよ」

「……言ってみろ」

ぶつきらぼうに返事をしているが、普段から舎弟達の話聞いてやっっているのもあり頼られるのには慣れていているし悪い気もしない。それが因縁の相手（自称）ならば余計にその通りなのだ。

「実はお店の営業日を少なくしようかと思ってるさ」

「なに?」

「お客さんには申し訳ないとは思ってるけどこの店のもう一つの機能を復活させようと思ってるね」

「もう一つ……ッ!!アングラビシダスカ」

「そう」

アングラビシダスカ、ブルーキャッツの地下にあるLBXバトルの会場で行われるルー

ル無用の大会だ。アンリミテッドレギュレーションよりも残虐、文字通り何をしても許されるといふ事実が多くの荒くれ者のLBXプレイヤーに人気だった。

「伝説のLBXプレイヤーが亡くなって、その後この店を継いだのがボクだつてことはもうそろそろ皆に知られ始めてきた。だから会場の管理者としての立場もちやんとしていこうと思つててね」

「悪くない話だ。俺の舎弟も通つていた奴が多かつたからな。ストレスを他の奴にぶつたバカを俺が絞める手間も省ける」

「ちゃんと番長っぽいことしてたんだね君。まあそういうわけだからさ、どう思う?」

「良いんじゃないか? お前と戦う機会が増えそうだ」

「アツハハ、やつぱりそこか」

肯定的な意見にレイもその方向へ思考を固めてきている。アングラビシダス出場経験のあるダイキのお墨付きならば余程のことがない限り失敗もないだろう。

「だが」

「……………」

一呼吸おいてダイキが怪訝そうな顔で言う。

「お前、負担増えるぞ」

「まあ承知の上だよ」

「いいやお前は分かかってない。あそこに集まるのは常識知らずのクズ共だ、お前がアレらを御することができると?」

「そこに関しては大丈夫。全部ぶっ壊して全部直せば皆納得するさ」

「なっ……クククツ、良いねそれ。俺にも噛ませろ」

要は異論がある者は全員アングラビシダス式LBXバトルで完膚なきまでに破壊し反対意見を叩き潰す。自分のLBXを破壊されれば余計に反感を買うだろうが、そこはレイ持ち前のメカニツクの側面でアフターフォローをしてLBXに関しての上下関係をしつかり叩き込むと言うわけだ。

思考が完全にイノベーター寄りである。話を聞いて一瞬絶句したダイキも、それが失敗する未来が見えないので笑いを抑えきれなかった。挙げ句の果てに協力者になろうとまで言っている。もはやタロットで占うまでもない。



完全に組んではいけない者同士が組んでしまった。

「「「」馳走様でした」」

「さてと」

「やるか」

途中まではダイキが押ししていたが、感を取り戻したレイがトロイを操り完勝していたのはその場にいた4人だけの秘密である。

「クソがッ!!!」

「アツハハハ!!!まだまだ甘いねえダ・イ・キ君?」

「テメエ!!」

「何を言っても負け犬の遠吠えでしかないんだよねえ!?!」

膝について敗北を噛み締めるダイキに、言葉による追い討ちをかけるレイ。ここ最近で1番テンションが高いと言うのは後のキヨカが言っていたらしい。

「キヨカちゃん……前見えないし何も聞こえないよー？」

「ヒカリ、アレは見ちゃダメ。お姉さんの悪いところは本当に学ばないで」

「聞こえないよー」

純粹無垢に成長しているヒカリの悪影響になるので、キヨカはヒカリの耳に耳栓を突っ込み両手で目隠しをした。当の本人は不満そうだが……

## 2代目レックスの誕生

### 35話、もしくは2話

「やあ、今日は集まってくれてありがとう。皆様存知の通り、ブルーキャッツの新しいマスターの八神レイさ。よろしく」

ブルーキャッツの地下に広がる空間の中心、唯一の照明がレイを照らしている。今日のレイはいつもの白パーカーでも喫茶店の制服でもない。黒を基調とした服に赤いズボン、レイの身長では明らかに丈が長すぎるファー付きのコート。

そう、檜山蓮のような格好だ。

「まず初めに言っておくよ。伝説のLBXプレイヤーは文字通り伝説になった。どう解釈してもらっても構わないけど……彼はもう2度とここに戻ってくることはない」

大きなブーイングが会場を埋め尽くす。暗くて見えにくいのが、柵を挟んだ360度荒

くれ者のLBXプレイヤー達がひしめき、2階も同じような状況だ。

「ボクは彼からこの店の鍵を託された。それがどう言う意味か……分かるね？」

刹那、会場全体を埋め尽くすような覇気により場が静まり返った。15のガキがオレ達に偉そうにご高説垂れている、そう思っていた大多数の人間が彼女の言葉を真剣に聞き始めていた。

「まあそうは言ってもボクはキミ達からすれば生きがつてるただのクソガキ。気に入らない人が多いでしょ。ボクの戦歴を知らない人間はいないと言う過程で話を進めるよ」

LBX世界大会アルテミスファイナリスト、そして事実上の3位。トロイによるガトリングの乱射、圧倒的な強度の砲身での殴打、見ていた者全てを魅了した光輝く必殺フアンクション。

『期待の超新星』山野バン、『秒殺の皇帝』海道ジン、『白銀の戦姫』八神レイ。

第3回アルテミスに現れた三巨頭を知らない者はいない。

「お遊戯みたいな大会で結果を残してここで威張られてもねえ……って思ってるね」

何人かの方が跳ねた。ここでのバトルにルールはない。それこそがアングラビシダスのルールである。ゼネラルレギュレーションなどと言う大会用のルールに縛られたバトルに飽きた人間達の集まりなのだから仕方がない。

「いいよ……かかってこい。その代わり一切の容赦はしない。ぶっ壊して、ぶっ壊して……それでもまだ向かってくるなら……ぶっ壊すまでさ」

ニヤリと意味深な笑顔を浮かべるレイ。その表情を見た一部の者はとてつもない違和感に襲われてしまった。普段マスターとして見せるあの笑顔はなんだったのか、と……

「そうして積み重ねた残骸の山で天高くファイティングポーズを見せてやる」

既にこの場の支配者はレイである。誰もがその威圧感に反抗しようという気概すら起きない。一種のカリスマだ。

「ボクが2代目だッ!!」

レイがそう宣言し指を鳴らすと、特別大きなDキューブが現れ展開される。

「「「「「おおお……………」」」」」ザワザワ

アルテミス決勝戦で使われた広いフィールドの2倍はあるであろう広大なフィールドとなった。

「アツハハ!!」

レイが勢いよくLBXをフィールドに投げた。

「イプシロンアーバンカモフラージュU……………さあ最初は誰かな?」

「俺だア!!」

都市迷彩が施されたイプシロンはどちらかと言えばレイのイメージカラーである白、もしくは銀を基調とした色で塗装され無骨ながらも凛々しい立ち姿を一瞥しその姿に畏怖を覚えたプレイヤー達は誰も手を上げない。そんな時一人の男が前に出てきた。

首狩りガトー、かつてアングラビシダス一回戦にて山野バンに敗北した男である。

ある意味、空気の読めない男としてこれから名を馳せるだろう。この場の支配者はどうあがいても彼女だったのだから。

「さつきから聞いてりやオレ様を差し置いてここのトップ名乗るとは良い度胸じゃねえか!!」

「キミは……ああ、バン君に負けた人」

「なんて覚え方してやがる!？」

「まあ誰でも良いさ。早くLBXを出しなよ」

「こんのアマツ!!ブルド改ツ!!」

『いけーガトーやっちまえ!!』

ガトーを応援する声が少数あり、一言の声援すらないレイは圧倒的にアウエー。しかし、幾人かは結果が見えているのかただバトルを見るのに集中している。

結果から言えば、ガトーは惨敗した。爆薬付きのアックス、スタンングレネード、アタックリキッドZ、違法改造レベルのマガジン数のランチャー、なんでもして良いと言われるばとりあえず思いつくような違反行為は悉く潰され最後には自らのパフォーマンスである首を刈られて大破した。

「次はだあれ？」

沈黙。ここでは実力が上位であるガトーが無惨にやられたにも関わらず、興味を失ったかのように次の相手を求めるレイに狂気を感じたのだ。

「アツハハリびびらせすぎちゃったかな？うん、今日はお開きにしよう。次回は……1週間後。それまでは喫茶店に力を入れるからいつでもお越しくださいませ」

雑な言葉遣いからマスターとしての礼儀正しい言葉遣いに変わったレイは、会場を閉めた。





「やりすぎだ」

「ええー!!アレくらい序の口じゃない!」

「どこがだ……!!俺の出る幕がなかっただろうが!」

「そ、そんなに楽しみしてたの……?それはそれでなんかゴメン」

反省会とは名ばかりの説教会、額に青筋を浮かべているダイキと彼に詰められているレイの姿があった。ダイキは序盤ライトアップやフィールドの準備など、裏方の作業をしており最終的にプレイヤー達の先導者となってボコボコに負ける予定だった。もちろん本人はプライドゆえに全力で立ち向かうはずだったのだが……ガトーが名乗りをあげたおかげでタイミングを逃したのだ。

詰まるところ本気のレイと戦うために一枚噛んでいたのだが、それが出来なくなりタダ働きしただけになってしまった。

「それで、1人しか相手にしないとかどういいうつもりだ？」

「うーん？ああ、これさ」

「ツ……ブルド……なのか？」

「そう、アルティメットブルド。ブルドファンの、ブルドファンによる、ブルドファンのためのブルド!!」

「黙れ、うるさい」

レイがガトーのために用意したLBXアルティメットブルドは、自身のパフォーマンスの一つとしてプロメテウス社の社長の息子である郷田ハンゾウのコネを使い一機だけ入手していた。それをガトーが好みそうなカスタマイズを施し来週に備えている。

「飴と鞭……バカしか通用しないと思っていたが、『戦車の正位置』征服、野望の成就……既に約束されていると言ったところか。アイツらチョロすぎるだろう」

「アツハハ!!力こそが全て、1番分かりやすくして良いよねあの場所は」

「……そうだな」

ダイキはレイがイノベーターにいた頃の癖が抜けきっていないのだと考えそれ以上

の追求はしなかった。

「話を戻そうか。まあなんか？ 思ってたより？ うまくいきすぎちゃったし？」

「いちいち疑問形にするな」

「つれないねえ、まあアングラは大丈夫そうだよ。残りの奴らは適当に叩き潰すさ。アングラに2代目レックスあり、頼んだよ」

「……チツ、分かった」

名の知れているダイキが2代目レックスの存在を仄めかす事で、少なくともミソラタウンにはレイの名が轟くだろう。どの道後で郷田にも頼むつもりなレイに抜け目などない。

「ボクに付き従う報酬は来年度アングラビシダスの出場権利。優勝、準優勝の報酬は……『前大会ファイナリスト八神レイのチームメンバーとなる権利』」

「ッ!!」

アルテミスファイナリストには次回アルテミスのシード枠が与えられる。それはつ

まり無条件に出場が確定されていてチームメンバーは3人までとなる。ソロで十分なレイには必要のないものであるが、その権利の有効な使い道がこれだ。

「まあそんなときめかないと思うよ？アルテミスって所詮ルールに則ったお遊びだし。あの程度の練度なら世界中にたくさんいるさ。アツハハ!!そのうちアングラの連中を世界レベルまで鍛え上げるのも面白そうだね。ボクが過労死する可能性を排除すれば」

「普段ここに来てる奴らは別にどっちでもいいだろうな。だがそんなものを商品にすればカタギまで来るだろう?」

「なーんにも知らないLBXプレイヤーがウチの連中にボコボコにされてるのを見るのもなかなか悪くないよ」

「……お前、ストレス溜まってるだろ」

「さてね」

凶星である。割と楽しんでるからストレスほどではないが疲労は少しずつ蓄積されていくのだ。LBXに使う時間が取れないなら仕事の中でそれを見つけてるしかない。

「組み立ててこそそのLBX。バトルしてこそそのLBX。カスタマイズしてこそそのLBX。そして…ぶっ壊してこそそのLBX。今まで以上に、これから楽しくなると思わないかい？」

## W編

## 飛翔

### 1話

「ヒカリー、行ってきます」

「いってらっしゃいお姉ちゃん!!」

イノベーター事件から1年が経った。今のレイにはかけがえのない家族がいて、帰る場所があり、頼れる保護者ができた。

「結城さんってば。かんっぜんに喧嘩売ってきてるよねえ……!!」

自宅兼職場であるブルーキャッツを出たレイは駅の改札を通過してトキオシアデパートへ向かっている。今日はタイニーオービット社の新作発表会が行われる日であり開発主任である結城とはメカニックとして意見交換をするような仲である。それ以前に

レイはL B X世界大会アルテミスファイナリストであるため正式な招待状が社長である宇崎拓也から届いているのだが。

レイが少し声を荒げている理由は、大凡半年ほど前に結城と会話していた時に遡る。

『結城さん、少し相談があつてさ。デクーカスタム砲戦型みたいに空中でも動ける機体の開発をしてみたいんだ』

『いいところに目をつけたねレイちゃん。これ、極秘で進めてるプロジェクトなんだからどうちで今空中起動を主軸にしたL B Xの開発を進めてるんだ』

『え!? それ言つていいやつなの!?』

「拓也さんからレイちゃんにだけは言つてもいいつて許可はとつてあるとも。そこで話なんだけど……君もこの話に嘸んでみない?」

『詳しく』

このようなノリでレイは今日発表されるL B Xの開発に関わりがあつた。報酬は航空力学関連の技術を丸々見て盗んでいいというもの。レイにとっては破格すぎる条件なので即決し今日を迎えている。

「セレモニ―が終わった後でボクも新型を自慢してやるっ」と

レイのファッションの好みは半年前に比べて少し変わってきた。昔は白無地のパーカーに短パンというシンプルな服装だったが、今はファー付きの丈が長めのコートにチノパンというカジユアルでオシャレに気を使った服装になっている。純粋に人間力が向上した結果だろう。

そんな彼女の鞆の中には一体のハンドメイドLBXが収められている。タイニーオービット社から学んだ技術を活かした新型である。バン、カズ、アミとも合流予定のためその時にLBXバトルに誘われてもいいように携帯しているのだ。

「やあレイちゃん、おでかけかい？これ、持つてお行き」

「ありがとうおぼちゃん。今度また寄らせてもらうね」

「よう嬢ちゃん!!今度また寄らせてもらうぜい!!」

「あ、カツさん。毎度どうも!!ボクのオリジナルブレンドを開発中だからできたら真っ先にお願い〜」

ミソラタウンでレイの知名度は一定以上であるため電車に乗っていても知り合いと



会うことはある。今回はミソラ商店街の顔馴染み達が多かったらしく次々と声を掛けられては返事をしていた。

(仲良くなれて本当に良かった。いざという時は皆にヒカリを守ってもらわなくちゃね)

二十歳まで生きられないと医者に余命を告げられているレイは残りの人生全てを、自分のせいで人体実験の被害者となってしまう妹のヒカリに捧げている。ブルーキヤッツでマスターをしながら稼ぎを得ているのも、人間関係の構築に勤しんでいるのも全ては自分のいない未来でヒカリの助けとなるため。だからこそレイは愚直なまでに頑張れてこられた。

時間が経ちトキオシアデパートに到着した。施設の中に入れば多くの人で賑わっておりエスカレーターのあるメインホールには一階から上層階まで満員以上に人が詰めかけている。日本におけるLBX開発企業ではトップシェアであるタイニーオービツ社の新作発表会とはそれほどまでの影響力を持つのだ。

受付で招待状を見せ中に案内されたレイを見た周囲の人々から驚きの声が上がった。

「前回アルテミスファイナリスト『白銀の戦姫』だ!!やはり招待されていたか」  
『超新星』山野バンとそのチームメイトも招待されているとか……」

「なんだって!?!我が社の商品売り込むチャンスじゃないか」

(い、居心地悪くないかなあ!?)

自分を見てザワザワし始めたホールに内心恐々としながら、レイは歩いている。CC  
Mでバン達と連絡を取りながら進んでいるのもうすぐ会えるはずだ。

「あつ、レイー!!」

「よつ、時間通りだな」

「やあアミちゃん、カズヤ君……あれ、バン君は?」

「なんかLBX初心者に操作を教えてるんだって」

集合場所に着くとアミ、カズヤの姿はあったが肝心のバンの姿が見えない。二人に話を聞けばどうやら寄り道をしているらしい。

「アツハハ!! 相変わらず人が良いね世界チャンピオン様は」

「そういうお前だつて、今じゃ商店街のアイドルじゃねえか」

「ヒカリのことだよそれは。ボクはキリツとかつこいいマスター!! でやってるんだから」

「よく言うぜ……どうせ二代目レックスとの二面性を楽しんでるだけだろ」

「君にしては察しがいいじゃないか」

「凶星か!!」

「ふふつ、まあ気長に待ちましょ」

カズヤとレイのコントのようなやり取りにアミが笑いその場を纏める。一年前、敵として戦ったとは思えないような仲の良さだ。

「そういえばレイ、ヒカリちゃん元気してる? ちゃんとご飯食べてる?」

「もうすっかりたくましくなったよ。多分ボクより家事出来る……うう、姉としてのプライドはぼろぼろにされてるよ」

「嬉しさのほうが勝ってるだろ」

「カズヤ君よくわかってるね。妹の成長がお姉ちゃん一番の楽しみです」

「丸くなりすぎ」

二人は初めて出会ったときのレイと今のレイを比較しながらしみじみつぶやいた。LBX廃人だったレイがただのシスコンになったとは当時全く信じていなかったのだ。

「アツハハ!! そうだ、今日はこの半年間の集大成を作ってきたんだ。これが終わったらバトルしないかい?」

「えっ、レイLBX作ったの? 今見せなさいよ」

「レイが作ったんなら……やっぱデクーか」

「もっろん。完全新作、新しいデクーのお披露目してあげる。これの後でね」

「みんな、遅れてごめん!!」

三人が会話に夢中になっていると、若干精悍な顔つきになったバンが遅れて到着した。

「遅いぞーバン」

「人助けもいいけどちゃんと約束も守ってよね。間に合ったからいいけど」

「まあまあアミちゃん。そこがバン君のいいところじゃないか。久しぶりー」

「レイ久しぶり!!二人とも元気してた?」

「おかげさまでね。三人ともたまにはウチの売り上げに貢献しにきなよ」

レイがこの三人と顔をそろえて会うのは久々のことだ。三人は普段中学校に通っているし、レイは喫茶店のマスターにアングラピシダスの管理など予定が合わない日のほうが多いため仕方がない。

四人がそろったため場所を移動し発表が行われるメインホールの中央にやってきた。

『本日はお集まりいただき誠にありがとうございます』

「始まったわね」

「拓也さん、全然教えてくれなかったよな」

「ボクはコンセプトだけ知ってるよ?」

「え、どうして?」

「アツハハ!!秘密!!」

そもそも航空力学を学んだ時点でどんなLBXを作り上げるのかは想像がついていた。ノウハウ自体、レイはオーディーンのメンテナンスをしたことがあるため概要は知っている。ゆえにハンドメイドのLBXを半年という短い期間で仕上げることできたのだ。

ホログラムで拓也の姿が映し出され余興ともいえる話が始まる。そんな話に毛頭興味を持っていないレイは軽く聞き流しながら新型の登場を今か今かと待っている。そしてステージ中央に布のかぶせられた箱が運ばれてきた。

『これが我が社の新製品、「アキレス・デイド」です!!』

「!!!!!!」  
「!!!!!!」  
「!!!!!!」

合図で布がはぎ取られエレベーター式でLBXが地下空間より上がってきた。

「アキレス!?!」

「アツハハ!! 思い切ったねえタイニーオービット!! いい、すごくいい!!」

拓也は手元のCCMを操作するとアキレスデイドを動かす。少しひざを曲げ、飛翔

した。

「アキレスが空を飛んでいるわ!？」

「すつげえ……」

「アキレスがみんなの下に……」

「うっそでしよ……あのサイズの背部オプションでなんて美しい飛行を可能にさせたんだ……」

レイの心の中ではアキレスデイドに対して二つの評価が生まれていた。一つは純粋にLBXへの評価、もう一つは企業としての評価だ。

(ナイトフレームの完成形の一つであるアキレスの形状を維持したままあんなユニットをつけるなんて。しかもツシールドの形状を見る限りブースターとしての役割もある。メインウェポンは量産型としては使いやすい片手銃、機体の改造は難しいけれど装備させる武器は夢が広がるなあ!!)

(でも……拓也さん、バン君に許可取っていないんだろなあ。いくらアキレスがタイニーオービット社製だとしてもワンオフ機、しかもアルテミス優勝者のLBXをもろパ

クって量産型にするとか、バン君のスポンサーはウチですって宣言してるみたいだ。もしかしたら拓也さんはそう思っていないかもしれないけど、会社の一部の人はそれ狙いで提案したでしょこれ)

世の中を知りすぎているレイは手放しに誉めることができない。経営者の端くれとしてそういった一面をついつい考えてしまう癖ができてしまった。

そしてアキレスデイドの遊覧飛行はつつがなく終了した。ホールを一周し拓也は頭上に戻ってきたアキレスデイドを着陸させようとしてCCMを操作し、できなかった。

ピシユンツ

「……………え?」

刹那アキレスデイドのカメラアイが妖しく光り無差別に銃撃を始めた。不運にも最初の一発はバンの頬をかすめ地面に着弾したのだった。



「ツ!!みんな伏せて!!」

レイはとつさの判断で三人に注意を促し警戒を始めた。

「「「「キャアアアアアアア」」」」」

!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?

それを皮切りにホールにいた人々が一斉に叫び始めた。

「今度は何!?!」

「レイ、あれ!!」

「なっ!!」

アミが指さした方向を見たレイが絶句した。無数のLBX達がいたるところから現れデパート内部を攻撃し始めたのだ。

会場はパニックとなり人々が一目散に逃げ始めた。

「まさか、またイノベーターじゃないのかよ!!」

「あり得ない!!イノベーターは海道義光のカリスマがあつて成り立ってたんだ。残党がいまさらテロなんてやる気はないはずだよ」

「とりあえず逃げましょう!!」

「いや、一体でも多くのLBXを止めるんだ!!オーデイン!!」

バンが目の前前の光景に耐えられなかったのかLBXを出撃させて暴走している機体を殲滅し始めた。

「バカか君は!!変な使命感で死ぬ気かい!?!」

「LBXはホビーなんだ!!父さんが作ったLBXが人を傷つけちゃダメなんだよ!!」

「ちよ、バン君!!」

「ああもう仕方ねえな。フェンリル!!」

「私たちもやるわよ、パンドラ!!」

バンに続いてアミとカズヤまでもが戦いに行ってしまった。

「レイ、無事か!!」

「拓也さん？これなに!!」

「わからない、アキレスデイドも急に操作が効かなくなってしまった」

一人残されたレイの下に血相を変えた拓也がやってきた。

「レイ一人か？」

「バン君たち、暴走LBXを止めるって行っちゃったよ。拓也さん、ボクが護衛するから逃げて」

「できるわけないだろう。俺が指揮を執る、できるだけ被害を最小限に抑えるんだ!!」

「はあ……キミもか」

拓也の言葉にレイの声音が下がってきた。

「こんなことでお披露目したくなかったんだけどなあ……ボクがやる。初陣だよ【フライト・デクー】、テイクオフ!!」

レイがCCMを取り出し持ってきた新型のデクー、フライトデクーを出撃させた。

フライトデクー

オーデイン、アキレスデイドに関わる飛行技術を学んだレイがオペレーションデイブレイクで使用したフライトパックを元にデクーのオプションユニットとしてフライトユニットを搭載した新型LBX。空中戦を想定しているためデクーのフレームにも手が加えられている。

「それがレイの新型か!!」

「フライトデクー、滞空には向いてないけど加速力、旋回能力に優れたボクだけのデクーさ」

レイはフライトデクーを操作しバン達がまだ到着していないだろう上層階に飛行させた。武器はトロイのガトリングを参考にしてハンドメイドした「ガトリングショット」という両手銃であり今回のような殲滅戦にはおあつらえ向きである。

「ん……? 敵の動きがおかしいかもしれない」

「なに? どういうことだ」

空中から一方的に射撃をし暴走LBXを破壊しているがどの機体も妙に続率が取れている。さらに一体一体の動きがイノベーターの無人機よりもはるかに洗練されている。そこにレイは引つ掛かりを覚えたのだ。

「この大量のLBX、デパートのホビーショップの機体が勝手に動き出してるの?」

「ああ、それに加え今日LBXを持ってきている一般のプレイヤーの機体も暴走を始めたとき報告があった」

拓也が耳元のインカムを触りながらレイに伝えた。どうやら状況はリアルタイムで情報を更新できるらしい。

「てことはボクたちの機体も暴走してないとおかしい。暴走LBXは全部一つのプレイヤーに操作されているとみて間違いないよ。少なくともプレイヤーじゃない。経験談だけど無人機をボクに接続するとわずかにボクの癖も反映されるんだ。このLBX達はみんな癖が同じなんだ」

「そういうことか。違うプレイヤー達が操作していれば違う癖が出る、だからこいつら

は無人機ということだな。これだけのLBXを一斉に暴走させているブレイン……  
いったい何が」

「とりあえず拓也さんは下がって。LBXが使えるボク達で何とかしてみるさ!!」  
「わかった、頼んだぞ!!」

そういつて拓也はスタッフ達と下がった。レイはそれを見届けるとフライトデクー  
がある上層階に足を進めた。

「うげ、エスカレーター止まってるじゃん……」

数分後、肩で息をしながらレイは止まったエスカレーターを登りきった。

# 新たな敵 デイテクター

## 2話

トキオシアデパートは現在暴走したLBXの襲撃によって見るも無残な状況になっている。しかしそんな状況で果敢にもバン、アミ、カズヤ、レイの四人は被害を最小限に抑えるべく戦っていた。

「みんな大丈夫!？」

『ああ、ただ敵の数が多すぎてさすがに厳しい』

『しかもこいつら、妙に強いんだけど!!』

『狙撃手にこれはキツ過ぎんだよなあ!?!』

四人ともバラバラに戦っているが通話をつないでいるため逐一状況を報告しあっている。万が一の時は機動力に優れたオーデイーンとフライトデクーで救援に向かうためでありレイの提案だった。

「ヤバそうだったら無理せずすぐ引いて!!今はLBXがいるから敵がそつちに向かつてくれるけど何にもなくなったら次の標的はボク達自身だよ!!」

『『了解!!』』』

レイはこの暴走事故に妙な気がかりを抱えているがそれを三人には伝えていない。下手に不安をあおりたいわけではないのだ。

(言い出しつpegが言うのもなんだけど、推進剤の連続使用はバーニアとフライトユニットに過負荷がかかるから厳禁なんだよねえ!!)

心の中で悲鳴を上げながら、それでもレイはフライトデクーで空中から銃弾をばらまいている。

『フェンリルツ!!?くそ、しくじつt...うわあ?!?!?』

『カズ!!どうしたんだ、返事をしてくれ!!カズ!!?!!』

『キャア!!あう...パン...ドラ...ごめ...』



「アミちゃん!?……バン君、一回合流しよう。ボク達、数で各個撃破されて行ってる!!こんなことになるならCCMグローブ持つてくるんだったよ!!」

『でも、二人を助けないと!!』

「パンドラとフェンリルの反応が消えた。多分やられてるさ、今一番やつちやいけないのはボク達が大滅することだ!!」

『ツ!!わかった!!』

悲鳴が聞こえ、鈍い音がアミとカズヤの通話を通して聞こえてきた。レイはそれをL B Xが破壊され二人が何らかの手段で意識を奪われたのだと仮定した。だからこそレイはバンと合流しようとしているのだ。

カチャ

「ツツ!!まつず、うわツ!?!」

背後から物音がしたことでとつさに振り返った。しかしそこにいたのはスプレーのようなものを持ったデクー改、正面を向いてしまったことでその中身を直接吹きかけられてしまった。

(催涙?! いや違う、睡眠薬だ!! だったら!!)

「残念、薬物はボクには効かないんだよねえ!!!」

煙で視界が悪いが持ち前のセンスで正確に「デクー改」を撃破した。

「ゲホゲホツ!! バン君、敵の狙いはボク達だ!! なんか睡眠薬が入ったスプレーもってる!!」

『なんだって!?! 大丈夫なのかレイ!!』

「異常体質で助かったさ。すぐそっちに向かうよ」

エスカレーター付近にも敵が密集している。どうやら出入り口をふさぐように指示されているらしい。それを見たレイは即座に判断しCCMを操作する。

「必殺ファンクション!!」

『ATTACK FUNCTION GREAT BOMBER』

空中でのグレイトボマーの発動により周囲に大量の爆弾が降り注ぐ。暴走しているだけのLBX達ではよけることなどできるはずもなく連鎖的に爆発を引き起こしていった。さらに爆発による煙幕でレイの姿が見えなくなり、その隙についてレイはエスカレーターを下って行った。

「つて、あぶなっ!?!」

下の階についた瞬間、目の前を何かが高速で横切った。

『……………』

「アキレスデイド。やっぱり君が司令塔か」

『……………』

警戒してアキレスデイドと見つめあっていると、お前に用はないとばかりに踵を返してどこかへ飛んで行ってしまった。

「捕まえられないから無視した？じゃあバン君のほうに」

フライトデクーに後を追わせながら自分もさらに下の階へ突っ走る。そしてフライトデクーのカメラにはバンの元へ迫るアキレスデイドの姿があった。

「バン君後ろ!!」

『え!?!うわっ!!』

間一髪バンは姿勢を低くしてアキレスデイドを回避した。

『バンさん大丈夫ですか!?!』

『ああ、大丈夫だよヒロ。レイもありがとう』

「うん、それ誰？」

バンのCCMから少年の声が聞こえた。逃げ遅れた一般市民か、しかしどうやらバンと知り合いらしい。

『彼は大空ヒロ。LBXを教えるのにさつき知り合ったんだ。今も手伝ってもらってる』

「はあ!?!初心者にこいつらと戦わせてるのかい……ん?暴走してない……しかも見たことないLBX。まあいいやすぐ行くからもう少し耐えてて!!」

『わかった、行くぞヒロ!!』

どうやら無事であるらしいのでレイはフライトデクーを自分の近くに戻しさらにエスカレーター下り始めた。

「ああもう数だけが多いな全く。なんでこんなLBXが多いところで……いや、どう考えてもそれが狙いだよねえ」

これだけのテロを起こすためのLBXを現地調達でそのまま暴走させる。兵器輸送の必要もなく、カスタマイズされた誰かのLBXであればその分強い兵士に生まれ変わる。素晴らしいほどに効率的だ。

「それにしては被害が建物だけなんだけど……」

上から下へと移動している途中、逃げ遅れた人は見えたがけがをしている人はいなかった。二次被害があったのかもかもしれないがLBXによる直接的な被害は見受けられなかった。このテロの動機はわからないが、手際がいいにもかかわらず達成目標が不明瞭なのだ。

(ただテロしたいだけならこんな入念な準備はしない。どこかにならず目的があるはず…)

それから2度ほど、敵LBXに睡眠薬のスプレーを吹きかけられたが少し目に染みるのと咳き込むだけで済んだので完全に無視して一階に到着した。

「おえっ、効かないのにしつこいんだよ」

サイコスキャニングモード中ならまだしも、ただのCCMで操作しているためスプレーの煙による視界不良は普通に致命的だ。そう言う意味では足止めとしては大いに成功している。

「ていうか、バン君達どこいったんだろう?」

「2人ならあの中だけ」

「あの中……ふうん、なるほどね」

特徴的な髪型にサングラスをかけたいかにも不審者です、というような男がレイの眩きに反応し親指で緑の膜に包まれた場所を指した。Dエッグと呼ばれるそれはDキューブの新たな形だ。通常のバトルフィールドに加えプレイヤーを包み込むような形で展開されるそれには、必殺ファンクションによる周りへの被害やバトルのやり逃げ防止で開発が進められていたものでそろそろ一般発売が控えていたのだ。どうやらこの男がバンにそれを与えてアキレスデイドを封じ込めたらしい。

「で、キミはっ」

「俺はコブラ。お前らのサポートをするために山野博士のそこから派遣されてきたんだよ」

「師匠が……? まあとりあえず信じるよ」

「おう、よろしくな」

明らかに偽名なコブラと名乗る男はレイに向けてグッドサインを出した。

「今はバン君とヒロ？君があの中でアキレスデイドと戦ってるって言う認識でいい？」

「ああ、2人とも山野博士に見初められたプレイヤーだからな。もしかしたら今回で片づいちゃうかもな」

「バン君はわかるけどヒロ君は完全な初心者だよ？そんなのを師匠が選んだなんて……」

「まっ、そういうのは後で纏めて話すからよ」

ピシユン!!？

「えっ」

突然Dエッグのバリアに穴が空きそこからアキレスデイドが飛び出していった。その飛行速度はフライトデクーでも追いつけるものであったが、フライトシステムの連



続使用で過負荷がかかっているため冷却モード中で即座に使用できなかった。

「……ねえ、Dエッグつて必殺ファンクションにも耐えられる仕様じゃなかったっけ」  
「そのはずなんだがな……アキレスデイドつてそんなに性能たけーの?」

必殺ファンクションでもないただの射撃でDエッグが突破された事に商品としての欠陥を感じた2人は苦笑いでアキレスデイドが飛び去った空を見つめていた。そしてバトルが終了したことによりバリアが解かれていき、バンとヒロの姿が現れた。

「2人とも大丈夫かい?」

「あ、ああ……でも」

「ツ、オーデインが……これは酷いね。ボクじゃここからの修理は出来ないかも」

バンの手には、敵の攻撃で四肢の砕けたオーデインの姿があった。誰がどう見ても全壊と言える。

「バン、レイ!!大丈夫か!」

「拓也さん」

慌ただしい状況が収まったのを見計らってか、拓也がレイ達の下にやってきた。

「……君は？」

「コードネーム、コブラだ。山野博士の命令でアンタらのサポートに来た。気軽に呼んでくれ」

「ヒロ、この際だし自己紹介したら？」

「あ、はい!! 大空ヒロっていいます!! よろしくお願いします!!」

「宇崎拓也だ。タイニーオービット社の社長をしている」

「八神レイだよ。LBXはブランドがあるからあんまり期待しない方がいいさ」

簡潔にだが、この場にいる5人の自己紹介をし本題に入る。

「ねえコブラ。父さんからの命令って言ってたけど、まさかまたイノベーターが？」

「いや、今度の敵はそんな生ぬるいもんじゃねえ」

「なんだと？」

(イノベーターが生温いつて……ボク喧嘩売られてる？これでもイノベーター最強だったんだけど……)

コブラがイノベーターを生温いと言ったことに思うところがあり口元が引き攣っているが、その脅威度を伝える手段としてはイノベーターしか物差しがない。つまり仕方がないのだ。

「今度の敵はディテクター、そんで山野バンと大空ヒロ。お前らは世界を救うために山野博士に選ばれたんだ」

「父さんが……」

「僕が、選ばれた……!!」

「あれ、ボクは？」

「お前にはメッセージの媒体が渡されてたな。えつと……ああ、あつた。ほらよ」

コブラがレイにUSBメモリを手渡した。

「い、今時USBメモリ!？」

「お前ん家ならあるだろうってさ。それに今時って言うけど、ほんの10年ちよいくらい前までそれだったからな？」

「あるけどさあ……うーわ、128GB? いや動画なら十分か……こんな低容量初めて見たなあ」

「ジエネレーションギャップ恐ろし」

「まあいいや、後で見とくさ。それでこの暴走騒ぎをおさめるにはどうすれば……ッ!!」

レイがコブラに問いかけている途中、爆音が聞こえてきた。

『世界中の人間に告げる。我々はデイテクター。世界をこの手に頂くことにした』

「拓也さん、外だ!!」

「行くぞ!!」

5人が外へ出てトキオシアデパートの外壁を見ると、黒い街頭に機械のような仮面をつけた男が空中ディスプレイに映っていた。

「あれが、デイテクター? なんか、趣味わるくないかな?」

「レイ、今はそんなこといいだろ」

「いや……まあ、うん」

そしてディテクターによる犯行声明が終わるとあたり一体での爆発がおさまった。

「LBXの暴走、ここだけじゃなかったのかな？」

「……………なんだと？分かった……………トキオシテイ駅でもLBXの暴走が起こっていたらしい」

「同時多発テロとかマジい…………？」

「とりあえず対策を立てよう。コブラだったか、君は事情に詳しいようだが説明を要求する」

「おいおい宇崎の旦那、少し落ち着けて。まずはバン、山野博士からお前にこれを預かってるぜ」

「父さんが俺に？……………これは、LBX!?!」

「かつこいいパッケージですね!!エルシオン……………つて言うんですねえ」

コブラが拓也詰め寄られる前に、バンに未開封のLBXのパッケージを渡した。どう

やらオーディーンの代わりになる機体の確保は出来ているらしい。

「コブラさん、エルシオンのカタログスペックもらえるかい？出来ればヒロ君の機体の方も」

「おいおいマジかよ……あれ、山野博士が『レイ君ならきつと欲しがらるだろうから』って、預かってるよ」

「アツハハ!!さっすが師匠。弟子のことはよく分かっている♪」

コブラからLBXのデータをもらったレイは、コブラと拓也の話聞きながら2機のスペックについて考察をしていた。

（ふむふむ……あれ？エルシオンってオーディーンよりも全体的に控えめな性能をしているねえ。世界を救うんだったらバン君に合わせてもっと尖らせた機体を渡す方がいいと思うんだけど……それにヒロ君のペルセウス？は珍しく二刀流か。初心者が扱うのに二刀流はどうかと思うけど、ヒロ君も使いこなせてるらしいし攻撃に寄せてる分機動性は確保できてるね。あーなるほどね。これ、エルシオンとペルセウスの連携を前提に据えてるから機体性能が尖ってないんだ。ん？もう一機分データがある……ミネル

バ？てことはもう一人選んだ子がいるんだ……」

「レイ、聞いているのか？」

「ん？LBXが暴走する現象を『ブレインジャック』で、ブレインジャックを引き起こしているのがその付近で最も処理能力の高い『司令コンピューター』ってのを止めればいいんですよ。ハッキングでどうにかならないの？」

「出来てたらとづくにやってるさ」

「まっ、そうだよねえ。じゃあ乗り込むしかないか。この辺で一番処理能力が高いコンピューターって？」

「おっと、それについてはもう調べてあるぜ。このトキオシアデパートの地下にそれらしい反応がある」

簡単に話をまとめたレイは、乗りかかった船だから仕方ないと協力するらしい。こつそりとヒカリに帰宅が遅くなる趣旨のメールを送って、改めて耳を傾けた。

「拓也さん、ここって……」

「ああ、旧シーカー本部だ」

「シーカーほんぶ?」

「え、シーカーって元々ここなの? 変な場所に立ててたんだねえ」

「イノベーターに襲撃されてから今の場所に設置したんだ」

「うーわ、イノベーター無能すぎ。さすがテロリスト」

事情を知らないヒロは首を傾げているだけだが、イノベーター事件に関わりのあるレイ、バン、拓也は会話を続けている。

「とりあえず制圧しよっか。威力偵察は空を飛べるボクのフライトデューを先行させるからバン君はエルシオンの完成と調整もしていいよ。一応、カタログスペックだけ見てバン君用のカスタマイズデータを送っておくから」

「あのデータだけで1人のプレイヤーに合わせたカスタマイズ案出せんのかよ!? さすが、山野博士の弟子は伊達じゃねえのな」

「ありがとうレイ!! よし、早速エルシオンを組み立てよう!!」

「あつ、僕も見学します!!」

「今のバン君には少し物足りないかもしれないからそこは適宜調整してくれるかい?」

「ああ!!」



バンのCCMに簡略化したデータを送信したレイは冷却の終わったフライトデクーを発進させるために準備を始めた。

(アミちゃんとカズヤ君のことは一旦仕方ない。連れ去ったつてことは何かにご利用したいつてこと、悪いようには扱わないはずだし)

レイのCCMは通常のものとは違い、LBXのコントロール範囲が従来の2倍となっている。とりあえず限界距離まで偵察へ送り、それ以上はバンとヒロと慎重に足を進めることにしたのだ。

「よし……フライトデクー、テイクオフ!!」

## 紅白木偶合戦

### 3話

「うーむ……LBX反応なし。フライトデクーを帰還させるよ」

「ああ、よくやったレイ」

バンがエルシオンを組み立てている間に周辺の威力偵察をしていたレイは安全を確認してフライトデクーを手元に戻らせた。

「コブラさん、LBXのリペアキット持ってない？ちよつと無理させたからメンテナンスしたいんだよね」

「おう、あるぜ。品質はあんまり期待すんなよ？」

「工具があれば問題ないさ」

コブラからリペアキットを受け取ったレイは器用にデクーのメンテナンスをしてい

く。しかしその結果はあまり著しくないようだ。

「うげ、フライトユニット死んでるじゃん。やっぱ耐合金ケチったのよくなかったかな。拓也さん、今度このフライトユニットの量産案提出するから少し素材の融通してくれない？」

「それはこちらから頼みたいくらいだが、いいのか？」

「どうせそのうち、暇になるでしょ。LBX関連の業績ダダ下がりだろうし」

「……やはりそう思うか」

「売れば売るほどどこかでディテクターの兵器おもちゃになるとか最悪すぎるね。クリスターイ  
ングラム傘下の神谷重工がマスターコマンドを一般発売しなくて本当によかったよ」

ディテクターが指令コンピューターを使って自由にLBXを操れるのなら世界でLBXの末路は目に見えている。企業としてやるべきことは一刻も早い原因の解明である。

「まあウチは外に電波が漏れないようになってる。逆もまたしかりだから通常営業なんだ。だから売れ残ったLBXは時たま買わせてもらおうから」

「アングラビシダス会場のことか。我が社も重要施設はスタンドアローン化できるようにしているがブレインジャックで物理的に攻め入られると面倒だな」

「暴走したLBXが自立できるか、電波遮断で無力化できるのかつてのも重要になりそうだ」

レイ、拓也、コブラの三人が話し合っている。レイが仲介しているからか最初はコブラを疑っていた拓也も少し警戒心を薄ませているらしい。

「できた!!」

「うおお!!かっこいい!!」

どうやらエルシオンが完成したらしい。テンシオンの高いバンとヒロの声を聞いた三人はこれから始める作戦に気を引き締めた。

「へえ、やっぱ実物は違うね。いい機体じゃないか」

「レイのおかげでチューニングもいらなそうだよ」

「そう?ならよかつたさ」

「レイさんは優秀なメカニックなんだってバンさんから聞きました。すごい人なんですね!!」

「アツハハ!!まあわからないことがあつたら何でも聞いてね。LBXを持つからには最低限自分の機体は面倒見れるようになってほしいし」

「はい!!よろしくお願いします!!」

（いい子だねえ。バン君の一歳年下だっけ?ヒカリに合わせないようにしよ。年近いし惚れられたら消さないといけなくなるからね）

シスコンの気が出て少し冷たい視線になったレイにヒロが一瞬肩を震わせたが気のせいだと感じたようだ。

「よし、じゃあ作戦を説明するぞ」

拓也とコブラによって示された作戦は、敵LBXを撃破しながら旧シーカー本部までたどり着き指令コンピューターを破壊するというものだ。バンとヒロを主軸に、LBXの調子が悪いレイはその補助につくことになった。

「ヒロ君、バン君の言葉はちゃんと聞くんだよ？才能があるといってもキミは初心者。その点、世界大会優勝者のバン君をしつかり見習ってね」

「え!?バンさんって世界チャンピオンなんですか!!そんなすごい人と肩を並べて戦えるなんて感激です!!」

「あはは……それほどでもないよ。そういえばレイ、フライトデクーはどうするんだ?」「んー、ジェットガトリングは音がうるさいしフライトユニットを外して二丁拳銃にしようかな」

各々が準備を整えると、コブラからマイク付きの暗視ゴーグルが渡された。なかなか準備がいいらしい。

「それじゃ、行こっか」

「ああ!」

「はい!」

レイはバンについて行こうとしたが、ヒロが別方向へ走っていった。

「ヒロ？」

「カバンおきっぱなしなんです!!」

「そりゃ仕方ないね」

ヒロのカバンを回収した3人は通信機から聞こえてきたコブラの指示に従って地下駐車場へ続く階段へと向かった。

「ここから暗いな……暗視ゴーグルを使おう」

「お、おお……これ、凄いですね」

「……ごめん、少し別行動するよ。2人は先に行つてて」

レイが急に立ち止まり、2人に言った。

「どうしたんだレイ？」

「大丈夫ですか、暗い顔してますけど……？」

2人はレイの真剣な表情を見て何かあったのかと眉を顰めた。

「いやー、すつごくお手洗いきたくってさあ!!アツハハ!!」

「「ええ……」」

沈黙が場を支配していた中、レイが少し大袈裟に答えた。2人はそれに若干引きながらも異性に対して流石にツツコミをし辛い内容だったため特に反論することなく受け入れた。

「何かあったらすぐ連絡入れてね。ヒロ君はバン君にボクのアドレス聞いておいてよ」

「分かりました」

「レイ、1人になるから気をつけろよ?」

「ボクを誰だと思ってるんだい?大丈夫さ」

そう言つて2人は階段を降り始めた。

「と、言うわけでコブラさん、拓也さん、少し通信切るねー?」

『はあ!?!』



『危険じゃないか？』

「女の子のお手洗い盗聴する趣味でもあるのかい？」

『オツケーすぐ切れ!! いやこつちから切るわ!!』

『おいコブラ、何をしt……』 ブチイ!!

ブチッ、つと強引に切断した音が聞こえた後レイは通路の奥に視線を移した。

「出てきなよ不審者さん。現場判断でキミをディテクターの構成員だと判別してもいいんだよ?」

「……ハッ、気づいてたか。流石はアルテミスファイナリスト、八神レイ」

レイの呼びかけによって通路の奥から現れたのは、囚人服のようなファッションの金髪青年だ。

「ボクも有名になったもんだねえ……まっ、色々やったしそれもそうだね」

『『白銀の戦姫』『二代目レックス』『デクー狂い』……噂はかねがね聞いているよ』

「ちよっと待って、最後の知らないんだけど!」

まさか自分がそんなふうには呼ばれているとは思っていなかったレイが怪しい青年に叫んだ。余程驚きだったらしい。

「俺とバトルしろ、八神レイ」

「へえ？今そんな場合じゃないんだけど？」

「知らないねえ。本当は君達について行って行って邪魔者を排除してからゆつくりバトルするつもりだったんだ。八神レイと山野バン、君達を倒すためにね」

「大きく出るねえ。ボクはともかく、バン君に勝つとか余程の自信家じゃないか。アツハハ!!いいね、面白いよキミ」

「俺の名前は風間キリト。そしてこれが俺のLBX、デクーOZ」

「んなあ!？」

自身の名前を名乗ったキリトは掌に愛機らしい赤いデクーをレイに見せつけた。そしてそれに対しレイは大きく目を見開き、輝かせた。

「美しい、ボクが今まで見たデクーの中でいっちばん美しい!!!その機体、もっと近くで見

たいのにキミが不審者すぎて近づけない!!」

「ふっ……デクーOZの良さ、君なら分かると思っていたよ。俺の理念は一般機を極限までカスタマイズすること、中途半端なワンオフ機よりも全て俺の手でカスタマイズした機体の方が強いんだよ」

「分かる!!その気持ちすっごく分かる!!!ああ、やっぱりキミとは良い友人になれそうだ!!!今からでも遅くないからキミが持つてる全部の情報を洗いざらい吐いた後にウチでバイトしないかい!?!」

少し気持ちが悪いほどテンションが荒ぶっているレイ。しかし脳内は意外と冷静なようので取引を持ちかけている。

冷静なだけで正常ではないようだが。

「(なんだコイツ) ……お断りだ。茶番はもういいだろ? さっさと戦え」

「もちろん良いとも!! ストリートレギュレーションでいいよね。そんなに美しいデクーを破壊するなんて勿体無い!! あっ、後で写真いいかな!?!」

「(……山野バンだけを標的にするべきだったな) ……俺に勝てたらな」

そしてキリトはDキューブを投げた。本当はDエッグを使い逃げられないようにするつもりだったがレイの異常なやる気を見てその必要はないと判断したらしい。

ステージは地中海遺跡、ストリートレギュレーションで破壊は無しだ。

「デクーOZ」

「アツハハ!!フライトデクー、テイクオフ!!」

ステージに紅と白のデクーが降り立った。

「へえ、君もデクーか。『デクー狂い』の異名は伊達じゃないらしいね」

「ちよつと嬉しい異名だからむず痒いなあ。デクーOZとバトルするのに、全力を出せないのは勿体無いけどごめんね」

そう、フライトデクーはフライトユニットを外しているため、見た目は少し角ばったデクーC監視型と言ったところだ。そんなフライトデクーは単発式のエネルギーガン『ヘブンブラスター』を両手に構えている。

【バトルスタート】

「行け!!」

お互いにまっすぐ突撃。レイは射撃をしながら詰め寄っているが、プロウラーフレームであるはずのデクーOZは一瞬機体が消えるほどの加速で華麗に銃弾を回避している。

「ツ!!いいね、ならこれはどうかなの?」

見た目以上の俊敏さを見せたデクーOZに驚いたレイは口元をニヤけさせながら次の指示を出した。

フライトデクーは立ち止まり、迫り来るデクーOZに対し更なる射撃を始めた。

「期待はずれだな八神レイ、もしかしたら山野バンより強いんじゃないかと思ってたんだけど」

「アツハハ!!ボクは3位で、バン君は1位だよ?そりゃバン君の方が強いさ。でも……」

油断していいのかい？」

「何?……なっ?！」

全ての射撃を躲していたデクーOZだが、フライトデクーまで後数歩の距離で、側面からの射撃にヒットしてしまった。

「バカな、攻撃は全て回避したはず……」

「さあ、どんどん行こうかフライトデクー!!」

『ATTACK FUNCTION BLOODY RAIN』

『ブラッディレイン』を発動したフライトデクーは、その銃弾を実弾に変更しCPUによる補助を用いて跳弾による多方向からの射撃を開始した。

「くっ……型通りにしか使えない必殺ファンクションなんてなあ!!」

「アツハハ!! 楽しく踊りな!!」

360。から飛来する射撃を躲し、時に盾で受け止め、1片手剣で切り飛ばしながら、対処しているその様子を見てレイは改めて風間キリトが只者ではないと認識した。

「ッ、とつた!!」

必殺ファンクションの銃弾を叩き落としデクーOZがフライトデクーの胸元にOZトマホークを叩きつけようとする。そして、デクーOZが吹き飛んだ。

「アツハハ、今のはちよつと……危なかつたよ」

驚いて目を丸くしているキリトは、今何が起こったのか理解できなかつた。すぐさまデクーOZのカメラをフライトデクーに向ければ……片手銃に殴られたのだと分かつた。

「『ガンⅡカタ』って知ってるかい？まあ、どっちでもいいけどね」

そしてフライトデクーがデクーOZに向けて突撃を開始した。

# 世界なんてどうでもいい

## 4話

意外と対応してくるじゃん……レイはこの半年間、創作物から見聞きしたものを己の技として昇華させたガンⅡカタで戦っているにも関わらずデクーOZにうまく受け流されている事実にも内心驚いていた。

「射撃型のデクーに格闘戦をさせるのは面白いが……君のデクーはそこが限界だろう!!」

「デクーについて無駄に口が回るようだねえ?アツハハ、ボクの方が熟知してるとも。開発者だからね!!」

体術を織り交ぜ距離を離された瞬間銃撃、そうでなくとも隙があればすかさず攻めに転じているフライトデクーだがその成果は著しくない。

エネルギー弾を片手剣で無理矢理弾き飛ばしながら距離を詰めてくるその姿に戦慄



しているレイだが、そのワケには単にデクーOZの運動性能がフライトデクーを上回っていてスペックで負けているからだと気づいている。

「いい、いいぞ!!もつと俺の経験値になれ!!」

「むむっ……（ありや、こりや勝てはしなさそう。せめてイプシロンかサイコスキャニングが使えればねえ……）」

今のフライトデクーにできる最大限を発揮しているがデクーOZには遠く及ばない。むしろフライトユニットはこの戦いにおいて邪魔でしかなかったため無くてよかったとまで考えている。

加えて、レイが自ら仕上げた機体であるためサイコスキャニングモードが搭載されていないので性能を引き出すことができないのだ。無論、レイ自身に負荷がかかるためできるだけ使用したくないのが本音だが、そうは言っていられない状況になったので真面目にサイコスキャニングモードを解析し他のLBXに搭載できるように研究することを心に決めた。

「今、よそ見したな？」

『ATTACK FUNCTION X BLADE』  
「あつ、やつぱ」

マイナス思考に陥っていたレイは思わずキリトに必殺ファンクションを使わせる隙を作らせてしまい、フライトデクーの着地硬直に技を合わせられてしまった。

デクーOZが完全にフライトデクーの間合いに入り、フライトデクーは着地による機体の硬直で咄嗟に動けない。フライト機として開発されたが故にイプシロンの時のような機体性能のゴリ押しができないという弱点をこんな早く実感することになるとはレイ自身思っていなかっただろう。

デクーOZの切先がイプシロンの喉元に触れかけ負けた、とレイが思った瞬間、第三者が現れた。

「レイ、無事か!？」

「……ちっ」

「拓也さん、コブラさん」

必殺ファンクションがフライトデクーを切り裂くその寸前、バンとヒロの元に向かっ

ていた大人2人と鉢合わせた。

「キミの勝ちでいいよ。今のは避けきれなかったし……次は本気の全力で叩き潰すから」

「……まあいいさ。中々な経験値も獲得したからね。山野バンにもよろしく伝えておいてくれ」

キリトはそう言うのとLBXを回収し別の通路へと姿を消した。レイは少し悔しそうな表情でフライトデューを回収した。

「ごめんね……昔のボクなら、勝てた……のにさ」

コブラ達との自己紹介の時にブランクがあると告げたが、これは間違いではない。そもそも格闘戦の得意なレイがガトリング系の武器をメインウエポンにしていた事自体、実力不足を誤魔化すという理由があったのだ。ガンⅡカタも付け焼き刃というには勿体無いほどの仕上がりだが、本来そんなことをしなくても近接武器を持てばいいだけのこと。ガちなバトルをしなくなった分、趣味に走る時間が増えているのもまた事実だ。

「レイ、今の男は？」

「さあ？ー急にバトルをふっかけられてね。でもまあ……ディテクターは関係なさそう」

「なんでそう言い切れるんだ？」

「デクーをあそこまでカスタマイズできる人に悪い人はいないさ」

「なんの理由にもなつてなくね？」

コブラから鋭いツツコミが入るがレイは無視。とりあえずバンとヒロの救援に向かうことにした。

(プレイヤーとして負けて、本業のメカニックとしても完膚なきまでに負けた………自信無くすなあ)

この瞬間、おそらく初めてだろう……レイは挫折を味わった。



レイ達が旧シーカー本部にたどり着いた時には、既に司令コンピュータは止まっていた。爆発痕があるので必殺ファンクションなどで無理やり破壊したのだろう。現にヒロはやり遂げた清々しい表情でペルセウスを眺めている。バンは怪訝な顔をしながら倒したGレックスを眺めていた。

「お疲れ2人とも。つてこれGレックスじゃん。よく再現したねー」

「レックス程じゃないけど、強かったよ」

「……無人機があの人に勝てるわけないよ」

「……ああ」

どうやら故人のLBXを勝手に再現する不遜な輩がいるらしい、しかもそれは世界を壊すテロリストときた。バンは師匠として、レイは恩人として思うところがあつたのか、檜山のことを思い出し静かに黙祷をした。

「よし、シーカーを復活させるぞ」

「シーカーを!?!」

「タイニーオービットにある方じゃいけないのかい？」

「……色々あつてな」

「ふうん」

拓也の宣言にバンは驚き、レイは興味深そうに質問したがはぐらかされた。自分が聞いていい事ではなかったのかもしれないと解釈したレイはそれ以上聞くことはなかったが少し気になっている。

そうして、一通りの作業を終えた一行は地上のコブラが乗ってきた車へと帰還した。

「あつ、そうだ。先に言っておくんだけど、ボクはキミたちに協力する気ないから」

「「え?!?!」」

バン、ヒロ、コブラが一斉にレイを見た。これから世界を救おうと意気込んでいたところに空気を読まないレイの発言があつたからだ。

「どうしてだよレイ!!アミとカズを助けなきや!!」

「そうですよレイさん。僕達は選ばれた戦士、世界のために今こそ立ち上がる時です!!」

「……」  
「アツハハ、ごめんねえ。ボク、喫茶店経営しててさ。妹を養っていかないといけないんだ」

正論である。言い方は悪いが、バンとヒロは所詮中学生である。親の保護があるからこそこうして躊躇いもなく判断できるがレイは違う。戸籍上の親である八神英二は居るもののレイの生活に口を出したことはなくその自由は保証されている。そしてレイは喫茶店のマスターでありアングラビシダス会場の管理者。個人の判断で好き勝手に生きる立場ではないのだ。

「それにね、バン君。これでもボクは何よりもキミを信用しているんだ」  
「俺を？」

「キミならやれる。まだボクはキミに1勝1分なんだ。キミより強いと噂のボクが信用してるんだから自信を持ってくれよ」

「レイ……うん、分かったよ!!」

(計画通り……バン君はまっ直ぐだけど変に賢いからねえ。情に訴えれば行けると思ってたよ。ジン君だったら正論パンチで強制参加させられてたかも)

内心ですこぶる笑っているレイはにやけそうになる頬を必死にせき止めながら言葉を つづけた。

「まあその代わり、遠距離からはしつかりサポートするからさ。これでもこの一年でハッキング技術を上達したからね」

「頼もしいけど……それは素直にほめていいのかな」

「アツハハ!!今更さ!!」

なんとか上手く丸めこむことに成功したレイは後処理を任せて自宅へ帰ろうとする。しかし、バンとヒロが話し込んでいるのを見た拓也がレイに呼びかけた。

「レイ、あれは建前だろう？本音を教えてくれないか」

「ありや、拓也さんにはやつぱりわかっちゃう？」

「お前がプラスの事ばかり言う時は大抵碌でもないことを考えていると八神が言っていた」

「ひつど!?!」



養父ならではの視点と言えようか、それを拓也に話す八神も八神だがかなり核心をついているのでレイには反論もできない。

「うう……身から出た錆とは言えなかなか厳しいねえ。まあ、端的に言うとなんてどうでもいいのさ」

「なに？」

「どのみちボクの方が先に死ぬからね。大人組はボクの寿命は知ってるだろうし」

「……」

「その顔だよ。皆ボクに会うたびちよつとだけ気の毒そうな顔するんだ。別に良いけどさ、こつちまで気が滅入るじゃあないか。そういうことだからボクには『今』しかないんだからこの先のことなんて考えてる暇はないんだ」

「……分かった」

「ありがとう拓也さん」

話を終えたレイは今度こそバン達に別れを告げ、自宅へと帰るのだった。



「おおお、お姉ちゃん!!無事!?無事だった!?!」

「アツハハ、心配させたよねヒカリ。うん、大丈夫だよ。バン君達が上手くやってくれたからね」

家に帰ったレイは、テレビの中継で状況を把握していたヒカリの慌てっぷりに苦笑しながらも優しく抱き止めて頭を撫でた。レイがヒカリによくする落ち着かせ方だ。

「今日は私が全部やるから!!お姉ちゃんはゆっくりしてて!!」

「う、うん。分かったよ」

やけに押しが強いなあ、と思いつつここまでやる気を出してくれているのならとレイは承諾し自室へと戻る。

「そういえば師匠からの映像見なきや」

カバンから取り出したUSBメモリの挿入口を探すこと数分、やっと見つけることが出来たので早速中身を見ることにした。

『やあレイ君、久しぶりだね。USBメモリなんてものを使つてすまない。今回の件は出来るだけ他人に知られるわけにはいかなかったのだ』

「ビデオメツセージか。こんな時代遅れな形式を取つたのはそういうことなんだね。一体どれだけ重要なことが……タイミング的にディテクター関連だろうけど」

考察をしながら山野博士の前置きを聞くレイ。彼がここまで嚴重に警戒をしなくてはいけないということに少し危機感を覚えたようだ。

『恐らく君は結果から伝える方が好きだろうと考えているから単刀直入に伝えよう』  
「さつすが師匠、弟子のことよく分かつてるね」

ウンウンと頷くレイだが、その次の言葉で思考を停止することになる。

『私がディテクターだ』

「.....」  
「っっっっ」